

































































































































## (2) 瞽女と座頭の関係

「寛永四年卯十二月五日」の識語を有する『座頭式目』<sup>(5)</sup>には、瞽女に関する記述がある。

一座頭の妻に瞽女持事堅法度たり当分不及政道候夫婦の内  
壹人は藝を止め可申候且又旅行の節夫婦一方へ同道不可致  
事

一惣別祝儀佛事有之方へ執行に出し節猥に瞽女を伴ひ出候  
事以之外見苦敷相聞候間堅同道の可無用事

一瞽女の作法は座頭中間の古法を相守萬事中間よりの指図  
を受へしごぜの官寿成りの事十年以後何国にても法事寄合  
有之所にては座上へ相断其名を改め瞽女と名を付へし十年  
前小瞽女といふ老たるを寿親と可仕事

これは座頭側、すなわち当道座側の記述であるが、「瞽女の作法は座頭中間の古法を相守萬事中間よりの指図を受へし」と、瞽女は座頭たちの当道座に従属するように記している。『座頭式目』では、瞽女と座頭の婚姻を固く禁じている。そしてもし夫婦になるのなら、夫婦の内一人は芸を止め、旅行の際も夫婦の同道を禁じている。すなわち、瞽女と座頭という組み合わせは禁忌なのである。

## (3) 座頭のおんぶ

狂言〈清水座頭〉は、天正本、虎明本、虎光本、天理本、波形本、狂言集成本などに記載がある。これらの台本に記載される本曲は、結末における退場の方法に違いがある。<sup>(6)</sup> 結末における退場の方法から、

### I 天正本、狂言集成本（和泉流）

#### II 虎明本（大藏流）、天理本（和泉流）

#### 波形本（和泉流）

の二つに大別できる。次に、天正本狂言〈ごぜさとう〉、狂言集成本〈清水座頭〉、虎明本〈ごぜさとう〉の段構成を取り上げる。<sup>(7)</sup>

#### 分類 I

#### 天正本狂言〈ごぜさとう〉の段構成

——シテの登場——座頭が登場する。妻乞いのために清水へ参詣する。

——アドの登場——瞽女が登場する。夫乞いのために清水へ参詣する。

——シテとアドの応対——登場の順とは逆に下向する。

——結末——ともにお告げを受ける。座頭は瞽女の手を取って帰る。

#### 狂言集成本〈清水座頭〉の段構成

——アドの登場——瞽女が登場する。瞽女は「三年以前。

ふと目をわづらひ、養生の甲斐もなく瞽女になったと語る。瞽女は夫乞いのために清水の観音へ参詣する。

シテの登場——座頭が登場する。妻乞いのために清水の観音へ参詣する。座頭は犬に行き当たり、杖で犬を追い払う。

シテとアドの応対——座頭は御堂に籠もろうとするが瞽女に蹴つまずき、口論となる。二人は互いに相手が盲目と分かり、酒宴となる。座頭は平家節を語り、瞽女は小歌を謡い、互いに仏前において芸能を奉納する。

結末——ともに配偶者が西門に在るという観音のお告げを受ける。杖と杖を打ち当ててそれと知り、座頭は瞽女の手を取って帰る。

## 分類Ⅱ

虎明本〈ござざとう〉の段構成

アドの登場——瞽女が登場する。夫乞いのために清水の観音へ参詣する。

シテの登場——座頭が登場する。妻乞いのために清水の観音へ参詣する。

シテとアドの応対——瞽女は鼓を叩いて謡い、座頭は平家節を語り、互いに神前において芸能を奉納する。互いにうるさいと言う。

結末——ともに配偶者が西門に在るという観音のお告

げを受ける。杖と杖を打ち当ててそれと知り、座頭が瞽女をおんぶして帰る。

諸本を結末の退場の仕方により、分類Ⅰと分類Ⅱの二つに分けることができる。分類Ⅰの天正本と狂言集成本は、座頭が瞽女の手を取って帰る、という演出を取る。分類Ⅱの虎明本、天理本、波形本は、座頭が瞽女をおんぶして帰る、という演出を取る。盲人が盲人をおんぶするという演出は、他の座頭物座頭狂言にもある。狂言〈井磻〉では、勾当と座頭の盲人主従が、旅の途中川にさしかかり、勾当が座頭におんぶして渡れと命ずる。その様子を見ていた通りがかりの男が、

やれおかしや、目くらがめくらをおうてわたらうとすると言う。盲人が盲人をおんぶして川を渡る様子は、晴眼者である通りがかりの男から見ると、奇異に映ったのである。

しかし、分類Ⅱの座頭が瞽女をおんぶするという演出は、狂言〈井磻〉のおんぶの演出とは趣きが異なる。座頭が瞽女をおんぶするという演出は、視覚的に二人が夫婦になったことを表しているのである。

また狂言〈清水座頭〉において、瞽女と座頭が配偶者のいる場所として観音から示された「西門」は、瞽女にとって特別な場所であることが指摘される。『蔭涼軒日録』文明一九年（一八八七）五月二六日の条に、

建仁当紀綱韓藏主、胸敲之乞食、清水寺西門瞽等学之、一

## 座快笑

とあつて、当時、清水寺西門に瞽女がいたことが記されている。瞽女は霊場を語りの場としており、永正十二年（五一五）の『釈迦堂縁起絵巻』にも、嵯峨釈迦堂拜殿において太鼓を膝に据えて語り物をする二人連れの瞽女の姿が描かれている。また、二人連れの瞽女の姿は、一三世紀後半成立の『西行物語絵巻』にも描かれている。二人連れの瞽女は、市女笠に桂姿で、足駄を履き、杖をつく姿で描かれている。瞽女は通常二人連れで、清水寺西門などの霊場において語り物をする。狂言〈清水座頭〉では、清水寺西門において座頭と二人連れで、座頭と出会えたことを喜び謡う。狂言〈清水座頭〉は、意図的に従来描かれてきた瞽女の姿を裏返ししているといえる。

江戸末期以前の狂言〈清水座頭〉は、当道座から「不座」という制裁を受け、その結果、当道座に所属していない下層の盲人「土盲」となった、座の式目に抗う瞽女と座頭の姿を描いたと推測できる。結末において、本来は禁忌の関係である瞽女と座頭が夫婦になったことを、おんぶという形で表すことにより、当道座に抗う姿勢を鮮明に描いたのである。

一方、狂言集成本〈清水座頭〉では、瞽女と座頭が当道座に抗う姿勢は描かれていない。その理由として挙げられるのが、狂言集成本に登場する瞽女が芸能を生業としない者だからである。狂言集成本に登場する瞽女は「三年以前。ふと目をわづら

ひ」、養生の甲斐もなく瞽女になった者である。

「瞽女」には二つの意味がある。一つは「盲目の女」を意味し、もう一つは「鼓を打ったり、あるいは三味線を弾いたりなどをして、唄をうたい、門付けをする盲目の女芸人」を意味する。狂言集成本に登場する瞽女は、三年前に突然目を患った者であり、女芸人の瞽女とは考えられない。当道座と関わりを持たない瞽女は、当道座に抗う必要はないのである。この場合の瞽女と座頭の婚姻は禁忌ではない。そのため結末において、座頭が瞽女の手を取って帰る、という演出へと移り変わったのではないだろうか。

## 二 狂言〈伯養〉

### (1) 伯養の身分

天正本狂言〈馬かりさとう〉は、大蔵流や和泉流において現行で演じられる、狂言〈伯養〉の元となった曲である。天正本狂言〈馬かりさとう〉の段構成を次に取り上げる。

天正本狂言〈馬かりさとう〉の段構成

—— シテの登場 —— 「はくゆふ」と名乗る座頭が登場する。

—— 次アドの登場 —— 「はくゆふ」に呼び出され、「はくゆふ」が登場する。

—— シテと次アドの応対 —— 「はくゆふ」は妙音講へ行くため、檀那のもとへ馬を借りてくるように「こきふ」

に言う。

——三のアドの登場——檀那が登場する。

——次アドと三のアドの応対——檀那は、「はくゆふ」の使いの「こきふ」に馬を貸す約束をする。

——主アドの登場——勾当が登場する。

——四のアドの登場——勾当は、檀那のもとへ馬を借りてくるように四のアドに言う。

——主アドと四のアドの応対——檀那は、勾当の使いの四のアドにも馬を貸す約束をする。

——シテと主アド、三のアドの応対——「はくゆふ」と勾当が檀那のもとへ馬を借りに行く。二人は争う。そこで勝負をして決めることになり、それぞれ相手をからかった和歌を詠む。勾当は腹を立ててけんかをする。

檀那が現れて顔を殴る。

——結末——のちに組み合つて、勾当は踏んづけられる。

檀那も踏んづけられる。

伯養と名乗る座頭と、勾当が、妙音講へ行くためにともに同じ檀那に馬を借りる約束をし、出会つて争うことになる。檀那は歌を詠ませて琵琶を貸す者を決めようとする。二人は、互いののしり合う和歌を詠み、またしても争いとなる。

段な出てつらをはる後くみ合てこうたふまるる段もふまるゝとめ

檀那が二人の争いの仲裁に入り、つらをはる。争いはますます激しくなり、取っ組み合いとなる。その結果、勾当は座頭に踏んづけられ、檀那も踏んづけられる。天正本狂言〈馬かりさとう〉は、結末部において勾当と檀那が、座頭である伯養に倒される。

江戸時代以降の諸台本では、檀那への借り物が琵琶となつてゐるが、それ以外はほぼ同じ設定である。虎明本〈はくやう〉以降の諸台本では、和歌の次に相撲を取るようになるが、二人とも盲人であるため、まともに組み合うことができない。そのため、結末部において、檀那を相手と間違えて二人で倒し、ともに勝つたと喜んで退場する。

橋本朝生氏は「天正狂言本の出家狂言・座頭狂言」において、「座頭が勾当を倒す結末を、二人が貸し手を間違えて倒すと盲人の愚かさを笑うだけのものに変えてしまった」と、本来は身分の低い座頭が勾当を倒すところに主眼があつたと指摘している<sup>①</sup>。先述の通り、盲人は、平家語りなどをする琵琶法師として座を形成し、上から検校、別当、勾当、座頭という官位を設けていた。また、盲人の社会で平家語りができるのは、勾当以上の官位を持つ者だけである。狂言〈伯養〉においても、そのことについて描かれている。

虎明本〈はくやう〉では、座頭である伯養が、涼みの会に出席する師匠の琵琶の四の糸が切れたため、檀那に琵琶を借りよ

うとやつて来る。そこへ来合わせた勾当が、座頭の伯養を制して自分に貸すように檀那に頼み、二人は争うことになる。

(勾当) へはくやうがにくひ事をぬかす、あれはすぢみには  
いではせぜうりまらすまひ、わたくしにかしてくだされひ  
(伯養) へこうとうはきこえぬ事を仰らるゝ、身共はいらね  
共、おやかたのかつてかせとおしやる程に、まいつた、身  
がせんやくじや程になりまらすまひ

勾当は、官位の低い座頭の伯養は、当道座に所属する全国の盲人が集まつて催す涼みの会に参加しない。そのため琵琶は要らぬはずだと言つて、自分に琵琶を貸すように檀那に頼む。一方の伯養は、自分に琵琶は不要であるが、親方に琵琶を借りてくるように言付かつてきた。自分が先約である、と主張する。『古式目』の「官位之次第」には、「一坊主之借物をば弟子なすへき也」という一文がある。<sup>(一〇)</sup>虎明本の伯養は、この式目に則り、自分の師匠の借り物をしに來たのである。

また、虎明本に対する諸台本の校異は下表の通りである。

|       |      |                                                  |                                                      |
|-------|------|--------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 大藏流   | 虎寛本  | シテ「汝は琵琶はいらぬはづぢやが                                 | 伯「私はいりませぬが師匠の琵琶が（ハ）二ノ緒が切て役ニ依而借て御座ル                   |
| 和泉    | 天理本  | 公当「やれはくよう、そちがいつびわをひいたことがあるぞ」と云、                  | 「ひかふとひくまひと、かまわせられてよふはわたくしが先約じや」と云、                   |
| 流     | 波形本  | 勾「夫ハともあれそちは琵琶を借つたけなが何にすらるぞ                       | 伯「川原のすゝみへ持て登らうと存て借りました                               |
| 狂言集成本 | 狂言記外 | シテ「やい／＼伯養。そちは琵琶を借りに来たな。別に琵琶の要る事はあるまい。某が借る程にさう心得。 | 伯「これアド、これは迷惑で御座る。私も要りますればこそ借りに参つて御座る。とかく私にお貸しなされ下され。 |
| 狂言記外  | 狂言記外 | 勾当「あいづめは琵琶はいるまい、某に琵琶を貸してくだされい                    | 伯養「いや／＼、わたくしが借つて御さるぞ                                 |

大藏流と和泉流とでは、伯養が琵琶を借り求める理由に違いがある。大藏流の諸台本では、涼みの会に参加する師匠の琵琶の四の糸が切れたために、檀那に琵琶を借りようとして、座頭の伯養が登場する。和泉流の諸台本では、琵琶は座頭の自分にとつて不要であるが、涼みの会へ嗜みに持つていくために借りようとして、座頭の伯養が登場する。伯養はいずれの台本においても、座頭という身分で、琵琶を演奏する資格を有していない。厳しい官位制を設けている当道座の様子は、狂言〈伯養〉においても描かれている。

波形本〈伯陽〉では、すでに檀那の持つ琵琶を借りる約束を取り付けた座頭の伯養に対し、官位を盾に取り、琵琶を譲るよう迫る勾当の様子が描かれている。

アトゝさういわせられても先約の事じやによつて、身共のまゝにも成ますまい。幸伯陽が来ております程に、あいたいをさせられい。

勾 夫ならハよふござる。伯陽く。トヨビナカラ上エトヲル伯陽下エサカリヘイフクスル

伯 ハア勾當の御坊でござりまするか。よふお出なされました。

勾 ハよふお出なされた。おのれ、身共の聲を聞しらぬと云事ハ有まい。是へ出てじぎをせうとハ仕おらいで、仲まへ云て不座さするぞよ

『古式目』の「官位之次第」では、

一 檢校ハ四度の座頭迄下馬する也勾当は大衆分まで下馬す其時下官のものハかさをとり沓をぬきて礼をなす べき事

とあり、当道座の厳しい上下関係をうかがい知ることができる。狂言集成本〈伯養〉においても、

シテ ハやいそこなやつ。さてさておのれは憎いやつの。

身共が借らうと云はゞ。たとへおのれが要らうとまゝ。共々に借つてもくれうやつが。推参千萬な。否でも應でも某が借るぞ。アドゝそれはお前の仰せられたい儘と申すもので御座る。シテゝまだぬかし居る。不座を云附けた。

と、勾当は当道座からの除名を意味する「不座」をちらつかせて、座頭の伯養に脅しをかける。

小アド ハ先づ待たせられい。一方は勾當の御坊。一方は伯養。されども伯養は先で御座る。これは勝負になされて。

勝負に勝たせられた方へ琵琶を貸しませう。

当道座の厳しい上下関係について理解している檀那は二人の間に入り、勝負による決着を提案する。二人はそれぞれ相手からかった和歌を詠むが、決着がつかない。次に相撲を取るようになるが、虎明本〈はくやう〉では相撲を取る前に、伯養がかけっこによる勝負を提案する。

（伯養） ハ私ははしりこぐらをいたさう

（勾当）「いやく／＼はくやうはちと目が見えまらする程に、すまふをとりませう」

勾当は、伯養が少し目が見えるのを理由にかけっこによる勝負を断る。当道座に所属する盲人は、全盲の者ばかりでなく半盲目の者もある。半盲目の者は、全盲の者たちの手引きとして働く。虎明本の伯養は、当道座において全盲の盲人の手引きをする最下層の座頭であつたと考えられる。

## (2) 歌に詠まれる「ほうかす」と

「いぬこうとう」

狂言〈伯養〉は、天正本および江戸以降諸流台本、また〈琵琶座頭〉の曲名で『狂言記外』にもある。檀那に琵琶を借りようと座頭の伯養がやってくる、同じ目的でやって来た勾当と来合わせる。一つの琵琶をめぐる二人は争う。そこで勝負をして決めることになり、それぞれ相手をからかった和歌を詠む。結局、和歌による勝負では決着がつかないのだが、和歌は天正本によれば、

1 道中にはかけほこりをころはしてはくゆふなくは谷へ  
ほうらん

2 酒もりのお座しきゑさへ入されはかすこうたふはむや  
くなりけり

というもので、虎明本では、

1 「庭中に、はかけのあしだぬぎすてゝ、はくやうなく  
て谷へほうかす

2 「さかもりの、ざしきへ人のよせざれば、いぬこうと  
うはかどにたゝずむ

と少し違った形にしている。これに対する諸台本の校異は左表の通りである。

| 2                    | 1    |       |      |
|----------------------|------|-------|------|
|                      |      | 大蔵流   | 和泉流  |
| 振舞の。座敷へ人の呼ばれば。ざれば。   | ○    | 虎寛本   | 狂言記外 |
|                      | ほうかせ | 天理本   |      |
|                      | ほうかせ | 波形本   |      |
|                      | ほうかせ | 狂言集成本 |      |
| たゝずめ                 |      |       |      |
| ○                    |      |       |      |
| ○                    |      |       |      |
| 座敷へ人の呼ばざれば犬や勾当門にたゝずむ | ○    |       |      |

天正本では、勾当が詠んだ和歌の「はくゆうなく」は、「履く用」に「伯養」の名を掛けている。勾当は、

道の真ん中に、齒の欠けた木履を転がして、履く用がないのなら谷へ捨てよう、齒の欠けた木履のように無用な伯養は谷へ捨てよう

と詠んだのである。

また天正本において、伯養が詠んだ和歌の「かすこうたふ」は、酒の縁から酒粕の「粕」に、役に立たない人や物をのしつて言う「滓」を掛けている。すなわち伯養は、

酒盛りのお座敷へさえ入れない酒糟勾当は、全く役に立たないことだなあ

と詠んだのである。

虎明本では、「道中」が「庭中」に、「はかけほこり」が「はかけのあしだ」に、「ほうらん」が「ほうかす」に変わっている。

国立国語研究所編『日本語語地図 第二集』によると、近畿周辺では、捨てるのことを方言で「ほかす」や「ほうかす」(漢字では「放下す」と表記する)と用いるとある。すなわち「ほうかす」は上方の言葉であるといえる。「ほうかす」には、投げ捨てることを意味する「放下す」と、小切子を打ちながら歌舞や曲芸を僧形で行った「放下僧」が、掛けられていると考えられる。勾当は、

庭の中に、齒の欠けた足駄を脱ぎ捨てて、履く用がなくて谷へ捨ててしまう。伯養はいなくて、谷で放下をしていると詠んだのである。

虎明本において伯養が詠んだ和歌の「いぬこうとう」の「いぬ」は、人を卑しめ、ののしつていう語の「犬」と、動物の「犬」を掛けている。伯養は、

酒盛りの座敷へ人が寄せないので、犬と犬勾当は門に佇んでいる

と詠んだのである。

犬と盲人の組み合わせは、他の座頭物座頭狂言にも見られる。天正本狂言〈犬引きぎとう〉は、現行でも演じられる〈猿座頭〉の類曲である。天正本狂言〈犬引きぎとう〉のあらすじは、次の通りである。

座頭の歌に惹かれた宿の娘が、座頭と夫婦になろうと宿を出る。座頭は女を帯で琵琶箱に繋いでおいたが、鷹狩りの殿が女を見つけて言い寄る。女は殿の申し出を承諾する。殿は座頭の氣づかぬうちに女を繋いであつた帯を犬に繋ぎ替える。盲目の座頭はにわかに女を繋いとおりに歩かなくなつた女、実は犬の機嫌を取りながら歩く。そして座頭は犬に「喰われ」逃げていく。

座頭が犬に追われるという演出は、他の座頭物座頭狂言にも見られる。

現行で演じられる狂言〈清水座頭〉では、座頭が配偶者を求めて清水観音に願を掛けに行く途中、犬に吠えかかられる。狂言集成本〈清水座頭〉には、

犬に行き当たり。肝をつぶし。杖にて犬を追ふ仕方仕様あるべし。

まだ吠えるか／＼。ト云うて犬を追ふ體する。近所に人もあるさうなが。犬が居ると云うて教へて呉れるか。また犬を共々

追うても呉れう事ぢやに。とかく情のある人は無いものぢや。既に咬み付かれうとした。

とある。また『一遍聖絵』善光寺道には、琵琶法師と小坊師の二人連れに吠えかかる犬が描き添えられている。この図像に見られる座頭と犬という組み合わせは、一般の人々が思い描く、琵琶法師に対する畏怖の念と軽蔑の念という二つの相反するまなざしを継承化したものとして、中世から近世を通じて描き続けられていた。狂言〈伯養〉において、勾当をからかつて詠まれた「いぬこうとう」の歌には、このような背景があつたのである。

### (3) 式目禁制の侵犯

狂言〈伯養〉は、伯養という名の座頭が勾当と、檀那の持つ琵琶をそれぞれ自分が借りようとして争う姿を描いている。二人はそれぞれ、檀那に自分に琵琶を貸してくれるように頼み、互いに相手を非難し合う。檀那は二人に勝負による決着を提案し、それぞれ相手をからかった和歌を詠む。勾当と座頭の伯養は、自分を犬畜生にたとえた、足駄という履き物にたとえたと言つて、杖を振り上げて争う。次に相撲を取るようになるが、二人とも盲人であるために組み合うことができず、檀那を相手と間違ひ打ち倒し、自分が勝つたから琵琶を貸してくれと言ひながら退場する。

狂言〈伯養〉を構成する要素として、平家語りに用いる琵琶、当道座の官位、相手をからかった内容の和歌、盲人の相撲などが挙げられる。

「涼みの会」は、年に一度、京都市高倉通五条坊門北にある清聚庵で開かれる。当道座に所属する盲人が集い、般若心経を転読し、平家語りをする。座頭の伯養と勾当が、檀那の持つ琵琶を借りに行ったのは、この「涼みの会」へ参加をするためである。そして、勾当より一足先に、檀那から琵琶を借りる約束を取り付けていた座頭の伯養に対し、勾当は官位を盾に取り、琵琶を譲るように迫る。

狂言〈伯養〉では当道座の座法に則り、当道座の行事や厳しい官位制などについて描かれている。しかし、座頭の伯養と勾当が詠んだ相手をからかった内容の和歌や、盲人の相撲という要素は、狂言が当道座の座法を意識し、裏返しを行ったものだと考えられる。

当道座における座法を記した『古式目』の「官位之次第」には、<sup>(二)</sup>

- 一 悪口すへからさる事
- 一 慮外すへからさる事
- 一 らうせきすへからさる事

とある。相手をからかった内容の和歌は「悪口」にあたり、盲人の相撲は「らうせき」にあたる。また、座頭の伯養が勾当に

意見することは、厳しい官位制のもとに成り立つ、当道座においてはある得ないことなのである。

## おわりに

中世から近世にかけての盲人は、当道座に所属し、琵琶法師として平家物語をする職能集団と、当道座に属さず、農村辺土をめぐる芸能を生業とする漂泊の盲人の二つが考えられる。狂言〈伯養〉に登場する、座頭の伯養と勾当は当道座所属の盲人であり、狂言〈清水座頭〉の瞽女と座頭は芸能を生業とする漂泊の盲人だと考えられる。当道座に所属する琵琶法師たちは、貴族や武家から特別な寵愛を受け、安定した生活が保障されていた。また、当道座に所属する琵琶法師たちから選良意識をうかがうことができる『古式目』の「官位之次第」には、<sup>(一四)</sup>

一 舞まひ猿楽等の跡は道をすてゝ二代をへすしてハましらふへからさる事但ひこよりゆるす

一 右いやしき筋有ものゝ芸したる跡不改して当道の芸すへからさる事

一 同いやしき筋有ものゝ住たる家屋敷当道のかたへすくに不可買取家主一人へたてゝハくるしからさる事

一 いやしき筋有ものゝ子養父母を取他名になり出家しつるものにハましらふへき事

とある。当道座に所属する琵琶法師たちは、「猿楽等」、すなわち

能役者や狂言役者を「いやしき筋」と蔑視している。また『当道大記録』には「筋目悪敷者」として、声聞師、足駄屋、空也派の鉢叩など、二〇以上もの職種を挙げている。

狂言〈清水座頭〉や〈伯養〉は、決して「風刺劇」ではない。なぜならば、座頭狂言座頭物は「他の事柄にかこつけて社会や人物を遠回しに批判、非難した劇」とはいえないからだ。狂言が、座頭狂言座頭物において行つたのは、当道座の式目の禁制を破る行為、すなわち裏返しである。座頭狂言座頭物は、狂言という演劇の中で、世の中の決まり事を覆す、裏返しを行つていたのである。

## 注

一 「古式目」には当道座における座法が記されている。内容は雨夜尊の伝承から、検校の系譜に始まり、盲官の官位、座中の法、年中儀式、当道の流派などが記されている。盲官の官位を次に引用する。

### 官位之次第

一 座頭なり 四度此内十八きさみあり此極官より名字を名乗ひかさゆるす

一 勾当なり 八度此内三十五きさみ有一度の勾当はいまた四度の装束也二度之勾当より衣白袴を着する事

一 別当なり 三階

一 検校官 一階但官錢未進之ともからハ惣晴とて残しおく也

二 座頭狂言狂言座頭物（川上）を、女狂言夫婦物と分類する場合もある。

三 狂言（清水座頭）は和泉流専有曲。近年は大蔵流でも上演される。大蔵流では（警女座頭）という曲名で、虎明本、虎光本のみに記載される。

四 現行で演じられ、天正本にも元となった曲が記載されている座頭狂言座頭物は、清水座頭、（伯養、（鞠座頭）の三曲である。本稿では、（清水座頭）、（伯養）の二曲を取り上げた。

五 「古式目」公事批判之次第（七一頁『当道座・平家琵琶資料』昭和五十九年十二月、大学堂書店）。

六 国立国会図書館所蔵。マイクロフィルムによる。『座頭縁起』（座頭式目、諸国座頭官職之事、当道記と合一冊）。

七 虎光本（盲女座頭）は、退場についての記述がない。

八 虎光本、天理本、波形本は、虎明本（こぜざとう）と、同じ段構成を取る。

九 八三頁「天正狂言本の出家狂言・座頭狂言」（橋本朝生氏『狂言の形成と展開』一九九六年一〇月、みづき書房）。

一〇 「古式目」官位之次第（六六頁『当道座・平家琵琶資料』昭和五十九年十二月、大学堂書店）。

一一 狂言集成本（伯養）では、シテが勾当、アドが伯養となっている。

一二 「すてる（捨てる）」の項（国立国語研究所編『日本言語地図 第二集』昭和五十七年八月、大蔵省印刷局）。

一三 注一〇に同じ。  
一四 注一〇に同じ。

## 【資料紹介】

## 伊丹・小西家旧蔵の能面

## ― 売立目録から ―

## 伊丹・小西家の売立目録

この売立目録は或る百貨店の古書市で表紙が金箔張りの売立目録を見つけ、表紙が目立ったことと、中に能・狂言面の写真が多く掲載されていたので、購入したものであったが、その後の調査で以下が判明した。

表紙は本金箔が張っており、そこに胡粉を用いて手書きで白い富士山が書かれた豪華な売立目録である。

表紙に題箋の脱落や、擦れがあるのは残念だが、内表紙には『某家所蔵品入札目録』（注1）（以下、『売立目録』という。）とあり、ペン書きで「伊丹小西氏」と記され、また、旧所蔵者の印で「坂田作治郎」とある。

坂田作治郎はこの売立の大阪の札元の一人に名を連ねているので、このような特別に装丁したと考えられる豪華本を所有していたのであろう。

保田 紹雲

売立は昭和八年一月二十四日入札で、総ての落札価格がペン書きで記入されていることもこの目録の価値を高めている。

伊丹・小西家は後述するように酒造業で、表紙に手書きされた白い富士山は、代表商品である「銘酒白雪」のキャッチフレーズである。「山は富士、酒は白雪」を表したものであろう。

能面の売立数は、売立番号二四九から二六八まで二十群に分けられ総数七十二面で、そのうち能面写真が付されたものは四十五面ある。

このほかの能道具は、狂言面が五群で総数三十四面、能装束十七領、能管一管、小鼓三丁、大鼓一丁、太鼓四丁、が掲載されている。

## 伊丹・小西家

伊丹・小西家は酒造業で代々新右衛門を名乗り、小西酒造株式会社を経営者である。

小西酒造株式会社のホームページから小西家の歴史を抜粋す

ると、小西家は文龜永正の頃（一五〇一～一五二〇）丹後国丹波郡吉原庄（現在の京都府中郡峰山町）奥吉原城に拠り細川藤孝と戦った守護一色氏の陣代小西岩見守を始祖とし、その猶子小西宗雄が民間に下り天文十九年（一五五〇）伊丹に出て薬種商を営むかたわら濁酒造りを創めた。

その後酒造業は文禄元年（一五九二）清酒業を本業として規模も大きく営むようになり、慶長十七年頃（一六二二）始考新右衛門宗吾が江戸へ駄送り（馬に積んで酒を送る）を開始、寛永十二年頃（一六三五）二代目新右衛門宗宅が江戸へ酒樽を運ぶ途中雪を頂いた富士の気高さに感動し、富士の「白雪」と（酒の名前を）名付ける。

寛文元年（一六六二）伊丹郷町が五撰家筆頭の近衛家領となり、一層酒造りに有利となり、元禄時代には江戸積酒の銘産地として高い地位を占めるようになった。

元禄十年（一六九七）伊丹郷町に聴宿老制度が設けられ、四代目小西新右衛門もその一人として帯刀を許され、町政を司り、以後代々その職に就いた。

領主近衛家と密接な関係を保つ一方、姫路藩や肥後藩などへの大名貸による金融業も重要な地位を占めた。

時代は下って明治維新の混乱期に多くの酒屋が経営困難に陥る中、小西家は蓄積した財力をもって維新政府の財政資金である会計元立金の調達に応じ、会計裁判所掛、商法司酒造取締役、

通商為替会社頭取などの公職にも就くなど時代の先見性をもって対応した。

さらに、伊丹の医療行政や小学校創設に私財を投じ社会貢献も怠らなかった。

明治期蓄積した酒造資本を近代産業に投資して新時代を乗り切ろうと意図し、明治十八年（一八八五）十一代新右衛門業茂（ぎょうも）はランプ口金工場、その後、皮革工場、山陽電鉄（現JR山陽本線）総代、川辺馬車鉄道（尼崎・伊丹間）、阪鶴鉄道（現JR福知山線）社長就任など近代産業にも参画した。

昭和八年伊丹酒造部を独立させて小西酒造株式会社を設立、十二代小西新右衛門業精（ぎょうせい）が社長に就任し今日に至る酒造業の基礎を固めた。

昭和八年（一八三三）一月二十四日入札の伊丹・小西家所蔵品の売立は、小西酒造株式会社の設立基金を確保するためであったのではなからうか。

小西酒造株式会社によると、能楽を好んだのは十一代小西新右衛門業茂で、邸内へ能舞台も建築していたが、その後、大正元年創建になる赤穂・大石神社へ寄進された。

『明治の能楽（一）』（注<sup>2</sup>）には明治十四年（一八八二）十二月十三日付・東京日日新聞に「小西新右衛門が邸中に能舞台を作り、装束の類まで新調し、また、舞台の傍へ和洋折衷の大座敷を貴賓の来遊の節、饗応歓待の料として拵た」とあり、又、明

治十五年（一八八二）九月九日付・京都滋賀新報に「十五日に伏見稲荷神社の能舞台の開台式に伊丹の豪商小西新右衛門が道成寺を舞うよし」とある。

十二代業精について『20世紀日本人名事典』（注3）には、「昭和期の実業家。酒造家。明治八年（一八七五）十一月生。昭和二十二年（一九四七）八月二日没。兵庫県伊丹出身。本名〓小西業精。茶号〓道易軒。初名〓小西利右衛門。

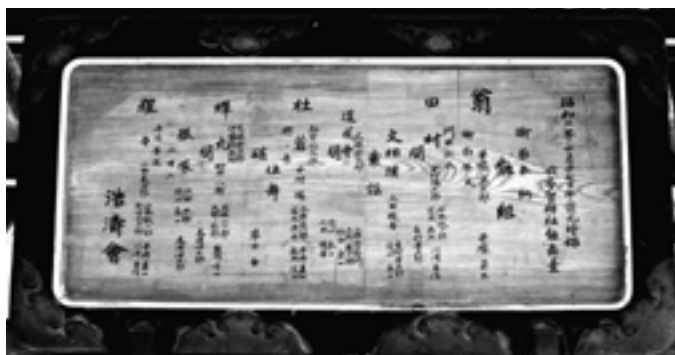
東京帝大法学部（明治三十六年）卒業。大蔵省に入ったが、明治三十九年（一九〇六）「白雪」酒造元十二代新右衛門を襲名。酒造業に改良を加え、合成酒製造も手がけた。また日本相互貯蓄銀行頭取を務め、他事業にも関係した。

表千家免許皆伝の茶人で道易軒と号し、著書に茶事作法書「凌雲抄」がある。」と記されている。

また、彦根・多賀大社の額殿（絵馬堂）に架かる能の奉納額の中に、昭和三年（一九二八）十月十七日多賀神社能舞台で能を奉納した浩濤会の立派な能番組額があり、手塚亮太郎が翁を奉納している。（写真①②参照）

この番組の中の素謡・道成寺に小西新右衛門の名が見られ、業精が茶道だけではなく、能楽も楽しんでいたことが判明する。業精の能楽の師は手塚亮太郎であろうか。

小西家の能面の蒐集は、業茂によって能舞台が建てられ、能装束を新調したことから考えても彼によるものとは容易に想像



①多賀大社奉納額



②奉納額部分

出来るのであるが、さらに、業精によっても引き続いて行われていたことは、大正八年六月二日開札の『因州池田侯爵家御蔵品入札』（注4）（以下、『因州侯立目録』という）で売り出された「猩々」が小西家の面に含まれていることから明らかである。

なお、小西家が大名貸を行っていたことから、蒐集はそれ以前の江戸時代に遡る可能性さえ考え得る。

## 伊丹・小西家の能面の行方

売立目録には四十五面の能面写真（モノクロ）が掲載されている。この中には面の傷などから、どこかで写真の面を見た記憶があり、それを手持ち資料から探すと彦根城博物館蔵の『井伊家伝来能面百姿』（注5）（以下、『能面百姿』という）に売立番号（250）（以下、売立番号を省略）獅子口、（250）童子、（261）小尉、（252）重荷悪尉（要色）があり、長沢氏春蔵の『古能面傑作五十撰』（注6）（以下、『五十撰』という）に（256）小獅子口と（257）男蛇が雷・満矩作として掲載されている。

その後、彦根城博物館・齋藤望氏による確認と調査よりさらに（265）猩々・児玉長門作と（265）若荷悪尉も彦根城博物館に入っていることが判明した。

これは筆者の手元に所蔵する彦根城博物館所蔵品の図録には掲載されていないものであった。

以下、個々の面について紹介したい。

## 獅子口について

『売立目録』（250）獅子口の写真に見られる面の傷の状態から、『能面百姿』八二図の獅子口と同一のものであることが判定される。

『売立目録』での名称は獅子口・赤鶴作で『能面百姿』では獅子口・伝赤鶴作となっている。



③

③ 売立番号二五〇 獅子口 赤鶴作

## 童子について

『売立目録』（250）童子の写真に見られる面の髪の中の傷の形状から、『能面百姿』十五図の童子と同一のものであることが判定される。

『売立目録』の名称は童子・日永作で『能面百姿』では童子



④

④ 売立番号二五〇 童子 日水作

・伝日水作となっていて、その面裏写真には(金泥銘)「日水作 宝生太夫憲成(花押)」がある。

### 重荷悪尉(要石)について

『売立目録』(252) 重荷悪尉の名称は「重荷悪尉(要石) 春若作」とある。

この面は同じ形の面に数種類の違った名前が付けられていることを齊藤香村が発見して、自身の主宰する雑誌『能楽画報』大正七年十月に齊藤香村稿「伝説の面(能面研究其十六)」(注7)と、大正八年十月に齊藤香村稿「三つ銘の能面」(注8)に、同一の形をしている面に金春流・鷺癒見・喜多流・要石、池田家・蔵王の三種類の名前が付けられていることを発表した。

ところがその後、雑誌『謡曲界』昭和五年十二月号に掲載された天野米太郎稿「能面の印象」(注9)の中に、これと同相の

面の写真に付した名前が鷺鼻悪尉であったのをきっかけにして、鷺癒見、要石、蔵王に鷺鼻悪尉を加えて「この面の名前はいずれが正しいか」との誌上論争が横山柚人、山口益堂、天野米太郎、松野奏風によって、昭和六年六月号までの毎号に延々と繰り広げられた。

これは論争した諸氏が誰も『能楽画報』の齋藤香村の記述を御存知なかったためで、香村が「奇怪な四つ銘の面」(注10)を同誌六月号に発表し、「三つ銘の能面」として『能楽画報』大正八年十月号ですでに言及していることを指摘したことで論争に終止符が打たれた。

その後、松野奏風は「要石の図」として能「要石」の舞姿を『謡曲界』昭和十年三月号に発表した。



⑤

⑤ 売立番号二五二 重荷悪尉(要石) 春若作

この論争に本稿の伊丹・小西家蔵「重荷悪尉（要石）春若作」は加わっていないが、もし加わっていればこの名称論争の四種類の名にもう一つ「重荷悪尉」を加えて五種類の名前で争われたことだったであろう。

『売立目録』の名称に括弧で記された（要石）の名は、幕末に水戸藩第九代藩主烈公（齋昭）が新作した能「要石」に使用した面の名で、烈公はこれを複数作らせて各宗家へ要石の謄本と共に贈っている。

ちなみに、金泥彩色の面は、享保時代に大野出目家から因州藩池田家に納められ、面裏に朱漆で「蔵王／出目半蔵／懸領」と記されたものが根津美術館にあり、また、『謡曲界』昭和六年六月号にも橋岡久太郎蔵で面裏に「蔵王／出目半蔵作／赤鶴打放シ」とあるもの掲載されていることから、世襲面打家大野出目家で「蔵王」と呼ばれていたことが明白である。

内藤泰二稿「能面同名異相異名同相辨」（注11）にも同相の面で名前が四種類あるものとして発表している。

彦根城博物館蔵・要石悪尉『能面百姿』九六図はこれと同相の金泥彩色であり、『売立目録』の写真は暗く面の傷などは良くわからないが、向かって右のこめかみの上の白い毛髪があるのが同一面であることを示しており、同館から頂いた面裏写真には「悪尉／春若作／出目栄満（花押）」とあって、『売立目録』の作者名「春若」と同一である。

以上から伊丹・小西家の売立面が彦根城博物館に入ったことが明らかである。

面裏の「悪尉」を目録で「重荷悪尉」としたのは重荷悪尉の曲に使用する意味であろうが、怪異な表情の中に悲しさを感じられるのはよいにしても、金泥彩色をどう考えるのであろうか。

## 小尉について

『売立目録』(261)小尉の写真に見られる面の傷の状態や、髪の毛のくせから、『能面百姿』六図の小尉と同一のものであることが判定される。



⑥

⑥ 売立番号二六一 小尉 小牛作

## 猩々について

彦根城博物館・齋藤望氏よりこの面が彦根城博物館にあることを教示頂いた。

筆者の所持する彦根城博物館の能面写真図録の『能面百姿』井伊家能楽名宝（井伊家秘蔵能面能装束展一九八四～一九八五）（注12）『特別展井伊家伝来の能面・能装束』（注13）『近世大名の美と心』（注14）『国立能楽堂開場記念特別展示・能のおもて・井伊家所蔵品による』（注15）には『売立目録』（265）の猩々・児玉長門と茗荷悪尉、は掲載されていないので判らなかつたものである。彦根城博物館から頂戴した写真と目や口の形、傷などが合致し、面裏には、撫角枳に「児玉」とある烙印があり、朱漆銘で「せうぜう／享保八卯七月出来」とあつて、これの字体や年記、出来、などの文字から因州藩旧蔵面である。

またこの面の面袋に記されている作者名には「児玉長、門」とある。

児玉長、門は児玉長右衛門を略して記したものと解される。角枳に「児玉」の烙印は、一般に朋満作のものとされているが、児玉長右衛門は長じて「朋満」を名乗るようになると「児玉朋満」の焼印を使用しているところから、「朋満」を名乗る前の児玉長右衛門の時代に使用した烙印である。

筆者は、因州藩旧蔵面の面裏の烙印の作者名が面袋にどのよ



⑦

⑦ 売立番号二五六 猩々 児玉長門作

うに記されているか調査した結果、同一人物であっても、面袋に記された作者名は、剃髪して法号を名乗る以前は俗名、以後は法号と明確に分けて記していることを発見している。（注16）

『因州侯売立目録』に猩々で「児玉長門」とあるのは売立番号四番の四九番目に記されたもののみである。

売立番号四番は橋岡久太郎が落札しているので、これが伊丹・小西家を經由して彦根・井伊家へ入ったものである。

时期的に井伊家第十五代直忠の収集品であり、直忠は関東大震災で多くの能面を失って、その後、精力的に能道具を収集していた。

筆者は橋岡久太郎が彦根のお殿様（直忠）と親交があつて面を譲ったり、交換したことを久太郎のご子息の橋岡慈観氏から聞いており、彦根城博物館の因州藩旧蔵面は橋岡久太郎から直接

入った物だろうと思っていたが、そればかりではないことも判明した。

なお、金剛宗家蔵『面の書』（注17）には、この面の烙印と同じ印形の撫角杵に「兒玉」について兒玉長右衛門と記されている。

## 茗荷悪尉について

（265）狸々と同じく、彦根城博物館・齋藤望氏よりこれが彦根城博物館にあることを教示頂いた。

筆者の所持する彦根城博物館関係の能面写真図録に掲載されていないことは前述のとおりで、教示いただいて判明したものである。

頂戴した写真と額のしみや傷などが合致する。



⑧

⑧ 売立番号二六五 茗荷悪尉

## 男蛇について

『売立目録』の（257）男蛇・出目満矩作として写真が掲載されている面は、傷などから『五十撰』五八頁に掲載の長沢氏春蔵・雷・（烙印）「出目満矩」と同じものである。

『五十撰』では、この雷・満矩作の面裏には（烙印）「出目満矩」があり、金春信高師の解説に、「いかずちともかみなりともいう文字は同じ雷である。」と記されている。



⑨

⑨ 売立番号二五七 男蛇 出目満矩作

また、齊藤香村稿「能面研究（六）」（注18）に「大蛇の名前が付けられた能面が伊丹・小西家にあるそうだが、未だ拝見しないから、名だけに留めおく。」とある。

齊藤香村著『能面大鑑』には甫閑作・橋岡久太郎蔵「蛇口」（注19）として同相の面の写真が掲載され、用途について、「男蛇に等しく、大蛇等に用ふべし。」とあり、香村の言う「伊丹・小

西家の大蛇」はこの面である可能性が高い。

内海靖子稿「泉屋博古館の面をめぐる近代」(注20)には泉屋博古館蔵・友水作の同型の面の写真があり、面裏に朱漆で「志ヤ口 元文三戊午十二月出来」とあると記され、因州藩旧蔵面である。

これらから『売立目録』で名称が「男蛇」になっているこの面は、享保時代に大野出目家や因州藩で「蛇口」と呼ばれていたことが確実で、これに非常に近い形の京都・金剛家で「雷」と呼ばれているところから『五十撰』では、名称に「雷」を採用されたものであろう。

『因州侯売立目録』には「蛇口」は二面あって、満猶作が七号三五番、庸久作が十号九八番にあり、いずれも橋岡久太郎が落札しているが、その内庸久作が泉屋博古館へ入ったものである。

なお、『因州侯売立目録』には作者名が満猶、庸久となっているので、剃髪して法号である甫閑、友水を名乗る前の作品であり、図録等で名前を法号に変えることは制作時期を曖昧にしてしまうこととなる。

## 小獅子口について

(256) 小獅子口には「公儀御面赤鶴写・出目洞水作」とある。額のところの傷の写真比較判定で、『五十撰』五五頁掲載の小

獅子であると判定される。

『五十撰』の面裏写真には朱漆銘で「公儀御面赤鶴作生写洞水打」とあり、合致する。



⑩

⑩ 売立番号二五六 小獅子口

公儀御面赤鶴写 出目洞水作

## 小西家へ入った経路の推定

彦根城博物館に入ったこれらの能面は同館所蔵面の中でも逸品に挙げられているものが多い。

これらの面が小西家に入った経路が気になるところである。これに関して、管見では、それを証拠付ける直接の資料は持ち合わせていないのであるが、乏しい状況証拠をつなぎあわせて、あて推定を試みたい。

経路の一つに考えられるものに、能楽を好んだ大阪の豪商千屋屋平瀬亀之助(露香)(以下、露香と呼ぶ。)と十一代小西新右衛門業

茂（ぎょうも）との親交が関係ありそうだ。

親交を伝えるものとして、当時の新聞記事から能楽関係のものをまとめた『明治の能楽』（注21）の明治十五年九月九日付・京都滋賀新報に「今春来新築に従事せし伏見稻荷神社の能舞台、己に全く竣工せしを以て、来る十五日、それが開台式を執行さるゝよし。当日は大阪の豪商平瀬亀之助が自ら小鍛冶を舞ひ、又、片山晋三には観世流の能を奉納し、伊丹の豪商小西新右衛門は親く道成寺を舞ふよしなるが、定めて賑はしきことなるべし。」とあり、明治二十年二月八日（朝旦）には「偕行社に於て能楽を天覧に入るゝに就き、天野皎平、平瀬亀之助、小西新右衛門、藪清右衛門の人々が力を尽し、久しく纏れし（観世派と金剛派の）葛藤を解き、両派打ち集りて叡覧に供ふることならば、（後略）」とあり、又、明治二十年二月二二日（大阪日報）には「今度偕行社に新築したる能舞台は工費一千二百円にして、小西、平瀬、藪の三氏が其全部を負担して建設したる者の由なるが、右の三氏は今度同舞台に於て能楽を天覧に供する為め、何れも五百円以上の金を投じて装束を新調したりと云う。」

これらの記事からは大阪財界トップの能を通じての交際を見ることができる。

『大阪人物辞典』（注22）には、「露香は邸内に能舞台を持ち、能装束（筆者注、能面を含むと思われる）には目が無く私財を投じて買い集めた。ために、本職でも衣装や能面の借用に露香宅へ日

参したといわれる。」とある。

また、露香は金剛流免許皆伝で、能の宗家と親しく交わっていて、金春流から流出した、太閤より拝領の雪の小面を取り止めて、京・金剛宗家へ入れた。

維新の後、金剛氏成宗家が頼って行つてその折、露香へ渡した河内の孫次郎も京・金剛へ入っている。（注23）

露香のもとには「雪の小面」や「河内の孫次郎」の他にも維新で困窮した能の宗家から流出した能面が入ってきていたのではなからうか。

露香は現在京・金剛宗家蔵となっている赤鶴作「猿飛出」面を所持していて、その後、近江日野の鈴木忠右衛門の所持となつた。（注24）

又、現在、京・金剛宗家にある作者不詳「鼓悪尉」、龍右衛門作「般若」も維新の動乱の中、宗家から流出した能面を露香が取り留めて鈴木忠右衛門へ入つたものの可能性が高い。

露香と小西新右衛門の交友関係を見ると、露香が所持していた能面を手放した時に、その一部が鈴木忠右衛門方だけでは無く、小西新右衛門方へも入った可能性が考えられるのである。考えられるもう一つの経路は、前述したように、小西家や平瀬家が江戸時代に大名貸を行っていたことである。

能面は大名道具であり、一般には大名家に入ってしまうと、動かないように思われているが、因州藩第三代吉泰公は享保か

ら元文年間にかけての、十数年間、参勤交代の行き還りで伏見屋敷に逗留する度に毎回継続して主に物故作家の能面を調達していて、この際に調達した能面の面裏には調達年月の下に「伏見調」と朱漆銘を入れていることが筆者の研究<sup>(注25)</sup>によって判明していることから、ここに伏見屋敷に持ち込んだ人の影が見えてくるのである。

江戸時代も半ば頃になると、経済的に苦しい大名家が多くなって、それらは大名貸をしている大商人に借りを重ねたり、利子の先延ばしの交渉に苦心をする状況になっていたので、困窮した大名家の諸道具が商人の手に渡り、それが流れるルートが出来上がっていたと推定され、能面もその例外ではなく、因州藩伏見屋敷へ能面が持ち込まれるようになっていたと考える。

小西家や平瀬家も大名貸を行う中で、能面を手に入れている可能性を考えると、そのうちの逸品を選んで持ち続けていたと考えれば、これらの商家にすばらしい面が残されていて不思議ではない。

前述した現在、京・金剛宗家蔵となっている赤鶴作「猿飛出」は「金剛嶺之助（慶応元年没）が三五才で没したその病床にまで千種屋から借り出しかかっていたという。」<sup>(注26)</sup>ことで、幕府の瓦解はこれ以降であるから、この赤鶴作「猿飛出」は維新以前から露香のもとにあったことが判る。

もし、これら推定が当たっていれば、伊丹・小西家のこれらの

能面には宗家伝来のものや、大名家旧蔵品でも選び抜かれた逸品が含まれていたことが考えられるのである。

このような状況証拠のみをもって仮定を書くのは研究論文集にはふさわしくないかもしれないが、美術品の流れには明らかにされないことが多いのであえて述べてみた。

## むすび

本稿は昭和八年（二八七五）の伊丹・小西家の所蔵品売立目録からその後の能面の流転を各種図録の写真と比較して発見したことから、その後の調査によって判明したことを記したものである。

現在、彦根城博物館の能面はきれいに修理されて、面にあった傷など、よほど注意して見ても分からないので、売立目録の写真と比べても直ちにこれが同じものと判断がつかない状況になっているが、筆者は修理前の写真と比較したのでこれが判明したのである。

彦根城博物館でも小西家から入ったものであることはご存知なかったようである。

長沢氏春撰『古能面傑作五十撰』<sup>(注27)</sup>に掲載された面は、能面の無形文化財選定保存技術保持者の編者が制作の原本として長年にわたって収集した所蔵品を中心にした能面集で「男蛇・出目満矩作」は巻末に「私の好きな古能面」として挙げられ

ており、「小獅子口・公儀御面赤鶴写・出目洞水作」も長沢氏春氏の所蔵品と思われるが、氏は平成十一年二月十一日に逝去されている。

『五十撰』に掲載された面の一部は、福岡市博物館に入っているが、本稿の「男蛇・出目満矩作」「小獅子口・公儀御面赤鶴写・出目洞水作」はこれに入っていない。

以上から考えて、『五十撰』の面は、福岡市博物館に入らなかったものについても、他へ異動している可能性が考えられる。本稿で掲出した能面写真は売立目録から転載したもので、多賀大社奉納額は筆者が撮影したものである。

本稿をまとめるにあたって、助言や資料を頂いた、飯塚恵理人氏、齋藤望氏に感謝の意を表したい。

(注1) 『某家(伊丹・小西家)所蔵品入札目録』(昭和八年一月二四日開札 大阪美術倶楽部発行)

(注2) 『明治の能楽』倉田喜弘編著・平成六年三月三〇日・国立能楽堂調査養成課編集・日本芸術文化振興会発行

(注3) 『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ株式会社(二〇〇四年七月二六日発行、紀伊国屋書店発売)

(注4) 『因州池田侯爵家御蔵品入札』大正八年六月二日開札、東京美術倶楽部発行

(注5) 『井伊家伝来能面百姿』(増田正造編・一九八三年十月七日平凡社発行)

(注6) 『古能面傑作五十撰』(毎日新聞社・昭和五九年九月三十日発行)

(注7) 齊藤香村稿「伝説の面(能面研究其十六)」(『能楽画報』大正七十七月号)

(注8) 齊藤香村稿「三つ銘の能面」(『能楽画報』大正八年十月号)

(注9) 天野米太郎稿「能面の印象」(『謡曲界』昭和五年十二月号)

(注10) 齊藤香村稿「奇怪な四つ銘の面」(『謡曲界』昭和六年六月号)

(注11) 内藤泰二稿「能面同名異相異名同相辨」(『宝生』昭和四二年二月号・昭和四五年六月号。採録『観る―愛面居士の能面探求辨―』保田紹雲編集・内藤泰二著述集刊行会・平成五年二月発行二三頁)

(注12) 『井伊家能楽名宝(井伊家秘蔵能面能装束展一九八四〜一九八五)』(朝日新聞社主宰展図録・昭和五九年十月〜昭和六十年六月まで各所で開催)

(注13) 『特別展井伊家伝来の能面・能装束』(彦根城博物館・昭和六二年九月〜十一月)

(注14) 『近世大名の美と心・井伊家伝来の名宝』(彦根城博物館・昭和六二年二月発行)

(注15) 『国立能楽堂開場記念特別展示・能のおもて・井伊家所蔵品による』(昭和五十六年九月十五日国立能楽堂編集・発行)

(注16) 保田紹雲稿「補遺2・因州侯(鳥取藩池田家)旧蔵能面に関する考察」(『名古屋芸文化』第十六号平成十八年十二月二三日名古屋芸文化)

文化会発行二三頁)

(注17) 金剛宗家蔵『面の書』(金剛永謹著『金剛家の面』二〇〇〇年八月一日)

日玉川大学出版部発行)

(注18) 齊藤香村稿「能面研究(六)」、『能楽画報』第十一卷第九号・大正六年九月号)

(注19) 橋岡久太郎蔵「蛇口」甫閑作(齊藤芳之助(香村)編『能面大鑑』

序卷三三頁(大正九年十一月二〇日発行・大正十四年五月一日再版

・能楽書院発行、昭和五三年四月二八日東洋書院発行(復刻版) )

(注20) 内海靖子稿「泉屋博古館の面をめぐる近代」、『泉屋博古館紀要第十九号』平成十五年三月三一日発行五六頁)

(注21) 『明治の能楽(一)』国立能楽堂調査養成課編集・平成六年三月三十日日本芸術文化振興会発行二二〇頁)

(注22) 『大阪人物辞典』清文社平成十二年十一月二十日発行

(注23) 『能楽芸話』金剛右京談三宅裏聞書昭和四六年九月一日檜書店発行

一一頁『能楽芸話』金剛右京談<sup>7009</sup> p.111) には「維新になって祖父

(金剛氏成・明治十七甲申没) が江戸から歩いて大阪の平瀬亀之助

を頼って下りました。亀之助が驚いたそうです。河内の孫次郎を平

瀬へ祖父が与え、これを後日謹之助がもらったのです。京都金剛の

河内孫次郎というのはこれです。(中略・もう一つの孫次郎の話あり)

平瀬亀之助は氏成のパトロン。謹之助の追善に仕舞を舞った。」

(注24) 『能と能面』金剛巖著・昭和十五年五月十七日弘文堂書房発行

(注25) 保田紹雲稿「続・因州侯(鳥取藩池田家)旧蔵能面に関する考察」、『名

古屋芸能文化』第十四号平成十六年十二月十八日名古屋芸能文化会発行四十頁)

(注26) 『能と能面』金剛巖著・昭和十五年五月十七日弘文堂書房発行

(注27) 『古能面傑作五十撰』(毎日新聞社・昭和五九年九月三十日発行)

一七四頁

【報告】

豊橋・安海熊野神社蔵能楽資料の調査

林 和利

一、はじめに

明治以降昭和の初めまで、豊橋市魚町では能楽が盛んに行われていた。そのときに使用されていた能面・能装束が、今も魚町の安海熊野神社に残されている。

その能面・能装束が平成元年十月に国立能楽堂で公開されて広く知られることとなり、さらに平成十年十月には地元の豊橋市美術博物館においても「華麗なる能装束の美」展と称して特別公開された。質・量ともに、魚町の能面・能装束の価値は高く評価されている。

しかし実は、文書資料についても能・狂言関係のものが、安海熊野神社の倉庫に大量に格納されていた。そのことは、地元関係者以外ほとんど知られていなかったと言ってよい。その資料をこのほど、東海能楽研究会のメンバーが撮影調査する機会を得たので、現時点で判明していることを、その経緯とともに報告しておきたい。

二、豊橋魚町の能楽

まず、豊橋魚町の能楽について、平石基次・平石正彦編『安海熊野宮と能楽』(安海熊野社・昭和46)、長坂理一郎談「豊橋想出の名士―小久保彦十郎」(『豊橋新聞』昭和31、32、本論集129、132頁所収)などに基づきながら、かいつまんで記しておく。

江戸時代、豊橋は吉田藩と称した。その吉田藩の能楽を近代に引き継いだ人物は、小久保彦十郎という資産家である。帯刀御免で吉田城に出入りしていた商人で、油屋という屋号を名乗っていた。

彦十郎は名古屋の大野という人物に就いて能を習い、その技量は玄人に近いレベルであったという。吉田藩士の能の指南的立場であり、城内で能楽の催しがあると、彦十郎が舞い、藩士たちが囃子を務めるのが普通だったと伝えられる。明治維新の廃藩置県で藩主が上京することになったとき、不要になった能装束が払い下げられることとなり、その散逸を惜しんだ彦十郎が名乗り出て値段を交渉し、能面ともども三百円で譲渡される

こととなった。

一方、幕末の弘化年間（二八四〇〜四八）以来、安海熊野神社において能楽の奉納が行われていた。それは、新城（豊橋北方の町）の山田権兵衛という狂言師が吉田城下の魚河岸越賀家へ養子に来たのがきっかけと伝えられている。

彦十郎や権兵衛たちは安海熊野神社境内の神楽殿を能舞台として使い、仕舞などを祭礼において上演していた。やがて袴能が上演されるようになり、明治七年、前述の能面・能装束払い下げにより、本格的な扮装の演能が可能となった。

その後、彦十郎は事業に失敗して青森県弘前市へ転居したが、払い下げの出資に協力して彦十郎を助けた滝崎安之助・佐藤善六の二人によって能面・能装束が受け継がれ、市内の名士とともに能・狂言が上演され続けた。

また、能面・能装束維持のために作られた頼母子講が功を奏し、舞台築造にまで及んだ。明治十七年、安海熊野神社境内に能楽殿が新築され、明治三十四に改築されて、演能の環境が整っていったのである。（ただし、現存しない）

魚町で活躍した能・狂言関係の人物として、前掲「豊橋想出の名士」は次の人たちをあげている。まず、シテ方として滝崎安之助・大口喜六・斉藤純太郎・上浜精清一・竹内市蔵・川村実蔵・佐野初枝・安松貞衛・彦坂勝太郎・滝崎吉太郎といった方々。また、ワキ方としては奥村蔵、小鼓方として藤井治三郎

・安松八郎・和田稻城・石田布二蔵、大鼓方として長瀬普・川村類三、笛方として鈴木源吉・佐藤治郎八・鈴木半蔵、太鼓方として奥村閑水・鈴木勘右衛門・深井清華、狂言方として森京之進・鳥居猪平・鳥居喜楽・鈴木彦兵衛・夏目半平・牧野新三九・山本伊助の諸氏である。この記事の語り手、長坂（阪理一郎もシテ方であった）。

### 三、経緯―調査にいたるまで

平成十七年六月、私はたまたま豊橋へ出掛けたついでに、雨の中を安海熊野神社へ足を伸ばした。もちろんそれは能面・能装束が所蔵されていることを知っていて、以前から気になっていたからではあるけれど、ほとんど急に思い立った気まぐれであつたと言つてよい。

そんな状態で、何の連絡も入れずにいきなり訪れても、通常は無駄足になるものである。私はほとんど何の期待もしていなかった。案の定、管理人は留守であつた。入り口は固く施錠されている。もともと調査目的の訪問ではなかったので、場所だけでなく確認できたのをよしとし、改めて出直そうと立ち去りかけた。ところが、そのときたまたま管理人の木村勝利氏ご夫妻が帰って来られて、八月に能面・能装束の虫干しが行われることがわかった。しかし、日時の詳細は未定だという。名刺を渡し、決定されたら連絡いたadakという約束を取り付けて帰った

のである。

振り返って考えて見ると、そのタイミングで木村氏が帰って来られなければ、今回の調査もなかったであろう。そのときは文書資料の存在を知らなかったのだから、もう一度と思いがながらも、それきりになってしまったかもしれない。私どもによる調査の機会は永遠に失われた可能性が濃厚である。幸運と言うほかない。ご縁というものは、つくづく不思議なものだと思う。

虫干しの日時など詳細が木村氏から電話でお知らせいただいたのは八月に入ってからだったと思う。忘れずによく連絡をくださったと感謝しつつ、八月十五日の虫干しを兼ねた能面・能装束展に出掛けた。会場には魚町能楽保存会代表の村田巽氏はじめ主要メンバーの皆様が集まっておられ、予想外の歓待を受けたのであるが、このとき、展示されている能面・能装束のほかに、倉庫にしまわれているという文書資料の存在を教わったのである。

そのときは、倉庫の入り口から薄暗い中をのぞき込むことができただけで、どんな物がどれほど納められているのかについては皆目見当もつかなかった。簡単にその中を見せてくださいたとは言いかねるような嚴重な雰囲気を感じたので、私はそれ以上の要求を遠慮したのである。

とにかく「膨大な書類の資料があつて、まだまったく調査されていない」という話を聞いて強い関心を持った。しかし、お

そらく一人では無理だと思い、東海能楽研究会のメンバーの助力を仰いで調査させていただくことの了解を得、改めて出直すこととした。

東海能楽研究会の例会は二ヶ月に一度である。その日から最も近い例会は翌月、九月十八日であった。その例会の席で、私は安海熊野神社に未調査の能楽資料が存在することを報告するとともに、東海能楽研究会の事業として調査を進めたいと提案した。また、たまたま出席の会員の中に豊橋在住の朝川知勇氏の存在があつたので、今後の仲介役をお願いしておいた。

すると、朝川氏は早速詳細な調査計画を立ててくださったので、その次の例会で計画案を報告していただくとともに、それに基きつつ研究会の事業として進めることが、出席会員の了解事項として改めて確認されたのであった。

ところが、たまたま私が公私ともに諸事多端な状況になるとともに、私の迂闊さゆえに先方への直接交渉の窓口が確認できないままに時間が過ぎていった。安海熊野神社には電話がないうえに、私は関係者の名刺をもらわなかったのである。翌年の春休みに、会員の米田真理氏が自ら調査担当を申し出てくださったのだけれど、やはり先方との連絡不通のために実現しなかった。

結局、夏の虫干しまで待たなくてはならないこととなったのであるが、その情報をつかんでくださったのは当研究会会員の

保田紹雲氏であった。八月十五日の虫干し当日、保田氏・朝川氏・米田氏とともに出掛けて行き、我々はようやく文書資料の現物を目にする事ができた。つぶさに拝見するゆとりはなかったが、とにかく縦長の本箱状に作られた大きな二つの木箱を開けていただき、その中いっばいに詰め込まれた資料の存在を確認した。

強い樟脳の臭いに包まれたその木箱は、おそらく数十年ぶりか、それ以上の歳月を経て開けられたものと思われた。しかし、とてもその場で詳細な調査はできない大部の資料である。調査の日程を翌月六日と決めて、再び出直すことにした。

とにかく、現物を目にする事ができたことと、ようやく本格調査に向けて、具体的に動き出した喜びは大きかった。

#### 四、本格調査

本格調査の当日は、前掲諸氏のほかに当研究会代表の筧鉦一氏も参加して下さり、地元保存会のメンバーも終始同伴して見守ってくださった。前掲村田氏のほか、氏子総代の太田安雄氏、山本恵三氏、および豊橋観光ボランティアガイドの会会長の原田守尉氏などの皆様である。

保田氏は氣を利かせてご自身の撮影機材を持ち込んで下さり、すべての文献の表紙と、重要と判断される頁をデジタル映像で撮影して下さった。また、米田氏は文献資料一つ一つに

要領よく短冊をはさんで番号を付し、丹念に書誌の記録を取ってくださった。

調査を進めながら気が付いたのは、能関係の資料が多いと思いついていたのは誤りで、むしろ狂言関係の資料が多いことであつた。それも比較的という程度でなく、圧倒的な多さであつたのは予想もしない驚きであつた。米田氏作成の別掲のリストのとおり、狂言台本、間狂言台本がその多くを占めているのである。

私の研究の関心は能よりも狂言の方に傾いているので、当初、豊橋資料の具体的な調査は若い能の研究者に譲りたいという気持ちが強かった。成り行き上、調査進行の責任者の立場は免れないものの、きつと狂言の資料は微々たるものだろうから、能の専門家に任せただ方が効率的で有益だろうと判断したのである。ところが、案に相違して狂言資料が多いという事実が判明したために、記述内容の分析に至るまで私が中心的に関わらざるをえないという状況となり、いっそうの責任を感じている。またことに不思議な巡り合わせである。

さて、その日、調査を進めながら、とても一日では終わらぬ作業であることがわかってくるとともに、すべての頁を映像に収める必要があると判断した。そこで再調査の許しを請い、日程を決めて、その日は引き上げた。

再調査の十一月五日は、東海能楽研究会の豊橋例会として位

置づけ、多くのメンバーが参加してくださった。まさに人海戦術の様相であった。最初から関わってくださったっていた前掲のメンバーのほかに、飯塚恵理人・田崎未知・中尾薫・橋場夕佳・青山武雄・小汐保・吉房徳二・長谷川忠・長田若子・山村知津子・野武審の皆さんのご協力があった。

とくに飯塚恵理人氏はパソコンを持ち込んで、撮影されたデジタル映像をその場でCDに入力してしまうという手際の良さであった。

この日朝から、改めて、すべての所蔵資料を対象として再調査に取りかかり、夕刻まで費やして収録し終えた。ただし、私自身はたまたま奥歯の親知らずを患っていて途中で退散せざるを得ないという有様で、肩身の狭い思いだった。

この調査の結果を基にして、米田氏が綿密に吟味整理してリストを作成してくださった。別掲のとおりである。

本稿はいちおうの中間報告であるが、引き続き内容分析を試みた上で、逐次報告していく予定である。

**付記** 本調査にあたり、豊橋へ訪問するたびに食事を提供するなど歓待していただいた魚町能楽保存会の皆様、撮影費など調査費用の全面的支援をしてくださった朝川知勇様、調査作業のご協力をいただいた寛鉦一代表はじめ当研究会会員の皆様に深甚の謝意を表します。

また、本稿執筆の段階で太田安雄様から資料を送付していただくとともに、貴重なご教示をいただきました。あわせて御礼申し上げます。

| 安海熊野神社能楽伝書目録 |                      |                                  |                                                  |                                                                                    |                  |          |    |
|--------------|----------------------|----------------------------------|--------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|------------------|----------|----|
|              | 仮 称                  | 題                                | 内 容                                              | 所蔵者等                                                                               | 備 考              | 縦mm×横mm  | 丁数 |
| 1            | 狂言台本<br>(No.1～20、23) | [外題・打付]第壹號                       | 鏡男、三人長者…                                         | [印]三州豊橋魚町<br>加納屋新三郎                                                                | 白茶地茶色斜<br>縞模様    | 246×166  |    |
| 2            |                      | [外題・打付]第貳號                       | 松拍子、三本柱…                                         |                                                                                    |                  | 247×163  |    |
| 3            |                      | [外題・打付]第参號                       | 通圓、宗八…                                           | ①[印]三州豊橋魚<br>町加納屋新三郎<br>②[印]三河国豊橋<br>呉服町二十七番<br>地牧野新作<br>③[寫入用紙のど]<br>豊橋呉服町満留<br>亦 |                  | 243×169  |    |
| 4            |                      | [外題・打付]第四號                       | 文蔵語り、井桁…                                         |                                                                                    |                  | 241×165  |    |
| 5            |                      | [外題・打付]第五號                       | 瓜盗人、伯陽…                                          |                                                                                    |                  | 250×167  |    |
| 6            |                      | [外題・打付]第六號                       | 因幡堂、犬山伏…                                         |                                                                                    |                  | 238×162  |    |
| 7            |                      | [外題・打付]第八號<br>*第七号ナシ             | さっくわ、磁石…                                         |                                                                                    |                  | 243×162  |    |
| 8            |                      | [外題・打付]第九號                       | 狐塚、清水…                                           |                                                                                    |                  | 243×162  |    |
| 9            |                      | [外題・打付]第拾號                       | 雁大名、文山賊…                                         |                                                                                    |                  | 240×162  |    |
| 10           |                      | [外題・打付]第拾壹號                      | 佐渡狐、柑子…                                          |                                                                                    |                  | 240×162  |    |
| 11           |                      | [外題・打付]第拾貳號                      | 悪坊、附子…                                           |                                                                                    |                  | 240×162  | 57 |
| 12           |                      | [外題・打付]第拾参號                      | 松拍子、入間川…                                         |                                                                                    |                  | 240×162  | 51 |
| 13           |                      | [外題・打付]第拾四號                      | 素袍落…                                             |                                                                                    |                  | 240×162  | 74 |
| 14           |                      | [外題・打付]第拾五號                      | しびり、雁礫…                                          |                                                                                    |                  | 214×139  | 43 |
| 15           |                      | [外題・打付]第拾六號                      | 石神、猿うた…                                          |                                                                                    |                  | 194×129  | 92 |
| 16           |                      | [外題・打付]第拾七號                      | 萩大名、魚説法語…                                        |                                                                                    |                  | 153×253* | 47 |
| 17           |                      | [外題・打付]第拾八號                      | 彌宜山伏、張蛸…                                         |                                                                                    |                  | 278×192  | 24 |
| 18           |                      | [外題・打付]第拾九號                      | 大藤内、知章…                                          |                                                                                    |                  | 246×168  | 66 |
| 19           |                      | [外題・打付]第貳拾號                      | 包丁髻、懷中髻…                                         |                                                                                    |                  | 227×161  | 30 |
| 20           |                      | [外題・打付]和泉流狂言六儀                   | 蚊角力、縄ない…                                         |                                                                                    |                  | 229×167  | 93 |
| 23           |                      | [外題・打付]不須(壹)                     | 不須…                                              |                                                                                    |                  | 237×166  | 14 |
| 21           | 狂言伝書(21、22)          | ①[外題・打付]装束秘伝書 第九号 ②[目錄冒頭]狂言装束秘伝書 | 夷大黒、毘沙門連歌、大黒連歌…                                  |                                                                                    | 横長型白茶地<br>茶色横縞模様 | 139×198  | 50 |
| 22           |                      | [外題・打付]壹番習<br>秘書 九               | 三番叟モミノ段、鈴<br>ノ段、千歳、道成寺、<br>木六駄ヲジ、(野村<br>流ハ…)、木六駄 |                                                                                    | 横長型白茶地<br>茶色横縞模様 | 239×165  | 25 |
| 24           | 狂言台本<br>(No.24～28)   | [外題・打付]覚書／第四号                    |                                                  |                                                                                    | 横長型薄茶色<br>横縞模様   | 152×206  | 51 |
| 25           |                      | [外題・打付]小習覚書／第五号                  |                                                  |                                                                                    |                  | 152×206  | 69 |
| 26           |                      | [外題・打付]習物覚書／第六号                  |                                                  |                                                                                    |                  | 152×206  | 54 |
| 27           |                      | [外題・打付]間語二十<br>◇◇(摩耗)／第七号        |                                                  |                                                                                    |                  | 152×206  | 45 |

安海熊野神社能楽伝書目録

|    | 仮 称                        | 題                                    | 内 容                           | 所蔵者等                                                       | 備 考                                                                                  | 縦mm×横mm | 丁数 |
|----|----------------------------|--------------------------------------|-------------------------------|------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|---------|----|
| 28 | 狂言台本<br>(No.24～28)         | [外題・打付]他見無用<br>秘書 抜書八 問語／<br>第八号     |                               |                                                            | 横長型薄茶色<br>横縞模様。[奥<br>書]東京麴町<br>通?土手三番<br>町廿五番地／<br>山脇元清<br>*「山」字に書<br>き損じ後あり、<br>他筆か | 148×208 | 30 |
| 29 |                            | [外題・題簽]第壹号                           |                               |                                                            |                                                                                      | 150×206 | 70 |
| 30 | 狂言台本<br>(No.29～31)         | [外題・題簽]第貳号                           |                               |                                                            | 横長型茶色地<br>菱模様                                                                        | 150×206 | 69 |
| 31 |                            | [外題・題簽]第三号                           |                               |                                                            |                                                                                      | 150×206 | 77 |
| 32 | 版本<br>太鼓頭付謡本<br>(No.32、33) | ナシ                                   | 貞享四丁卯<br>梅村弥右衛門版              |                                                            | 赤茶色地波模様                                                                              | 228×158 |    |
| 33 |                            | ナシ                                   | 貞享四丁卯<br>梅村弥右衛門版              |                                                            |                                                                                      | 228×158 |    |
| 34 | 狂言台本                       | [題簽ハガレ跡アリ]<br>[外題・打付] [外題・打<br>付]拾壹号 |                               | [挿入]新城原田氏<br>から魚町藤城氏へ<br>(薬市)出演承諾お<br>よび(塗師)替装束<br>に関するハガキ | 横長型薄茶色<br>横 縞 模 様<br>(No.24～28と同<br>表紙)                                              | 210×148 | 51 |
| 35 |                            | ①[刷題簽]続狂言記一<br>②[刷題簽] (曲名)           |                               | [丸印]三州／吉<br>田／上清／魚町                                        | 小型横本                                                                                 | 110×160 |    |
| 36 | 版本 続狂言記<br>(No.35～38)      | ①[刷題簽]続狂言記二<br>②[刷題簽] (曲名)           |                               | [丸印]三州／吉<br>田／上清／魚町                                        |                                                                                      | 110×160 |    |
| 37 |                            | ①[刷題簽]続狂言記三<br>②[刷題簽] (曲名)           |                               | [丸印]三州／吉<br>田／上清／魚町                                        |                                                                                      | 110×160 |    |
| 38 |                            | ①[刷題簽]続狂言記五<br>②[刷題簽] (曲名)           | 第五巻はナシ                        | [角印]上濱屋／<br>清兵衛                                            |                                                                                      | 110×160 |    |
| 39 | 版本<br>小型謡本百番               | (題簽・外題ナシ／<br>奥付ナシ)                   | 綴糸切。本紙は良好                     |                                                            | 焦茶色地菱形<br>桐花?模様                                                                      | 150×110 |    |
| 40 | 版本 七太夫流<br>仕舞付(計7冊)        | [外題・題簽]仕舞付百番<br>七太夫流                 |                               |                                                            |                                                                                      | 278×200 |    |
| 41 | 版本<br>絵画指南書                | [外題・題簽]絵本写実袋<br>九之巻目録上               | 「遠山に麒麟の図」<br>など。能・狂言とは<br>無関係 |                                                            | 紺色                                                                                   | 222×158 |    |
| 42 | ガリ版刷<br>狂言謡                | [内題]猿うた／<br>吉乃葉／花の袖                  | 二紙                            | 豊橋狂言社中                                                     |                                                                                      | 242×324 |    |
| 43 | 間狂言台本                      | ナシ                                   | 忠度／敦盛／東北<br>…… ◎前半部欠          |                                                            |                                                                                      | 150×182 |    |
| 44 | 版本<br>弘化勸進能番組              | [外題・打付(刷)]宝生大<br>夫／勸進能番組             |                               |                                                            |                                                                                      | 180×456 |    |
| 45 | 間狂言台本<br>頼政                | [外題・打付]頼政／<br>古市猪兵衛                  |                               | 古市猪兵衛所持                                                    |                                                                                      | 208×138 | 7  |
| 46 | 間狂言台本<br>知章                | [冒頭]知章                               |                               | [末・書名]<br>吉田彦?兵衛                                           |                                                                                      | 235×132 |    |
| 47 | 間狂言台本<br>鉢木                | [外題・打付]鉢木／六<br>儀／鳥居新次郎／写之            |                               | 鳥居新次郎                                                      |                                                                                      | 247×167 | 3  |
| 48 | 狂言台本<br>雁大名                | [外題・打付]雁大名／<br>六儀                    |                               | 豊橋魚町／<br>鳥居寅藏之持主                                           |                                                                                      | 247×166 | 15 |

| 安海熊野神社能楽伝書目録 |                         |                                            |                         |                                |                                        |                |
|--------------|-------------------------|--------------------------------------------|-------------------------|--------------------------------|----------------------------------------|----------------|
|              | 仮 称                     | 題                                          | 内 容                     | 所蔵者等                           | 備 考                                    | 縦mm×横mm<br>丁数  |
| 49           | 狂言台本                    | [外題・打付]寛政六年甲寅四月三日於神宮寺興行／天鼓間・萩大名・呂蓮・三人片輪騎可也 | 本文は、萩大名→呂蓮→三人片輪(天鼓間はナシ) |                                |                                        | 245×168<br>33  |
| 50           | 間 狂 言 台 本<br>(No.50～57) | [外題・打付]能間第壹号                               | 白楽天、飛雲、巻絹…              | ①[印]三州豊橋魚町加納屋新三郎<br>②[直書]古市猪兵衛 | 藍色横長型                                  | 140×198<br>143 |
| 51           |                         | [外題・打付]能間第貳号                               | 藤戸、船弁慶、百万…              |                                |                                        | 140×198<br>204 |
| 52           |                         | [外題・打付]能間第三号                               | 和布刈、養老、賀茂…              |                                |                                        | 140×198        |
| 53           |                         | [外題・打付]能間第四号                               | 白楽天、飛雲、巻絹…              | [印]三州豊橋魚町加納屋新三郎                |                                        | 140×198        |
| 54           |                         | [外題・打付]能間狂言第五号                             | 和布刈、春栄…面箱<br>見…         |                                |                                        | 140×198        |
| 55           |                         | [外題・打付]能間狂言第六号                             | 阿漕、巴、藤永…                |                                |                                        |                |
| 56           |                         | [外題・打付]能間狂言第七号                             | 狂言名寄                    | [印]三州豊橋魚町加納屋新三郎                |                                        | 134×194<br>171 |
| 57           |                         | [外題・打付]能間狂言第八号                             | 大般若、千切木…                |                                |                                        | 149×188<br>82  |
| 58           | 三番叟秘書<br>[包紙]三番叟        | ①[外題]揉之段 鈴之段 笛譜                            | 三番叟、揉の段、鈴の段             | ①[印]吉田札木町／御菓子司／船橋屋平角製          |                                        | 245×168        |
|              |                         | ②[外題]三番叟 千歳 極秘伝書                           | 三番叟、千歳                  | 古市猪兵衛                          | 挿紙有(「藤田重政」あて誓状)。仮綴                     | 217×157        |
|              |                         | ③[外題]三番叟 極秘伝書 完                            | 三番叟                     | 魚町 鳥居新三郎                       | 仮綴、朱入                                  | 245×162        |
|              |                         | ④[外題]鈴の段                                   | 三番叟の鈴の段                 |                                | 卷子本                                    | 162×748        |
|              |                         | ⑤[外題]三段之舞                                  | 三番叟の三段の舞                | 貞雄[花押]                         | 卷子本                                    | 164×218        |
|              |                         | ⑥[外題]揉之段                                   | 三番叟の揉の段                 |                                | 仮綴                                     | 233×156        |
|              |                         | ⑦[外題]三番叟 モミノ段 下ガカリ翁                        | 三番叟、揉の段、鈴の段             | 古市貞雄                           | 卷子本                                    | 164×519        |
|              |                         | ⑧[外題]三番叟 十人子宝                              | 三番叟、十人子宝                |                                | 一枚もの                                   | 241×331        |
|              |                         | ⑨(なし)                                      | 小謡                      |                                |                                        | 146×160        |
|              |                         | ⑩[外題]船弁慶 舟中語之節                             | 船弁慶愛狂言                  |                                | 一枚もの                                   | 164×234        |
|              |                         | ⑪[外題]誓状                                    | 誓状ひな型                   |                                | 江戸末期～明治初期                              | 138×298        |
|              |                         | ⑫[外題]三番叟 笛                                 | 三番叟                     | 古市猪兵衛                          |                                        | 215×155        |
|              |                         | ⑬[外題]三番叟 千歳 極秘伝書 完                         | 三番叟 千歳                  |                                | 仮綴                                     | 210×157        |
|              |                         | ⑭[外題]揉之段 鈴之段 笛譜                            | 三番叟 揉の段、鈴の段             | 魚町 鳥居新三郎                       | 表紙に「和棟(花押)」。仮綴。朱入り。罫線譜。挿紙1枚(鍋八撥カッコ付片附) | 244×162        |
|              |                         | ⑮[外題]靱猿                                    | 靱猿                      | 古市貞雄                           | 仮綴                                     | 215×157        |

安海熊野神社能楽伝書目録

|    | 仮 称         | 題                                       | 内 容                          | 所蔵者等      | 備 考                                                      | 縦mm×横mm | 丁数 |
|----|-------------|-----------------------------------------|------------------------------|-----------|----------------------------------------------------------|---------|----|
| 59 | 版本<br>狂言小舞謡 | [外題・題簽]<br>和泉流小舞謡全                      | 明治三十四年二月<br>山脇元清著、江島伊<br>兵衛刊 |           |                                                          | 233×161 |    |
| 60 | 間狂言台本       | [外題]能間 是界 八<br>幡ノ前 膏葉練 芥川<br>水掛掬 塗附 第貳号 |                              | 藤城良吉      | [裏表紙]大正<br>貳年八月十八<br>日 編 藤城<br>良吉                        | 234×165 |    |
| 61 | 狂言台本        | [外題]しびり 舎弟<br>盆山                        |                              |           | [裏表紙]<br>狂言社中                                            | 109×149 |    |
| 62 | 狂言台本        | [外題]狂言六儀(弐)                             | 貰智、阿漕(間)、<br>因幡堂…            | 藤城良吉      | [表紙]大正拾<br>參年六月。<br>挿紙あり                                 | 235×160 |    |
| 63 | 太鼓頭付        | [地]太鼓頭附 全                               | 高砂、弓八幡、老松…                   | 田中彦安      | 表紙剥脱。最<br>初の数丁破れ。<br>朱入。〔最終<br>丁〕観世流太鼓<br>頭附 謡ハ下<br>カヽリ也 | 140×240 |    |
| 64 | 狂言台本        |                                         | 大黒連歌、夷大黒、<br>夷毘沙門…           | [所蔵印]     |                                                          | 120×180 |    |
| 65 | 謡本          | [外題]囃諷                                  | 高砂、難波、志賀                     |           | 版本。天明三<br>年柏原屋清右<br>衛門、敦賀屋兵<br>衛、須原屋九兵<br>衛。茶色横長<br>型。   | 124×188 |    |
| 66 | 狂言台本        |                                         | 伯母が酒、地藏舞、<br>齊山賊…            | 古市音蔵      | 文政十一年戊<br>子八月吉日                                          | 140×193 |    |
| 67 | 狂言台本        |                                         | 粟田口、さるうた<br>(以上2曲)           |           |                                                          | 140×194 |    |
| 68 | 謡本          |                                         | 養老、清経、采女…                    |           | 版本。宝暦五<br>年山長版。青<br>色波模様表紙。                              | 132×195 |    |
| 69 | 狂言台本        |                                         | 烏帽子、盗人、大江山…                  |           | 朱入。白茶色<br>横長型。                                           | 149×180 |    |
| 70 | 謡本          | [楊貴妃]全                                  | 楊貴妃、老松、雲林院                   | 岩上氏       | 楊貴妃は正徳<br>三年山長版の<br>写し。他は版<br>本を合綴。                      | 192×130 |    |
| 71 | 太鼓頭付        | [外題]笛頭附太鼓手附                             | 高砂、弓八幡、志賀…                   |           |                                                          | 152×215 |    |
| 72 | 間狂言台本 絃上    | [外題・打付]絃上                               |                              | [表紙]古市貞雄  | 楮紙袋とじ                                                    |         |    |
| 73 | 白隠禪師施行歌全    | [外題・打付]白隠禪師施行歌全                         |                              |           | 楮紙袋とじ                                                    |         |    |
| 74 | 狂言台本        | [外題]腫物                                  | 腫物                           | 古市口口郎     |                                                          | 213×136 |    |
| 75 | 間狂言台本       | [外題]たつた 間                               | 龍田の間狂言                       | よし田 古市猪兵衛 | [裏表紙]寅壬<br>廿六日 森氏<br>より伝被之                               | 125×160 |    |
| 76 | 出納帳         |                                         |                              |           |                                                          | 150×195 |    |
| 77 | 狂言台本        | [外題]瓜盗人                                 | 瓜盗人                          | 牧野秋蔵      |                                                          | 240×166 |    |
| 78 | 狂言台本        |                                         | 膏葉煉                          |           |                                                          | 245×165 |    |
| 79 | 狂言台本        | [外題]熊坂                                  |                              |           |                                                          | 246×163 |    |

| 狂言・間狂言伝書仮綴本、版本謡本等(能の曲名で[謡本]の記載なきものは間狂言伝書) |                                              |                 |    |          |                     |                 |    |         |                            |                 |    |          | 全108点                                           |                 |    |
|-------------------------------------------|----------------------------------------------|-----------------|----|----------|---------------------|-----------------|----|---------|----------------------------|-----------------|----|----------|-------------------------------------------------|-----------------|----|
| No.                                       | 内容                                           | 寸法              | 丁数 | No.      | 内容                  | 寸法              | 丁数 | No.     | 内容                         | 寸法              | 丁数 | No.      | 内容                                              | 寸法              | 丁数 |
| 80<br>①                                   | 盛 久                                          | 245<br>×<br>165 | 3  | 80<br>②  | 小 袖 曾 我<br>間・水掛 舞   | 245<br>×<br>165 | 7  | 81      | 石 神                        | 245<br>×<br>165 | 13 | 82       | 舟 弁 慶                                           | 245<br>×<br>165 | 3  |
| 83                                        | 大 藤 内                                        | 245<br>×<br>165 | 5  | 84       | 重 喜                 | 245<br>×<br>165 | 4  | 85<br>① | 鬼 丸                        | 245<br>×<br>165 | 6  | 85<br>②  | 悪 太 郎                                           | 245<br>×<br>165 | 7  |
| 86                                        | 松 風                                          | 245<br>×<br>165 | 2  | 87<br>①  | 博 奕 十 王             | 245<br>×<br>165 | 7  | 87<br>② | 十 七 八、<br>ひょうたん、<br>節 ぶ ん… | 245<br>×<br>165 | 14 | 88       | 悪 坊                                             | 245<br>×<br>165 | 7  |
| 89                                        | 貫 智                                          | 245<br>×<br>165 | 7  | 90<br>①  | 貫 智                 | 245<br>×<br>165 | 6  | 90<br>② | (不 明。<br>棒 縛 か)            | 245<br>×<br>165 | 6  | 91       | 橋 弁 慶                                           | 245<br>×<br>165 | 5  |
| 92                                        | 田 植                                          | 245<br>×<br>165 | 3  | 93       | 子 盗 人               | 245<br>×<br>165 | 6  | 94      | 川原太郎、<br>三 本 柱、<br>鶴 亀 間…  | 245<br>×<br>165 | 19 | 95       | 文 山 賊                                           | 245<br>×<br>165 | 7  |
| 96                                        | 相 子                                          | 245<br>×<br>165 | 5  | 97<br>①  | 加 茂                 | 245<br>×<br>165 | 3  | 97<br>② | 猿 座 頭                      | 285<br>×<br>200 | 8  | 98       | 鶏 鴛、<br>不 腹 立                                   | 245<br>×<br>160 | 16 |
| 99                                        | 重 喜                                          | 245<br>×<br>165 | 3  | 100      |                     |                 | 6  | 101     | 茸 六 儀                      | 248<br>×<br>161 | 5  | 102      | 三 人 片 輪                                         |                 | 3  |
| 103                                       | 舟弁慶 間                                        |                 | 6  | 104      | ひ く ず               |                 | 4  | 105     | (不 明)                      |                 | 5  | 106      | [太鼓頭付]<br>須 磨 源 氏                               |                 | 16 |
| 107                                       | 末広、鏡男                                        |                 | 21 | 108      | 今 参                 |                 | 11 | 109     | 三 山                        |                 | 4  | 110      | 須 磨 源 氏                                         |                 | 3  |
| 111                                       | 太子手拝、<br>文 山 賊、<br>なまぐさ物、<br>さつくわ、<br>米市、雁大名 |                 | 37 | 112      | 来 殿<br>(他見無用)       |                 | 3  | 113     | (不 明)                      |                 | 2  | 114      | 八 幡 前 儀                                         |                 | 18 |
| 115                                       | 野 宮                                          |                 | 4  | 116      | 不 須                 | 240<br>×<br>162 | 9  | 117     | 萩 大 名                      | 240<br>×<br>162 | 11 | 118      | [外 題]<br>飛 ■ 和泉流<br>[内 容]<br>鍾 道、若菜、<br>博 奕 十 王 | 240<br>×<br>162 | 19 |
| 119                                       | 小 鍛 冶、<br>三 人 片 輪、<br>鈍 太 郎                  | 240<br>×<br>162 | 42 | 120      | 八 句 連 歌<br>抜 書      | 240<br>×<br>162 | 4  | 121     | 金春太鼓舞<br>手 附               | 240<br>×<br>162 | 8  | 122      | 楽 阿 弥                                           | 206<br>×<br>132 | 6  |
| 123                                       | 安 宅                                          | 206<br>×<br>132 | 3  | 124      | 富 士 松               | 206<br>×<br>132 | 12 | 125     | 胝                          | 206<br>×<br>132 | 7  | 126      | 白 髭 間                                           | 206<br>×<br>132 | 4  |
| 127                                       | 鶴                                            | 206<br>×<br>132 | 8  | 128      | 鶴                   | 206<br>×<br>132 | 9  | 129     | 鶏 智                        | 206<br>×<br>132 | 8  | 130      | 枕 士 童                                           | 206<br>×<br>132 | 3  |
| 131                                       | 二 千 石 語                                      | 224<br>×<br>160 | 2  | 132      | 弓 矢 太 郎、<br>水 波 替 形 | 220<br>×<br>165 | 17 | 133     | 胸 突                        | 246<br>×<br>162 | 5  | 134      | ちよぼくれ                                           | 243<br>×<br>162 | 4  |
| 135<br>①                                  | [謡 本]<br>難波、兼平、<br>千 寿 …                     | 243<br>×<br>163 | 6  | 135<br>② | 茸                   | 243<br>×<br>163 | 4  | 136     | 節 分                        | 243<br>×<br>163 | 2  | 137      | 八 幡 前                                           | 243<br>×<br>163 | 5  |
| 138<br>①                                  | 成 上 が り                                      | 243<br>×<br>163 | 3  | 138<br>② | 巴                   | 243<br>×<br>163 | 2  | 139     | 竹生嶋参り                      | 243<br>×<br>163 | 7  | 140<br>① | 地 蔵 面                                           | 243<br>×<br>163 | 4  |

| 狂言・間狂言伝書仮綴本、版本謡本等(能の曲名で[謡本]の記載なきものは間狂言伝書) |                                               |                 |    |          |                                                                   |                 |    |      |                                                                      |                 |    |                    | 全108点                                                      |                 |    |
|-------------------------------------------|-----------------------------------------------|-----------------|----|----------|-------------------------------------------------------------------|-----------------|----|------|----------------------------------------------------------------------|-----------------|----|--------------------|------------------------------------------------------------|-----------------|----|
| No.                                       | 内容                                            | 寸法              | 丁数 | No.      | 内容                                                                | 寸法              | 丁数 | No.  | 内容                                                                   | 寸法              | 丁数 | No.                | 内容                                                         | 寸法              | 丁数 |
| 140<br>②                                  | 柿 山 伏                                         | 243<br>×<br>163 | 4  | 141      | 鞞 猿                                                               | 208<br>×<br>132 | 4  | 142  | 八 幡 前                                                                | 243<br>×<br>163 | 6  | 143                | [狂言小謡]<br>連歌昆沙門、<br>蝦子大黒、<br>朝 比 奈                         | 252<br>×<br>168 | 8  |
| 144                                       | [小歌小舞]<br>鐘 の 音、<br>高砂、なには<br>(挿紙1枚)          | 203<br>×<br>150 | 30 | 145      | 鼻 取 角 力                                                           | 250<br>×<br>174 | 9  | 146  | さ つ く わ                                                              | 237<br>×<br>160 | 8  | 147                | 鞍馬まゐり                                                      | 250<br>×<br>170 | 5  |
| 148                                       | 寝 音 曲                                         | 209<br>×<br>130 | 3  | 149      | 縄 な ひ                                                             | 243<br>×<br>160 | 1  | 150  | 悪 坊                                                                  | 212<br>×<br>134 | 6  | 151                | 嵐 山                                                        | 115<br>×<br>148 | 6  |
| 152                                       | (不 明)                                         | 210<br>×<br>140 | 1  | 153      | 盛 久                                                               | 240<br>×<br>164 | 4  | 154  | 萩 大 名                                                                | 252<br>×<br>160 | 10 | 155                | 黒 塚 間                                                      | 243<br>×<br>164 | 3  |
| 156                                       | 六 地 蔵                                         | 245<br>×<br>163 | 10 | 157      | 養 老                                                               | 122<br>×<br>320 | 3  | 158  | 仏 盗 人                                                                | 273<br>×<br>190 | 5  | 159                | 蟬丸、鉢木、<br>一角仙人…                                            | 150<br>×<br>180 | 31 |
| 160                                       | 惣 太 郎、<br>じしやく、<br>あく 坊…                      | 158<br>×<br>214 | 23 | 161      | と を る                                                             |                 | 10 | 162  | 十 七 八、<br>ひょうたん、<br>節 ぶ ん…                                           |                 | 19 | 163                | [乱舞要用<br>書]狂言ア<br>ンライ有之候                                   |                 | 9  |
| 164                                       | [太鼓頭付]<br>養 老                                 |                 | 25 | 165      | [版本謡本]<br>俊 明 治 32 年<br>檜 書 店 版                                   |                 | 10 | 166  | 蟹 山 伏                                                                |                 | 6  | 167                | (不 明)                                                      |                 | 4  |
| 168                                       | [版本謡本]<br>(部 分)<br>三 井 寺                      |                 | 17 | 169      | 夜 討 曾 我                                                           |                 | 5  | 170  | (不 明)                                                                |                 | 5  | 171<br>①           | [版本謡本]<br>船 弁 慶<br>観世流改定版<br>内 十 八 年 本<br>丸 岡 本            | 230<br>×<br>155 |    |
| 171<br>②                                  | [版本謡本]<br>百萬 観世<br>流改定版<br>内 十 八 年 本<br>丸 岡 本 | 230<br>×<br>156 |    | 171<br>③ | [版本謡本]<br>竹 生 島<br>観世流改定版<br>内 十 八 年 本<br>丸 岡 本<br>[所 蔵 者]<br>細 海 | 230<br>×<br>156 |    | 171④ | [版本謡本]<br>羽 衣<br>観世流昭和<br>17年檜書店<br>[挿 紙]<br>千秋楽、高砂<br>詞章、祝儀<br>袋、メモ | 226<br>×<br>160 |    | 172<br>①<br>②<br>③ | [刊 本]<br>謡 曲 通 解<br>第一卷～第<br>三 明 治 25 年<br>博 文 館<br>大和田建樹著 | 236<br>×<br>148 |    |

(作成・米田真理)

《資料編》第一部 東海能楽研究会の活動



# 賞状

東海能楽研究会 殿  
代表 寛一 鑛一

貴会は東海地域の能楽史の解明と  
普及次世代への継承をめとし  
能楽師と研究者愛好者が一体と  
なご活動を続け近著『近代名古屋  
能楽を支えた人々』にその成果を  
結実させましたその功績を讃え  
第十七回催花賞員を贈ります

平成十八年一月十三日

遠坂孝徳 平林千牧





平成18年1月13日 催花賞授賞式 向かって左端が寛鉾一本会代表

# 東海能楽研究会 年報

## 世阿弥作能時の「忠度」の

「カケリ」をめぐって(その2)

尾本 頼彦

昨年度の本会の年報に、世阿弥作能時の「忠度」に「カケリ」が存在しなかったであろうとの推論を提示した。論拠としては、応永三十年までの世阿弥の軍体能6曲(「通盛」「実盛」「頼政」「清経」「敦盛」「忠度」)において、世阿弥の軍体能における「カケリ」(「通盛」にあった「カケリ」が「実盛」「清経」「敦盛」で用いられていない)や修羅道の表現(「通盛」のように、「差し遣え、共に修羅道の苦を受ける」と表現されるような戦闘場面はそれ以降には用いられていない。また、「清経」は、飯塚恵理人氏説のように、「登場する前にすでに成仏していて、方便としてキリで「修羅道」を妻に見せているだけである」)の推移をみても、世阿弥が「申楽談儀」で「忠度上花舞」と言っている幽玄能の理想に近づいた(「忠度」に「カケリ」が似つかわしくないこと)をあげた。また、傍証として、江戸時代初期の能伝書(「少進能伝書」「七大夫仕舞付」「観世流仕舞付」)の記載によれば、江戸時代初期の上掛りと下掛りの能伝書の両方ともにおいて、「忠度」の「カケリ」

はあるのが定型ではなく、あっても場所が一定せず、また、なくとも良いとされていることをあげた。

さて、その後、室町後期から江戸時代初期の能伝書の「宗節仕舞付」「童舞抄」「金春安照仕舞付」の記述にも、前回の推論を支持する傍証があることに気づいたので報告したい。

まず、天文(一五三二)頃の観世流の演出を伝える「宗節仕舞付」の「忠度」の「カケリ」は「たらしき」が現行曲で用いられる箇所(の記述についてみると、「舟にとりのつて海上にうかが」と云時はるかにミヤリ、「みきはのかたにうちいでし」と云時さき「あゆみより」と云時うしふミ、ぶたいさき「へ出て「花やこよひの」といひだし、「忠聞とか、れたり」と云時名のりの書所をぞと見、「さつまのかミにたますそいたはし」と云時、矢をすて、なきく「下にある。」となつていて、「カケリ」は「たらしき」に関する記述はみられないのである。しかしながら、「宗節仕舞付」の「やしながら、は、「矢たけの音しんどうせり」といひてはたらく。」と、現行曲で「カケリ」の部分に、「はたらく」と記述されているから、天文頃の観世流の「忠度」には

「カケリ」は「たらしき」はなかったという傍証になるのではないかとと思われるのである。

つぎに、慶長元年(一五九六)の年記のある「童舞抄」の「忠度」は、「海上にうかが」と云時「正面を遙にみる。爰にて働きもする也。」と「はたらしき」を記述している。「童舞抄」の「通盛」は、「うしろがみぞひかたへ」と云時、うしろを女のかたへなし、しるる仕舞あり。爰にはたらしきあり」と同じく(八息)は「矢たけの音を震動せり」と云時たつ。「爰にて働きあり」と「はたらしき」のあるところ(「はたらしき」)が明記されているが、「忠度」の場合は、「働きもする」と、「も」が入つていて、「はたらしき」をしない場合も予想される表現であることが注目されるのである。なお、「少進能伝書」の、「木の陰下宿とせバ」トいふてソトカケリモスル。又前ノ「ミナモナ船に取乗テ海上ニウカブ」トイフテ、カケリモスル。二所ナカラカケラズ「モ」という記述との差が注目されるが、「下間少進集」の解題(古川久氏担当)が指摘しているように、「童舞抄」が意識的に記載を省略しているからであろうと思われる。つぎに、慶長十二年年記の「金春安照仕舞付」の「忠度」は、「海上にうかが」というところに

も、「行番て木の陰を宿とせば、花や今宵のあるじなまし」とのところに「カケリ」や「はたらしき」の記述はないのである。「金春安照仕舞付」の「通盛」や「八息」には、「カケリ」の記述があるから、「金春安照仕舞付」の「忠度」については、「カケリ」がある型は定型ではなかったと考えてよいのではないだろうか。

以上、前回紹介した、「カケリ」があつても、なくてもよいことが記述してある能伝書の「少進能伝書」「七大夫仕舞付」「観世流仕舞付」にくらべ、比較的古い能伝書であると思われる「宗節仕舞付」「童舞抄」「金春安照仕舞付」の記述を新たに追加してみると、世阿弥時代の「忠度」には「カケリ」がなかったのではないかとすることが一層確かなものに見えるのである。そして、「忠度」に「カケリ」の演出が新しく加えられたのは、下間少進の周辺からではないかということが推測されるのである。また、金春八郎安照が「忠度」で「カケリ」を演じなかったことは、「金春安照仕舞付」の右の記述と「観世流仕舞付」の「海上に浮ぶ」ひらきて向ひミる。又八郎八楽やをミたる事もあり。かけりなし。又はたらく者もあり」という記述からも推

測され、また、右の「はたらく者」の具体例としては、下間少進や北七太夫があげられると思われるのである。

### 慶長期の藝名の能楽

米田 真理

江戸時代の桑名藩（現三重県桑名市）は東海道五十三次の宿駅が置かれ、十一万石の城下町として栄えた。芸能関係の史料としては、雅楽に関する文献や、装束、樂器類が数多く残されている。これは、文政六年三月に白河藩から移封した松平定信の嫡子であり、その定信は雅楽に造詣が深かったからである。以後、幕末の藩十分限帳にも雅楽師が記載されているし、祭礼の際にも町人によって雅楽が奏されるなど、雅楽とは縁の深い土地柄である。

一方、能楽に関するまとまった資料、例えば能番組やお抱え能役者の存在は未だ知られていない。しかしながら、既に公刊された資料の中にも、ごく少数ではあるが能楽関係の記事を見出すことができる。その中から、「桑名市史 補編」（昭和三十五年八月初版、同四十九年十二月再版）巻末に翻刻が掲載されている『慶長日記』を取り上げた。

『慶長日記』は、船馬町に住して酒屋を営んだ太田忠右衛門吉清による私記で、主に米相場などについて

詳述されている。太田家は戦国時代に地侍として活躍し、江戸時代では町年寄をつとめた名家であった。同書には慶長四年秋から同二十年正月までの記事が収められる。ちなみに当時の桑名藩主は、徳川四天王の一人である本多忠勝の、嫡子忠政であった。

その中で能楽関係の記事は同十七年と十八年の二年間だけに集中している。すべてを掲出すると次の通りである（便宜上①～⑧の番号と句読点を付した）。

①（慶長十七年）三月八日、樋口甚右衛門・同甚七殿、駿河へ下向、桑名ニテ鞍轡打。江口遊歴、一段閑事驚耳候。

②（同）六月四日、御城ニテ御能アリ。

③（同）七月十二日、長嶋ニテ御能アリ。

④（同七月）十九日、廿日、御城ニテ御能。

⑤（同）十二月十九日、藤堂和泉守殿、御越被成、御城ニテ能アリ。

⑥（同十八年）正月二日、御城ニテ御能アリ。

⑦（同）七月二日、穀山ノ南光坊御下宿。談義所ニ御座候。一夜御宿。拍子三番アリ。二日ニ駿河へ御下り、仏眼院ノ法印御同道ニテ御下り。

⑧（同）七月廿一日、御城ニテ御能アリ。又三郎初メテ出テ、夕顔ヲ打ツ。諸人褒申候。

①⑤⑦のいずれも、徳川家康の居城であった駿府城への途上のエピソードである。

①に見られる「樋口甚右衛門・同甚七殿」は、豊臣秀吉に厚遇され後に島野流に属した大鼓役者樋口久左衛門と関係のある者だろう。「近代四座役者目録」には久左衛門の養子として「樋口甚六」なる人物が見え、名前の似ている点から関わりが窺われる。

③は、津藩の初代藩主で能好きの大名として著名な藤堂高虎に関係する演能である。高虎は同年十一月六日と同十七日に領国である伊賀にて演能を行っており、家臣ながら友人同然の活動をしていた花崎左京と浅井真之助、それに二人の師匠にあたる本願寺坊官の下間少進がシテをつとめている（「能之留帳」）。翌年、月十六日には駿府の高虎邸にて演能が行われている（『能楽研究』一八号所収「江戸初期能番組七種」による）。

④、⑤の記事は高虎が伊賀から駿府へ向かう際のものだろう。左京や真之助も、その腕前を披露したのではないだろうか。

⑦は徳川家康の帰依を受けた大海（南光坊・慈眼大師）が桑名の仏眼院に一泊したときのものである。仏眼院は、もともと桑名の総鎮守である三嶋神社の神宮寺として繁栄し、戦国時代に一時衰微、延暦寺末となったが、寛永年間には大海の弟子天華を住職に迎えて東叡山末となり、

大海との関係が深い。家康主催の能楽に臨席することもしばしばだった大海を、囃子でもてなしたのである。

⑧の「又三郎」は実際に桑名城での演能に出演している個人名として貴重である。その口ぶりや、著者吉清の父吉忠（元和元年に八十二歳で没）が「又六郎」を名無っていたこと、後代の町年寄に「太田又十郎」がいることなどを考慮すると、著者の身内である可能性が高い。ただし、『桑府名勝志』（寛政七年春・同十年、巻續庵義道著）所収の太田家系諸中には「又三郎」なる人名を見出すことができない。

以上、若干の考察を試みたが、他に、単に「御城ニテ御能」とだけ記される②④⑥の実態や、なぜ同史料での能楽関係記事が慶長十七年以後からなのかなど、不明な点が多い。ただ、慶長から元和年間には、家康・秀忠が能を愛好していた影響から、多くの大名が能役者を召し抱えたり扶持を与えたりして盛んに演能を催しており、桑名藩でもこの頃から演能環境の整備を進めていたのではないだろうか。もっとも、翌十九年十月には大阪の陣が起り、藩主忠政も参陣したため、しばらくこの整備を中断しなければならなかったであろう。残念ながら、翌々元和二年に著者が没した『慶長日記』を引き継ぐような有効な史料を見出すことはできないが、今後は元和三年七月に本多氏が転封した姫路藩の史料も参考

に、考察を進めていきたい。

\*桑名藩の歴史については「桑名市史」に依った。

# 続・因州侯（鳥取藩池田家）

## 旧蔵能面に關する考察

保田 紹雲

能面の面裏には烙印や文字、隠しサインとも呼ばれる彫刻のしるしなど、いろいろな情報秘められているものが多い。

能面の面裏に朱漆（一部、黒漆書のものもある）の特徴のある筆太の文字で、享保あるいは元文間の年月や作者名、調達先、本面（手本面）の所有者などが記されている

一群の面があるが、その一部には「旧因州侯蔵橋岡久太郎所持」と金文字で書かれたものがあり、この朱漆銘から因州侯旧蔵の能面であることが橋岡所持の記載がなくとも容易に判明する。

これまでに実見した面や、各種図録、資料などから因州侯旧蔵と判断される能面一五二面をPCエクセルで一覧表に整理した。（以後「一覧表」とよぶ）

大正八年六月に「因州池田侯爵家御蔵品入札」が行われ、その売立目録には能面七九二面の面名称、作者名が掲載されており、これも、一覧表同様PCエクセルで整理した。これにより、面名称や年月順、作者名や調、出来、懸額、借分などの

面裏記載の特殊用語及び本面の所有者、売立書などの照合などの分類整理や解析が容易に行えるようになった。

この能面を蒐集した藩主は第三代吉兼で、能面蒐集を始める前は能に明け暮れる日々を送っていたが、吉明が將軍になった享保年間になると、自ら能を舞うことは無くなり、また、享保の初めに芝下屋敷と鳥取城の火災にあつて、能道具が焼失した頃から能面の蒐集が始まつてゐる。

その当時の藩の財政状況は最悪で、火災・水害・蝗災等の天災や幕府の手伝書請が相次いでいる中で、藩主は高価な能面蒐集を続けている。売立目録、一覧表を総合して解析すると

一、先立目録以外にも旧蔵面の存在することが判明した。（推計で売立目録以外の旧蔵面数は七四四面。その結果、推計で旧蔵の総面数は八六五面）

一、売立目録の作者分類

桃山時代以前の面 三十面

享保七年以前の物故者 二五〇面

出目洞水、甫閑、廣久 三七九面

享保八年以降と経歴不明 一二面

作者名不明 二二〇面

計 七九二面

圧倒的に多いのは大野出自家の洞水、甫閑で廣久も含む三人である。一、女面の種類からみた能の流儀は小面（五五五面）が圧倒的に多く、喜多流か金春流であり、藩の資料から喜多七太夫に習っていたこと

が判明した。

一、喜多七太夫家（六世喜多七太夫・成能が享保元年に没し、七世七太夫定能が相続した）の主な面を手本にして洞水や甫閑に直写させ、出来次第、納めさせている。（推計で七四四面）

一、橋岡久太郎は「三二面以上を所持したが、その後散逸したものも多い。」

一、面裏記載は享保七年十月以後のものは月まで記されており、記載がその時から始められたと推定出来る。

それ以前の年記には年のみで月の記載がなく、遡って記されたこと推定した。

一、「打放し」の定義は出目満光が面袋に記した内容から「手本を参考にしてさらに工夫・創作を加えた面」が妥当であることを明らかにした。

一、年記の後に「出来」とあるものは、当時活躍中の面打の作品で、同一年月には一面のみが発で、複数のものは極少ないことから、制作直後に直ちに納入されたものと考えられる。

一、年記の後に「調」とあるものは、物語作家及び多数の面を纏めて納めた時のものに付されたことを明らかにした。一、「伏見調」とあるのは、京都・伏見の因州藩伏見屋敷で藩主が参勤交代の時に求めたものであること

を、参勤交代の年月と面裏年記が合致していることから突き止めた。（推計で一二二面）

一、「伏見調」の面の出所を推理した。

一、面裏記載事項中の独特な言葉「直写」「借分」「懸額」についてその意味を明らかにした。（推計で懸額は六八八面）

一、「享保十八年九月調」の面は、廣久の因目見えに際して大野出自家から因州藩へ普物とされた能面と推定され、目玉として古作の春若作小徳見を加え、大野出自家で所蔵していた面のうち、手本面として必要数の少ない面を整理して能面一揃としたことを明らかにした。（推計で五八八面）

一、その処分した面には「打放し」の面や、若い時分の作品、他藩大名家の写面が多く含まれていることを示した。

一、その他の時期に纏めて納入された面にも目玉面として古作の面が含まれていることを示唆した。

一、大野出自家の当主は能面の納入の他に面の鑑定など頻繁に出入りし、参勤交代には見送り出迎えるなど、藩主との交際の深さが営業活動でもあったことを明らかにした。一、大野出自家に伝えられた重宝である手本面や満猶の「極め」付の面が因州藩へ流出していることを明らかにした。

一、他著名大家の写面で「出来」は藩王古楽が所望して届けられた写面であり、「調」は写しを所持していた自家から入ったことを示唆した。

二、売上目録と一覽表での洞水・甫閑・痛久の面数をサンプル数として、その比率から、一覽表の収録率や種々の推計値を算出し旧蔵面の全貌にせまった。

### 能楽の普及と「階級」

——大正初期の能楽観——

飯塚 恵理人

明治時代から大正にかけての能楽が、新しい担い手の登場と新しい愛好者の獲得を目指したことは事実である。しかし明治・大正期の能楽界では、能楽師が相手を選んで教えていたことも見のがしてはならない。芸者・役者に能を教えたものは破門する。女性を舞台にあげないなど、能楽の愛好者の範囲を限定する動きが明治維新から大正時代にかけて継続してあった。またこの現象は東京・関西・名古屋など、全国的に見られる。だが、なぜそのようなことが広範にあったかについての考察は、従来されていない。

本稿では、この理由を、能楽師の側に、能を上流の人々の芸能と位置づけたという意図があったのではないかと考え、以下に述べてみたい。大正元年に東京の囃子方が連帯して

出勤料の値上げを要求した。宝生会の本間廣清は「当然の要求」という題名で、囃子方の値上げ要求を容認し、以下のように述べる。「能楽は近來非常の勢力を以て其範圍が拡大されつゝあるので、其れは結構な事には相違ないが、近時の斯界を見るには其勢力の拡まりつゝある処は中流以下の社会にある様だ。由來能楽は日本最高の芸術として是を嗜む者も学ぶ者も、共に中流以上の社会にあつたのであるから、其芸術の高尚なるのみならず、これに従事する樂師や、これを学ぶ所の所謂お素人も芸術家として又芸術嗜好家として、最も品性の高いものとして、社会からも之を許されてあつた。然るに今日の狀態をして此儘に放棄したらんには、熊公八公の類が斯界の中心点とならぬとも限らぬ。従つて茲として、は、中流以上の人々は漸く斯道を棄しむ事を躊躇するに至るであらう。斯うなつた、高尚な芸は一變して、能楽と云ふものは浪花節と同視されて了はねばならぬ。現今の斯界に何故斯う云ふ忌まはしい傾向の侵入を見るに至つたかと云ふに、其原因は種々あるであらうが、諸君の中で能楽は一番安値で見られもし、又最も安い月謝でこれを稽古する事もできる。然かも謡でもやつて居れば一寸世間体がいよと云ふ処から、中流以下に其勢力を示すに至つたのである。

其れで一日の能を何程で見られるかと云へば一人六十銭（一席三円）さへあればよい。其れで朝の八時から午後五時頃迄楽しまれる。場末の寄席ですら一夜三四時間で三四十銭は要る。實に比較にも何にもなつたものでない。其芸は日本の最高であり、其見料は日本芸術の最低である。云ふ、最も奇怪な現象をば、今日我が能楽の外に之を觀る事は出来なぬ。其れでも多くの人は怪しみもせぬのである」と述べる。本間は、このような能楽の狀態を述べた上で「趣く迄も能楽の品位を保つて行には、其れに従事する樂師一同を不平のなない範圍内の報酬の下に働かせねばならぬ」と「能楽の品位」を保つために値上げ要求を認めるよう主張している。また久米民之助は大正初年の能楽界の問題を挙げる中で、「一つ憂ふ可き事がある。即ち謡や能が、社会の中流以下に廣まりつゝ、あるの一事である。人によつては、これを云つて斯道の範圍が拡大された」と云つて喜ぶかも知れぬが、私は反対の意見を有つて居る。中流以下の人が、斯道によつて思想が高尚になれば、誠に結構な事であるが、實際上の道具は全く没却されて了まふ。斯うなつたら意義ある能楽は亡びて了ふと同時に、品性の下つた人が多くなるから、上流の人達には、共に之を学ぶを好まぬに至るであらう。現に各所の機能に行つて見ても

不行義な人が随分多くなつて居る様に思ふ。」と述べている。「中流以下」に流行することによつて、「品性の下つた人」が能楽に関わることを嫌う点が本間と共通する。また、山階徳次郎は、婦人・子供の能楽が隆盛になつてゆくに伴つて、男子ばかりでなく、御婦人方や年若き少年少女で、謡を習つたり、仕舞や鼓の稽古をしたりするものが多くなつて来た。之れに就いてある種類の人達の中には、婦人や子供・殊に女の子供などが、謡を稽古したり、舞をならつたりすることは、決して喜ぶべきことではない。」と云つてゐる云ふべきことと思ふ。それとも義店住ひの賤しいお内儀さんとか、そこらの馬方のお内儀さんとか、子供だとか云ふ連中が、能楽に手を出して来ると云ふのでは、種々の方面から考へて、種々な故障が湧いて来るから、従つて謡をやつては悪いとかも云はなけねばなるまいが、御婦人方やお子供連で斯道を嗜むといふ人は、多くは社会の中流以上の家庭にある方である。その方達にしても、何か弊害のない娛樂が一つなくては、人間としてよくない。その一つの娛樂に斯道を嗜むといふのだから、私は却つて可い事だらうと思ふ。」と、社会において中流以上の子女であれば認めるという態度を取つている。能楽の愛好者

は大正初期、既に「上流」階級者と限定し得ないことは、誰にも明らかであった。ただ「中流以上」に制限した以上、能楽師にもそれらの愛好者を教える「品位」が要求された。そして「品位」に関わる問題をおこした楽師には舞台上に立たないといような制裁が加えられた。たとえば、宗家親世元滋の実父である片山九郎右衛門が妻と不和となり、片山家を退いて、親世元滋と改名したとき、その原因に他の女性との関係が嘲された。これについて親世元滋は「九郎右衛門とすれば迷惑なことですが、誤解にも嘘報にもせよ、斯界の九郎右衛門、私の実父：親世宗家の実父に当るものとしての九郎右衛門が、自分の身の上にさういふ問題を惹起したといふことは、九郎右衛門の人格に欠けた処があるものと見なければならず事實は無根拠であつてもそれによつて斯界に何ものかの汚名をつけたといふ点に於ては、九郎右衛門自身の責任であつて宗家として私が之を見ますと、頗る不都合なものと云はなければならぬのであります。それで今迄は毎月親世会の能を一番乃至二番位勤めさせてゐたのを先月から拒絶し、尚京都に於ても決して舞台などには何処にも出勤をせず、当分謹慎するやうにと、命じてゐるやうな次第であります。」と述べている。「嘘報」であつても「不都合」であるから「謹慎」とする点で、世間的な「品位」感覚にかなり

気を遣つていゝと言へる。  
この記事の末尾には記事をまとめた吉田逸洋が「今後の元義氏は大に自重されん事を望むのである。」と述べており、元滋の処置を支持している。大正初期、能楽師達は能楽の愛好者を「中流以上」の人々までに抑えようとし、それに害となると思われる行動を取る能楽師には制裁を加えた。しかしながら、この時点で謡の流行は「婦人」「中流以下」にまで広がりが顕在化していた。そしてそこから新しい愛好者と担い手が育ちつつあつたのである。

注1「当然の要求」本間廣清「能楽画報」能楽通信社 第五卷第二号 大正元年一〇月一日発行

注2「門閥を奈何」久米民之助「能楽画報」能楽通信社 第六卷第八号 大正二年七月一日発行 一四頁

注3「婦人と子供に」山階徳次郎「能楽画報」能楽通信社 第八卷第拾二号 大正四年二月一日発行 四頁

注4「片山の問題」親世元滋「能楽画報」第九卷第五号 大正五年四月一日発行 五頁

補記 本稿は平成一六年度科学研究費補助金基盤研究(C)「東海地域能楽資料の収集と整理」(課題番号一五五二〇一二四)による成果の一部となる。

## 「鬼は外、福は内」の芸能史

林 和利

このほど東海能楽研究会で刊行した十周年記念論集に、私は「能・狂言をめぐeringの試論を發表した。さほど実証性のない説まで顔面もなく披露したが、その中で書き漏らしたことがある。それが、「鬼は外、福は内」というキーワードで整理した日本芸能史である。

「鬼は外」すなわち悪霊退散または鎮魂を意図して演奏されるものと、「福は内」すなわち福神札賀または招魂を意図して演奏されるものに分けられるという意味である。

たとえば、舞と踊りの違いもこの発想で説明できると、私は思つていゝ。周知のように、能は「舞う」と言い、歌舞伎の舞踊は「踊る」と言うが、舞と踊りには根本的な違いがあると思つてよい。

舞は旋回運動で踊りは跳躍運動だと説いたのは折口信夫である。郡司正勝はそれを受けて、水平運動と垂直運動の違いだと補足した。

確かに、水平にマウルからマイなのであり、垂直にオドリアガルからオドリなのである。腰の動きによつてその違いは明瞭である。

美意識の根底に安定感を求める能の舞では、基本的に腰の位置は一定してゐて上下しない。しかし、歌舞伎舞踊の所作は腰が固定せず、上下

も含めて自在である。

元来、歌舞伎は若い女性の性的魅力を表現する踊りから発している。そのために柔軟な腰の動きは重要であつたはず。直接的にはそれに起因する違いであらう。

しかし、歌舞伎はその前に風流踊りや念仏踊りの前史を持つ。いわば、盆踊りのたぐいである。そのことを踏まえると、両者の本質の違いはもっと明瞭になる。

舞は、旋回運動によつて神や精霊・靈魂を祝福したり慰めたり、それが遠くにある場合は招き寄せられる意図を持った身体表現と考えられる。刺激を避けた穏やかな動きは、慰めの意図であらう。扇の動きも招く表現のように見えなくもない。

一方、上下運動を含む踊りは、その刺激的な動きによつて鬼や悪霊を追い払つたり、死者の霊をあゝの世へ送る意思を表しているように見える。足を踏んで両手を前に押し出すような盆踊りの所作は象徴的である。そう考えれば、能の舞が祝儀に用いられ、盆踊りは祖先の霊を送る意図で踊られるのは、理にかなつていゝ。

これを単純化して言えば、舞の意図は「福は内」であり、踊りは「鬼は外」の意識であるという結論になるのである。

実は、囃子に関しても、笛や琴のようなメロディー楽器と、太鼓のようなリズム楽器では、同様の相違が

このほど東海能楽研究会では  
「十周年記念論集」を刊行しました。  
収録論文は下記のとおりです。

『申楽談儀』第二十二条の「此座」再検 …尾本 頼彦  
元和年中の女能——海士・山姥から——…野崎 典子  
数寄者の時代……………飯塚恵理人  
——関戸家と能楽との関わりを中心に——

因州藩旧蔵能面に関する考察……………保田 紹雲  
健忘斎の能面鑑定をめぐる一考察……………米田 真理  
——彦根藩文庫から——  
狂言〈ぬらぬら〉考……………田崎 未知  
『間狂言会秋』の繙刻と解題……………藤岡 道子  
能・狂言をめぐる芸能史的雑考……………林 和利

あると見てよい。前者が「福は内」で、後者が「鬼は外」の演奏意図である。  
死者の霊を招き寄せる霊媒の巫女が琴や梓弓をかき鳴らすことはよく知られている。もちろん弓は音階の違いを表現できないので、厳密にはメロディー楽器とは言えないが、それに通じる音色であろう。  
また能の笛は死者の亡魂を引き出す意図で演奏されるが、鼓よりも先に吹き始める。すなわち招魂の表現であるが、「福は内」の意図に通うものである。  
また、鬼の姿で太鼓を打つ佐渡のオランダコ（鬼太鼓）はさらに象徴的

であろう。明らかに、太鼓は「鬼は外」の意識である。  
そういう目で、我が国の芸能史を眺めてみると、神楽・舞楽・白拍子・曲舞・能・幸若舞は「福は内」の系列であり、田楽・風流踊り・念仏踊り・歌舞伎舞踊・日本舞踊は「鬼は外」の系列につながるジャンルであると整理することができよう。  
もちろん双方に太鼓や弦楽器が使用されていることからわかるように、峻別されるものではなく、それぞれ両者の要素が入り交じっていることは言うまでもない。基本的要素がどちらであるか、というレベルの話である。

平成十六年度 活動報告

平成十六年七月十七日 「第五回 伝統芸能上演会」(於 名古屋能楽堂) 開催

例会

平成十六年四月十日

ざわめく観客との対峙—世阿弥の「先聞後見」論をめぐって

六月二十七日

大倉三忠師所蔵「御用留」(仮称)に見る尾張藩の能楽政策

九月五日

尾張藩と尾張名所同会  
栗花 光弥氏 飯塚恵理人氏  
続・因州侯(鳥取藩池田家)旧蔵能面に関する考察  
栗花 光弥氏

十一月二十一日

ワキ方高安流仕舞付「問答集—舞谷追賦」の紹介と考察  
保田 紹雲氏  
藤岡 道子氏

平成十七年一月二十日

『和泉流秘書』(奥大本)の位置

三月二十八日

明治・大正期の名古屋能楽界  
野崎 典子氏  
飯塚恵理人氏

東海能楽研究会年報 第九号

二〇〇五年(平成十七)三月三十一日発行

代表者 寛 敏一

幹事校 名古屋女子大学文学部 林研究室

〒468-8507 名古屋市中天白区高宮町一三〇一

印刷者 共生印刷機

# 東海能楽研究会 年報

## 良き能とは何か

―世阿弥の「見・聞・心」―

三著 佳子

能については、室町時代に生まれた古典芸能で幽玄な情緒のある芸術であるといったような定義がなされるのが一般的である。しかし実際に能に接してみると、そうした一般的な定義が何の役に立たないほどの様々な印象あるいは感動を与えてくれる。能が今日に至るまで演じ続けられてきたのも、観る者を感動させるに至る何らかの良きものがあつたからにちがいない。では、その「良きもの」とは何なのか。

この問いに答えるためには、(観客にとって良きものとは何か)という問題と、(舞台から観客に対して何を示したらよいのか)という役者あるいは主催者側の問題とを同時に考えていかななくてはならないだろう。この二つの問いは、いずれもお互いにかにされてはならないし、また、この両者が重なり合う上演という場で、初めて「良き能」が現実のものとなる。

ここで私が言おうとしていることは何も特別なことではない。それは世阿弥がすでに、そしておそらく歴史上初めて、示してくれたことなのである。世阿弥は常に(観客が観るもの)と(役者が示しうるもの)という二つの視点を持ち、その交わりとところに「良き能」の姿を浮かび上がらせようとしていたのであつた。

「花鏡」の中で世阿弥は、すべての人から称賛を受ける事の難しさを「人の好みまぢまぢなり、万人の心に合はん事、左右なくありがたし」と述べているが、そういつた状況にもかかわらず、舞台としての出来・不出米は確かにあるという見方をしている。そこで世阿弥は「批判之事」と題し、出来の良い上演を「見」「聞」「心」の三つの形で示すのである。

見より出で来る能  
指し寄りからやがて座敷も色めきて、舞歌曲風面白くて、見物の上下、感声を出だして、はへばへしく見えたる当座、これ、見より出で来たる能なり。

冒頭から華やかな印象を与え、舞や音曲の調子も変化に富み、見栄えのする作品に仕上がった場合が「見より出で来たる能」

である。「座敷も色めきて」とか「感(歎)声を出だして」とあるところから、能の出来がよければ即座に感嘆の声や態度で反応していた当時の観客の様子を伺い知ることが出来る。このような形で成功すれば、「目利きは申すに及ばず、さほどに能を知らぬ人までも、みな同心に、面白き」と思ふ当座なり」と、「目利き」はもちろん、はじめて能を

観るような人にもわかりやすく、誰にでも楽しんでもらえる結果となる。近年では、新能の演目に選ばれるような、視覚的な効果で観客の目を惹きつけてくれる能を思い浮かべることが出来るだろう。もともと、私達が観る能の多くは世阿弥より後に作られているから、世阿弥が観ていた能と、現代の観客が鑑賞できる能とは、見た目の面白さの内容は違つていことになる。

しかし今日でも「見より出で来る能」という形で成功があるということができるだろう。

聞より出で来る能  
聞より出で来る能と申すは、指しよりしじみとして、やがて音曲調子に合ひて、まよやかに面白き也。是、まづ音曲のなす感なり。無上

の上手の得手に入る当座也。最初からしじみとした雰囲気、に謡の調子も解け合つて、とりわけ派手な動きがなくても観客を感動させることができるのが、「聞」によって成功した能である。ただし、上手な役者でなければ、このような形で観客の心を動かすことは難しといえかられている。また、観客の立場からすると「かやうに出で来る味はいはば、あ中目利きなどは、さほどとも思はぬ」という事態も生じる。役者の側では上手に演じていたとしても、ある種の人々はそのよさに気がつかず、面白くない能とは評価しないという結果に終わるのである。「聞」による成功の確率は、「見」によるそれよりも少ないということになる。

筋が平易で、誰がどうしてどうなつたということがわかりやすく、見た目の演技で楽しめるように作つてある能とは異なり、その内容に共感できなければ面白くは感じられない能の場合には、語られる言葉をよく聞き理解することも必要となる。気楽に能を観たいと思う観客の心を惹き付けるのに限界があるのは致し方ないことである。人それ

それに興味の持ち方が違ふという現実はいつた時代も同じだが、世阿弥はこういう状況をただ静観していただけではない。

世阿弥の考える「閑より出で来る能」というのは、「無上の上手」であるなら「を」のづから、内心より風体色々に出で来れば、なまよいよい面白くなる」というところが鍵となる。閑かせることで観客に何かを感じさせることができる役者であれば、それが目に見える演技の中にも自然に現れてくる。すると、見ることの面白さも加わり、観客はさらにその能に引き込まれることになる。

実はこのような成功の形については、作者の心得を説いた『風姿花伝第六花修云』の中でも取り上げられている。登場人物に動きが少なく謡ばかりを聞かせる「ひたすら静かなる本の音曲ばかりなる」能と、音曲よりは専ら演技を見せることに重点を置いた「舞・はたらきのみなる」能は、それぞれ一つの技法に注意を払うだけなので、比較的簡単に書くことができる。しかし、観客が「真実面白しと感をなす」能というのは「音曲にてはたらく能」だ。世阿弥は断言している。それはなぜか。

音曲は聞く所、風体は見る所也。一さいの事は、謂れを道に於てこそ、よろづの風情にはな

るべき理なれ。謂れをあらはすは言葉なり。

常に、聞く所と見る所、つまり「聞」と「見」を意識している世阿弥であるが、最も重要なのは、音曲を通して言葉が伝えられ（聞）、その意味が演技（見）と結びつき、そこに新たな風情が生まれることだという。これはまさしく「閑より出で来る」成功のことである。このような形で観客の心を捉えるためには、作者としての工夫も必要となる。

聞く所は、耳近かに面白き言葉にて、節のかりよくて、文字移りの美しく続きたらんが、ことさら、風情を持ちたる語めをたしなみて書くべし。この数々相成する所にて、諸人一同に感をなす也。耳に聞いてその意味がすぐに理解できるような言葉を選び、その言葉の続き具合が美しく聞こえるように節を付ける。その上で、見せ場となるような演技のできる場面を作るように仕掛ける。そうして舞台上から発せられる言葉や音曲の調子、しぐさや舞などが、観客の感覚に順次はたらきかけていくこととなり、最後にはすべての要素が一つに溶け合う場面となる。こうして最終的に観客を深い感動へと導くことができれば成功である。

ここに求められているのは、見せ

て楽しませるだけの能ではなく、聞かせただけの内容を持った作品である。世阿弥も難解な言葉によって観客を遠ざけることのないようにと努めているようだが、言葉という点では現代の能は世阿弥の時代以上に不利な立場にある。謡の文章が耳に遠い古文となつてしまった今、聞いたその場だけでだに内容の理解できる人は限られてくる。しかし、言葉と風情の関係に工夫を凝らしたことに

よつて、言葉、音曲、所作や舞、などの要素が巧みに意味のある形で組み立てられている作品を考案したのが世阿弥であった。言葉の意味がすべて理解できない場合でも、こうして能に特有のしくみに助けられることで今日においても「閑より出で来る」能を楽しむことはできるだろう。心より出で来る能

心より出で来る能とは、無上の上手の申樂に、物数の後、二曲も物まねも義理もさしてなき能にと、さびさびとした中に、なにとやらん感心のある所あり。

いくつかの能が演じられた後で、舞や音曲、物まねのわざや筋の展開などの趣向が一見地味な作品でありながらも、これを上手な役者が演じた時に、どこがどうというわけでもないのに感動することがある。それを世阿弥は「心より出で来る能」と

する。しかしこのような能では「よきほどの目利きも見知らぬなり。まして、あ中日利きなりは、思ひも寄るまじきなり」とその良さを感じ取るこのことができる人は「閑より出で来る能」以上に少ないという。数少ない娯楽の一つであった当時の能（猿樂）は、数多くの舞台芸術がある中で特に関心のある人だけが能楽堂に足を向ける現代とは観客層の質・量ともに全く違っている。だから世阿弥の言う「目利き」の意味を言葉通りに受け取るわけにはいかないが、それにしてもどういう時に、「心より出で来る」成功はもたらされるのだろうか。

面白いことに世阿弥は「心より出で来る能」といいながら、これを「無心の能」「無文の能」とも言い換えている。その意味は、観客の立場からは、何かに感動しているのにそれを意識していない能、演技の面からは、目や耳に直接訴えるものがあるわけではなくの人に人を感動させている能となる。おそらく世阿弥は、目や耳に訴える演技を控えるにしてこそ伝えることのできる内容を思い描き、「無心の感」によって観客の心を動かす作品作りを試みていたのだろう。

我々人間は、煩雑な日常生活の中に生きているにもかかわらず、生き

ていることそのものを実感したり、自分の存在している世界の全体を感じ取った時がある。それは言葉にあらわさずとも何かを確かに感じている瞬間である。このような瞬間によってこそ感知できるような世界を、世阿弥は自分の作品の中に織り込みようとしていたのだと思う。そのようにして書いた作品を役者が演じ、観客によって舞台に示されたものが観客に確かに伝わることを、その瞬間こそ、演ずる者と観る者と、文字で綴られた作品に潜む「言葉以前」の世界を共有しているのである。このような稀有な体験をした（と自覚できた）人のみが、「心より出で来る能」という成功のあることを知り得るのかもしれない。

本稿の世阿弥伝書の引用は、日本書紀大系「世阿弥・神皇」の本文に拠り、その表記の一部を改めた。

### （井筒）に見る伊勢物語

と能の関連

橋場 夕佳

「伊勢物語」を素材とした能の背景に、作品成立当時流通した伊勢物語が在り。伊勢物語理解があることは既に周知のことであり、「井筒」もその例に漏れない。もちろん、古往積を過ぎた伊勢物語理解のもと

に「井筒」が成立していることは疑いないが、さらに、「伊勢物語」の絵画（以下、伊勢物語絵）とそれによって固定されていくイメージが能作品の成立する背景にあるのではないかと、このことを、「井筒」の場合について検討してみたい。

「伊勢物語」は成立当初より絵と共に享受されてきたと言われている。一般に「伊勢物語絵」の享受は女性によるイメージが強いが、中世の伊勢物語絵の受用について千野昌典氏は次のように述べている。



図1 伊勢物語下絵契字巻（対証人大利文庫蔵）

中世には「源氏物語」や「伊勢物語」が平安時代以来の伝統を意識させる機能を持つようになっていた。……（中略）……当時の文獻には源氏物語絵と伊勢物語絵がしばしば並べて扱われている（「源氏物語」『長崎公記』、『源氏物語日記』など）。「伊勢物語」や伊勢物語絵は、現在一般に想像されるような、女性たちに与えられた消費の道具ではなく、男性たちの重要な政治文化だったのだと私は考えている。

現存の伊勢物語絵のなかで最も古くを伝えるとされるのが「伊勢物語下絵契字巻」（図1、以下「白描伊勢物語絵巻」）で、十二世紀に制作されたものを十三世紀に模写したものと考えられている。片桐洋一氏によつて「異本伊勢物語絵巻」と命名された「伊勢物語絵巻本」（図2、以下「異本伊勢物語絵巻」）も、原本の制作年代は十三世紀から十四世紀頃ではないかと推定されている作品であり、言うまでもなく両作品ともその成立年代は「井筒」に先行する。

「井筒」の本文のひとつとされる「伊勢物語」二十三段は、幼い二人が井の下で将来を約束し合う井筒の物語、成長して夫婦となったものの、高安の女のところへ通うことと



図2 伊勢物語絵巻 模本（狩野康成、他・著 東京国立博物館蔵）

なった男が、女の嫁んだ和歌によつて高安通いをやめる河内通いの物語、その後、高安の女を訪れた男が、女の現実的な姿に幻滅する後日譚の三部構成となっており、それぞれの場面が絵画化されることが多いが、ここでは、井筒の物語を描いた絵画について能との関わりを考えていく。

まず、伊勢物語絵と能の関連についての先行研究を紹介しておきたい。近年の注目すべき研究として、大口裕子氏の「中近世伊勢物語絵研究―能とのかかわりを中心に―」がある。同論では、「伊勢物語」百十九段の絵画が「同段の和歌（「見見こそ」）を媒介とし、能（松風）の影響を受けて固定化していったとする。また、中世伊勢物語注釈書のひとつである『伊勢物語宗印談』の百十九段注に（松風）を介した理解が見られることから、「能の知識を援用しつつ注釈」する「宗印談」の性格を指摘する。従来から指摘されていた伊勢物語注釈書から能への影響ばかりでなく、その逆の流れもあったということになる。能と伊勢物語注釈、あるいは絵画といった同時代の文化間における往還の中で、伊勢物語絵が成立し固定化していく様相を明確に呈示している。

〈井筒〉と伊勢物語絵の関係については、伊藤正義氏が昭和五十九年の朝日カルチャーセンターにおける講座で言及され、その後、それを補完される形で「伊勢物語絵―〈井筒〉の場合―」にまとめられている。伊藤氏は、「伊勢物語」二十三段の筒井筒の場面の絵について、鎌倉時代の白描伊勢物語絵巻から江戸初期の嵯峨本の挿し絵へと至る構図の変

化に能（井筒）の影響を指摘している。すなわち、紀有常の娘が業平との幼い頃の思い出を語る（井筒）のクセの詞章（互に影を水鏡）によって、徳久通文庫本以降の伊勢物語絵においても、幼い二人が井の内をのぞき込む構図へと変化しているとする。次に伊勢物語絵に影響を与えているとされるクセの詞章を引用する。

むかしこの國に、住む人のありけるが、宿を並べて門の前、井筒に寄りてうなる子の、友だち語らひて、互に影を水鏡、面を並べ袖を掛け！

伊藤氏は「面を並べ袖を掛け」の詞章についても同様の現象が見られるとする。同氏の指摘にあるように、〈井筒〉の詞章によって伊勢物語絵に構図の変化が見られることは明らかであり、先に挙げた大口氏の論考も能から伊勢物語絵への影響を指摘するものであった。

では、前引の（井筒）の詞章はそもそも何に拠っているのだろうか。当然、「伊勢物語」二十三段は本説のひとつに違いないが、〈井筒〉という作品自体がそうであるように、このクセの詞章は「伊勢物語」本文だけでは成り立ち得ないものである。この詞章に關して、大谷節子氏はそれまで世阿弥の創作であると考えら

れてきた「互ひに影を水鏡」を、「和歌知類集」の次のような理解に拠るものであるとされている。

おさなき時、ゐのもとにいであそぶには、井のそこを、おとなしき人のみるを、うらやみてみんとすれど、たががすこしもおよばねば、せんかたなくて、かの井の、にたちそひて、わがたけはまきりたり、我たけはひきしなどいふ事あり。

このような古注釈の理解を踏まえて、大谷氏は「大人になつて井戸の底を覗きたいという、幼な子のたわいない願望は、〈井筒〉の中で仮想現実と化し、幼い日々の遊びの記憶として語られている」とする。

一方で、管見の伊勢物語絵では、幼い二人が井桁を挟んで向き合う構図と隣り合う構図の大きく二系統に分けられるが、いずれの場合でも幼い二人が井桁に袖をかけて語らう様子が描かれていると見ることができるとかと思う。そこで、この詞章（井筒に寄りてうなる子の、友だち語らひて、互に影を水鏡、面を並べ袖を掛け）の背景を考えると、そこに古注釈の理解と共に、伊勢物語絵のイメージがあることと見ることも可能ではないだろうか。「白描伊勢物語絵巻」や「異本伊勢物語絵巻」を二人が面を並べて袖を井桁にかけ、井の

底を覗いていると見ることもできるのではないかと考えている。これら二作品に描かれたような構図が筒井筒の物語のイメージとして定着し、それが（井筒）のクセの詞章に影響を与えている可能性があるということである。伊勢物語絵も「伊勢物語」本文だけではなく、同時代の様々な周辺文化の影響を受けて成り立っていることは先行研究において言われている通りであり、その中に伊勢物語注釈も含まれているのであるが、そのようにして成立していた伊勢物語絵が能に影響を与え、その能がまた伊勢物語絵に変化をもたらすといった相互の関係は、〈井筒〉においては何言えるのではないだろうか。

注1 表作氏が『安政古典文学大系 謡曲巻上 昭和35年』補注において指摘されたのを始めとして、伊藤正義氏の「謡曲と伊勢物語の絵化―「井筒」の場合を中心として―」（『金蘭』第64号）などがある。

注2 千野香織「伊勢物語」の絵画―「伝統」と「文化」を呼び寄せる装幀―（『特別展「伊勢物語」と西暦一展覧会図録」平成12年）

注3 千野香織『日本の美術301 伊勢物語絵』（平成3年）を参照。

注4 大口裕子「中近世伊勢物語絵研究―能とのかかわりを中心に―」（『鹿島美術研究』年報第22号別冊。平成17年11月）

注5 伊藤正義「伊勢物語絵―〈井筒〉の

場合」(『伊勢物語』と能 国立能楽堂2001年特別展示図録)

注6 橋邊萬里雄・渡部 校注『謡曲集上』昭和35年、岩波書店)に拠った。

注7 大谷節子「作品研究(弁頭下)」「観世」平成13年11月号

注8 片桐洋一「伊勢物語の研究(資料編)」「昭和44年、明治書院」に拠った。

## 闘う女

米田 真理

《巴》は『平家物語』に取材し、源義仲最後の戦となった栗津合戦に動じた女武者巴を描く。巴は女ゆえに義仲と最期を共にすることを許されず、形見を郷里の木曾に届けることを命じられる。そこへ現れた敵を相手に長刀を振るって闘うその姿は、女性としても、武者としても、現行の他曲と比べて異彩を放っている。

ところで、同じく巴をシテとする謡曲の中には、義仲の遺言に従って木曾の屋敷に帰った後、寄せ来る敵から奥方を守って闘うものがある。《御台巴》や《扇巴》(「形見巴」と題する番外曲である。例えば《御台巴》では、鎌倉から敵が攻めてきた場面)

で次のような詞章になっっている。  
未練なり人々よ、巴一人におぢ  
恐れ、寄手は何くに帰るべきと、  
長刀真手に取直し、小庭に立出

戦ひければ、御台も巴と共に死なむと、打物追取出給へば、御軽々しや暫くと、妻戸に隠しおしたる

巴と一緒に闘うとして、義仲の妻の姿もまた印象的である。そもそも家や城を守るために女が闘う能は、著名なものに《安太》や《村山》がある。《安太》は「笠間の能」として『申楽談儀』に見られる古作である。「母は我子をとめかねて、長刀おとり出けるが」のように、我が子と家を守って闘う女が描かれる。この《安太》を意識して作られた観世小次郎信光作の《村山》も、「村山見参申さんと、御堂のから戸を手盾に取り」「御母長刀取り直し、松若殿と一所になって、敵をまねき立ち給ふ」のように、侍女村山と母親とが協力して若君を守るうとして、いる。

さて、戦国時代、男の出陣中に家を守り、女中ともども闘う女性はい実際に存在した。田端泰子氏によれば、戦国期の永禄十二年、大内輝弘に攻め込まれた毛利領で、毛利配下の市川経好の妻は、夫の留守中に自ら女中を従え、甲冑を帯びて城を守って闘ったという(『日本中世の社会と女性』。平成十年十二月、吉川弘文館)。

このように家を守って闘う女性はい、戦国から近世の重宝の中に数多く見出すことができる。例えば享保十七年成立の『東蓬基業』では、遠州引間城主飯尾能房が今川氏真に滅ばされた後、能房の妻は「緋威の鎧に同色の冑を着し、長刀を持」という出で立ちで侍女を従え、城を守ると記される。また、寛延二年成立の『豊薩軍記』では、鶴崎城を守る老尼妙麟は「鎖鉢巻をむすとしめ、着込の上に羽織を着、長刀を携へたり」と記される。こうした、家を守って闘う女の姿は、軍記の中でパターン化されていたのだらう。《御台巴》などに見られる巴像も、このような女の系統に属しているといえる。

《巴》の出自である『平家物語』では、男たちが戦で死んだ後、残された女たちはもっぱら彼らの後世を弔う(『鎮魂』の役を担っている。巴もまた、武者である一方、そうした役目に重きを置いて捉えられてきた。ただ、『源平盛衰記』では、形見を木曾の奥方に届けることが強調された語り口になっている。戦場と、家とを結ぶ役目である。

つまり、謡曲(「形見巴」)は、巴が木曾の義仲邸に到着した後、当然起こりうるであろう場面を想定し、劇化したものであろう。そして、その想定こそが、戦国時代の所産なのである。

注意したいのは、そうした家を守る

て闘う女たちが、いずれも長刀を用いている点である。長刀は古くは僧兵など、大方の猛者が用いる印象が強い。しかし、時代が下ると次第に飾り道具化し、武家婦人の心得として学ばれるようになった。戦国時代末には、源義経の恋人静御前に流祖を仮託した「静流」なる長刀の流儀すら生じたという。

義仲最期の様子を描く《巴》の能で、巴が長刀を振るって闘う姿は、『平家物語』からの直接的な発想ではあり得ない。『平家物語』の巴は太刀を持つ騎馬武者で、長刀とは全く縁がないからである。また、『源平盛衰記』などで大方であることを強調される巴ではあるが、《巴》では大方には言及されず、力と長刀が結び付いたというわけでもない。だが、これまで見てきたように、家を守って闘う戦国時代の女性と同一視されることによつて、長刀を持つ巴の像が自然なものになっていったと考えれば納得がいく。

『平家物語』において義仲の鎮魂を担い落ちていった巴は、人々の想像の中で木曾に帰り、奥方と共に長刀を持ち、家を守って闘った。その戦国時代的な姿のまま、栗津合戦の場に帰帰した巴、それが能の《巴》なのである。

## 明和本における「松」と「源氏」

—《紫式部》のかざしと舞臺を中心として—

中尾 薫

能《老松》の中入り前の一節「花も松ももろともに、神さびて失せにけり、跡神さびて失せにけり」は、「松」という言葉が徳川の姓である松平氏に通じると思えられ、この場合「松平氏が失せる」ことを通想させるため、「よるず代の春とかや、千代万代の春とかや」という詞章に変更して補われたことは知られている。この現象は、江戸時代においては古くからの慣習だったと思われるが、これを最初に謡本に反映させたのが、明和二年（一七六五）刊行の明和改正謡本（以下明和本）である。

明和本は、幕府御用書肆である出雲寺和泉楼を版元に十五代親世大夫元章が刊行した謡本で、詞章の極端な改訂でよく知られている。その改訂詞章には、当時の国学の影響が色濃く現れているが、その背景には、親世元章のバトロンで賀茂真淵を和学御用として国学を学んだ田安宗武（八代將軍吉宗の次男）の介入が考えられるほか、親世元章自身が田安家で盛んであった国学研究の気風に感化され、謡本の考証を行うといった研究活動をしていたこともその要

因であらう。

そのため、明和本は元章の個人的趣味が投影された謡本とされることがあるが、一方で明和本の詞章にはそのような国学の影響とは別に、九代將軍家重の御台所である五十宮を憐れ、「急く」「疎」という言葉をすべて削除したり別の言葉に改訂したりといった極端なかざし言葉が見られるのも見逃せない現象で、前述の《老松》の詞章のやうに、徳川家・松平氏への憐りのために改訂されたと思われるものがほかにも認められる。以下ではそれらの事例をみていきたい。

まずは「松」についてのかざし言葉と思われる改訂である。さきほどの《老松》と同様に、明和本以前の慣習として指摘されている例であるが、《鉢木》において、

シテゝさて松はさしもげに

地へ枝を挽め葉をすかしてか、

りあれと植えおきし、そのかひ今は嵐吹く、松はもとより煙にて、薪となるも理を切りくらべて今ぞ御垣守

という一節が、松平氏を想起させる「松」が煙になるのは縁起が悪いという観点から、

シテゝさて松はさしもげに

同へ枝をため葉をすかして風情

あれとつくりにし、其かひありやあらし吹く、松ハ本よりときハにて、たきよとなるに梅桜きりくべて今ぞみかきもり

と「松」は永遠であるという賛美表現を使つて、松を燃やすという行為を曖昧にした詞章で語られることがあったが、これも明和本は後者の詞章を採用している。このほかにも明和本では厳密に「松」に関する表現をかざしており、たとえば（最初が従来の詞章で、明和本では傍線部が改訂されている。「↓」以下に明和本の詞章を示す）

《浮船》：松風も、散れば形見となるものを（↓秋風に、散れば）

《喜城》：夕煙、松が枝そへて焼かうよ（↓煙をいざや、たかふよ）

《江口》：ほの見えし、松の煙の浪よする（↓松もつら、に浪よする）

という改訂があげられる。これらはいずれも松平氏、つまり徳川幕府への憐りから生じたものである。なお、明和本での「松」のかざしの例はそれほど多く見られない。これは、「松」が本来の詞章でも「松の葉の散りうせずし」（《高砂》）とか、「松も千年の緑にて」（《花籃》）な

どといった具合に、め得太い事の引き合いに出されることが多く、それほど松平氏にとって忌むべき言い回しが見られないことが原因であらう。

では「松」以外に徳川幕府へのかざしの事例と考えられるものとして、「源氏」という語についての改訂をみていこう。徳川家が実際に源氏の出身であったかは歴史的には疑わしいらしいが、それはともかく江戸時代において徳川家は清和源氏の出身であると信じられていた。そのため、明和本では「源氏」という語についても厳密に改訂の手を加えているのが確認できる。その顕著な例として、明和本の《紫式部》をあげよう。

《紫式部》は、明和本での曲名で《源氏供養》のことである。《紫式部》は古名でもあり、この呼称を採用したのは元章の復古主義の表れのようにも解釈できるが、むしろ「源氏」すなわち徳川家への憐りの意味合いのほうが強いように思われる。つまり曲名は徳川家を連想させる「源氏」を「供養」しているのが、都合が悪いのである。そのような観点で「源氏」の語を扱っていたことは、《紫式部》の本文の改訂をみればいっそう明らかにならう。以下に「源氏供養」の本文から「源氏」という語がある節をとりだし、それぞれが

明和本(「樂式部」)でどのように改訂されていくを示す。

○我石山に籠り、源氏六十帖(一六十帖の冊子)を書き記し、亡き跡までの筆のすさび、名の形見とはなりたれども、かの源氏に終に供養を(一此の冊子の供養を終に)せざりし科により、浮ぶ事なく候へば、然るべくは石山に源氏の(一削除)供養をのべ

○まづ石山に参りつゝ、源氏の(一かの)供養をのべ給はせ

○共に源氏を申ふべし(一供養し参らすべし)

○いで源氏(一冊し)を書きしは、恥かしや此身は浮世(一誰ぞともこたへん此身は)の土となれど

○ありつる源氏の物語(一ありつる昔の物語)

○古の光源氏の物語(一古の光をのこす物語)

○南無や光源氏の幽霊成等生堂(一観世音、恵によりし物語今ぞ供養し奉る)

○光源氏の御跡を、用ふ法の力にて(一恵によりし物語。供ずる法の利益)

○かゝる源氏の物語、これも思へば夢の世と(一かゝせ給ひし)

これらはいずれも「源氏」を供養する、あるいは「源氏」を過去のものとしてみえらる(「ありつる等」)ことができて、いずれも源氏徳川家にとって不吉な言い回しに聞こえる。

そのため、明和本(「樂式部」)ではそのような詞章を右のように徹底して改訂し、「源氏物語」という書名ですら遠まわしに「かの」とか「物語」などという表現に置き換えているのである。ただし、「源氏」という語目体を嫌っているのではなく、そのあとに忌まわしい語が連なっているから訂正されるのであって、そうでなければ改訂の対象にはなっていない。

たとえば明和本(「浮舟」)の、

「美に／＼光源氏の物語、なほ世に絶えぬ言の葉の、それさへ添へて聞かまほしきに

という詞章などがそれで、むしろ源氏の世が絶えないとの褒め言葉に解釈できなためか、改訂の対象にはなっていない。また、同じく「源氏」

にとって良くない意味に解釈できる詞章の場合でも、たんに「源氏」の語を使用しない改訂ばかりではなく、

「玄上」：此須磨の巻の春かとよ、

源氏此浦に還され給ひ

(一げにや源氏の物語に、光君此浦にしばしかくろひ)

の改訂のように、「源氏」が配流されるという意味になることをかきすたために「源氏」という語を削除するのではなく、あえて「源氏物語」の語であることを強調し、なおかつ「かくろひ」という曖昧な語を用いて問題を解決するものもみられる。

このように明和本の詞章には、徳川家に憚ったと思われる改訂が多数見出せるのだが、このような改訂がなされた背景として、やはり当時の能楽が幕府の式業として保護されていたことがあげられよう。特に、明和本を刊行した観世元章の場合、父親である十四代観世大夫清親が九代將軍徳川家重の能指南役という地位にあった。そして、延享四年(一七四七)に清親が没すると、元章は二十六歳で親世大夫と將軍の能楽指南役を引き継いであり、いわば生まれながらの幕府御用役者といえよう。

その家督相続の三年後、寛延三年(一九五〇)には、江戸浅草筋通橋で前代末関の十五日間にわたる一世一代の勧進能を興行(それまでの江戸での勧進能の先例は、四日ないしは五日間の開催)、さらに宝暦二年(一七五三)に弟の維部清尚の別家樹立が認められるなど、その地位は揺るぎないものと思われただろう。このように幕府の格別な庇護を受けていた

こともあって、国家の最高権力者である徳川家にとって不吉な言い回しがないう神経をとがらせていたと思われよう。

ほかにも、元章がそのような幕府により近い立場であったことから由来すると思われる改訂として、能に登場する人物の官位等の表記に関するものがあげられよう。たとえば、

「八嶋」：源氏の大將候非連使五位の尉源の義経(一候非連使五位の尉)

という改訂がその一例である。この場合「源氏」の語を削除しているが、特に忌むべき言葉が連なっているわけではなく、「源氏の大將」といえば源氏の棟梁、征夷大將軍であるという、江戸時代ならではの捉え方から本来の詞章が不都合であると判断され、改訂されたと考えられる。なお、詞章改訂に關与した加藤枝直も(「千手」)の「一頼朝よりの御徒にて琵琶をもたせて参りたり、此由重て御申候へ」という詞章に關して、

狩野介か為にも主君なれハ「頼朝より」と千手が申へきやうもなく候。

と狩野介が主君である頼朝を呼び捨てにしている例を誤りであると指摘してのように(「国会図書館蔵『謡曲改正草案稿』」、人物の敬称につい

ては厳密に検討しており、その意識の高さがうかがえる。これも身分社会といわれる江戸時代ならではの視点と思われる。

以上のように、明和本には江戸幕府に対して非礼のないようにとの配慮から生じたと思われる改訂がみられるのは、当時の能楽のおかれた状況を反映したものであろう。なおいえば、明和本において謡曲の義典である古典文学が誤って引かれている場合は、やはり改訂の対象となっていることは、元章の考証癖の表れであると言われることもあるが、これまでも見てきたように能が幕府の式楽であったゆえに誤りを正す必要があったことも要因として考えられよう。つまり、正式の場で將軍や諸大名あるいは勅使・公家来に対して能を上演するにあたって、徳川家にとって忌むべき詞章はもちろん、明らかに誤りや人物の呼称が当時の常識と異なる場合、誤用の案といえどもあまり好ましくは思われなかったであろう。あるいは、諸大名や知識人から謡本の「誤り」を指摘されといった状況も実態にあったのではないかと想像されるのである。

## 能楽「蛇口」追跡(その一)

保田 紹雲

### 1. はじめに

因州藩田代義興に「蛇口」と名づけられた面があり、京都・金剛宗家藏の「雷」とほぼ同形であるが、各種の書画図版での同様の写真や説明には差異が見られることから、その他の文献も含めて比較、検討してみよう。

なお、本稿での所収者名は資料とした原典に記された名である。



①



②

(写真①) 徳川久太郎藏・蛇口・市川作「能楽大鑑」掲載。写真② 金剛宗家藏・雷・自作「舞影」(一) 掲載。

### 2. 資料・能楽「蛇口」と「雷」

(1) 徳川久太郎藏「蛇口」(雷) 面図作。

「能楽大鑑」掲載。

説明に「蛇口」蛇の一種。金剛宗家の時氏所藏の「雷」は此面と全く同型なり。名称は蛇口を正しとす。

「用道」男蛇に等しく、大蛇等に用ふべし」とある。(写真①)

また泉屋博古館藏・蛇口・友水作。「泉屋博古館紀要」掲載。

説明に「因州藩田代義興蔵であること。面裏に「志々口元文(戊午十二月出来)」の墨書。

「実立目録には(○)号に徳川の蛇口一面がある」とある。

(3) 金剛宗家藏・雷・自作。「金剛宗家の面」掲載。

面裏に「(東下坂金剛寺)「天下」一、自白・漢高(花押)」の後書がある。

この面が最も早い時代に写真で紹介されたのは、「能楽歩斗金剛宗の助・舞影」(一)・附其再蔵古面」で明治三十七年であり、説明に「金剛特有の面にて、元禄年間浅草寺の雷神を模写して作れるものなり」と、此面は雷電に用う」とあるが、作者については、天下一友閑作とあり、

面裏と異なっている。

青森香村は此の面の写真を大正五年に「能楽方代蔵」・大正九年に「能楽大鑑」に掲載し、この説明に「蛇口」鬼神類。「用道」金春・金剛・両蔵之を照ふ」と記している。(写真②)

その後も多くの図録に掲載されている。

(4) 長沢氏春藏・雷・調断作「古能楽面作五十撰」掲載。

面裏に「(伊印)「出日調断」があり、金春信高師の解説に、「いかずちともかみなり」という。文字は同じ雷である。」

徳川久太郎藏や泉屋博古館藏の「蛇口」と同型である。

(5) 伊丹・小西氏旧藏・男蛇・出日調断作。「某家(伊丹・小西家)所蔵品入札目録」掲載。

写真が掲載されている。徳川久太郎藏や泉屋博古館藏の「蛇口」と同型であり、傷などから長沢氏春藏・雷・「伊印」・「出日調断」と同じものと推定される。

3. 面の形の比較

香村著「能楽大鑑」には「蛇口」と「雷」は全く同型なり」とあるが、写真による比較で、全体から受ける感じは金剛宗家藏の雷が最も引締まった顔しきで、勝れている。

細部の明確な違いは眉と上唇で、

まず、蛇の形の差異は、金剛宗家蔵「雷」・洞白作(写真②)には丸い粒々があつて、筋子のような形であるが、その他の面(写真①)は、周辺にぎざぎざのある小判型が貼り付けられたような形になっている。

上唇については、前者は紅葉の葉のような突起が上牙を隠すように存在するが、後者にはそれが随分退化して僅かな痕跡のみである。

前者の洞白作は大野出日家四代目で、後者は五代目満矩(洞水)、六代目満猶(甫閑)、七代目庸久(友水)の作だが、後者間では殆ど差異は見られない。

このように、世襲面打家大野出日家の作品が四代続いて存在するのは、この手本面が代々伝えられて来たことを示しているが、満矩以後、眉や上唇等の形が変わつたのは、手本面がこの形のものに変わったのであろう。

#### 4、考察・「蛇口」と「雷」

以上の図録写真とその写真に付された説明、その他の文献から考察してみる。

(1)因州侯所蔵品充立目録には「蛇口」満猶作が七号三五番、庸久作が十号九八番にあり、二面存在する。

二面共、橋岡久太郎が落札したが、橋岡氏は落札直後から売却しているの、庸久(友水)作が泉屋博

古館蔵となったものである。

(2)因州藩旧蔵面の面裏には名称が「蛇口」と記されており、金剛宗家蔵や長沢氏春蔵の「雷」も含めて、江戸中期における一般的な面名称は「蛇口」であることが明白である。

(3)香村が「蛇口」の説明で「名称は蛇口を正しとす。」と言つたのは香村が因州藩の充立前後に面裏の名称を見ていたことによる。

(4)香村は蛇口の用途を「男蛇に等しく、大蛇等にも用ふべし」としているが、能面「男蛇」の相貌は角のあるもの二種、角無し一種が香村稿「般若」と其系統の面(上)(中)(下)に描載されているほか、前出の「某家(伊丹・小西家)所蔵品入札目録」の面名称も「男蛇」で、その相貌は「蛇口」と同相である。

以上のように、男蛇には同名異相の面がいくつあつて、「男蛇に等しく」とある面の相貌がいずれを指すのか不明である。

(5)京・金剛家ではこの面の名称を「雷」の能に使うことから「雷」と名付けていたと推察する。

面名称は自家の所蔵面の間で区別が出来るばよいので、他所での名称とは関係なく付けられたのであろう。

(6)金剛謙之助は雷を「金剛特有の面」と言っているが、これは京・金剛だけでなく坂戸金剛でも使用すると金剛右京から香村は聴取していることが、香村稿「能面研究(二)」にある。

(7)香村が「金春・金剛。両流之を用ふ」としているのは、香村が入手した金春家伝聞譜に「蛇口」が掲載されていることによると考えられる。

(8)「雷」は明治末から写真の出版、図版等にたびたび発表され、金剛家特有の能面として広く知れ渡っている。

(9)長沢氏春蔵・雷・(烙印)(出目満矩)の説明に、金春信高師の解説で、「いかずちともかみなりともいう。文字は同じ雷である。」としたのは、その名が広く知れ渡つた金剛宗家の「雷」の名称が影響していると推察される。

#### 5、図録における作者名について

橋岡久太郎蔵「蛇口」には「能面大鑑」に甫閑作とあるが、これに該当する「因州侯所蔵品充立目録」七号三五番の「蛇口」には満猶作とある。

充立目録の作者名は、因州藩旧蔵面独特の面裏記載の作者名が記されていると考えられるので、この面裏には本名の満猶と記されていると考えられ、制作年代は判明し甫閑を名

乗る享保十五年(一七三〇)五月以前の作である。

仮に制作を始めた年齢を十五歳(元禄七年(一六九四))からとすればこの間の三七七間に絞り込める。

また、泉屋博古館蔵・蛇口には「泉屋博古館紀要」に友水作とあり、説明で「志々口元文三戊午十二月出来」の墨書があると記されている。

元文三戊午年(一七三八)の名乗りはまだ本名の庸久で、判明して友水を名乗るのは延享四年(一七四七)からである。

図録や論文で能面作者の名前を記すとき、面裏等に烙印などで制作当時の名前が明らかにされている場合は、それをそのまま記述すべきであつて、同一人の名で広く知られているからと称号などに安易に変更すべきではないと考える。

作者の制作当時の名乗りは制作年代がある幅に絞り込めるキーワードであるからである。

記載のない名乗りを併せて記したときは、

#### (例)

満猶とある時・満猶(甫閑)作  
甫閑とある時・甫閑(満猶)作  
といったように記してはどうであらうか。

(川橋岡久太郎蔵「蛇口」市閑作(斎藤芳之助・香村稿「能面大鑑」序巻三三

- 頁(大正九年十一月一日発行、大正十四年五月一日再版、能楽書院発行、昭和五年四月二十八日東洋書院発行(復刻版))
- (2) 泉屋博古館藏・蛇口・友水作・「泉屋博古館紀要」第十九号(平成十五年三月二日発行)
- (3) 金剛宗家藏・雷・洞白作・金剛永護著「金剛宗の面」(二〇〇〇年八月一日玄川大学出版部発行(二四頁九六図))
- (4) 「能楽家斗金剛護之助・舞影・蛇・附其御蔵古面」(明治三十七年三月十七日芸術堂発行)
- (5) 「能楽家斗金剛護之助(香村)著(大正五年三月十日能楽通社発行)
- (6) 「能面大鑑」香藤芳之助(香村)著(天正九年十一月二〇日発行、大正十四年五月一日再版・能楽書院発行、昭和五年四月二八日東洋書院発行(復刻版))
- (7) 「古能面傑作五十張」毎日新聞社昭和五年九月三十日発行
- (8) 「某家(伊丹・小西家)所蔵品入札目錄」(昭和八年一月二十四日關札大坂美術俱樂部発行)元立番号「五七男蛇・出自満絶作。
- (9) 保田紹鑑編「因州侯(鳥取藩池田家)旧蔵能面に關する考査」(稿、三「補遺」……)(名古屋芸術文化)第十三、十五巻、平成十五、十七年十二月発行)
- 00「一月録、因州池田公卿家御蔵品入札」

(大正八年六月一日開札・東京美術倶楽部発行)

「奇佳な四つ銘の面」(「謡曲集」第三四巻第六号昭和六年六月)

「奇藤香村稿」(般若と其系統の面(上)(中)(下))『能楽劇集』第十四年第九、十一号、大正九年九月十一月号

「奇藤香村稿」(能面研究(二))『能楽劇集』第十四年第七号、大正五年十月、月号十四頁

「奇藤香村稿」(金葉家の能面上)『能楽劇集』第十四年第一号、大正七年一月、月号十八頁

## 佐渡金山の三番叟絵馬

藤岡 道子

能狂言の演出研究のための絵馬資料の調査を始めて数年がたった。そのひとつに絵馬の調査がある。絵馬はその特殊な用途から資料的な有効性を欠くものも当然あるのだが、なにより制作年や絵師が特定できるといふ他の絵馬資料には期待できない特質がある。能狂言に関わる面白い事象を読み取ることのできる諸例について近年小考をまとめた。(「狂言絵馬を読む」聖母女学院短大研究紀要三十四、二〇〇六、三)それにしても能狂言を描く絵馬は思ったより多くは無い。調査不十分のゆえか、

残存資料が多くないゆえか。あるいはそもそも絵馬の題材に能狂言はあまり選ばれなかったのか。

前稿を書き終えた頃、「国史大辞典」佐渡金山の項に奇妙な三番叟の絵馬を見出した。佐渡金山の主要拠点であった相川(現佐渡市相川)に伝来する絵馬である。(相川の鉾山文化)の解説に「相川は山師・金守の町であり、商人の町である。町は自治的性格を強くもっていた。佐渡奉行大久保長安のもたらした能・謡が百姓・町人の間にひろまる風土がそこにある。相川はまた帰るべきふるさとをもたない人々の町でもある。諸国の唄がうたわれて民謡の渦となり、八十五カ寺にも及ぶ寺と、海を向いて立つ墓とがこの町の歴史を物語る。」この解説とともに(奉納能絵馬)の写真が掲げられ「新潟県大山祇神社所蔵」とある。新潟県に大山祇神社は、大雑把な検索でも数箇所あるが、これは佐渡市相川大字下山之神町?番地の大山祇神社である。この絵馬について「佐渡相川郷土史事典」に次のようにある。「七福神演能絵馬 下山之神町の大山祇神社に奉納されたもので、縦一五〇釐、横一六〇釐で大型の絵馬である。昭和四十九年八月町の有形文化財に指定された。能舞台の絵馬は全国的にも珍らしく、天保四年(一八三三)の

年号のほか、七人の奉納者が墨書で記されている。七人とも佐渡奉行所の地役人である。水田惟政・細野元則・渡邊安信・赤江橋賢吉・清水政清・小宮山千吉・井上恵通である。ともに能に堪能な人たちであったろう。舞台上部正面に「金銀山」の文字額、横掛りのところに「大盛」の文字が大書されている。このやしろは、慶長十年(一六〇五)に鉾山の総鎮守として、大久保長安の手で建立されているので、通常の能舞台とは違った鉾山色の強い性格を持っていたと思われる。「金銀山」「大盛」などの大筆の文字をかかげる舞台は、ほかには例がない。横掛りが舞台と直角に描いてあったり、囃し方も演能者も、ともに七福神の仮装で登場している。能のきまりからははずれた絵だが、金銀山の繁榮の祈願のほか「特別の祝い」となどもあつて、実際にこうした能が催された可能性もある。能ファンが多かつたらしく、大勢の観客がまわりを埋めていて、「御能だんご」を売り歩く何人かの人が描いてあり、能を見ながら団子を食べる習慣が古くからあったという、町の古老たちの伝承も裏づけられている。古くは三月二十三日の祭礼日が、同社の定例能の日であったが、明治二十年代には能舞台もなくなつて、近くの教養院に新しい舞台がで

きた記事が「北沢雜誌」(二十二年五月)に見える。また、「佐渡相川の船馬」(相川郷土博物館刊一九八〇・二二〇)には「佐渡は能が盛んである。若井三郎氏の調査で、佐渡の九十八の能舞台があったことが確認された。佐渡の能舞台」(昭和五十二年)相川には三つの能舞台があったが、いずれも現存していない。相川町下山之神の大山祇神社では、毎年三月十六日に能が行われ、その目はお能揚子といって、能を見ながら団子を食べるならわしがあったと伝えられている。能舞台を描いてあるが、舞台の人の配置は能の正式のものではなく、また演題も能にはないなど、能のきまりからはずれているという。(小松屋藏氏の調査による)七福神は七人の奉納者、水田豊政、細野元國、渡辺安徳、赤江健賢典、清水政清、小宮山千吉、井上恵通、を模したものであろう。(相川町指定文化財)

以上の二つの解説から本船馬の奉納者、奉納者は確定でき、また新編の内容も推測できた。(付録部分)。ただ、実際にこうした能が催された可能性(渡辺部分)は能上演の歴史から見て薄いと考へたい。また、演題も能にはない(渡辺部分)ということはなく、これは「三番度」「上演」である。この船馬の船馬のきわめ

で特異な点は舞台上の役を七福神で描いていることである。江戸時代の浮世絵でよく用いられた見立ての趣向でもなく、諸役を七福神にあてがっている。苗、小鏡、大鏡、太鼓がそれぞれ吉祥天、布袋、大黒、毘沙門、布袋と大黒はなんと袋と米俵に懸けて打っている。面類は恵比寿、本末輪郭にしている。三番役を舞うのは寿老人である。三番役のみ面白い対面を懸けている。能舞台と七福神の奇想天外な取り合わせがおかし、まためでたい。おそらく中央の能狂言絵の伝統と制約から遠くあったために、このような能に類を見ない作品が描かれたのであろう。

この船の建築としての能舞台が天保年代の佐渡の能舞台の式写であるとするは、中央との多くの相違点があることができて有地な資料となるのだが、残念ながら実写とはいきれない。この船から読み取れる貴重な情報に客席の賑わいである。能狂言舞台の絵でここまで見物の群衆が描かれた例はなく、佐渡の能上演絵の有り様、芸能文化の熱い息吹きを、まさしく今日に伝えている。

(本船馬模写、佐渡船馬神社蔵の第一小図「一」船馬を見出した、船馬を予示したい。)



佐渡市相川 大山祇神社蔵「三番度」図船馬  
(掲載につき本船馬の寄託先であるGOLDEN SADO-三番船馬の保存の了解を得た。)

〔資料紹介〕

〔山脇得平稽古本 関之本〕

飯塚恵理人

狂言共同社佐藤友彦師所蔵の間狂言本に山脇得平の稽古本がある。山脇得平については、すでに佐藤友彦師<sup>（注1）</sup>に言及があり、これによってかなりその輪郭が明らかになっている。多少重複する部分があるが、得平の事績について資料から見えてゆきたい。まず「名古屋市史 人物編 第二」<sup>（注2）</sup>は得平について、

「山脇得平、名は則継、鬼頭某の男。狂言和泉流の家元山脇和泉の支流山脇氏（飯塚 注1）山脇藤左衛門家）に養はれ、弘化三年に九世を相続す。妙技を以て知らる。然れども其声枯れて微せず。伝へ云ふ、壮時美声を以て人の羨視する所と為り、水銀を飲ましめられたるなりと。後京都を常住地とす。明治十一年三月二十四日卒す。含笑寺 東区松山町、に葬り、徳藏寿仙上座と諡す。門人外堀新太郎 本名は角淵宣 明治十一年よりその芸事を相続せり」とある。佐藤友彦師所蔵の「神文帳」（門人帳のこと）には明治四十年五月九日として

井上重兵衛

一 当流弟子家職分初代早川忠三郎之名義今般芸名相続申談居

角淵 宣

一 当流弟子家職分初代佐々藤左衛門之名義今般芸名相続申談居

とあり、井上重兵衛（菊次郎）は早川家初代忠三郎の、角淵宣は山脇藤左衛門家初代の佐々藤左衛門の芸名の相続を許されており、それぞれ和泉流としての正式な早川家・山脇藤左衛門家の「芸事後継者」となっていると考えよう。二人とも藝名はしなかったが、その間の事情は別に考えた。この「神文帳」に角淵取立て名が見える人に、武山鎮三郎がある。尾張藩（藩士名寄）（徳川林政史研究所所蔵、飯塚翻刻 <sup>（注3）</sup>）には、

尾州

赤塚町柏屋佐助伴

泉頭得平

山脇

一 弘化三（一八四六）年十月十八日、山脇藤太郎頼之通同人家為相続、御役者狂言役被召抱、御扶持五人分被下置

一同四（一八四七）末三月、先達而尾州住居被仰付候処、今般御吟味之譯有之、以前二被復上方住居御免被成下候

上方住居御免相成候付而は、御用之節尾州迄御呼下二付而、御手当品は不被下善候

一 安政五（一八五八）年十二月廿一日、家芸出精宜仕候付、御加持持式人分被下置

一 明治二（一八六九）年十月八日、三等兵隊中付候

此已後不訂

とある。得平は養子であるが、この間の相続の事情としては山脇治兵衛が亡くなった後、子供が放蕩をして貧しくなったことが伝わっている。細野要齋の「役の滴 諸家雑談」<sup>（注4）</sup>には、小寺玉晃が「大星「だいはし」という味噌を商う大商家の主人であった「逸人（梅樹軒）」について話したこととして、「其初は山脇御役者に狂言を学び、大金を出して奥伝の技進も許可を得たり。山脇初め按摩をするといふを以て、大星へ周旋し、これを誘ふて大金を得たり。然に其子放蕩にて家衰貧くなりたり。其養子、今の得平なり。宅内に舞台を作り盛に技をなしたり」と載る。梅樹軒逸人は自宅に舞台を設け、「四季三番壁」<sup>（注5）</sup>という能・狂言を題材とした俳諧西集を出版するほど狂言にのめりこんだ商人だったが、最後は没落し、自殺した。逸人は山脇

治兵衛に習っていたと考えられる。この記事によれば、山脇治兵衛は按摩もしていたこととなり、御役者の副業を考える上でも興味深い記事である。治兵衛の子供は放蕩をして貧しくなった。結局その家を得平が継いだ。得平は明治になってからも、息子の山脇録太郎・録弥<sup>（注6）</sup>とともに狂言に出演しており、狂言師としての活動をしていたと考えよう。のち子供二人は芸事から離れ、「山脇藤左衛門家」としての活動はおわったが、芸事と伝書は角淵宣に引き継がれ、現在の狂言共同社に続いている。得平の命日・戒名については含笑寺の御住職に、含笑寺の記録と市史の記述が一致していると教えていただいた。（山脇得平稽古本 関之本）の曲名を目錄によって示すと以下のようになる。（曲名は「へ」をつけた。また曲名に通し番号をつけ、<sup>（注7）</sup>で示した。墨で消してある部分は「一」で聞んだ。題には墨と朱筆の部分があるが、区別しなかった）

- （第一冊）（表紙）稽古本 間 語之部 九冊之内、老 神事類（裏表紙）山和喜（内題）稽古本之巻語之部三冊之内（1）《高砂》（2）《野々宮》（3）《藤》（4）《弓八幡》（5）《龍田》（6）《三輪》（7）《淡路》



3 主 催 岐阜県立岐阜高等学校  
4 場 所 岐阜市民会館  
5 演 者 玉井弘子他

6 曲 目 『葵上』  
7 鑑賞者 岐阜高等学校生徒およ  
び父兄、教職員約13  
00名

8 当日の内容

上演される『葵上』の内容の説明と、能の基礎知識の説明がありました。その後、舞台にて生徒に大鼓、小鼓、太鼓、笛等の実技指導がありました。そして『葵上』の上演がなされました。

9 その他

玉井弘子先生は岐阜高校の同窓生でもあり、当日の囃子方等にも同窓生が出演されました。上演後の生徒に対するアンケートでは多くの生徒が「すばらしかった」と答えており、日本の伝統文化を満喫しており、又、玉井先生の、能を未来の若者に是非とも伝えていきたいとの意気込みが舞台の中からひしひしと伝わってきました。多くの生徒はその迫力がある演技に感銘をしていました。

小中高中生に能を見てもうための入門では『葵上』が動きもあり、現代のスピードにマッチしていますので適当かと思われます。

今後このような方法によって若者に能の楽しさを伝えていくことが必要であると感じました。

（体験談）

伝統文化（能楽）ことも教室

山村 友子

そもそのまのきっかけは豊田で「能楽堂まつり」というのに行つて、「能楽器に触れてみよう！」というのがあつて大野先生と能管に一目惚れしたので（笑）、寛先生と出会つて母達が一枚の紙をもらったことでした。

その一枚の紙に書かれていたことも教室に行つてみようか、と言われた時は、もう一度能管と大野先生に会えるなら行こうかなあ、ぐらいの感覚でした。「能楽堂まつり」に行くまでは能の存在すら知らなかった私は、これも教室でなくことをするかなんて知つてのわけもなく行くことになったわけですが、。

ことも教室に行つてからの私は寛先生に「もつてけ」みたいな感じで貸してもらつた能管の練習や、うたいの練習をひたすらした気がします。教室の内容はすごくシンプルで特別どうだというわけではないのですが、「じゃあ、これも教室の力が良いのか」というと、能管の力もあ

つたと思いますが、先生達が格好良かったこと（笑）、教室に来て他の子供たちの明るさと、なんていふたつて寛先生です。寛先生は、子供たちがこれから人として成長するために大事なことを能楽と一緒に教えてくれ、なおかつ子供たちを嫌にさせず、のびのびと能楽を楽しめることをしてくれそうです。そんな環境の良い中で、きやつきやつと騒いでいる子供たちの中にいるとても心地良く、毎日あればいいのになあと思うくらいです。

前の私みたいに、「能はまったく無縁の世界だわ」とか「能って何？」と思つている人や子供に一度は来て欲しい、とても素敵な伝統文化（能楽）ことも教室。来年度も、もちろん行きたいと思っています。

（伝統文化 能楽）ことも教室に参加して

山村知津子

昨年の夏、豊田市能楽堂にて行われた、能・狂言体験教室に参加させて頂いた折に、寛先生にお声を掛けて頂きましたのを縁に、二人の娘と共に「ことも教室」に参加させて頂きました。

札に始まり札に終わるのお作法を始め、お謡、大鼓など全般を寛先生

先生に習ひ、太鼓を加藤洋輝先生、笛を大野誠先生、小鼓を船戸昭弘先生達より楽しくお稽古を受けております。

遊びごころを取り入れながら、營めて伸ばす！の寛先生流のお稽古手方は、習う、教わり身に付けるの喜びを与え、学ぶ喜びを得る、のびのび、和気あいあいとした教室で、「親御さんも知らなければ……一緒にやって。」の寛先生のお言葉に、子供の付き添いで行つております私たちが親も、楽しく冷や汗（笑）をかきながら、お稽古に参加させて頂いたに致しました。

私の下の娘は、寛先生を始めとする諸先生方のお人柄はもうろんの事、体に付けられておられる技の素晴らしさに魅せられ、すっかり能楽ファンに……。中でも能管、笛が大好きで、日々お稽古に励んでおります。

時折々に、寛先生が掛けて下さる言葉や気遣いは、私の子供はもとより、教室に参加しているお子様達にとつても、大きな喜びと励みになっている事と思います。色々な意味において世代を超えた交流は、子供達にとつても、親、大人にとつても良き学びの場所となり、小さな子供達と寛先生のやり取りは、見ていても聞いていてもほのぼのとするものが

感じられます。

今年(十七年)度のことも教室は三月十八日で終了しましたが、来年(十八年)度も続けて頂けるとの事ですので、是非ともに子供共々参加させて頂き、親として何かのお手伝いのできればと思っております。かわい子供達と寛先生を始めとする先生方とのお稽古風景は、見ているだけでも楽しいですので、皆様もぜひ一度、伝統文化(能楽)のことも教室を覗きにきて下さい。本当に楽しいですよ。

## 能楽子供教室を体験して

野武 審

これまで能楽に対して、映像で鑑賞する舞台と感じておりましたが、在住する豊田市に能楽堂ができ、昨年夏の催しで能狂言の体験教室に参加し、舞台上を歩いたり、能楽器に触れる機会を得て、子供に返って諸先生方に教えて頂きました。

その折、寛先生には大鼓を御教授頂き、先生の主催されます能楽子供教室へのお誘いを頂戴致しました。我が子は、見学をさせて頂き見聞を広めることができました。友人と共に出席する度に、寛先生と子供達の掛け合いや触れ合いがとても楽しく

心暖まるものと感じられました。知らず知らずに「春霞(はるがすみ)」ら子遊む程、子供達と共にお話をさせて頂きました。

見守られる親御さん子供と共に体験できる楽しい教室です。来年度も同様に子供教室に活氣溢れる楽しい子供達の声が響くことを待ちたいと思います。

## こども能楽教室にかよって

長田 若子

2005年の「伝統芸能上演会」で「こども能楽教室」がスタートすると知り、当時小1と小3の2人の子供を伴って米野コミセンにでかけた。夏休みである。

「よう来たなあ。」何が起こるのか知らないまま部屋に入った子供達を一人一人みつめて、寛先生が声をかけてくださった。お孫さんの明香里さんと純太朗くん並び「はるがすみ」たなびきにけり ひさかたの」と謡いはじめる。そのフレーズだけを何十回と繰り返したのが初日である。

大鼓と小鼓がずらりと並べられる。抱えたり、自由に叩いてみたりする子供達の表情から、胸がときめいているのがわかる。「や、は」とかけ声。先生の目と顔を見、腕の動きと指先

を見、懸命にまねながら叩く。音は出なからでも手の平に痛みはくる。手をぶらぶらと振りながら「痛った」と笑っている。「音よりまずかけ声が大事だよ」と先生に聞かされ、大きな声を出すことの大切さを知る。

お稽古の後、初めて先生の御宅を拝見した日には、親子ともども胸がおどった。その古い造りに、頭をぐるりと大きく回し眺めると、自然に目が見開いてしまう。子供達はお庭に入り、大きな石の上にながって心地よさそうだった。

ひなまつり会が催された。飾られたお雛さまの前に並び「はるがすみ」たなびきにけり」と謡いはじめる。その頃には、おわりまで通して謡っている。はらばらでも子供ならではの元気さ。「うまくなったなあ。」子供達が顔をすこし上げ先生を見つめている。

「うまいなあ。」「ようやくたな。」子供の顔を見つめながら、こんな言葉を繰り返して何回かかけてくださっただろう。先生の御宅では恒例のかくれんぼ。自分をみつけれられた瞬間、小さな子供はとても嬉しそうな顔をする。その気分によく似たものを、先生の声かけから子供達が受けているように感じる。

## こどもを「伝統文化」で「能楽教室」に通わせて

飯塚恵理人

文化庁が、こどもに伝統文化を伝えるための「伝統文化こども教室」の実行団体を募集しているのを知ったのは、筑波大学日本文学専攻の二年後輩だった岡明彦君(現在は公明党愛知県本部議員)との雑談からでした。岡君とは同じ愛知県出身で、大学時代ともに教育者をめざしたのですが、いまは同じ年配の子供を持つ親として、名古屋の「芸どころ」の伝統が子供の世代まで続くといったなあと言う話を互いにしています。ただ、なかなか具体的な手段が思い付かなかったのです。募集要項を頂いて、すぐに東海能楽研究会代表の寛範一先生と相談し、会として申請する事と致しました。ただ、寛先生の苦勞は予想をずっと越えていました。能楽囃子の稽古は、教室の前に先生が道具を揃えなければなりませんし、教室の予約、外部講師の手配、子供への連絡など考えると、とても大変です。先生の奥様、御子息とその奥様には本当にお世話になりました。これを機会に、二人の子供にも、幼

稚園児なので「見習い」として参加させました。少しもじっとしていませんし、算先生にも大野誠先生、加藤洋輝先生、船戸昭弘先生にも失礼があったかと思えます。ただ、比呂人も友思も「春霞」をみんなと謡うのがとても楽しいらしく、家でも「はるがすみ」と謡っています。また、一緒に教室のお兄さん、お姉さんと遊ぶのが楽しいようで、土曜日になると、いつも「早く行くー」と言います。半野駅で近鉄電車を見る事、帰りにムシキングのゲームが出来るのも楽しみのようです。先生方、教室のお友達、お母様方に心より感謝致しております。平成十八年度は寛蔵一先生の名古屋市中村区教室とともに、長田驥先生・郷先生による津教室も東海能楽研究会三重県支部として申請致しました。採択を祈っております。これらの教室が東海能楽研究会とともに続いて、謡曲・囃子を習う子供たちが増え、伝統が引き継がれてゆくことを心より祈っています。授業料も無料ですから、参加する子供がもっとも増える事を本当に祈っております。今年度は皆様本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

東海能楽研究会は、能楽界で最高の権威を持つ「催花賞」を受賞致しました（平成十七年度）。法政大学より発表されました贈呈理由は左記の通りです。これを機に益々能楽の普及に励むべく、平成十八年七月二十二日に「催花賞受賞記念 第七回 伝統芸能上演会」を名古屋能楽堂において開催致します。この会では東海能楽研究会が昨年より「伝統文化活性化国民協会の事業」の実行団体として行った「伝統文化」も、能楽教室「のお稽古発表も行います。また、今年度末を目標に「催花賞受賞記念論集」の刊行を計画致しております。

〔贈呈理由〕

名古屋を中心とする東海地域の能楽史の解明と、次世代への継承・普及を目的とし、当地の能楽師と研究者が一体となって組織された同会の活動は、近代名古屋の能楽のデータベースを基軸とし、詳細な索引を付した「近代名古屋の能楽を支えた人々」全三冊（平成13年刊）に結実した。名古屋ゆかりのA龍の口Vの復興、児童生徒を対象とした「伝統芸能上演会」の開催など、能楽の普及に果たした功績も大きい。

平成十七年度 研究例会活動報告

平成十七年五月二十九日

七月三日

昭和初年から戦後にかけての名古屋能楽界  
飯塚恵理人氏  
流転する能面―健忘斎書状（彦根藩文書）  
にみる大名家間の売買―

九月十八日

田村のクセとキリスト教の伝来  
米田 真理氏

十一月二十日

明和本『源氏物語』関係曲をめぐって  
中尾 薫氏

平成十八年一月二十九日

豊橋の能楽関係資料  
朝川 知勇氏

三月十二日

名古屋の能楽関係資料  
三苦 佳子氏  
問狂言本の本文比較（輪読）  
寛 蔵一氏  
飯塚恵理人氏

訃報

栗花光彌氏 平成十七年十一月十七日心臓発作のため死去。享年七十七歳。本会設立時よりの会員で、能楽関係古文書の翻刻に尽力された。墓所は福島市五月町の康善寺。心より御冥福をお祈り致します。

東海能楽研究会年報 第十号

二〇〇六年（平成十八）三月三十一日発行

代表者 寛 蔵一

〒453-0802 名古屋市中村区下米野三二二九

幹事校 名古屋女子大学文学部 林研究室

〒468-8507 名古屋市中村区高宮町一三〇二

印刷者 共生印刷所

## 第六回

# 伝統芸能上演会

——伝統芸能を次世代につなげるために——

日時 平成十七年七月十六日(土)

場所 名古屋能楽堂 名古屋城正門前

入場 無料・御来場歓迎(先着六三〇名)

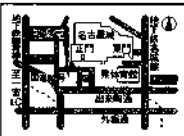
高層の時は会議室テレビでご覧いただきます

主催 東海能楽研究会

後援 名古屋市教育局  
愛知県教育委員会

開場 零時半  
観客体験 一時から二時まで  
上演会 二時半始

名古屋市中区三の丸二丁目一番一号 電話 〇五一一三一〇〇八八



## 二 挨拶

私たち東海能楽研究会は名古屋を中心とする東海地域の能楽の特徴を明らかにすること、一般への普及を図ることを目的として平成六年に設立しました。日本の伝統芸能がいつのまにか消えかきつつある昨今、子どもたちが少しでも伝統芸能に触れるために、文部省が学校教育の場にこうした芸に関わる單元を盛り込むことになりました。次世代に継承されてゆくきっかけが出来たことはまことに喜ばしいことであります。出演各位の御協力を得て昨年に引き続き、名古屋でこそ、今も見きよめることの出来る、芸能の一端を上演させていただきます。

伝統芸能に関心のある皆様のご来場をお待ち致しております。特に学校教育関係の皆様には、この機会には非一度御覧頂き、子どもたちの教育の一助にいただければ幸いです。

東海能楽研究会 代表 寛 勉一

舞台体験（一時から二時まで・白足袋お持ちになり楽屋へお出で下さい）

・能面をつけて横がかり・舞台を歩いていただきます  
・和楽器に触れていただく（笛・小鼓・大鼓・太鼓・尺八・胡弓・箏）などを企画しています

## おけいこ発表 はるがすみ

うたい 寛 純太郎（五才）  
あしらい 寛 明香里（小3）

## 番組（二時半始）

狂言 柑子 大郎冠者 佐藤友彦 主人 佐藤 融

半能 天鼓 シテ 大鼓 長田 駿  
ワキ 助役 飯富雅介

大鼓 寛 鉦一 太鼓 鬼頭義命  
小鼓 後藤嘉津幸 笛 大野 誠  
見 加藤誠子  
後見 平塚昭子  
地謡 森 健 和谷衡市  
二井栄太郎 中村 正

休憩 十分

## 各曲解説

### 狂言「柑子」

主人は太郎冠者に、昨夜附けた三つ成りの柑子を出せと言う。全部食べてしまった冠者は、「一つはぼぞ（へた）が抜けた、一つはつぶれたと言いつつ、残る一つは聞かされた。」「（鬼界が島）に流された後醍醐が一人残された」という逸話を用い、こじつけた言い訳に面白さがある。冠者のせりふにある「六波羅」は京都鴨川の東、五条と七条の間、平家一門の屋敷があったところである。流人三人と三つ成りの連環、「六波羅」と「殿」の首題で持ち出した話。「柑子」は日本在住の僧頼朝で、三つ成りは青光とされた。（林 和利）

### 半能「天鼓」

少年天鼓は内裏に鼓を献上するようにという帝の命令に背き、逃げたために呂水に沈められて殺された。この鼓はその後宮中に献上されたが鳴らなかつた。鼓が天鼓との別れを悲しんでいるのではないかと天鼓の父が噂はれ、打ったところ凄惨らしい音で鳴った。帝は天鼓を沈めた呂水に行き、天鼓の霊を管弦講（音楽会）を行って平うにとした。半能の「天鼓」は勅使（ワキ）が弔いをするに述べるところから始まる。すると少年天鼓の亡霊（シテ）が現れ、帝の命令に背いて殺されたため、死後も仏罪によつて成仏できずにいたところを、弔われたことによつて成仏できる喜びを述べ、生前親しんだ鼓を打って舞い遊ぶ。そして夜明けとともに姿を消す。（飯塚忠理人）

### 平曲「那須与一」

「平曲」は、琵琶を伴奏に用いて『平家物語』を語る芸能で、中世から近世では西月の琵琶法師によつて伝承されてきた。『平家』を語る法蘭の存在はすでに『徒然草』に見られるが、室町時代には幕府の保護を受けていっそう盛んになった。楽器を用いたり語り物としては浄瑠璃に先行するもので、寺社などで多くの聴衆を集めて演じられた。なお、平家の琵琶は、雅楽用のものと、様や声明を囃え床から奏されるいわゆる「宮内琵琶」が、融合したものといわれている。（米田重理）

平曲 那須与一 今井勉

明略本曲 鈴 慕 布袋軒 岩田律園

琵琶 珠取海女 北川鶴昇作曲 振付・立方 西川眞乃女 終 久米稚子

箏曲 千鳥の曲 胡弓 澤田孝子 胡弓 今井勉

終了 四時半頃

### 出演者紹介

今井 勉 平曲・唄・箏・横井みつゑ・三品正保・十居崎正富の各師に師事。平成四年国風音楽会より検校の官を受ける。平成十一年名古屋市芸術奨励賞受賞。国風音楽会会長。

西川眞乃女 地唄 日舞を西川家元に、地唄舞を古川雄雄夫師に師事。西川演師範。03名古屋市民芸術祭受賞しのじり会主催主宰。

久米稚子（箏）三絃川柳派東郷会教師 宮城派森壽会大師範。01愛知県芸術文化協会芸術賞受賞。

澤田孝子（胡弓）母澤田はぎの師より箏曲・三絃を其の後継井みつゑ師に三絃、胡弓を師事。国風音楽会所属。評論員 大師範。北川鶴昇（琵琶）鶴田流薩摩琵琶・鶴田郷史則に師事。社団法人日本演劇奨励協会賞受賞。オペラ「新・琵琶白痴物語」（名古屋オペラ協会20周年記念）他に出演。

岩田律園（尺八）西園流尺八、明略村山流（虚無僧尺八）を収めて六十年。東海三曲演奏家の会代表。

|       |        |            |
|-------|--------|------------|
| 長田 敏  | 喜多流シテ方 | 能楽協会名古屋支部員 |
| 和谷新市  | 喜多流シテ方 | 日本能楽会会員    |
| 長田 郷  | 喜多流シテ方 | 能楽協会名古屋支部員 |
| 飯島雅介  | 高安流端方  | 能楽協会名古屋支部員 |
| 大野 誠  | 藤田流端方  | 日本能楽会会員    |
| 後藤嘉津幸 | 幸酒流小鼓方 | 能楽協会名古屋支部員 |
| 寛 誠一  | 大曾流大鼓方 | 能楽協会名古屋支部員 |
| 常盤義典  | 観世流大鼓方 | 能楽協会名古屋支部員 |
| 佐藤友彦  | 和泉流狂言方 | 日本能楽会会員    |
| 佐藤 融  | 和泉流狂言方 | 能楽協会名古屋支部員 |

### 明略本曲「鈴 慕」

明略尺八本曲は、中国唐代の善化狸師が鈴を振って家々を巡り歩いて厄払いをしたことをまねて、鎌倉時代より虚無僧が托鉢の際に吹いた曲のことで、法式や勸行のための宗教曲が中心となる。虚無僧寺ごとに奏法は異なり、また伝承に伴う差異も著しい。この曲は、宮城早野田にあった虚無僧寺布袋軒の最後の番匠、長谷川東孝の伝えた曲で、大正期の高第小製源水・浦本新彌・岩田律園と伝えられたもので、演奏は独特のゆりを用いる。曲の構成は、①静かな調べ、②表現豊かな高音躍落、③舞返し、④静かな結尾となっている。（一名奥州鈴慕ともいう。）（岩田律園）

### 琵琶「珠取海女」

謡曲「海人」から歌詞をかりたもので、前シテ「珠の段」、藤原前が、自分の母は讃州老徳の浦で死んだ娘女であるとき、その過重供養のため志度の浦に下ると、そこへ一人の娘女が来て語り始めた。藤原前大臣の父、淡海公は、自分の妹（唐の高宗の妃になった）が、興福寺に三種の寶を送った所が、その中の明珠をこの沖の龍（大蛇）に取られたので、淡海公は身を扮してこの浦に下り、娘女と契り結び一人の子を儲けた。娘女はかたの珠を取り還す事が出来たらこの子を世継ぎにして貰うという約束で、女は命を懸けて海底に下り、遂に明珠を奪い返したという話を物語ったが、実は私が貴方の母であるその娘女なのですと告げ、波の底に消え失せ、今回は、その娘女の海中深く分け入って、悪戦苦闘の末、明珠を奪い還す様子を、子を思う母の願い、女の哀れさを表現できればと思います。（西川眞乃女）

### 箏曲「千鳥の曲」

二代目吉沢操校作曲。吉沢藩一検校は愛知県海部郡佐屋町出身。日本音楽史上不世出の生田流箏曲家。名古屋城下の羽塚秋楽庵・岡本楽楽から学んだ雅楽の調子を取り込んで、三味線から独立した箏曲を自指し、古今調子を取り出した、国学・和歌・漢字の要素を生かして、「古今集」及び「新古今集」の歌をもとに「古今組」「新古今組」の新組歌を作曲した。その最初の曲が「千鳥の曲」である。この曲ははげめ胡弓曲として作られ、安政二年（一八五五）に事曲化された。「古今集」と「新古今集」の千鳥の歌二首を、前唄・手事・後唄からなる、松風・波の音や千鳥の鳴声、櫓の音などを象徴する手が用いられている。（安田文吉）

## 東海能楽研究会

# 平成十六年度例会発表要旨

## ●ざわめく観客との対峙―世阿弥の「先問後見」論をめぐる―

米田 真理氏

大蔵(大蔵寺)である世阿弥(1414-1483)は、持権の後援を模索するようになった。初期の伝書では、ざわめく観客に対し、上演が始まってから身振りを大きくするなどの当座の工夫を考えていた。やがてこの「身振」や観客層そのものの特徴について分析するようになった。詞章を構成する言葉の連綴にそれらに全体の流れを重視した能を、「大所」にふさわしいものとするようになった。晩年の世阿弥の作風が歌舞能へと傾倒していったのも、遠くから見ている観客を惹き付けられるような工夫した結果に考えられる。

(16年4月10日)

〔16年4月10日〕

●大倉三忠師所蔵「御用留」(仮称)に見る尾張藩の能楽政策

栗花 光弥氏，飯塚恵理人氏

尾花澤藩御役者の大抵方々しての相模頼みの人の位で、「御用」として出動した。従ってその番組が載る。本発表会には、二代藩主光友時代に取り上げ、この時期にすでに純粋令を出して、御役者の整理行方についていたこと、また御役者として最も重要な任務としていた詔初での御役者の役割は、藩主からの委託の役割と見られる。この際、御役者のバックミュージックについて喋り、仕舞を勧めることであったことについて述べた。

(16年6月27日)

(16年6月27日)

## ●尾張藩と尾張名所図会

栗花 光弥氏

尾張藩の能業を考える上には、歴代藩主の事績や藩の財務状況、藩の地勢などに関する知識が必須の物となる。本発表では歴代の藩主とその事績について述べた。さらに藩中の町並みや祭礼の様子を示す『尾張名所図絵』を紹介し、尾張藩が能業のみならず、祭囃子などを中心とした豊かな芸能の土壌をもっていたことについて述べた。

(16年9月5日)

●続・因州侯（鳥取藩池田家）旧威能頭に関する考察

保田 紹雲氏

昨年（因州侯（鳥取藩田沼）邸、旧藏能面に關する考察）を発表したが、資料の検討が未完であつた。今回、能面蒐集の記録調査と、能面の裏に未探で記された意匠と照合することにより、能面蒐集を継続して行く状況と、大野出日家の活動状況が窺はれた。種々の説が存在している特殊用語の「伏見廻」の面は、備まつた容貌を明らかに出来た。種々の説が存在している特殊用語の「伏見廻」の面は、備まつた容貌を明らかに出来た。種々の説が存在している特殊用語の「伏見廻」の面は、備まつた容貌を明らかに出来た。種々の説が存在している特殊用語の「伏見廻」の面は、備まつた容貌を明らかに出来た。

ともに、「出来」「調」の示す意味を明確に出来た。PCEエクセルで整理した旧版能力の資料数は前回の100面から152面に増加した。今回新しく判明した事項により、前回の考察で誤っていた箇所を削除・訂正した。

(16年9月5日)

(16年9月5日)

## ●ワキ方高安流仕舞付『問答集―舞容追賦』の紹介と考察

藤岡 道子氏

『同窓集—難容道賦』は京都の高安流ワキ方次郎太郎(京都市伝来)蔵の一点である。本書は、まず同窓集と資料群についてその発見の経緯と資料群の一覧を羅列し、編纂のことに概説した。そして編入の稿時点では署名はわかっていなかったが内容の傍見が許されるので本書を含む数十点を年毎すべしで閲覧できた経緯について述べた。次いで、『同窓集』について紹介と考察を行った。江戸中期に同家の二代岡曲(大蔵)によつて書かれた本書はワキ方流の詞筆と判明で、上巻①、下巻九五曲を収めていた。詞筆の親同や衣装料詳細な型付が朱筆で書きまされた本書は、ワキ方流の台本・本歌の稀少を埋める貴重な存在といえるものである。(本書はいずれ刊削の予定である)

〔16年11月21日〕

〔16年11月21日〕

## ●『和泉流秘書』(県大本)の位置

野崎典子氏

愛知県立大学附属図書館蔵の『和泉漢秘抄』と、和泉漢狂言台本の『天理本』と『和泉漢吉本』と『波形本』と『元衡本』と『皇形本』とを比べると、ここに位置するものなのかをさがす。『波形本』(びやうもん連歌・音引)の三曲については本文の比較検討をしたものである。『元衡本』または古く遡ることはできないが、『元衡本』と同時代か、あるいは少し後、『皇形本』よりは以前の山脇和泉家の台本と位置づけたものである。

〔17年1月30日〕

●明治・大正期の名古屋能楽界

飯塚恵理人氏

明治維新は紳士階級のなかには藩の扶持を失い、廃藩となつたものが出た一方、新に能楽界に入つたものが数多く出た。これに機運である。本発表では、倉田孫弘氏の「明治能楽界」(全四冊)、「大正の能楽界」から名古屋の能楽界に関する記事を抽出し、名古屋の能楽師と後援者の変遷について考察した。そして、明治元年には井上馨などが出身の上の能楽師と多く登壇したことを、明治20年前後には「素人」で能を舞う人々が多数いたこと、明治30年前後には国戸喜八郎や松橋重太郎が「名古屋楽会」という組織を築て後援し、これについて力を持つたことについて述べた。

昭和元年、主筆流となつた流儀の会が出来、

（昭和元年2月28日）

(17年3月28日)

お問い合わせ 名古屋市中原区下米野三一九 眞 純一

電話・FAX 〇五二—四五一—九七九七

東海能楽研究会への御入会歓迎します（年会費五、〇〇〇円・学生三、〇〇〇円）

法政大学 催花賞 受賞記念

## 第七回

# 伝統芸能上演会

——伝統芸能を次世代に伝えるために——

日時 平成十八年七月二十二日(土)

場所 名古屋能楽堂 名古屋城正門前

名古屋市中区三の丸二丁目一番一号  
電話 〇五二一三二一〇〇八八

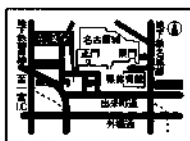
入場 無料・御来場歓迎(先着六三〇名)

通員の時は金通宝テレビでご買いたたきます

主催 東海能楽研究会

後援 名古屋市教育局委員会  
愛知県教育委員会

開場 要諦半  
舞台体験 一時から二時まで  
上演会 二時半始



## 挨拶

私たち東海能楽研究会は名古屋を中心とする東海地域の能楽の特徴を明らかにすること、一般への普及を図ることを目的として平成六年に設立しました。日本の伝統芸能がいつのまにか消えかきつつある昨今、子どもたちが少しでも伝統芸能に触れるために、文部省が学校教育の場にこうした芸能に関わる単元を盛り込むことになりました。次世代に継承されてゆくきっかけが出来たことはまことに喜ばしいことであります。出演各位の御協力を得て昨年に引き続き、名古屋でこそ、今も見させていくことの出来る、芸能の一端を上演させていただきます。

今回は昨年度より始めました「伝統文化こども能楽教室」(伝統文化活性化国民協会・文化庁芸術事業)のおかげこの成果を発表させていただきます。

下花車二福神車のお囃子と共にご声援いただきました。存じます。

伝統芸能に関心のある皆様のご来場をお待ち致しております。特に学校教育関係の皆様には、この機会には是非一度御覧頂き、子どもたちの教育の一助にしたいだければ幸いに存じます。

また本年一月私共の研究会が法政大学の催花賞を受賞させていただきました。これもひとえに皆様方のお蔭と厚くお礼申し上げます。

東海能楽研究会 代表 眞 敏一

舞台体験（一時から二時まで・白足袋お持ちになり楽屋へお出で下さい）

・能面をつけて橋がかり・舞台を歩いていただきます  
・和楽器に触れていただく（笛・小鼓・太鼓・尺八・胡弓・等）などを企画しています

名古屋増設文化財  
下花車（欄干車）

## 山車囃し

|       |       |      |       |       |       |      |
|-------|-------|------|-------|-------|-------|------|
| 安藤美の里 | 犬飼貴之  | 柴田早希 | 立脇佑奈  | 野々垣唯浩 | 古川真実美 | 矢澤正之 |
| 伊藤綾野  | 大竹 藍  | 柴田達也 | 立脇雅也  | 林 祐希  | 古川恵理  | 湯浅可奈 |
| 伊藤佑華  | 大竹隆志  | 柴田豊平 | 水田茂晃  | 藤松宏誠  | 三浦敦美  |      |
| 伊藤有哉  | 加藤 慶  | 柴田真吾 | 水田久美子 | 藤野玲子  | 三浦雅弘  |      |
| 伊藤宏行  | 児玉慈明  | 清水桃子 | 水田千晴  | 藤野樹貴  | 三浦英美  |      |
| 伊藤宏恵  | 児玉佳奈恵 | 清水 陸 | 永田展子  | 古川浩士  | 山田 諭  |      |

伝統文化こも能楽教室（伝統文化活性化国際協会主催）

おけいこ発表 はるがすみ シテ坂口貴仁

|    |      |       |      |
|----|------|-------|------|
| 笛  | 山村友子 | 来田敬史  | 山村知子 |
| 小鼓 | 寛明香里 | 米田篤史  | 長田泰世 |
| 大鼓 | 寛純太朗 | 三苦華子  | 長田朔人 |
|    |      | 飯塚友恵  | 柴田佳音 |
|    |      | 飯塚比呂人 | 松浦拓海 |

## 番組組（二時半始）

後シテ 常明神 長田 曉

## 半能 小鍛冶

ワキ三條小鍛冶正近 高安勘久  
白頭 ワキツレ鑓屋 桐元正樹

|    |      |    |      |
|----|------|----|------|
| 大鼓 | 大倉三忠 | 大鼓 | 鬼頭義命 |
| 小鼓 | 亀井俊一 | 笛  | 大野 誠 |
| 鑓見 | 加藤誠子 | 地謡 | 伊藤英毅 |
|    | 平塚昭子 |    | 長田 郷 |
|    |      |    | 和谷衡市 |

小出甚吉

## 狂言 清水

シテ太郎冠者 佐藤 融 アド主人 佐藤友彦

小出甚吉

## 各曲解説

### 能「小鍛冶」

三案の小鍛冶家道は一条天皇より剣を作つて納めるようにとの命令を受ける。天皇より剣の注文を受けることは名誉なことだが、ともに剣を打つ優れた技量のもの（相違）がいなければとてよい剣はできない。家道が氏神の稲荷に祈ると、明神が重子の姿で現れ、力を貸すので準備をして待つようにという。家道が待っていると明神が狐の本体で現れ、家道とともに剣を作る。草壁の剣にもまさる小狐丸という名剣が作られ、この剣の威徳によって国土の平和は維持された。  
今回は後半の演能で小書白頭ではシテが狐足で歩き廻ります。（飯塚恵理人）

### 狂言「清水」

狂言は室町時代の喜劇的せりふ劇。野中の清水へ水汲みに使われ、いやいや出かけた太郎冠者、汲まずに帰ってきて、鬼に襲われたと嘘をつく。置いてきた手桶を取りに行つた主人を、太郎冠者は鬼に扮して脅すが、  
うっかり「取つて喰もう」と鬼のまねをしたために、その声色から主人に不審を抱かせることになる。真相が発見しやうになつて四苦八苦するおかしさが見どころ。（飯塚恵理人）

### 囃子「高砂」

阿蘇の宮の神主・友成は、都に上る途中播磨国高砂明神に参詣し、相生の松の精の化身である老人夫婦に会う。老人夫婦は友成に播磨国住吉で待つと述べて姿を消す。囃子はその後、友成が住吉に向けて出港する「高砂やこの浦舟に帆を上げて」から、友成の前に住吉明神が現れ千年も万年もこの平和な世と国土を守ろうと誓う終曲まで。（飯塚恵理人）

### 平曲「鐘」

平曲は『軍物語』を原型の仲孝で始まる芸能。盲目の琵琶法師によつて伝承され、江戸時代、名古屋には諸本を築大成した

囃子 高砂 シテ 長田 舞

大鼓 寛 鉦一 太鼓 加藤洋輝  
小鼓 船戸昭弘 笛 大野 誠

和谷衡市  
長田 曉  
伊藤英毅

休憩 十分

平曲 鱧 シテ 今井 勉

尺八 九州鈴慕 岩田律園

地唄舞 くらかみ 立方 西川眞乃女

明・三弦 久米雅子

胡弓 秘曲 蟬の曲 胡弓 澤田孝子

今井 勉

新箏曲 春の海 藤田眞理

尺八 岩田恭彦

終了 四時半頃

### 出演者紹介

今井 勉(平曲・唄・等横井みつ子・三品正保・土居崎正富の各師に師事。平成四年国風音楽会より検校の言を受ける。平成十一年名古屋市芸術奨励賞受賞。国風音楽会会長。  
西川眞乃女(地唄舞。日本舞踊を西川右近家元、池田舞を吉村雄彌夫師に師事。西川流日本舞踊師範。日本の伝統文化の伝播。国際交流活動に積極的である。しのじよ賞受賞者。  
久米雅子(唄・三弦)東京川瀬派井上道子。宮城派雄雄士に師事。NHK邦楽オーディション合格。二〇〇一年愛知芸術文化協会芸術賞受賞。  
澤田孝子(胡弓)幼少の頃より、母澤田はぎの師より箏曲・三弦を学ぶ。二十歳の時より、故郷井みつ子師に三弦・胡弓を師事。国風音楽会所属。評論員。大師範。  
岩田律園(尺八)西園流尺八。明暗対山流(虚無僧尺八)を吹いて六十余年。66名古屋市民芸術祭審査員特別賞受賞。東海三曲演奏家の会代表。  
岩田恭彦(尺八)東京芸大邦楽科在学中。山本邦山、北原望山両氏に師事。また声楽、合唱、作曲を学ぶ。現在無流尺八、94名古屋市民芸術祭受賞。福沢誠知会、グループ「竹の輪」主宰。  
藤田眞理(箏・生田流正派邦楽会師範。正派音楽院卒。NHK邦楽技能者育成会卒。第四回豊前記念全国箏曲コンクール奨励賞。たちばな会主宰。

長田 曉

喜多流シテ方

能楽協会名古屋支部員

和谷衡市

喜多流シテ方

能楽協会名古屋支部員

長田 孝

喜多流シテ方

能楽協会名古屋支部員

高安勝久

高安流シテ方

能楽協会名古屋支部員

横元正樹

高安流シテ方

能楽協会名古屋支部員

大野 誠

藤田流シテ方

能楽協会名古屋支部員

船戸昭弘

幸清流シテ方

能楽協会名古屋支部員

大倉三忠

大倉流シテ方

能楽協会名古屋支部員

寛 第一

大倉流シテ方

能楽協会名古屋支部員

鬼頭義命

観世流シテ方

能楽協会名古屋支部員

加藤洋輝

観世流シテ方

能楽協会名古屋支部員

佐藤友彦

和泉流シテ方

能楽協会名古屋支部員

佐藤 融

和泉流シテ方

能楽協会名古屋支部員

名人萩野操がいた。

「鱧」は『平家物語』巻一「所収。保元・平治の乱で大功のあつた平清盛は、能野種現の御利益で太政大臣にまで昇進した。かつて清盛が萩野参詣のととき大きな鱧が舟に躍り入つたのは、御利益の予兆であつたと語る。(米田眞理)

### 明暗尺八「九州鈴慕」

江戸中期頃から、九州地方の虚無僧が花笠の露・門付けに吹いた曲、博多の虚無僧等一朝軒より京都明暗寺三十五世徳口対山が受け継ぎ、京風に洗練されて伝承されている朗然な曲。(岩田律園)

### 地唄「くらかみ」

十八世紀後期長門の唄方潮(彦)出市十郎又は初世伴屋佐吉作曲という。曲は平易ながら前付けたみに、別れを惜しむ女心のやるせなさをよく表している。  
歌詞 黒髪のかはれたる思ひをば解けて寝た夜の枕こそ  
独り寝る夜はあだ枕 袖はかたしくつまじくと云うて  
愚痴な女子の 心と知らず しんと更けたる 鐘の声  
夕べの夢の今醒めてゆかしなつかしやるせなや積ると知らで續る白雪 (岩田律園)

### 胡弓秘曲「蟬の曲」

名古屋系胡弓本曲。蟬の集り、千鳥の曲と並んで三大秘曲のひとつである。馬場守信作詞。一世吉澤操校作曲。明治二十九年に刊行の「華曲花がたみに」初出。吉澤操校は郷土鹿野の佐屋の明通寺の生まれ。心を深く染め集めてと唄い出し、歌詞の中に鹿野地方の地名が諷みこまれ、手事で、現在、名古屋系のみ伝承されている名曲である。(澤田孝子)

### 新箏曲「春の海」

勸進帳辺の歌になんで、尺八と箏の二重奏曲として、昭和四年宮城雄雄作曲。春の海ののどかな気分をうつつしている。(初演は吉田晴風氏の尺八で演奏されたが、昭和七年、来日中のフランスのヴァイオリニスト、ルネ・シユメヌ女史が尺八の部分演奏して世界的に有名になった。)(岩田律園)

皆様の御支援により、東海能楽研究会は能楽界では最高の権威をもつ法政大学の催花賞を受賞いたしました。左記は法政大学より関係者へ敬通欄に発表されました（贈呈理由）と（受賞者の紹介）です。

## 〔受賞者〕

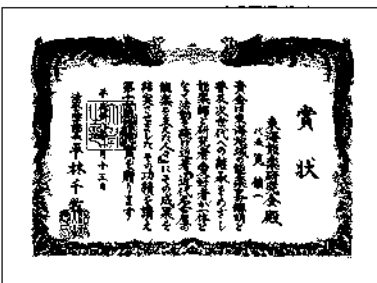
●東海能楽研究会（代表・寛 鉦一）

## 〔贈呈理由〕

名古屋を中心とする東海地域の能楽史の解明と、次世代への継承・普及を目的とし、当地の能楽師と研究者が一体となって組織された同会の活動は、近代名古屋の能楽のデータベース化を基軸とし、詳細な索引を付した『近代名古屋の能楽を支えた人々』全三冊（平成13年刊）に結集した。名古屋ゆかりの（龍の口）の復曲、児童生徒を対象とした「伝統芸能上演会」の開催など、能楽の普及に果たした功績も大きい。

## 〔参考〕受賞者の紹介

●東海能楽研究会（代表・寛 鉦一）



平成6年、大倉流大蔵方で当時能楽協会名古屋副支部長であった寛鉦一氏を中心に、名古屋の能楽の歴史を明らかにすると共に、次世代への継承のための普及活動を行うことを目的として結成された。会員は、能楽師、研究者、大学院生、能楽愛好者等で、現在、約40名。最初の事業は、明治以降の名古屋を中心とする東海地域で催された能楽番組のデータベース化。寛氏収集の約五千枚の番組を入力し、平成13年には、明治元年から昭和63年までの資料をもとに番組集・人名索引・演目索引を作成して『近代名古屋の能楽を支えた人々』全三冊を刊行した。能楽番組の収集・整理とデータベース化は現在も継続中で、平成9年までのデータは福山女学園大学三木邦弘助教授のホームページで公開されている。

この作業を通じて、能楽の愛好者は幼少時から祭囃子などと和楽器に触れることによって育って行くことが多いことを

知り、次世代の愛好者育成のための活動にも取り組み、平成12年より、毎夏、玄人の出演で、平曲・能・狂言・日本舞踊・長唄・三曲などを、小・中学校の教員、児童生徒、愛好者を対象に、無料で「伝統芸能上演会」を開催している。また名古屋ゆかりの能（龍の口）を復曲上演するなど、愛知県芸術文化の振興と向上に貢献し、そうした功績が評価され、平成14年度愛知県芸術文化振興文化賞が贈られた。会員による研究成果の発表の場たる論集も継続して発行するなど、地道ながら着実にその成果を上げていく。

## 東海能楽研究会

### 平成十七年度例会発表

#### 例会活動報告

於名古屋女子大学沙路亭

●昭和初年から戦後にかけての名古屋能楽界 — 飯塚恵理人氏

（平成17年5月29日）

●流転する能面―健忘書状（彦根藩文書）にみる

大名家間の売買―

米田 真理氏

（平成17年7月3日）

●田村のクセとキリスト教の伝来

小島 英幸氏

（平成17年9月18日）

●明和本『源氏物語』関係曲をめぐって

中尾 薫氏

（平成17年11月20日）

●豊橋の能楽関係資料

朝川 知義氏

（平成18年1月29日）

●「井筒」と「杜若」

三吉 佳子氏

（平成18年3月12日）

●名古屋の能楽関係資料

寛 鉦一氏

（平成18年3月12日）

●同狂言本の本文比較（輪読）『高砂』

飯塚恵理人氏

（平成18年3月12日）

お問い合わせ 名古屋市中村区下米野三一九 寛 鉦一 方  
電話・FAX 〇五二一四五一〇九七九  
東海能楽研究会への御入会歓迎します（年会費三、〇〇〇円）

1月7日(日)  
 新年謡会(能楽堂地下)  
 1月27日(土)  
 豊田能楽堂賛助本  
 演  
 1月28日(土)  
 伝統芸能上演会  
 1月20日(土)  
 中村公園スポーツセンター  
 3/10(土)  
 13:30~米野池2階集会室で  
 3/17(土)  
 13:30~米野池音古2時始

平成19年1月 こども能楽教室(中村教室)案内



平成18年1月8日 こども能楽教室(中村教室)  
名古屋能楽堂稽古舞台



平成18年4月15日 こども能楽教室(中村教室)  
刈谷西病院 記念写真

# 熱田神宮能楽殿おわかれ能楽大会（二日目）

平成十八年十月二十六日（木） 十時半始

於 熱田神宮能楽殿

## 番組

志 經 竹  
会 横田多津子  
会

清

吳

衣きり

大鼓達調 羽

衣きり

比足中松戸中足比  
江崎里立三登三  
孝知紀恒  
子子子子子子  
夫一夫勇子子子

小沙松山成武  
成成成成成成  
成成成成成成  
成成成成成成

伝統文化 こども能楽教室

連 花 東 遊  
子 咲 か び

檀子 はるがすみ 坂口 貴仁 寛

寛

明統  
香里朗

山村友子

三長米山米寛寛  
吉田四村田 寛  
華藝馬知殿大  
子世走子史朗大  
松銀崇殿成水金  
浦比 佐友明 殿  
拓呂 佐友明 殿  
海人音恵人健生

仕舞 敦

盛きり

早川

寛

高橋 睦一

附 祝 言

終了午後三時半頃

御来場歓迎

主 催 能楽協会 熱田神宮能楽支部

「伝統文化能楽こども教室・津」にご参加いただき、  
ありがとうございました。

第9回の稽古を以下のように行います。

ぜひご参加ください。

「伝統文化能楽こども教室・津」(第9回)  
日時＝11月26日(日)/午後1時～2時半  
場所＝松風閣(津市本町22-12渡辺ビル) ℡059-228-0438

※時間・場所に余裕がありますので、成人の方にも参加いただけます。お誘いあわせの上、お出かけください。

※11月からの稽古は以下のとおりです。

11月12日(日)、26日(日)、12月10日(日)、17日(日) いずれも午後1時～2時半、松風閣にて

#### 能のお話

橋弁慶(はしべんけい)

比叡山延暦寺の僧・武蔵坊弁慶は、このところ京の五条天神に丑の刻詣をしています。今夜は満参になりますが、五条の橋にあやしい子供が出現するからやめておけという忠告を受けます。何でも、その子供は通りかかった人を小太刀で斬り付けるといのです。しかし弁慶は、逆にその化け物を退治してやろうと、なぎなたを担いで出かけます。案の定橋の上にいた子供と弁慶は戦いますが、なんとその子供に弁慶がまったくかざりません。弁慶は感服し、子供の名を尋ねると、それは源氏の御曹司・牛若でした。二人は主従の契りを結ぶことになりました。



橋弁慶  
長田駿  
園田光樹

伝統文化能楽こども教室 (東海能楽研究会・三重支部)  
長田郷 ℡090-1108-7151



平成18年10月26日 こども能楽教室（中村教室）熱田神宮能楽殿おわかれ能楽大会 記念写真



平成19年1月28日 こども能楽教室（津教室）稽古風景・記念写真

**無 料**

**参・加・者・募・集・中!!**

# 能楽こども教室



みなさんの参加を  
お待ちしております。

## ★と き

会費は無料です。

- ①——10月21日(土)
- ②——10月28日(土)
- ③——11月11日(土)
- ④——11月18日(土)
- ⑤——11月25日(土)
- ⑥——12月2日(土)
- ⑦——12月9日(土)
- ⑧——12月23日(土)

※全て午前10時から

※毎回、謡・大鼓・小鼓などの稽古を行います。

## ★講 師

東海能楽研究会

かげつこういも  
寛 弘 一

東海能楽研究会代表  
豊橋市文化財(歴史館)保存者

## ★内 容

謡や小鼓、大鼓などのお稽古を通して楽しみながら音楽を体験します。

難しいことはいっさいなし！  
来れるときだけに来てくれても構いません。

なかなか体験できない能の世界に触れてみませんか？

大鼓を打ったり、大きな声で謡をうたったりと、とても楽しいお稽古です。  
興味があれば、どうぞ気軽にお申込ください。

※途中からの参加でも大丈夫です。

## ★と ころ

西村能舞台 (上宿馬町)

主 任／東海能楽研究会  
協 賛／(財)豊橋文化財振興財団  
問合せ／(財)豊橋文化財振興財団  
TEL(0532)81-8145

**無 料**

**参・加・者・募・集・中！！**

# 能楽こども教室



みなさんの参加を  
お待ちしております。

## ★と き

合計9回あります。

- ① → 1月13日(土)
- ② → 1月20日(土)
- ③ → 1月27日(土)
- ④ → 2月3日(土)
- ⑤ → 2月10日(土)
- ⑥ → 2月17日(土)
- ⑦ → 3月10日(土)
- ⑧ → 3月17日(土)
- ⑨ → 3月24日(土)

※全て午前10時から

※毎回、謡・大鼓・小鼓などの稽古を行います。

## ★と ころ

西 村 能 舞 台 (上田馬町)

## ★講 師

東 海 能 楽 研 究 会

かけのこういち

寛 弘 一

東海能楽研究会代表  
東海能楽文化財(遺跡)保存会

## ★内 容

謡や小鼓、大鼓などのお稽古を通して  
楽しみながら能楽を体験します。

難しいことはいっさいなし！  
来れるときだけに来てくれても構いません。

なかなか体験できない能の世界に触  
れてみませんか？

大鼓を打ったり、大きな声で謡をう  
たったりと、とても楽しいお稽古です。  
興味があれば、どうぞ気軽にお申込  
ください。

※途中からの参加でも大丈夫です。

上 宿／東海能楽研究会  
後 援／(財)豊橋文化振興財団  
協賛／(財)豊橋文化振興財団  
TEL:0532)81-4145

# 豊橋に於ける 能楽子供教室の古今

平成18年末、東海能楽研究会は豊橋魚町に鎮座まします鎌倉期 安海熊野神社の所蔵する能楽資料・古書を調査し172点の目録を作成した。

先ずは関係各位の御理解と支援・尽力に感謝の意を表します。

古くは酒井忠次の時代、更に弘化年間(1844～1848)から安海熊野神社の祭礼時に能楽が奉納され始め、徳川幕府の老中職である吉田藩主を中心に吉田藩(豊橋市)では能楽が盛んであった。

しかし、幕末に至り能楽は市井においても楽しまれるようになり、廃藩時藩財政の緊迫に連れ、明治7年能面・装束などが町民に払い下げられ(当時の金で約300円)、町民文化として吉田宝生流能楽が更に盛んになって行った。

## ・弘化年間(1844～1848)より祭礼に能楽奉納

— 遠州灘での水揚げ、取引の魚町の独占権とその取引の2%を安海熊野神社に上納

・能面・装束などの調達のために、小久保彦十郎を中心とする魚町の有志との親子講(基金)の設立……資金的に支援する仕組み

・環境の整備 能舞台新築 町の青少年や消防組が地築きに参画

— 明治24年6月 安海熊野神社消防組による絵馬奉納とその心意気 支援する環境の整備と人の協力体制の充実

・能面・装束の有効的活用

— 町民などによる能上演 資産を友好的に活用する仕組み

・能楽 子供教室への拡大

— 石部実蔵、竹内倍吉ゆによる尽力 先輩が後輩を指導・教育する仕組み

人、金、物、情報など資源を活用して「能」を経営する、経営出来る社会システムが確立し、生活の中に能楽文化が存在する心豊かな文化都市として充実して行った。然るに不幸にも戦災で町民の市民の想いが甞るこの能楽堂も消失してしまい、伝

統文化を継承・発展させる社会システムも崩壊してしまつたかの如くの様相で今日に至っている。

能楽資料・古書172点には、自らの手作りの稽古本などがあり、武家社会から町人社会に普及・発展して行く「能楽」への滝崎安之助・佐藤善六・小久保彦十郎・長坂長一郎 他先人達の熱き想い、魚町の人々の活気・エネルギーが伝わってくる。

又一方、現在 能楽子供教室で利用させて頂いている「西村舞台」を戦後しばらくして増築された故 西村祐三氏も落成舞台抜きで次の様な想いを、戦後を支える寺部一威、織田哲也、富田正代司等の前で、開陳されている。

「……思えば、終戦直後の見わたす限り瓦礫の焦土から立ち上がり、多忙な毎日の明け暮れの中で、僅かながらも潤いと想いを求めてまいりましたこの道に、探求すれば

探求するほどにその奥深さに魅せられ、一念奮起した次第です。流友の皆様と共に、心の荒むばかりの世風の中で、明日を背負う若い人々や、更に学生の方々まで、心の糧として日本の伝統古典芸能に触れる機会に少しでも役立って頂ければ望外の幸と念じておる次第です……。」

温故知新、人間社会は何も変わっていない。今も昔も同じで、親と子、大人と子供とのかかわりは基盤とするものである先輩が後輩を教え、学ぶ心をそれぞれが持ち、周囲が温かく支援して行く仕組みね経営システム、社会システムの再確認、再構築と拡充が重要ではないか。その豊かな心、活力の中に人を中心とする明日への町・地域の発展があると信ずる。

これは豊橋に於ける能楽子供教室の今日的課題でもある。この課題を解決しつつ、子供達が能楽に触れる事で、日本独自の物の見方や理解が広がり、豊橋が心豊かな文化的な町、誇れる心の故郷になればと期待してやまない。

記…朝川 知勇



能楽こども教室（豊橋教室）稽古風景

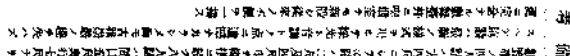
《資料編》 第二部 名古屋の能楽の歩み



我國所有ノ歌舞音樂ニシテ其曲譜小雅ニ失ズ其歌舞  
申俗ニ流シテ其歷史ハ遙遠ニ其詞句ハ典雅清麗ニ其組  
織ハ高前雄大實ニ帝國固有ノ樂藝ナリ諒解シ得ヘキニ  
ハ特ニ能業アルモノミ然ルニ斯ル貴重ニ鑄セシタル危機  
新日事更新ノ變ニ際シ將ニ廢絶ニ歸セントスルノ危機  
ニ顯シタリ於此旨志ニ力ヲ盡シテ專ラ維持發達ニ努メタ  
ル結果世人亦斯樂ニ心ヲ寄セ日ヲ追フテ稍快復チ見ル  
ニ至リ聖代ノ發展ト共ニ益々昇盛ニ趨キ帝國ノ樂劇ト  
シテ世界ニ誇ルニ至レリ續ク之レヲ當市ニ見ルニ憐カ  
シ相造ナル一ノ能業俱樂部ヲ以テ斯道發展ノ機關トシ  
漸ク其唱ヲ響シ米リタルモ其ノ起業物タルヲ組織腐朽  
實ニ見ルニ忍ビズ將ニ大修繕ヲ加フルニ非サレバ到底  
國樂ノ美ヲ發揮サル能ハズ依テ大ニ吾人ノ之ヲ憂ヒ計開  
法人名古屋能業會ナル團體ヲ組織シ基本財産ヲ募リ舞  
台及ヒ見所ノ改築ヲ斷行シ春秋ノ好季ニ大會ヲ開キ以  
テ斯道ノ興隆ヲ圖ラントス伏シテ希フバ大方ノ諸君吾  
人ノ微力ヲ傾ケ斯道ニ盡瘁スルノ返意ヲ諒トシ當テ此  
學ヲ展覽シ投資アラシメコトヲ

舉ヲ翼賛シ投資アラントキ

|    |      |     |
|----|------|-----|
| 豫算 | 建築費約 | 八萬圓 |
|    | 維持基金 | 貳萬圓 |



|      |      |       |         |        |        |        |      |    |   |       |       |       |     |       |      |      |      |      |      |
|------|------|-------|---------|--------|--------|--------|------|----|---|-------|-------|-------|-----|-------|------|------|------|------|------|
| 國戶守森 | 富田重助 | 岡谷清治郎 | 渡邊澄彦良衛門 | 岡田良忠衛門 | 伊田良忠之丞 | 伊藤承左衛門 | 岩津哲助 | 寶珠 | 助 | 鬼頭爲太郎 | 野崎光之丞 | 須野崎重監 | 角隅宣 | 井上順次郎 | 伊勢門永 | 土屋重永 | 野村二郎 | 淺井有郎 | 永谷鏡造 |
|------|------|-------|---------|--------|--------|--------|------|----|---|-------|-------|-------|-----|-------|------|------|------|------|------|

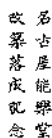
- 144 -

會員芳名

[illegible][illegible]

鑄名員会藥能屋古名現在4月4年昭和

[illegible]

[illegible][illegible]

大能藥堂

金力民 八五  
野村 直也

東三  
上  
贈  
名  
助

田柄豊一氏 金沢市三

3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11

山田 三郎

其狀如

武田三火

網  
作  
主  
書

李誠居士集  
金澤林太郎

四支書三  
一增又六部

山井信成

九上 第六版

四九 澤水 益 金 占 卦 太 師

古今風能樂寶

昭和6年4月26日 舞台披記念能組



昭和9年3月11日 青木社中 濤名会 記念写真



昭和9年9月23日 平野舞台披（平野清 大槻十三門下）記念写真

昭和十年五月

二十四日

二十五日

二十六日

名古屋市東區布池町

於 能 樂 堂

日加壽

# 能組

主催

後援

田鍋惣太郎  
田鍋惣一郎

霞會

## 御挨拶

今般社中霞會の二百五十回を機とし私共心祝ひの爲め茲に清爽の好季節を撰び、全國にも比類稀なる日數能を催させていたゞきます。

幸ひ各宗家始めの御快諾を得ましたことは、一門の光榮、感銘の至りに存じます。

能の本格的の面白さを江湖に弘めたく微衷にて、左記の通り連日の番組の取り合せには最も苦心いたしました。能・狂言いづれも斯の道の精粹を集め、大曲秘曲揃ひでございます。

何卒多大の御高援と御期待を賜はり、當日は御誘ひ合され賑々しく御來觀の程、幾重にも御願ひ申上はま。

昭和十年陽春

主催

敬白

昭和10年5月24・25・26日 日加壽能組 番組

五月二十四日(金曜)午後四時終了

青木恒治 藤田豊二郎  
守屋壽石

永田虎之助  
鬼頭爲太郎  
田鍋惣太郎  
藤田豊二郎

戸次又一  
福井初太郎

金森準三

野村又三郎  
井上新一郎  
井上松次郎  
井上廣三郎

内藤 鋳造

桐谷正治

安福春雄 一噌蹊二  
田鍋惣一郎

野村又三郎  
佐藤卯三郎

五月二十五日(土曜) 午後二時始  
終了七時半頃

橋岡久太郎  
青木恒治  
鈴木直恒

武田宗治郎

杉浦義朗 日高烈一郎

|       |        |       |
|-------|--------|-------|
| 大西 信久 | 西尾 孫太郎 | 山田 一郎 |
| 山本 博之 | 守屋 壽石  | 金森 準三 |

西村弘敬  
谷口喜三郎  
田鍋惣太郎  
杉市太郎

歌村彦四郎  
可村正造

島要之助  
吉田秀夫  
藤井五郎  
野崎光之丞  
藤田豊二郎

佐藤秀雄

三日目

五月二十六日(日曜)午後一時始  
總了六時半頃

能組

囃子

郡

鄣

本田秀男

永田虎之助 鬼頭八郎  
青木恒治 杉市太郎

金剛右京

家

豐島妻之助

西尾孫太郎 杉市太郎  
福井初太郎 茂山七五三

間

鬼ヶ宿

茂山千五郎 武藤達三

一調

放下僧

金剛 巖 田鍋惣一郎

仕舞

巻絹

豊島 一 伴新三郎

殺生石

一調

福岡周啓 谷口喜三郎

三井寺

囃子

小袖會我

山田仁三郎 戸次又一 鈴木直恒  
片野東四郎 山田耕石

金剛 巖

道成寺

赤坂

西村弘敬 谷口喜代三 前川光隆  
田鍋惣太郎 藤田豊二郎

附祝言

以上

茂山真一 田中保清

初日

後見地鑑割

翁

林 高橋 弘 孝 遠

續

競

寅生 英雄 弘

麒麟

野

大橋新三郎 加藤泰次郎 岩槻信治  
桐谷正治 長尾庸建 森島貞三郎

安宅

松本 雄 長 内藤雄造

近藤廣十 津口好忠 桐谷正治  
大野慶雄 長尾庸建 鐵田信衛

二日目

螢

老

水藤光三 石梅有一 大橋十三郎  
大橋岩三郎 中島 馨 大西信久

卒都婆小町

片山博通 橋岡久太郎 杉道義助

龍

虎

宮藤安次郎 飯田新三郎 林 忍藏  
村瀬慶文 飯田宗治郎 柴田初太郎

正

尊

親世左近 杉浦義郎

高橋賢次 佐藤比古志 林 忍藏  
飯田宗治郎 柴田初太郎 柴田初太郎

部  
軍

定案

伴 新三郎  
小倉 松次郎

錦成  
國編  
賢善  
一彦

小澤利一郎  
高崎利三郎

北 廣  
川 田  
邊 晉  
一

片野東四郎  
登場一

小補血我

我

大 牌  
猴 田  
一 香  
二 一

機 一  
今井 三郎

道成寺

金剛 野東四郎

廣田 一  
高橋 啓次

山田仁三郎  
豊島一

小倉松次郎

北  
州  
燕

北澤耕雲

以上


 費

| 一<br>日<br>券           |                       | 三<br>日<br>券           |                       |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 席別                    | 特<br>甲                | 特<br>甲                | 乙                     |
| 一<br>等<br>席<br>六<br>人 | 六<br>圓<br>五<br>角      | 拾<br>六<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>四<br>圓<br>五<br>角 |
| 二<br>等<br>席<br>六<br>人 | 拾<br>五<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>四<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>四<br>圓<br>五<br>角 |
| 三<br>等<br>席<br>六<br>人 | 拾<br>四<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>三<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>三<br>圓<br>五<br>角 |
| 四<br>等<br>席<br>六<br>人 | 拾<br>三<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>二<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>二<br>圓<br>五<br>角 |
| 五<br>等<br>席<br>六<br>人 | 拾<br>二<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>一<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>一<br>圓<br>五<br>角 |
| 六<br>等<br>席<br>六<br>人 | 拾<br>一<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>一<br>圓<br>五<br>角 | 拾<br>一<br>圓<br>五<br>角 |

△御席割については午卯平三日開進し御申込の向を御優先と致しますから精々御訪合の上御有利な三日象の御申込を願ひます。

△各席敷に限りあり目増に混み食ふことと存じますから、御申込は即割御電話又はおハカキにて承りとうございます。

△催能事務所 名古屋市中區榮町五丁目 田 鍋 方 電話③〇五九一  
△札 取 扱 全 廣小路本町西 中惣南店 電本③〇五九一

申  
込  
所

## 市

|           |            |            |            |            |         |          |           |           |             |              |            |            |           |          |           |             |           |            |           |           |            |            |            |           |           |           |          |             |             |             |       |
|-----------|------------|------------|------------|------------|---------|----------|-----------|-----------|-------------|--------------|------------|------------|-----------|----------|-----------|-------------|-----------|------------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|----------|-------------|-------------|-------------|-------|
| 全<br>東馬町三 | 全<br>北清水町七 | 全<br>東大柴町四 | 全<br>寶町三ノ四 | 全<br>千種町池田 | 全<br>側田 | 全<br>布池町 | 全<br>志磨町三 | 全<br>武平町四 | 全<br>石神堂町五八 | 全<br>今杉村八一四七 | 全<br>代田町堀崎 | 全<br>新出津町一 | 全<br>帆原町三 | 全<br>堀屋町 | 全<br>七岡町四 | 全<br>千波町仲節一 | 全<br>西區町一 | 全<br>堅三瀬町一 | 全<br>傳馬町四 | 全<br>大境町二 | 全<br>上長野町四 | 全<br>小田原町二 | 全<br>御幸本町二 | 全<br>八重垣町 | 全<br>伊賀町一 | 全<br>比奈所四 | 全<br>福宜町 | 全<br>小井町二ノ一 | 全<br>中津屋町前町 | 全<br>東廣町三ノ五 |       |
| 飯田 賴惠     | 小田井愛三郎     | 片野東三郎      | 河村 丘造      | 春日井太右衛門    | 永田虎之助   | 名古屋能樂堂   | 野村 二郎     | 松本三七郎     | 福井泰太郎       | 近藤泰太郎        | 青木 恒治      | 荒川又四郎      | 淺井 有鄰     | 津造 大親    | 柴田初太郎     | 平野 清        | 伊藤竹次郎     | 東松 泰三      | 金森 華三     | 神戶分左衛門    | 長尾 德太郎     | 長尾 唐造      | 内田源兵衛      | 歌村茂四郎     | 野崎光之丞     | 國井和雄      | 藤田豊二郎    | 島木周次郎       | 森島重三郎       | 井上重兵衛       | 井上新三郎 |

## 市外

|         |          |        |          |        |         |         |       |          |       |        |       |      |       |          |       |
|---------|----------|--------|----------|--------|---------|---------|-------|----------|-------|--------|-------|------|-------|----------|-------|
| 中國八百原町二 | 全吉澤町三    | 全白田町二九 | 全小園小路本町西 | 全南武平一  | 全新船治屋町三 | 全前踏町北石坂 | 全御大津町 | 全新堀町電氣節病 | 全荏葉町一 | 全大井町一六 | 全門前町  | 全榮町二 | 全佐古町三 | 全南郷熱口中郡町 | 全西宮渡町 |
| 中區北橋村爲町 | 中區常平橋村六輪 | 丹波郡有賀岡 | 岡崎市山田町   | 岐阜市札木町 | 岐阜縣勝野町  | 全       | 全     | 全        | 全     | 全      | 全     | 全    | 全     | 全        | 全     |
| 林 恩藏    | 西村 弘毅    | 寄田 龍章  | 中惣 兩店    | 山田 仁三郎 | 山田 直平   | 松良 正一   | 松坂 屋  | ブレーカイド   | 永束 書店 | 齊藤 安次郎 | 齋 中堂  | 靜觀 堂 | 鈴木 直恒 | 安岡 哲郎    | 阿部 悅治 |
| 小澤利一郎   | 鬼頭爲太郎    | 村瀬小右衛門 | 志貴 一三    | 長坂理一郎  | 岡田好司郎   | 山田耕平    | 杉山保太郎 | 飯尾露二     | 早川 輝吉 | 玉井 梧一  | 守屋 貞吉 |      |       |          |       |

并ニ在名出演者宅

清見、地謡劇

八 島

八島 山崎 三  
八島 山崎 三  
八島 山崎 三  
八島 山崎 三  
八島 山崎 三

鷗鷺小町

鷗鷺小町 山崎 三  
鷗鷺小町 山崎 三  
鷗鷺小町 山崎 三  
鷗鷺小町 山崎 三  
鷗鷺小町 山崎 三

大急流音

大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三

道成音

道成音 山崎 三  
道成音 山崎 三  
道成音 山崎 三  
道成音 山崎 三  
道成音 山崎 三

上

大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三

披露能樂

披露能樂 山崎 三  
披露能樂 山崎 三  
披露能樂 山崎 三  
披露能樂 山崎 三  
披露能樂 山崎 三

開設會

開設會 山崎 三  
開設會 山崎 三  
開設會 山崎 三  
開設會 山崎 三  
開設會 山崎 三

道成音

道成音 山崎 三  
道成音 山崎 三  
道成音 山崎 三  
道成音 山崎 三  
道成音 山崎 三

墨

墨 山崎 三  
墨 山崎 三  
墨 山崎 三  
墨 山崎 三  
墨 山崎 三

大急流音

大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三  
大急流音 山崎 三

瑪

瑪 山崎 三  
瑪 山崎 三  
瑪 山崎 三  
瑪 山崎 三  
瑪 山崎 三

鷗鷺小町

鷗鷺小町 山崎 三  
鷗鷺小町 山崎 三  
鷗鷺小町 山崎 三  
鷗鷺小町 山崎 三  
鷗鷺小町 山崎 三

八 島

八島 山崎 三  
八島 山崎 三  
八島 山崎 三  
八島 山崎 三  
八島 山崎 三

組

先考常照院

能樂

昭和十二年四月二十日

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂

能樂



昭和12年12月19日 ABC家族会 舞台写真

拜啓 今般改選ノ結果本會役員左記ノ通りニ候間此段御通  
知申上候 敬具

昭和十三年二月八日

會 員 各 位  
社 團 法 人 名 古 屋 能 樂 會

名 譽 會 長 伊藤次郎左衛門  
會 長 岡谷敬助  
理 事 岡谷敬助  
專 務 理事 阿田良右衛門  
同 司 白木周次郎  
同 田鍋總助  
富田重助  
渡邊喜兵衛  
淺野甚七  
野崎光之丞  
伊藤竹次郎  
監 事 關 戸 有 彦  
寄 田 龍 彦  
神 戶 分 左 衛 門  
福 井 初 太 郎  
北 澤 忠 男

評 議 員 (イロヘ順)  
伊 藤 佐 平  
井 上 重 兵 衛  
服 部 準 三  
林 愿 藏  
西 尾 孫 太 郎  
戸 次 又 一  
豐 田 利 三 郎  
加 藤 泰 次 郎  
片 野 東 四 郎  
吉 田 敬 二 郎  
春日井丈右衛門  
祖 父 江 重 兵 衛  
内 藤 鐘 造  
長 戸 儲  
長 尾 庸 造  
村 瀬 陸 藏  
内 田 源 兵 衛  
野 村 二 郎

山 田 直 平  
福 井 富 雄  
小 澤 利 一 郎  
淺 井 德 治 郎  
木 造 大 觀  
柴 田 初 太 郎  
平 野 清  
鈴 木 埴 一 郎  
鶴 讓 員  
福 井 初 太 郎  
野 崎 光 之 丞  
田 鍋 惣 助  
西 村 弘 敬  
井 上 重 兵 衛  
永 田 虎 之 助  
藤 田 豊 二 郎  
以 上

昭和十二年  
十二月末號

社團法人名古屋鐵樂會

[illegible]





昭和14年 5月 鈴木直恒師（藤田流笛方 はじめ平岩流）引退記念能 記念写真



昭和14年10月22日 田鍋守正三年祭 道成寺 観世武雄 舞台写真

名古屋屋樂師協會規約及名簿

## 名古屋樂師協會規約

- [illegible]

會 員 名 簿

(附記十五卷) 具表在)

之 部

[illegible]

昭和15年1月現在 名古屋楽師協会規約及び名簿



昭和15年 皇紀二千六百年記念 記念写真



昭和17年 5月17日 霞会300回記念会 記念写真



昭和18年 5 月 9 日 藤門会100回記念会 記念写真



昭和24年11月11日 能楽協会名古屋支部設立 記念写真

# 東 海 宝 生

発行所 東海宝生流同好会  
名古屋市中区新栄町九ノ一  
編集 高橋 鑑三郎  
発行人 三和印刷株式会社  
印刷所 三和印刷株式会社  
非 売 品



**鉢木** 宝生流では、鉢木そのものの曲の位を尊重し、シテのいでたちをウンとりつばにすることになっていて、古腹巻などという本文には拘泥しない。ことに小書黒頭の格式に応じて、腰の物や波被(はつび)などみごとにこしらえてあった。(名古屋鑑賞能)

祝  
發  
刊  
寶  
生  
九  
郎

發 刊 の

ごあいさつ

A 「春ならばふーウくも長閑けーエき  
」

B 「失礼！宝生でいらつしやいますナ。

私もちよつと……」

A 「そうですか。ーじや御一緒に……」  
B 「有難い。では、失礼して……エヘン  
かアーさ早のー。三イー保ーオの浦  
わを」

春雨のしと降る旅の宿や、櫻花吹き  
競う野路の筈で、聴き慣れた節廻しを  
耳にすれば、知己と不知己は別の世界  
等しく唱和、よろこびをとにもするは  
「うたい」の徳。

こうしたよろこびを平素の組織へと  
東海宝生流同好会が生まれ、そのうぶ  
声がこの小誌となつたのです。

宗家はじめ各地の諸先生の御指導な  
らびに東海在仕の流友各位の御支持に  
よつて、すこやかにまた、おおらかに  
育ちたいとお願いいたします。敢えて御  
愛読と御鞭撻とをお願いいたします。



芸術院会員

野口兼資先生を圍む

座 談 会

三月十八日宝生鑑賞館（松阪屋）演了後、矢場町山塚旅館  
広間は、野口先生の芸術院入りを祝う名古屋館樂界の代表者  
で満ちた。温容の老師の左に英雄師、右に疎久師、とり  
まぐ面々は宝生はもとより他流、三役の職分素人を網羅。  
高橋幹事の司会。田鍋惣太郎師の挨拶として、野口先生と  
名古屋との古い因縁、明治三十九年創立の名古屋宝生流研究  
会が、誕生以来先生にお稽古願つて来たことなどが述べられ  
た。ついで戸田、夏目兩幹事より記念品の贈呈が行われ、  
座談会に移った。

野口 近頃新聞記者などがよく来  
ましてネ。カメラを向けて、茶  
碗を持つてくれとか笑つてくれ  
とか、いろんな注文をしてネ！  
（東海宝生の記事にとお断りを  
すると、こう仰言つて芸術院  
入り当時のお話になる）  
高橋 御陪食のお話を！  
野口 御陪食は午餐でした。席は  
陛下の右に三笠の宮、次に私。  
新会員の方々がそれ／＼苦談と  
か絵の苦心談などをお話にな

りました。私は「配置」という  
こと——舞台での位置の取り方  
ですネ。丁度陛下の後に御立が  
ありましたので、それで御説明  
申上げました。エ、お料理は  
洋食でした。  
高橋 お菓子は？  
野口 特に大したものではござい  
ません。名古屋のお菓子のほう  
がよほど……（同笑）  
高橋 御紋入りの落雁でも！  
野口 いゝえ、餡物でした。御紋

入りの煙草でしたが、私は頂  
きませんので人に差上げました  
これはたいへんおいしかったそ  
うです。

皇后陛下も、よくおわかりに  
なりますよ。われわれと同じよ  
うなおことばでしてネ  
疎久 女官方もおやりになつてみ  
えますから！  
高橋 皇后陛下もなさるというた  
とお流儀は？

英雄 松平家の系統ですかネ！  
まあ、宮中流とでも！  
（一同笑）

野口 英照皇太后は好きでした  
ので、芝山内の紅葉館で折々天  
覧能がありました。見所が、大  
礼服なので、たいへんきれいで  
した。

田鍋 宮中でのお能は？  
野口 大正天皇の御即位の祝賀能  
に連獅子を勤めました。

（こゝで外人の細能の話）  
野口 外人は宝生会へもよく参り  
ますが、唯子方の掛声が……殊に  
大鼓の気がなるッて！  
増田 外人ばかりでなく、学生能

でもそうですね  
飯島 ですから最初はひかえ目に  
かけてみるんですよ。何しろ高  
い調子でかけますから！  
鬼頭 時に、きよりの熊野、殊に  
車の型など、何ともハヤ感激致  
しました。若々しくて！

大野欣 キリの所など、本当にう  
れしそうでお見事でした。一調  
になつてから、前の娘さんだ、  
あれがまつきの熊野のおシテさ  
んだと言つてもウソだといつて  
信用しませんでしたワ

（一同感の語）

野口 そりやあ芸には艶といゝま  
すか色気がなくつちや！近頃、  
お素人の方が仲やうがつた批評  
をしますよ。舟に乗る時に上を  
見て乗つたと言いましたか成程  
いゝ所を見ていますね。シモツ  
て乗らなければネ。

大西 今日の一調も全く面白かつ  
たですね。

高橋 （疎久師に）あなたはセイ  
ウして論つてみえたのですか。  
疎久 とんでもない。汗をかいて  
諦めましたよ。この間もたしか

羽衣の謡でしたがね。喜多実さんが聞いていたんですが、やはり精一杯謡ったのですが父の声だけが聞こえたと言うんです。飯島 やはり力というのか、氣迫ですね。川崎先生でも別に熊野だといって変えて打たれないのですが熊野になっていますネ。

野口 無心でやつて、そこに現れるものが熊野になつていなければなりませんネ。

林 今でも歌舞伎を御覧になりませんか。

野口 今あまり見ません。映画の方が面白いですよ。近頃では「佐々木小次郎」がよかったです。まだ見てない方は御覧なさい。いゝですよ。「悲しみの歌」も上原と三枝子が大変よくやりましたよ。

祿久 父は私の見てないのまで見えていますからね。何しろ帽子をかぶれば私より若く見える……

野口 エ、洋画もよく見ますよ。「家路」というのですが、大が非常によく仕込んであります。祿久 映画会社から何か貰つてや

しませんか。(笑) (家路は四月下旬封切予定のもの)

野口 それから「虹をつかむ男」が天然色できれいですし主役も華者なものですよ。

(大要詳しい。先生は松竹や室塚や少女歌劇などまで御覧になる由)

鬼頭 名古屋でも度々ありますが、きょうのような盛況は初めてですよ。ねえ皆さん。

祿久 この十一日に京都でも祝賀能がありました、金剛の舞台も満員でした。

野口 エ、求塚を勧めました。親世にはない能です。仲々いゝ能ですよ。

(と求塚の解説をされる。こゝで離子の話になつて又一調の話がはずむ。)

野口 三井寺であの「所からさへ」の所ですね、所からさへチヨンと来た時はいゝですね。こうした会場の所がむづかしいですね。きょうの一調のように半間が半間でビタビタとはまつてくると氣持がいゝですね。

福井 先生と名古屋の関係の古い所をお話願えませんか。

野口 そうですね。長谷川さんや田錦さんの肝煎りで研究会を始めたのですが、明治三十九年でした。

福井 その以前に能でおいでになつた事があるでしょうね。

野口 エ、那古野神社の舞台披露の時ですから明治三十二年ですか。

藤田 私の先々代退善の時にもしかお出になりました。

(田錦師永田師など昔の話がにぎやかに始まる。)

野口 (英雄師を見て) もう少し細くしてやりたいですね。きょう相撲が終つたから、駅で間違えられますよ。

田錦 祿久さんも大分、何貫です。

祿久 十九貫です。

田錦 若先生は?

野口 二十二貫だそうですね。唐英雄 装束など着しいですね。唐絨を腹の所へたぐし込みますから……(更に假設舞台の幕にかゝる前の階段の板の薄さに苦労し

たなどと笑われる。配膳を機に話が分散して行く。先生はニコニコと話を聞かれながら箸をとられる。茶宵一刻盡きの話題を惜しみながら八時、大野慶雄氏の発声で先生の万歳を三喝し散会した。)

**宝生流研究会 会員募集**

創立明治三十九年以来、地方には類のない權威のある謡曲研究機関

○年六回 各回 二日間

○一回に六番平均 東京より 宗家・野口祿久師、大阪より 辰巳孝師

交代出張教授

○全会員平等に稽古を割当てられ親しく口授

○会 費 一年 八百円

○最近のお稽古

辰巳先生 五月五日

威陽宮・放下僧・羽衣・唐船・土蜘蛛

六日 草薙・熊坂・隅田川・張良

## 田鍋惣太郎

さを堅持している点、まことにみごとであります。

幸に、東海宝生流同好金の組織を活用して、従来よりも一層積極的に各種の催しをなさるることによつて、各位の差に關する識能力に

目覚ましい進歩がみられ、宗家を  
中心とする宝生流の社会的な勢力  
にも機能的な躍進を示すように、  
各位の御発憤と御協力を切望いた  
します。

こうしたよい流風が、この東海の地に正しく發展することによつて、各位の上に、趣味以上の何ものかが備わりますことを信じ、微力ながら、できる限りお力添えをしたいと存じて居ります。

日 鏡太郎商店  
今般田鍋先生は大久手電停東  
一丁のよいところに御転居  
千種区大久手町四ノ一〇  
電千<sup>(73)</sup>〇三三六番

四、一五 英雄師放送 忠度

- |      |            |            |
|------|------------|------------|
| 二一   | 辰巳先生仕舞稽古   | 常盤女學院      |
| 二二   | 五雲會素誦會     | 夏目宅        |
| 二九   | 金沢 佐野退善郎   | 岐阜簡易保險局素誦會 |
| 五、三  | 辰巳先生仕舞稽古   | 霞友會 藤登美會   |
| 〃    | 連合誦會       | 起町後藤宅      |
| 〃    | 鹿門會囃子會     | 東海堂生流同好會   |
| 五    | 春季大會       | 常盤女學院      |
| 六    | 名古屋堂生流研究會  | 辰巳先生稽古     |
| 〃    | 常盤女學院      |            |
| 一三   | 假金囃子會      | 大塚舞台       |
| 〃    | 定式能第三回     | 松阪屋        |
| 一九   | 五雲會誦會常盤女學院 | 能樂協會名古屋支部  |
| 二〇   | 春季催能后四     | 松阪屋        |
| 二七   | 八雲會素誦會加藤彦宅 | 幸友會囃子會     |
| 六、一七 | 東北會素誦會加藤平宅 | 定式能第四回     |
|      | 宗家隅田川、辰巳熊坂 | 松阪屋        |

流生宝西関  
ルコン曲謡

六條河原の院の旧跡といわれる根柢郎において、全関西宝生流総出の謡曲コンクール第三回が、去る三月二十五日盛大に催された。中央板の間を舞台に面々お得意の一番（但し三十分以内）を競うのである。

臨正面向きの別席には審査委員  
長たる宗家、兩側に辰巳先生御兄  
弟、巖然とひかえ、一分のミスも  
見のがすことなくマークしてみえ  
る。団体、個人それぞれ第三位ま  
で入賞、正面に飾られた優勝楯は  
十組のうち最高点獲得の大坂東光  
金の手におちた。

岐阜鉄道局にみえた笠谷孝氏は、この日大阪鉄道宝生会で御活躍、みごと団体第二位に入賞。

番外「綾鼓」(宗家)の後、藝  
宣成績発表、授賞、講評、四海波  
全員唱和解散。

來年こそは、と期待を胸に帰る人々の肩に池汀の春雨が昔もたく降りかゝつて、京都の午後四時は静かだつた。

名古屋  
宝生流屋

研究會員名簿

(到着順)

|            |        |             |        |
|------------|--------|-------------|--------|
| 岐阜県高富町佐賀北畑 | 堀内 國夫  | 昭和区川名本町二    | 鬼頭 嘉男  |
| 市内北区大杉町四   | 小田井 錦次 | 市中区矢場町一ノ七四  | 林 啓次郎  |
| 瑞穂区洲雲町四    | 鈴木 得二  | 市中区東橋町二     | 下里 誠次  |
| 千種区新池町二    | 内藤 宗一  | 瑞穂区豆田町四     | 安藤 三郎  |
| 岐阜県美都戸村    | 仲井 重次  | 岐阜市神室町四     | 加藤 博之  |
| 県下西春日井郡新川町 | 後藤 重次郎 | 市外西枇杷島町二ツ入  | 安井 愛吉  |
| 市内北区東杉町二   | 三輪 恒雄  | 市内千種区元古井町七  | 山田 徳之助 |
| 北區東大杉町二    | 加藤 平三郎 | 昭和区川原通八     | 永田 仙三郎 |
| 津市羽所町津駅公舎  | 岩崎 一雄  | 昭和区池端町二     | 大重 慶雄  |
| 岐阜県不破郡赤坂町  | 照山 英雄  | 東區添地町三      | 片岡 成二  |
| 市内南区明治町一   | 井上 政則  | 鈴鹿市神戶新町     | 内藤 泰二  |
| 東區新出来町五    | 井上 是   | 四日市市々朝日町朝日寮 | 早川 春治  |
| 中區南外堀城南町   | 溝口 好忠  | 市内西區堀詰町二    | 中西 広四  |
| 千種区田代町金子谷  | 星野 文二  | 瑞穂区瑞穂通二     | 加藤 彦兵衛 |
| 昭和区石坂町七九   | 戸田 秀雄  | 春日井市八事町     | 石川 意之  |
| 中區三輪町十二    | 錦見 幹子  | 瑞穂区瑞穂通二     | 浜村 義雄  |
| 中區南辰巳町十三   | 加藤 兼吉  | 市内中区松重町二五   | 竹腰 仙洞  |
| 岐阜県安八郡神戸町  | 新井 貫一  | 津市河津浦町      | 田中 俊夫  |
| 春日井市柏井町三   | 近藤 源十  | 市内西區堀詰町二    | 淺野 益太郎 |
| 市内北区田端町七二〇 | 鈴木 右門  | 西區西第井町四     | 加藤 半助  |
| 瑞穂区松月町六    | 池田 正治  | 昭和区若柳町二     | 高橋 徳三郎 |

四月八日観桜会番組あれこれ

降りつゞいた雨が上つて、晴れやかな日曜日、立ち寄る木蔭はそれぞれ異つても、花の下に朗吟する境

|     |        |       |          |
|-----|--------|-------|----------|
| 松韻会 | 岐阜市京町  | 母子寮   | 鞍馬       |
| 素 詠 | 吉口 示口  | 越智 新造 | 天狗 渡部峻二郎 |
| 嵐 山 | 加藤 博之  | 八島 井上 | 胡蝶 伊藤敬太郎 |
| 田 村 | 新井 貫一  | 吉口 示吉 | 櫻川 戸田 鶴子 |
| 熊 野 | 藤本彌次郎  | 木村 幸夫 | 小歌 夏目 幸尚 |
| 西行櫻 | 照山 英雄  | 河田美佐子 | 胡蝶 仕 舞   |
| 櫻 川 | 後藤 泰子  | 菊井すみ子 | 胡蝶 仕 舞   |
| 蟬 丸 | 井上和子   | 大塚 敬子 | 胡蝶 仕 舞   |
| 当 麻 | 伊藤 昇   | 関 夫 伴 | 胡蝶 仕 舞   |
| 霞友会 | 八事 戸田宅 | 東     | 胡蝶 仕 舞   |
| 素 詠 | 中島一夫   | 伊藤敬太郎 | 胡蝶 仕 舞   |
| 嵐 山 | 遠水 恒宏  | 戸田 和子 | 胡蝶 仕 舞   |
| 殺生石 | 早瀬 敏子  | 戸田 和子 | 胡蝶 仕 舞   |
| 羽 衣 | 杉村 銀次  | 高田 真六 | 胡蝶 仕 舞   |
| 蟬 丸 | 夏目 幸尚  | 戸田 朝子 | 胡蝶 仕 舞   |

名匠閑話

「つい先だつて、おもしろい土の大黒様が出てましてネ。よく出来ているんですよ。いくらでもお恵というんで、十円で買つて贈りましたがネ」

それが、その日から、万事都合よく事が運びましてネ……とても福がありますので、うれしくてネ……で、一寸した手土産を持つて其所へまた行つたんですよ。

『あの大黒様は、大愛御利益があつたんで』つてネ……

そして、こんどはかねの御書様を買つて帰りました。

すると、丁度その日に「田村」をすることになつてましてネ……それから「熊野」もあつたんです。偶然でしょうけれど、非常に氣持がよくつてネ

え……この頃は、前より一層元氣でしてネ……

(大野慶雄氏宅にて)



「かうべを……き髄を……喰ふ……」

こは……そもわらはがなせる料かや……」

京都における野口先生の「求塚」

赴生

襦袢脱ぎ羽織片手に春の雨案の上に書は四五冊但し老莊

一言一言の緊迫にゆらめく「撥女」の面は、軽卒な面遣い以上に懐情な効果をあらわし悠揚としていて大胆な型のあいだを充満する。

それは、コンテで描いた名匠の一面にも通ずる。ゆれ動く巾は、線の味わいである。だが、型は、あたかもパツトが飛球の中心点を隔断するあの確かな動きと同様に、針の巾ほどの狂いもない、決定的な、曲線上を滑つて行く。

奉 二

期待される

# 宗家の隅田川

昭和二十六年度の名古屋定式能も、順調に回を重ね、来る五月十三日橋田久太郎師の来演によつて上半期を終ることとなつた。会場が松原屋ホールに移つてからは、グツと観心地もよくつた。とは万人の認める所。欲を言えば、音響と照明に今一段の工夫をして欲しい。

下半期分は、宝生流二回に観世一回。会員の補充のために近く、入会受付も行われるであろうから、まだ入会手続きをされない流友

## 第四回 六月十七日(第三日曜)

囃子 安宅 畑 富次 永田虎之助 金森準三 青木 恒治

宝生 九郎  
隅田川 西村 弘敬 西尾孫太郎 藤田 福井 五郎 六郎兵衛

狂言 呂蓮 河村 丘造 河村 鉦二 佐藤 秀雄

一調歌 占切 宝生 九郎 田鍋惣太郎

熊坂 辰巳 孝 高安 遊男 永田虎之助 野崎 太郎 田鍋惣一郎 小島鉄次郎 井上松次郎

## 第五回 九月十六日(第三日曜)

囃子 松虫 山本 勝一

杉村 竹翠  
隅田川 大槻 十三

景清 小返 西村 弘敬

狂言 鎌腹 歌村彦四郎

独吟 經政 松良正一  
仕舞 熊坂 大槻 秀夫

海士 山本 順之 山本 博之 赤原三段之舞 高安 滋男

の各位には、この際申込まれるようにお勧めする。取次は本誌発行所を始め関係能樂師方です。

いよ、円熟の境に入られた宗家の隅田川に接し、必ずや各位の魂にふれるものがある。

なお、来る七月八日には、名古屋金華会の催しで、櫻間弓川師の全曲「角田川」が同じ舞台で演ぜられる予定。

兩流の大家が、それぞれの流儀の模範的な演出を提供されるこの機会に、かつて世阿彌とその息元雅が、子方を出す出さぬで対立したと伝えられる問題その他いろいろと、隅田川について認識を深めたいものである。

## 第六回 十一月十八日(第三日曜)

囃子 八島 辰巳 孝 永田虎之助 藤田 守蔵 青石 六郎兵衛

宝生 英雄  
百萬 高安 遊男 西尾孫太郎 鬼頭 八郎 田鍋惣一郎 小島鉄次郎 佐藤 卯三郎

狂言 盆山 佐藤 秀雄 井上松次郎

仕舞 敦盛 内藤 泰二  
// 卷絹 鈴木 右門  
// 小歌 畑 富次

春日龍神 野口 祿久 西村 弘敬 永田虎之助 鬼頭 喜太郎 河村 丘造 福井 五郎 金森 準三

五月五日子供の日前十時始

東海宝生流同好会

春季大会

參觀並に  
飛入申込歓迎

去る一月二十八日第一回の発表以来、益々お稽古にはげんで進歩顯著な面々は、手ごすねひいて、来る五月五日の大会を待ちかまえている。今回は、名古屋宝生流研究会の大先輩各位の出馬に加うるに、辰巳孝、辰巳清順先生を始め、關西宝生流准職分、馬鎌富四夫、倉本頼子、細野ヒロミ三氏の特別出演を仰ぎ、回を重ねる毎にその発展が見られる。愛知、岐阜三重の各地よりの参集し、技を競うさまは、定めて見ものであるう当日のお昼べんとうは、おそるいでお亭司がいただけの由。

会場 東区 横代官町  
布池町電停東北常盤女学院  
階上ホール 特設舞台

素謡仕舞組

咸陽宮

鬼頭 嘉男  
山 英雄  
新井 買一  
藤加藤之一  
地 藤宗一 外

嵐 山  
経 政  
鞍馬天狗  
井上 男  
渡辺 清彦  
井上 美知子  
戸田 和子  
浜村 義雄  
義雄 清彦

枕 慈童  
井上 美知子  
戸田 和子  
浜村 義雄  
義雄 清彦

草紙洗  
戸田 和子  
浜村 義雄  
義雄 清彦

放下僧

安藤 三郎  
尾野 文二  
地 瀧口好忠 外

鶴 龜  
井上 はる  
棚橋 節子  
井上 保子  
岩崎 一雄  
戸田 秀雄  
夏目 幸尚

鳥 追  
井上 保子  
岩崎 一雄  
戸田 秀雄  
夏目 幸尚

雲雀山  
岩崎 一雄  
戸田 秀雄  
夏目 幸尚

羽衣

戸田 朝子  
大野 欣  
地 倉本 雅子  
細野ヒロミ 外

網之段  
足立 知子  
高橋 鍾子  
岩崎 節子  
林啓 次郎

富士太鼓  
岩崎 節子  
林啓 次郎

鵜之段

加藤彦兵衛  
堀内 国夫  
星野 文子  
井上 和子  
高田 昌子  
大丸 典子

大江 山  
星野 文子  
井上 和子  
高田 昌子  
大丸 典子

笠之段  
高田 昌子  
大丸 典子

唐船

日 後藤重治郎  
山田 徳之助  
加藤 益太郎  
近藤 安井 愛吉  
地 大野 源十 外

春日龍神  
倉本 雅子  
細野ヒロミ  
馬鎌富四夫  
内藤 泰二  
鈴木 有門

岩 船  
馬鎌富四夫  
内藤 泰二  
鈴木 有門

女郎花  
内藤 泰二  
鈴木 有門

土蜘蛛

小田井錦次  
胡加藤平三郎  
細下里 波  
地 板正 文男  
仲井重次 外

番外  
花山 姥  
月 辰巳 清  
辰巳 孝

四海波 全員唱和

編集後記

△宗家ならびに名古屋能樂界第一人者田鍋惣太郎先生の御祝詞をいただきました。題字は松尾宗匠の麗筆です。まず以て厚く御礼申し上げます。

△野口先生のお話、記録のまずさをお含みの上名匠のおもかげをおくみとり下さい。

△この体裁を以て前例とするつもりは些かもございせんので、いろいろ御指示と御投稿によつて、よりよくして行けるように御援助のほど、くれんもお願いいたします。番組、会合記録、隨筆、紀行、研究、詩歌等何にてもお寄せ下さい。

△このたびの印刷費は、御親切なさる御方にすべて御寄附いただきました。厚く御礼申し上げます。△当分のうち、林啓次郎と内藤泰二が編集のお手つたいを致します。



# 東 海 宝 生

発行所 東海宝生流通同好会  
名古屋市中区新栄町九ノ一  
編集人 高橋 錦三郎  
印刷所 三和印刷株式会社  
非 売 品

貞明皇后御作

## 千代のかざし

ヨワタ下

秋のみやまに移されし、菊の  
ふた葉ぞ頼もしき、あめにつ  
らなる星月夜、をぐらの山の  
もみぢ葉の<sup>ツバ</sup>あかきところ  
を讀へん、ひかり加ふるすべ  
らぎの、<sup>クニ</sup>国のはゝその蔭もり  
て<sup>ツバ</sup>たてにし功は神風や、伊  
勢のはまをぎさらさらに、神  
代もきかめためしかな、龍の  
都のそれならで、くもゐにま  
たもかへる波、玉とかがやき  
花と咲き、千代のかざしと匂  
ふらん、千代のかざしと匂ふ  
らん

宝生九郎謹曲

## 誦う樂しみ

誦曲は、文学的な詞章を鑑賞する喜  
びとともに、たとい下手でも「誦う」  
表現を通して、そこに創作の喜びを味  
わえるという、二重の樂しみがある爲  
に、よく永い生命を保つてきたのであ  
りましょう。

私も、この肉体の躍動を伴う  
「歌う文学」に興味を持つことができ  
たのは、思えばそこには誰方かの御懇  
切が働いていることに気がつきます。  
世間では「仲人を三度ぐらいしなけ  
れば一人前でない。」と言われるよう  
に、自分をこのよい趣味に導いていた  
だけた御恩返しに、ぜひとも新しい流  
友を勧誘したいものです。

高級なお稽古は、専門の先生にお取  
次すればよいことですから、ともかく  
も多くの愛好者を勧誘し合つて、とも  
に樂しむ。それがやがて御恩報じにも  
なるならば、私どもの人生は楽しい上  
にも一層有意義になろうというものだ  
でありましょう。

## 宗 家

## 宝生九郎師を囲む

## 座 談 会

六月十六日(定式館「岡田川」演館前日)夕、常盤女学院別室に一同が位置を占める。宗家はボーダブラジオのダイヤルを廻してみえる。六時十五分のニュース解説が、かなり大きく聞える。

田鍋 皆さん、来年の出しものが決まりましたよ。三月が鑑賞館で、若先生と祿久さんの小袖曾我、野口先生の杜若、これには「沢辺の舞」という小書つき。

宗家は景清をお願いしました。六月は蜀法師が宗家、辰巳さんの殺生石。十一月は祿久さんの忠康に若先生の鉄輪です。

(ボーダブラジオの音が、蓋の向きによつて大きくなつたり小さくなつたりする。)

田鍋 向きによつて変わりますか？

しかし便利になりましたナ。汽車でも退屈しませんね。

宗家 ええ。先日も金沢の催しるとき、夏場所の千秋楽でしたネ

茶屋でみんなが聴いてました。内藤 七月八月の放送は、何か決まつてませんか？

宗家 放送は、前の月に次の一月分を決めるだけでして、さきのことはわかりません。放送といえば、この二十二日に、貞明皇后様の御大喪の当日、皇太后様のお作りになつた謡を放送することになつています。八時四十五分からは「千代のかざし」という小謡です。

田鍋 いつ頃の御作です？

宗家 大正四年でしたか。御生家の九条家へ行啓の折、長年勤めたお乳人の宿下りの送別の宴にその老女の功をたゝえてお作り

になったものです——先代が節付をして、御前で勤めたものです……ええ、弱吟でして、五分もかゝりません。——で前に解説を三四分つけても、まだ時間が余るので……草紙洗か加茂かお好みだつた曲を振んで、いっぱいにおさめることにしました結局「年の矢の、早くも過ぐる光陰、惜しみてもかへらぬは、もとの水……」という所が、お手向にふさわしいので加茂に決定しました。——石川や……からロンギの終まで……

戸田 綱世、金剛など機關誌を出しています、宝生でも何か御計画は？

宗家 わんやの方でも、旅の友の方が一段落したらというわけです。何しろ舞台の方でいそがしかつたわけで……ええ茶屋の方も、きれいになりました。

——いや、まだ未拂が……それでも、あと百万？ほどになりました。綱世でも……やはり大曲ですがネ。何しろ、ズツと昂くなつていので大変です……

——そう、あの時着手しててよかつたわけですネ。

高橋 少し落着いてきて、謡でも始めようとする人もボツ／＼出て来ましたが、普及といつたことについて……いかがでしょう。

宗家 そう、野球のナイトゲームのように、気軽に見られるようなものも考えてます。能一巻狂言一番位です。——が今は何といつてもジャリナリズムの力かゝりて宣伝しなくちゃ、どこでやつてるだか一般にわかりませんからね。と、いつて大々的に広告すると興行ということになつて、税の方が大変なことになるし……何しろ若い人たちに働きかけることですね。学校なんかで少しやつたから、というんで中途にプランクがあつてもきつと始めますからね。しかし從來どりの教え方ではウマくいきませんから、今の人に合うように、理論的に、分解して説明する先生が要るわけです。以前には正課に謡曲をとり入れた学校もありまして、その教師を養成

するのが主目的で、音楽学校の方にも関係ができたわけだ。前の乗杉嘉樹校長がたいへん乗気だつたんで、音楽科の設置という事になったわけだ。——

その卒業生の資格の問題もあつて一年考えたわけですが、……、ですから、女子の職分というのは戦前からあつたわけなんです。

高橋 井上さんのお嬢さんあたり是非、その女子の方の先生になつてもらつて、お骨折り願ひたいものです。

井上 いや、もう……。でも、今のお話、たしかに若いうちからやらせるのは、よろしうございませぬ。和子なんか、無類もやりましたし、近頃もいろいろな演劇やお芝居なんか勿論映画など見せましても、お能の方が深みがあるナンで申します。ウチなんか赤ん坊まで謡で寝ますんで……

一同 井上さんとは本当の謡一家だからな……

田嶋 きよりの先生の阿漕どうで

す。あゝした本調子の謡は、めつたに聴けない。節ばかり聴かないで、あの調子——後ジテの山の阿漕の位というものを聴きとらないことにはな。

大野 そうしたことが受けとれるには、よほど力がある。

戸田 その受けられる人はいいいれど受けられない人の稽古は、聴いている方もつらいわけでは……

近藤 以前、朝の放送で謡の解説と突演の連続放送など、たいへん爲になりましたナ。

宗家 あれは、忘れもしませんが例の二・二六事件の当日でして……もう何年になりますか。響の日でした。愛宕山へ車で行つたんですが溜池から山下にかゝりますと、赤タスキに白鉢巻という物々しい連中が大勢いましめて……まだ早かつた爲に、交通遮断もしてなくて、なんなく通りましたが無気味でしたよ。

近藤 関西の乗謡コンクールというのは？

宗家 あれは、三年になります。

非常に進歩しますね。優勝権を毎年返還しては、技を競うわけですが、総評の点から、役の位とか、地がよくそろつたかどうかなど、いろいろな角度から審査して、ミスを減点して行きますから……比較的永く続けて来た、いわゆる先輩たちのグループも、新進組に圧されて、優勝権を他に与えられましたりしてすると、非常に發憤して、一年間は、どの組も、たいへんうまくなつて、殆ど誰がつきませんでした。発憤して稽古をつづければ、やはり古い人々は底力があつて、またそのグループが優勝しましたがネ。

——東京じゃ、多過ぎて出来ませんネ。区毎に手選でもしなくちや……

(氣サクに応募される宗家の風格におのずから引き入れられて地方在住の一同の胸にも流儀についての信頼と希望が新たに盛り上つて、誰からともなく、力強いものが嘆息のように洩れ始めた)

高橋 有難うございました。きょうのお話に力を得て、東海地方の宝生流、力を合せて、がんばりましょう。——林 記——

## 宝生流研究会

### 會員募集

創立明治三十九年以来、地方には類のない権威のある謡曲研究機関

○年六回、各回二日間

○一回に六番平均、宗家御監督の下野口祿久・辰己孝両師出張教授

○全會員平等に稽古を割当てられ親しく口授

○最近のお稽古 野口先生 八月二十二日(水)后四時半 俊成忠度・三井寺・羽衣 八月二十三日(木)后四時半 竹生島・百万・小督

於 常盤女学院

# 祝 發 刊

(東四名士より  
の來信)

野口兼資

東海宝生発行 お送り頂き  
御喜び申上ます 益々御盛大  
を祈居ます

水藤元三

拜啓 初夏の候愈々御清祥奉  
賀上候 先般野口師芸術院祝  
賀能の折には色々御世話様  
に相成り御礼申し上げ候。陳者  
本日御流友誌東海宝生御贈與  
に預かり難有厚く御礼申し上げ  
候。早速拜読、非常に面白  
く拜見仕り候。然もお世辞無  
しに誠に立派な御出来栄えに  
て御流の統一のあるのをうら  
やましく存じ候今後いよいよ  
御発展の程乍薩御祈り申し上  
けつゝ御礼の辭と致し度く存  
じ候 不一

(觀世流 名古屋清韻会)

田中 允

拜復 東海宝生御惠贈に預り  
厚く御礼申し上げます  
御地の能樂界の状況が手にと  
るようにわかり、まことに重  
宝させて頂きました

(幸流小鼓方・法大教授)

佐藤芳彦

拜啓 東海宝生御発刊お喜び  
申上けます。中々小冊子とは  
いえ気の利いた御編集感心致  
しました。東京がぐずぐずし  
ているうちに先を越されまし  
た。東京にとつて何よりの刺  
戟と存じます。御発展を祈り  
ます。尚私にて御手伝い出来  
ることは何なりとお申付下さ  
い 先づは御喜びまで 拜具

(わんや編集部)

前田正民

拜啓 愈々御清健斯道のため  
御活躍大慶至極に存じ上げま  
す

東海宝生御贈与忝く拜受しま  
した。大層立派な雑誌が出来  
流儀御発展の御様子もうか  
われ大褒美ましく存じます、  
一筆御挨拶申し上げます敬具

(宝生流・大阪女子大教授)

前西芳雄

東海宝生 御惠送に預り厚く  
御礼申し上げます。数日前、丁度  
皆の顔が揃いました折、觀世  
・金剛・喜多・能・花・能樂  
通信・東海宝生・松声等の現  
役誌を話題にのせたのですが  
何号まで続くかなんて失礼な  
事を言う人もあり是非とも続  
けて下さい、とにかく宝生流  
の機関誌のないのは淋しい事  
です (花・金剛誌編集部)

田鍋洋一さん初舞台

当地小鼓方のホープ田鍋洋一さ  
んは、宗家の隅田川の子方を無事  
演了、初舞台とも思えぬ落着きぶ  
り。ふたばよりかんばし。  
おめでとう。

銷夏の読物として

秋行樂の伴侶として

栗林良一著

能謠名所旧跡

觀能や謠の参考書と  
して机辺に贈る!

▲写真版一二〇面

▲松野奏風氏筆

▲能姿図版八〇個

▲美装B6版一二〇頁

定價 二三〇円

送料 二〇円

京都市二条猿蓑町

發行所 檜書店

振替東京二二三番

名古屋取次店

大久手電停東田 鍋方

大須門前町 其中堂

脚行跡舊  
朝長・熊坂・班女  
在赤坂・照山生

朝長、熊坂、班女の跡はともに美濃國不破郡にあつて、ざつと見て知るのでしたら一日で足りります。最近の其処の様子をお知らせして、杖を曳かれる方の御参考としましう。

國鉄美濃赤坂駅で降りて駅前を二町ばかりで四つ辻に出、左に折れて県道を西へ行き、北側に石灰岩発掘のため処々赤くえぐられた金生山や、その麓に屋根から眞白に粉を被つた幾つかの石灰工場を見

ながら、二つの鉄道線路を過ぎると、やがて青墓村大字青墓に出ます。駅から約二十町、垂井駅からは約三十町です。此処で「國宝觀世音菩薩、圓興寺、朝長公菩提寺」と刻した石碑に従つて北に入ると、間もなく一面の水田で、十六七町前方に丘陵が連なり、その麓に大字圓興寺の部落が隠れます。

寺はこの部落の奥に小高くあつて、約千百年前に今の圓興寺山に開かれた大寺でしたが、信長に焼かれて現在の地に移つたのです。本尊觀世音木像はもとの国室で、外に朝長の槍先と称するものを藏しています。寺で話では、時折その道を嗜む人々が見えて本堂で話を手向けることもあるとのこと。

朝長の墓所はこの寺から更に四町ばかり東方、圓興寺山の中腹にあります。人家を離れて山道を行き、突き当つて左右への細い急な道を「これより一町」の指導標に従つて右へ登り、初めての小徑を左に入るとすぐ二つの石塔群の中間に出ます。右の高みのが即ち朝長の墓所で、高さ三尺ばかりの五輪の塔が三基左にかぎの手に四基、石面はすべて傾して刻まれた文字も定かでありません。

朝長の遺骸は青墓の宿の大炊延壽が一旦自宅裏の竹藪の中に葬つて置いたのを、平宗清によつて発かれて首は京都へ持去られ、その後此処に改葬されたのだと言われます。圓興寺の過去帳には、義朝、義平、朝長の戒名の外に朝長に殉じたらしい三人の家臣の名もありますから、それらの墓石として、又或ものは供養塔としてこの五輪の塔は建てられたのでしよう。平治物語によると朝長の妹になる夜叉御前も葬られてあると察せられます。夜叉は義朝と長者大炊の女延壽との間に生れ、赤坂を流れる瀬瀬川に身を投げて十一才の生涯を終えたのでした。

墓は赤松の林の中に寂然としています。そのさびしさを哀んで百年も前のこと、圓興寺のかゝり人であつた一尼僧が近くに小屋を建て、住み、墓守をしたそうです。もと来た急な道を登り詰めて、養老山系を眺望する尾根

に出る所の松の根方に、二つの石仏に挟まれて小さな卵塔のあちがその尼僧の墓と言われます。朝長の墓所に隣して低くあるのは圓興寺の古い住職達の墓所です。

山中に置かれたこれらの墓所は、昔は寺の堂宇に近接していたのであつて「これより一町」の指導標を左に狂つて藪を分けて探すのでしたら、仁王門や五重塔の礎石を見出すことが出来ます。蹴鞠の場であつたと言つ一つの平地には雑木がびつくり茂つていました。道を戻つて寺から南の道を少しく東に入つて、又南に行き県道に出る途中、二つの古墳の西標を通ります。初めのは「遊び塚の古墳」で遊女を葬つたのでこの名があると言われ、圓頂を二つ持ったその丘は、この春開墾されて桃畑となつています。その先のは「粉雄山の古墳」で遊女が粉雄を捨てたので名づけられたと言われ、前者よりもずっと低いその丘は、今はこの辺の共同墓地です。

この二つの古墳のほぼ中間、鉄道線路の北側の田のあたりこそ長者屋敷の跡であり、又昔の中山道はこの辺に通じていたと伝えられます。里人の話では、その田の畔には「化け椿」と名づけた一本の古木と一里塚の跡とがあつたが、椿は去年倒され、塚は数年前崩されて了つたとのことでした。

(つづく)

試 案

地 拍 子 教 室 (一)

By C. T. Tenten

ま え が き

素謡で地拍子に一々こだわるのは勿論感心しませんが、どんな謡でも囃せというのも無茶であります。

謡をやる以上、囃子に合うようにできたらどんなに楽しいでしょう。またこうなることによつて、おとうさまの澄いお声も、家庭の反感を防止するにとゞまらず、御家族の興味を誘ひ、かえつて歓迎されることになるでしょう。

それは歌謡の一要素たるリズムが整うからで、この変化が何も知らない人の耳にも、それだけこゝろよくひびくからです。

では、できるだけ無駄なく、地拍子のソモソモから、囃子の相手ができるところまでのひとつのコースを御案内致します。けれどもこれをお読みたゞいてハハと理解していただくだけでは何のお役にもたちません。「わかつてからできる」という領域の他に「できてからわかる」という領域が現実には存在し、しかも後者の方が発生的であり、永久に基礎的であることをお認めくださつて、実際に手を動かし、声を出して、よく馴れていただくことがたいせつです。

文字表現には限度がありますが、本謡では

諸先生の御指導の下に、単なる地拍子にとどまることなく、地拍子から乳離れして、謡曲の本質に肉迫したいと意気込んでいます。

第 一 教 程

ミニマム・トレーニング

I 雨 垂 拍 子

打 2 3 4 5 6 7 8 1

呼 ニーサンシーゴーロクシチハチイチ

▼右手で等間隔に膝を打ちながら、これに合せてニーサンシーと数字を読む。  
これを連続して繰返す。

II 雨 垂 に 掛 声 を 加 け る

打 2 3 4 5 6 7 8 1

呼 (ン)ハア。(ン)ヤア。(ン)ハア。イヤー。

▼右手で雨垂を打ちながら、これに合せて掛声をかける。  
これを連続して繰返す。

▼掛 声 の か け 方

・2拍を打つときハラの中で(ン)と称えて手を上げハ声をかける。

・3拍を打つときハの延音アを止め、手を上げるとき息ツギ。

・4拍を打つときハラの中で(ン)と称えて手を上げハ声をかける。

・5拍を打つときハの延音アを止め、手を上げるとき息ツギ。

・6拍を打つときハラの中で(ン)と称えて手を上げるときハ声をかける。

・7拍を打つときハの延音アに移り、手を上げる。

・8拍を打つてスグにイヤと声を掛けながら手を上げる。

・1拍を打つときイヤの延音アを止め、息ツギと同時に手を上げる。

▼こうして掛声をかけても、雨垂の間隔が乱れないで打てるまで練習すること。  
杖時計の音を聞いて掛声をかけると効果的。雨垂を速くしても遅くしても、掛声が合うようになれば、この項卒業。

III コ ミ を と る

手 (圧) 2 3 4 5 6 7 8 1

呼 (ン)ハア。(ン)ヤア。(ン)ハア。イヤー。

▼こんどは246拍の三カ所で、膝を打つ代りに膝をグツと圧えます。

▼打 方

・2拍の(ン)をハラで称えながら手(掌の手首に近い部分)で膝をグツと圧え(これをコミをとるといふ)、その反動で手が上るときハ声をかける。手が膝に落ち

て2拍を打つときハの延音アを止め、息ツギしながら手の力をぬく(指先は膝に

元來謡曲は、八拍子を一小節として展開してゆく一種の音曲なのでありますから、もし一定の強弱がなければ、それは八拍子ではなく一拍子の羅列にとどまつて、曲を

3 コミによつて曲の進行が支配されて行く様式は、日本の諸芸道の本質に深い関係がある。

打 落  
 (ン) — (圧) 2  
 あ — ○ 3  
 ア — (圧) 4  
 ず — ○ 5  
 ま — (圧) 6  
 あ — (圧) 6  
 ア — ● 7  
 そ — ○ 8  
 び — ○ 8  
 の — ○ 1

— オ —  
— か —  
— ア —  
— ず —  
— か —  
— ア —  
— ウ —  
— に —  
— 引 —

クドいようですが、この脆弱感が体得できなければ次の研究を御理解になつても、論語よみの論語しらずに終りますヨ。

引

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 一 | ○ | × | 2 |
| 一 | ○ | ○ | 3 |
| 一 | ○ | × | 4 |
| 一 | ○ | ○ | 5 |
| 一 | ○ | × | 6 |
| 一 | ● | ○ | 7 |
| 一 | ○ | ○ | 8 |
| 一 | ○ | ○ | 9 |

(シ) <sup>ア</sup> **ア**ーザー まーあアそおびーの  
 ーかアーザー かーアずウーにーい  
 ーのーなーもオつウきーのーオ  
 ーオみーやーびイーとオーわーア



三重だより

五月四日白子町所在鈴鹿学園に三笠宮殿下がおいでになつた際余興に彈子船升慶を御覽に入れました。シテ田中

俊夫地平井俊三笛藤本利雄小鼓山口謙郎でした。その夜白子町に協宝生の大家宝生彌一師がみえ鉢木シテ田中ワキ彌一師ツレ早川春治氏で誦いました。彌一師の独吟景清が了つて、師をかこみ讃歌を伺いました。下掛宝生流の文句が通うようになったのは元祿時代からで、宝生新師が北海道でデタラメを誦うといわれたといつた話や北京の支那風呂の話等が出ました。五月二十日の大会別紙番組の通り、極めて盛会でした。

(三重・田中俊夫)

三重県宝生流謡曲大会

五月二十日前九時始

於 龜山町高町 誓昌院

素謡組

小林 悠

山竹生島坂 榮吉 落合 初造

坂 長工門

井田 巴

竹内 道雄

市放下 伊藤隆雄

中川 杜

岩崎 菊甫

早川 春治

白子 寛 中川武雄

神 俊 寛 藤田重郎

村山 清八

水谷 定尾

四村 仙松

上寺戸惣四郎 中島規矩太

津 葵 齋藤 一

山川 滋樹

戸船辨慶 二五正人

井口橋三郎

勝田正次

市川 周一

豊田 早苗

龜通小町小龜定一

連吟 鶴之段坂 榮吉 渡辺重雄

仕舞阿 漕 平井俊三

藤田社中

○藤雲会(第二十四回)

六月十六日(日)一時 於藤田宅

養老 高麗

小柳 五森

曾我 小森

玉立 渡辺

貫林 高麗

草紙洗 伊藤

通小町 林本

熊坂 渡辺

伊藤 森

藤田 山田

加茂 森

忠度 渡辺

班女 林本

小督 山田

鐵輪 伊藤

高麗 渡辺

小柳 佐藤

曾我 大島

溝口 大島

○中日謡曲部素謡会

六月二日(日)五時 於鶴南莊

船辨慶 西沢

他に鶴世の吉野夫人・大仏供養

○藤奈美会(第五回)

七月二十一日(日)一時

於一宮文化クラブ

加茂 松崎忠右衛門

杜若 後藤 元三

鶴飼 林本 忠雄

○龍吟会 於大塚舞台

九月二十三日(第四日曜)

東北会

○小田井先生三回忌

六月二十四日 於加藤宅

追善 諸会

小田井錦次

馬三宅義郎

佐川 忠夫

熊坂 義郎

三宅 義郎

江口 義郎

隅田川 見玉五郎代

鶴飼 鈴木 馨

齊藤 修一

見玉五郎代

○東北会例会

七月二十九日 鈴木宅

加 茂 三宅義郎

半 部 加藤平三郎

阿 濤 岡嶋正郎九

佐川 忠夫

児玉まつ代

○東北会八月例会

氷室・楊貴妃・土脚

○東北会九月例会

松尾・井筒・船辨慶

岐阜だより

照 山 生

六月九日居二時から、若葉輝く

石田川のほとり堀内氏宅で、蜚特

茶話会を賑やかに催しました。

来賓として名古屋から研究会の

高橋さん、近藤さん、鶴見さん、

新井さんがおみえになり、大原御

幸をお聴かせ下さったのは会員の

傍ででありました。

夜は螢の名所、イルミネーショ

ンのように光り、乱れ飛ぶみごと

さを賞し、一両歌をつくつて、十

時散会しました。(番組下段)

登壇素諾会

岐阜県高富町佐賀 堀内宅

平野 和見

市川 芳博

夜討 鬼十 寛時 武志

會我 立 服部 新治

長屋 清子

羽衣 大塚 敏子

草紙洗 田島智恵子

賞 殺田志賀子

立 王井上 和子

堀内 関夫

七騎落 松川 好一

堀内 関夫

立 入村 由郎

葵 上 種義貞子

鑑見 靜子

大原 御幸

附 祝言

岐阜簡易保険局宅生会

山の茶屋の記

首夏の週末、都座をきけて緑陰

の茶亭に平日の客となる。まち中

にもこうした閑寂なと嘆息すれ

ば、つましやかに当所のいわれ

物語り、手前みごとに茶を進める

花の姿は、櫻山壯次氏の令嬢。

綱世宝生へだてなく、他生の夢

に一河の流れ：一流会のメンバー

相つどえば、はや「心づくしの秋

風に」と中林氏の名調は薫風に

和して境域をひきしめてゆく。

星野氏のサビた車利さが格闘と

執心の阿漕をよくあらわした。地

はスタートからよく揃い、叫ぶ声

のシメの手練もみごと。ヤリにな

つて、阿漕が浦の引きがやゝ小

さかつたが大熱演。待機中の綱世

グループ拍手を送り杜若。

田嶋の酒井、新進の村田雨氏の

コンビよろしく優艶な観世ぶり。

ついでに都合により結綱を先に

井上の清澄と奥田の明快、雨氏

の同吟よく揃うこと。シテ林氏は

朗潤淡泊、たくまぬ風情あり。

後に今一段ハコビがつけば點晴。

お次は綱世の班女。シテ大平氏

は少年時代の稽古がモノいつてさ

すが：平野氏慎重に応待し、よい

御夫婦。トメは俊寛。番外みたい

シテ柳原氏調子といひ吟といひ、

別席までもリンと来る。假借ない

奥田氏のワキに對し、愁嘆の吐息

真に迫る。終つて番外櫻山壯次氏

の八句連歌、解説と独白。地元狂

言の主観一過雅な演出について認

識を深めた。

一流の名に恥じない面々、敬禮

につれての超弱吟は、ようやくに

たそがれた邸内に搖曳……(T)

一流会素諾組

六月九日居一時

於 徳川美術館裏

山の茶屋

阿漕 屋野 中林

杜若 酒井 村田

鵲飼 林 井上

班女 大平 平野

俊寛 柳原 奥田

成井 上

廣林

八句連歌

番外

櫻山 壯次

田鍋社中

○饗友会 (第三十二回)

七月十五日 夏目宅

加茂 渡部峻二郎

藤戸 中島 一夫

松戸 早瀬 敏子

小督 杉村 銀次

黒塚 志雄 速水 恒宏

伊藤 秀雄

独調 伊藤 敬太郎

經政 伊藤 敬太郎

蟬丸 早瀬 敏子

放下 幸尚 夏目 保子

鞍馬 坂路 俊子 戸田 和子

鉄輪 秀雄

仕舞 夏目 幸尚

胡蝶 戸田 秀雄

高砂

○饗友会 (第三十三回)

九月九日 於早瀬宅

田鍋惣一郎社中

○たなびき会

練成歌仙会

七月二十九日 於大塚舞台

知多だより

穂積生

知多連合会 常滑、大野、横須賀、半田と隔月に廻りもちに開催しております。五月二十日には大野町齊念寺で小袖會、盛久、杜若、隅田川、鶴飼と独闘華知、鳥及び仕舞蟬丸(但しシテ観世)七月十五日には、横須賀町役場別室にて、敦盛・蟬丸・山姥・天鼓・百萬の番組で催しました

半田宝生会 幸川病院長の御宅で、六月十日、熊坂・百萬・天鼓七月下旬に、龍太鼓・江口・頼政にて開催します。

八雲会

五月二十日 加藤彦兵衛宅

七月八日 下里 誠宅

九月九日 鈴木右門宅

○CK新人放送

七月十二日 四時四十五分より

成陽宮 シテ 大野 慶雄

八月は「山姥」獅子の予定

流友名簿

●印幹事

○知多宝生会

半田市 前山 中笠 清允

横須賀町 横須賀 中村 花井 貫三

横須賀町 高横須賀 久田 栄松

横須賀町 高横須賀 山田 文治

旭村 加木屋 義治

旭村 新獅子 鈴木 幸美子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

大野町 新獅子 林 静子

○竹腰仙洞社中

春日井・味美・三九

東春・志段味・東谷山

岐・土岐・駄知本町

一宮市千歳通二ノ一九川合

瑞穂区東栄町八ノ一〇志水鉄次郎

千種区山門町二ノ五六石川 堅二

熱田区沢下町七四 西井 豊

中区大池町六ノ二七 益川 勘平

西区橋詰町二六 渡倉 正一

昭和区川原通八ノ十一 平林 信子

津市南堀端

大森幸一郎

谷口 正之

富田 正子

松田 正子





戦後 蒲郡常盤館 婦人師範の会 記念写真

趣 意 書

[illegible]

樂堂建設有限公司 董事會

(10) (57)

左

- 一、鉄金目額 金二千萬百也  
二、一口の金額 金五百萬百也  
三、私達方法 即時私達 又は隔期 二十九年十二月迄に  
分額私達 一口中以後五年間年一回繰能招待

龍溪堂建設期成委員 (一、二、三) ○財政科委員

口申込者五万年間一回網能招待  
口申込之者申込者其端上之位置同數を增加する只迄

- [illegible]

申 込 書

口 (金) 田也

世界各國醫藥當局均能承認建國醫院之醫藥  
醫藥方法  
（即臨時）  
每月利  
回本送

右の通り寄附中込みます

附錄二  
附錄一  
附錄  
附錄

所需

名 用

法月 人1組

名古屋龍樂會

能衆黨建設期成委員会 御中

昭和29年 名古屋能楽会 能楽堂建設期成委員会趣意書

## 趣 意 書

当地能楽家は幾失以來、再建復興の爲、能楽堂建設期成委員会に於て、各方面の御賛同を得て、若々と実現に努力致さしましたが、今回本会にて色々採決の結果、建築に關しては、竹中工務店の非常の御好意により、建設費用の分割払を承諾の上、今秋の御宸御巡歴祭迄に竣工せしめられる事と、又建設費の約半額は熱田神宮側にて御負担願へる事等が、具体的に進捗致したるも、之れが建設資金の面に於ては、先に期成委員会のお尽力による募金額は、其の予算の半額にも満たざる状態でありますので、今般更に左記の事項により、各方面御志願者の御協力を相仰度、又二方県、市、其他町界方面へも御協力を乞ふ等、資金の調達に一路邁進致度、何卒右等御了終後下、存つて御援助賜ります様申敬御願申上ます

### 記

- 一、能楽堂建設概算額 金參千万円也
- 一、募金方法 一口毎月金壹百圓迄の月掛として満參ヶ年を以て満了の事
- 一、募待方法 御申込口数に依り數年間本会主催の能楽に

觀能御招待申上ぐ

- 二、附 記 期成委員会にて御申込御返入金に對しても今回の募金の分配概行して同程御撤消申上ぐ

右

昭和三十一年四月 日

住居法人 名古屋能楽会

会長 伊藤次郎 左衛門  
副会長 岡谷 正 男

## 申 込 書

- 一、名古屋能楽堂建設資金 口分

但 一口に付毎月金壹百圓宛月掛滿參ヶ年終了の事

右の通り寄附申込みます

昭和三十一年 月 日

住所

氏名

印

住居 人回 名古屋能楽会

御中



TAKENAKA KOMUTEN CO., LTD.



GENERAL CONTRACTORS

住田神宮能楽殿



（昭和）

設計者 住田株式会社 竹中工務店



THE

|      |         |      |         |
|------|---------|------|---------|
| 貸    | 借       | 貸    | 借       |
| 現金   | 100,000 | 現金   | 100,000 |
| 預金   | 50,000  | 預金   | 50,000  |
| 有価証券 | 20,000  | 有価証券 | 20,000  |
| 固定資産 | 30,000  | 固定資産 | 30,000  |
| 負債   | 10,000  | 負債   | 10,000  |
| 純資産  | 140,000 | 純資産  | 140,000 |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000   | 繰上金  | 5,000   |
| 繰下金  | 5,000   | 繰下金  | 5,000   |
| 繰上金  | 5,000</ |      |         |

知 道 嗎

|     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|
| 品名  | 规格  | 单位  | 数量  |
| ... | ... | ... | ... |
| ... | ... | ... | ... |
| ... | ... | ... | ... |
| ... | ... | ... | ... |

[illegible]

本論文は、日本企業海外展開の動向を、国際化の進展に伴って変化する海外展開の環境を背景として、その変遷を明らかにし、その変遷の要因を明らかにすることを目的とする。

謝世英、謝世雄、王仲良、陳昭堂主編

[illegible]

参考文献: [1] 王德胜, 王德胜, 王德胜. 中国人口地理学[M]. 北京: 中国人口出版社, 2000.

| Time (min) | Flow rate (L/min) | Flow rate (L/min) | Flow rate (L/min) |
|------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 0-10       | 1.0               | 1.0               | 1.0               |
| 10-20      | 1.0               | 1.0               | 1.0               |
| 20-30      | 1.0               | 1.0               | 1.0               |
| 30-40      | 1.0               | 1.0               | 1.0               |
| 40-50      | 1.0               | 1.0               | 1.0               |
| 50-60      | 1.0               | 1.0               | 1.0               |
| 60-70      | 1.0               | 1.0               | 1.0               |
| 70-80      | 1.0               | 1.0               | 1.0               |
| 80-90      | 1.0               | 1.0               | 1.0               |
| 90-100     | 1.0               | 1.0               | 1.0               |

陳其南、陳其南、陳其南

张 明 强

本報地址：重慶市中二路新華書局大樓  
電話：(023) 87691111  
郵政代辦所：重慶市各郵局

1000

肅啓 錦秋の候愈々御清祥の段お慶び申上げます  
扱豫而建設中の熱田神宮能樂殿は御蔭を以て豫定通り  
竣功を見るに至りました これは偏えに各位の御後援  
の賜と深く感謝申上げる次第でございます  
就ては御繁用中恐縮に存じますが左記により竣功式に  
御來駕賜り度此段御案内申上げます 敬具

昭和三十年十一月吉日

熱田神宮 宮司 長谷外余男

熱田神宮造營會會長  
社団法人名古屋能樂會會長

伊藤次郎左衛門

記

能樂殿竣功式 十一月十六日(水)午後二時

於 熱田神宮能樂殿

御來臨の節は本狀御持參の程願上げます

昭和30年11月16日 熱田神宮能樂殿竣工式 案内状

謹啓 涼秋の候益々御清適の段慶賀に存じ上げます  
扱豫而建設中の熱田神宮能樂殿は御蔭を以て此程竣工を  
見るに至りました これは偏えに各位の御後援の賜と  
厚く御禮申上げます  
就ては別紙の通り能樂殿竣工披露能を舉行致しますから  
何卒御繰合せ御來駕賜り度右御案内申し上げます

謹 具

昭和三十年十一月吉日

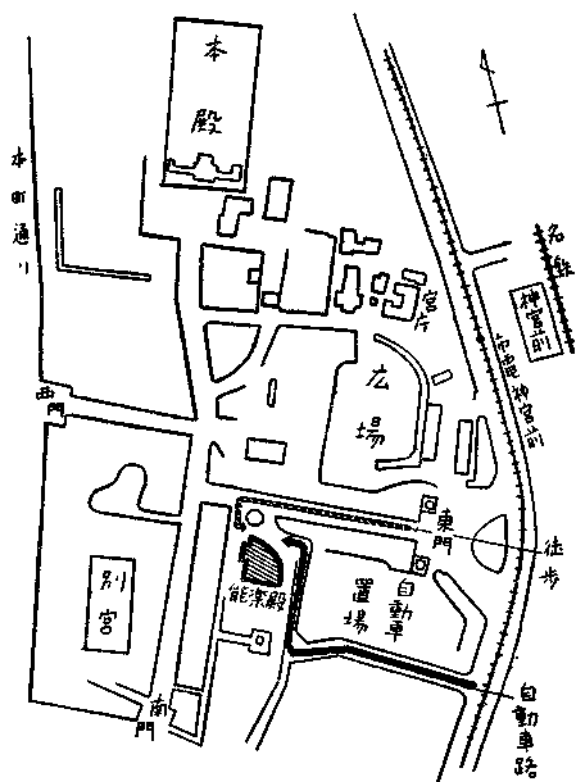
熱田神宮宮司 長谷外余男

熱田神宮造營會會長  
社団法人名古屋能樂會會長

伊藤次郎左衛門

昭和30年11月16・17日 熱田神宮能樂殿竣工披露能 案内状

# 熱田神宮能樂殿 路順



昭和30年11月16・17日 熱田神宮能樂殿竣工披露能 案内状附録 路順



# 能楽舞台披

昭和三十年十一月十七日午後三時始

於 熱田神宮能楽殿

## 能組

橋岡 久太郎 西村 弘敬 田西 鋼尾 孫一太郎 鬼頭 季八  
後見 杉村 竹翠 柴田 初太郎 地謡 林田 健太郎 尾隨 健太郎 早川 輝吉  
加藤 兵衛 鬼頭 五郎 田 十草 綱 太郎 武田 太 願五郎 藏 太郎

狂言 三本柱 佐藤 卯三郎 井上 礼之助 市歌 村 陽一 男 橋 幸一 男

仕舞 難波 木田 秀男 武田 大加志

髭 高 信 高 砂 高 西村 欽也 沼安 田 正郎 也 田 永 鋼 田 虎 之 助 金 孫 準 三郎 鬼 頭 喜 太 郎 伏 原 順 四 郎 利 秀 一 郎 田 仁 田 德 吉 助 男 郎 郎 重

主 催

熱田神宮能楽会

名 古 田 屋 能 楽 会

# 能楽殿舞台披露

昭和三十年十一月十八日午後一時始

於 熱田神宮能楽殿

## 能組

望生九郎 三番 河村秀雄  
 千歳 佐藤 西尾孫太郎 藤田六郎兵衛  
 面 續 田銅惣一郎 田銅惣一郎 藤田六郎兵衛

後見辰己 孝請 地龍 孝 青木恒治郎  
 辰己 近戸田 井藤源秀 忠 内如野翁 木 藤 富禄右 泰 二久門  
 龍田 林 愿 藏 口 好重 忠 内如野翁 木 藤 富禄右 泰 二久門

生舞 草薙 辰己 幸 野口 禄久

## 舞囃子

々

柴田初太郎 吉田 福井啓次郎 金鬼頭 八 三郎

主 催

熱田  
法利  
大川

地龍

石谷初藏 河佐竹内 村藤 鉦三雄 久田 秀雄 加藤 野瀬 大 雄

名古屋能楽会  
田 神 宮

# 能楽殿舞台披

昭和三十年十一月十八日午后三時始

於 熱田神宮能楽殿

## 能組

舞臺 竹生島 山田仁三郎 河村橋一 後藤孝一郎 寛頭三八男郎

地謡 中内利一 竹市秀大塚一門雄  
伊藤鉄之進 豊嶋弥左門雄

狂言 三本柱 歌村彦四郎 市歌村鴻一等男郎  
井上礼之助

仕舞 笠の段 豊嶋弥左門

祝言 高砂 國 西村村 西村敬也 立石 雄 永田虎之助 鍋惣一郎 小島鉄次郎

後見 山田仁三郎 片岡信一 地謡 荒木 藤敏之進 伊藤 大塚 豊嶋 弥左門 雄 中内利一 竹市秀大塚 雄

主 催 熱田 古屋能楽会 宮

お返手の余白少々お返しの位の  
 ところへお返しを 本手中は公松  
 ともねさるう 方能る 希り 洋に  
 多難く 移りしりある

東田神宮能楽殿にまつる 資料の一部  
 をお送りしりあるから 利用下さ  
 追て又お送りしりある  
 常一様にお送りしたる 越後の程と  
 お送りしりある 器具

十二月 十六日

長谷 晴男

寛 鉦 一 標

つれ下

不明な部分は空けておきまし  
 した 清水 下

12.9.15 死去されし 82才

資料

熱田神宮能楽殿建設に関する資料

熱田神宮能楽殿地鎮祭

同 起工奉告祭

同 竣工祭

同 竣工式

式次第 式辞 経過報告

同 竣工祝賀能

同 創立十周年記念能

御大典奉祝能

薪能一覽表「能楽・狂言」

名古屋薪能の沿革について

熱田神宮能樂殿地鎮祭

昭和二十九年一月二十八日

式次第

- 一 一同着床 能樂殿を建立するに際し
- 一 修被 熱田皇大神と敷地の守護
- 一 降神の儀 神を祭り、神饌を供して
- 一 献饌 斎主が祝詞を奏上、祭場の
- 一 祝詞奏上 の四隅及び中央に米・切
- 一 地鎮の儀 麻を散供、鎮物を埋納
- 一 玉串拜禮 玉串を奉つて拜禮し、土
- 一 撤饌 地の平安堅固ならんこと
- 一 昇神の儀 を、神に祈請する祭祀で
- 一 一同退出 ある。

奉仕員 齋主 長谷權祢宣

祭員 山本・竹内・岡地權祢宣

服部 履

参列員 神宮關係者 名古屋能樂會關係者

約一〇〇名

祝詞

是乃處乎嚴乃齋場登被清米底注連繩引回保志  
 神饌刺立色々招奉里坐奉留掛麻又母最被熱田  
 皇大神及大地主大神等乃御前齋主熱田神宮  
 權祢宣長谷晴男恐美恐美母白左久  
 歌舞乃技波數多有留賢中別使臣能樂  
 歌乃品位高又舞乃手振母最床志久大神乃御心  
 平慰米世情乎永留爾處波志伎道奈礼華大宮  
 乃宮造仕奉留熱田神宮造管會尔臣源社団法人

名古屋能樂会 人等 登相議里 今度境内 乃甘志  
 所 熱田神宮能樂殿 乎新志久 設建御留事 登波  
 成里 故是 乎以知 是八十日 日渡有 礼将母 今曰  
 乎生日 乃足日 登齋定米 臣今志 御前 御食御酒  
 種々乃 味物 捧奉聖 社団法人 名古屋能樂会々々  
 茲伊藤次郎左衛門 乎始 米關係 有人等 参来集比  
 氏 地鎮祭仕奉 既 乎平介 又 安介 又 關食志 諾給  
 比臣 今 往前大神等 乃嚴 乃神靈 幸給 比 航 氏  
 築建 氏 年 大地 揺里 米 年 地震 尔 底津 磐根 乃崩  
 掃 渡 留々 事 無 常磐 尔 堅磐 尔 守 幸給 比 工事 員

持 留 諸人等 手 乃 踏足 乃 踏有 良志 米 給 渡 受  
 工事 乎 弥進 米 尔 進 米 志 米 給 比 夜 乃 守 日 乃 守 尔  
 護 幸 給 贈 恐 美 恐 美 母 白 須  
 地鎮祭終了後は、直ちに着工の予定であつたが、施行者が確定してゐなかつたこと、募金の情況が良くなかつたために、一ヶ年有余の歳月が経過した。翌年の五月なり、漸く着工の運びとなつたので、昭和三十年五月二十六日に、改めて「熱田神宮能樂殿起工奉告祭」を執行了ことを茲に特記しておく。  
 奉仕員 齋主 長谷祢宜  
 祭員 山本・堀田・杉浦権祢宜  
 横田厚  
 〔以下 省略〕

熱田神宮能樂殿竣功祭

昭和三十年十一月十六日

式次第

|        |              |
|--------|--------------|
| 一、一同著床 | 能樂殿の竣功に際し、熱田 |
| 一、修被   | 皇大神と殿屋の守護神を祭 |
| 一、降神の儀 | り、神饌を供して齋主が祝 |
| 一、献饌   | 詞を奏上、祭場の四隅に米 |
| 一、祝詞奏上 | 切麻を散じて清祓の儀を行 |
| 一、清祓の儀 | ひ、玉串を奉つて拜禮、將 |
| 一、玉串拜禮 | 未殿屋の安全堅固ならんこ |
| 一、撤饌   | とを祈請する祭祀である。 |
| 一、昇神の儀 | (註)          |
| 一、一同退出 | 舞台を祭場として執行。  |

奉仕員 齋主 長谷祢宜

祭員 山本権祢宜 服部・松永彦

参列員 伊藤造堂会々長(名古屋能樂会々

長)岡谷名古屋能樂会副会長

植村熱田神宮能樂殿建設委員長  
高橋総代 長谷宮司 篠田権宮司  
吉村・原田祢宜 竹中工務店社長  
以下 約五〇名

祝詞

是乃處嚴乃齋場 登被清米玉注連繩引回 保志

神祿刺立 長々招奉里坐奉留掛麻久母畏 熱田

皇大神及屋船久久能邊命屋船豐宇氣雄命等乃

御前 齋主熱田神宮祢宜長谷晴男恐 恐 美母

白 本久

長告奉 聖志賀如又神苑乃甘志所 熱田神宮

能察殿乎設建 氏年養志 去志五月二十六日

里工事起志 氏在里 株式會社竹中工務店 乃人

等質優 礼多留 技術 盡志 氏 勞 技 勵 拜 隨 尔 工 事

波進 美 尔 進 美 氏 今 波 早 也 内 外 乃 裝 飾 最 美

波志 父 築 建 氏 畢 故 是 乎 以 知 感 入 十 日 曰 波

有 礼 將 母 今 日 乎 生 日 乃 足 日 薪 定 米 氏 今 志 御

前 尔 御 食 御 酒 禮 々 乃 味 物 乎 捧 奉 里 社 団 法 人 名

古 屋 能 樂 會 々 長 伊 藤 次 郎 左 衛 門 乎 始 米 關 係

人 算 參 未 集 比 氏 竣 功 祭 嚴 志 々 美 波 志 々 仕 奉 良

久 乎 平 介 久 安 介 久 聞 食 志 謝 給 比 更 尔 波 去 志 十

一月十一日 波志 母 熱田神宮本殿遷座祭 乃 執行

波 礼 志 最 母 芽 出 展 儀 時 奉 礼 準 觀 世 宝 生 今

春 金 剛 各 流 乃 宗 家 等 寄 承 集 笛 鼓 乃 音 色 母

佐 夜 加 尔 翁 高 砂 乃 曲 乎 奏 儀 祝 賀 能 乎 催

須 狀 壽 御 心 甘 良 尔 所 看 坐 志 氏 今 往 先 大 神 等

乃 嚴 乃 神 靈 幸 給 比 氏 八 十 柱 津 神 乃 禍 事 有 良 世

給 波 愛 進 美 往 々 今 乃 世 尔 相 応 波 志 氏 施 設 予 設

整 閑 津 々 中 京 尔 誇 留 芸 術 文 化 乃 殿 堂 登 成 良 志

米 給 布 倍 又 夜 乃 守 日 乃 守 尔 護 幸 給 朋 登 恐 美 恐

美 母 白 須

熱田神宮能樂殿竣工式

昭和三十年十一月十六日

式次第

- 一 開式の辞 原田祢宜
- 一 式 辞 伊藤会長
- 一 経過報告 植村建設委員長
- 一 感謝状贈呈 宮司より竹中工務店社長へ
- 一 来賓代表祝辞 高橋総代
- 一 四海波奉唱 伊藤会長
- 一 萬歳三唱 岡谷副会長
- 一 閉式の辞 原田祢宜
- 一 直 会

以上

熱田神宮能樂殿竣工祭終了後に挙行した。

〔参列員〕

伊藤造管会々長（名古屋能樂会々長）  
岡谷名古屋能樂会副会長 植村熱田神宮能

樂殿建設委員長 高橋総代 竹中工務店社  
長 岡谷宮司 篠田権宮司 吉村・原田祢  
宜

能樂殿建設委員 能樂会々員 工事担当者  
総計 約一〇〇名

○ 式 辞

名古屋能樂会々長 伊藤次郎左衛門

本日ここに熱田神宮能樂殿の竣工式を挙行  
するに当り、来賓を始め多数同好の各位の御  
来臨を得ました事は誠に感謝に堪へぬ所で厚  
く御礼申し上げます。

申すまでもなく中京の地は古来各種の芸能  
が盛んに行はれて、その盛観を誇った土地柄  
であります中に、能樂は特に高尚純雅な武家  
の式樂として、尾張藩の雄名に恥じない發達  
を遂げて参りました。明治以後に於ても、そ  
の伝統は一般市民の間に力強く受継がれ戦災  
を蒙る前までは柘池町の能樂堂に於て常に各

流の能樂が上演せられ、年を逐ふて盛況を呈してゐた事は皆様御承知の通りであります。

然るに戦災に依つて、その能樂堂を失つた以後は演能の上の不便是譬へ様もなく、殊に社会状勢が落着いて来るにつれ、貴重な無形の文化財としての能樂に対する一般世人の関心が昂まり、その上演の機会も亦頻繁となるにつれ能舞台の必要が痛感されて参りました。偶、戦災を受けられた熱田神宮を復興するための熱田神宮造営会が、昭和二十四年に結

成され、私が会長の席を汚す事となつたのであります。この造営会の目的とする事業は單に諸社殿の復興のみに止らず、時代に即応し土地柄にふさはしい、諸種の文化施設をも完備する事になつてゐます所から、当時寄々話が出て居りました能樂堂復興を造営会の事業の中に加へてはといふ声が起こり、これが具体化し、名古屋能樂会をはじめ斯道の興隆に志を有する人々も、その造営資金の募集、その他能ふ限りの後援を申し上げるといふ事

になつたのでありますが、その成果として、熱田神宮本殿遷座祭が盛大に執行はれました機会に、能樂殿も善美を尽して美事に竣工するに至りました事は誠に慶賀に堪へぬ所であつたことの上もありません。

今回竣工の能樂殿は御覽の如く広く各地の能樂堂の粹を取り、その風格の優れてゐる事は申すまでもありませんが、その上、外観内容共に許し得る範圍に於て種々の新施設を採り入れ、斬新にして卓抜な特徴を有し、その

意味に於て今後の能樂堂建設に対し、一つの優れた典型を示したものと称し得ると思ふのであります。この竣工に至るまでに払はれた造営会々員並に能樂会々員、その他物心両面に亘つて協賛された各位の御努力と御好意とに対し、この機会に深く感謝の意を表してやみません。又この工事を担当された竹中工務店の真に犠牲的な御努力に対し、衷心御礼を申し上げます。

今後この能樂殿の運営が理想的に行はれま

して、能樂のいよいよ振興する事は勿論その他にも有意義な諸芸能の公演にも利用するの機が与へられ、中部日本芸能の新たな中心がこの熱田神宮の神苑の中に置かれて、一時代を創り出す様になる事を祈つてやみません。簡單ながら以上を以て式辞と致します。

昭和三十年十一月十六日

### ○ 経過報告

熱田神宮能樂殿  
建設委員長 植村 真太郎

一、名古屋市東区布池町にありました社団法人名古屋能樂会所有の名古屋能樂堂は外郭は鉄筋コンクリート建て相当堅牢な建物でありましたが、今次大戦において空襲を受け、昭和二十年三月十八日全焼致しました。

二、終戦直後は、国民の意欲は専ら衣食に

向けられ、芸術復興については等閑に附せられて居りました上、旧能樂堂建設には手狭でありましたので、先づ敷地の獲得に困難を来して居りました處、熱田神宮より境内の一部を敷地に提供の朗報を得ましたので、当初は那古野神社境内の能樂堂を移築するの計畫の下に、昭和二十六年九月頃に募金運動を開始しましたが、那古野神社能樂堂移築の件不能となり、物価高騰に依り予算膨大となりましたので、能樂堂建設は頓生を来し、暫く足踏状態でありました。

三、此時に当り熱田神宮におかれましては能樂堂再建に多大なる関心を持たれ、熱田神宮能樂殿として、神宮諸御殿の一部として建設費の半額負担苦しからずとの有難い御申出を受けましたので、能樂愛好者並に能樂専門の先生方も深く感動し、遂に昭和二十九年一月八日の吉辰を卜し、当所において能樂殿建設の地鎮祭挙行の運びとなりました。

四、地鎮祭は無事執行ひましたが、適当な

建設施工者が容易に物色出来ず、又予算も更に膨脹致しましたので、募金成績も芳しくらず、又々停頓の兆候が見えましたが、名古屋にご縁故の深き竹中工務店が犠牲的な協力精神を以て建設担当を快諾せられましたので、本年三月頃より能樂殿復興計画急進展し、本年五月二十六日に起工式を挙行出来得る事となり募金計画も新たに造り直し、県市のご援助を期待し、財界並びに能樂愛好者の方々より多大のご後援を得る事が出来、起工式以来六ヶ月足らずの短期間に此の清新なる能樂殿が竣功した次第であります。

# 建設様式

|      |     |        |
|------|-----|--------|
| 本殿   | 一階  | 一九五坪〇六 |
|      | 二階  | 三三坪五五  |
| 附屬建物 | 樂屋  | 三五坪八九  |
|      | 地下室 | 一六坪一五  |
| 合計   |     | 二八〇坪六五 |

座席数 一階

四一八席

二階

八〇席

補助椅子

二四〇席

合計

七三八席

施工者

株式会社竹中工務店

松羽目の揮毫画家は前田青邨画伯に御指導を願ひ、同門の逸材江崎画伯作であります。

昭和三十年十一月十六日

熱田神宮能樂殿竣功 祝賀 能

昭和三十年十一月十七・十八日

# 清祓の儀

斎主 長谷祢宜（狩衣着用） 祭員一員（狩衣着用）を従へて、正面木階より舞台に昇り、舞台の四隅に五色の切麻を散じて、「清祓の儀」を奉仕した。

能 組

第一日 十一月十七日

第一部 午後一時始

翁 觀世元正 外

仕 舞 老松 大槻十三

舞囃子 東北 山本博之  
觀世喜之 外

第二部 午後三時始

菊慈童 橋岡久太郎 外

狂言 三本柱 佐藤卯三郎 外

仕 舞 難波 本田秀男  
箴 武田太加志

祝言 金春信高

高砂 高安滋郎 外

第二日 十一月十八日

第一部 午後一時始

翁 宝生九郎 外

独吟 龍田 林 愿藏

仕 舞 草薙 辰巳 孝

舞囃子 老絹 野口祿久  
柴田初太郎 外

第二部 午後三時始

舞囃子 竹生島 山田仁三郎 外

狂言 三本柱 歌村彦四郎 外

仕 舞 笠の段 豊嶋弥三衛門

祝言 金剛 巖

高砂 西村弘敬 外

觀世・金春・宝生・金剛の各流宗家出演の  
祝賀能のため、両日共、見所は立錫の余地  
も無い盛況を呈した。

記念能

熱田神宮能樂殿創立十周年記念能

昭和四十年十一月三日（祭）

奉祝 天皇陛下御即位五十年

熱田神宮能樂殿創立二十周年記念能

昭和五十年八月二十四日（日）

—

—

熱田神宮能樂殿創立三十周年記念能

昭和六十年三月十日（日）

熱田神宮能樂殿創立四十周年記念能

平成七年四月二日（日）

御大典奉祝能

平成二年十一月十五日（木）

新能一覽表「能樂・狂言」

熱田神宮御造宮本賛  
熱田神宮能樂殿建立勸進 新能

（於 熱田神宮境内）

〔昭和〕

| 年 | 月 | 日 | 能        | 樂   | 狂言 |
|---|---|---|----------|-----|----|
| 元 | 九 | 二 | 枕慈童・紅葉狩  | 太刀奪 |    |
| 元 | 九 | 二 | 小袖曾我・船弁慶 | 不須  |    |
| 言 | 九 | 三 | 加茂・小鍛冶   | 棒縛  |    |

第一回市民の 納涼能樂の夕 新能

（於 若宮八幡社境内）

第二回市民の 納涼能樂の夕 新能

（於 若宮八幡社境内）

| 年 | 月 | 日 | 能          | 樂    | 狂言 |
|---|---|---|------------|------|----|
| 四 | 八 | 六 | 小督・紅葉狩     | 末広がり |    |
| 四 | 八 | 五 | 小袖曾我・胡蝶土蜘蛛 | 雷    |    |

第三回以降は、舞台を熱田神宮神樂殿前広場に移し、名称を「名古屋新能」と変更、毎年盛大に催行されてゐる。

名古屋新能

(於 熱田神宮神樂殿前広場)

昭和

| 回    | 年 | 月 | 日 | 能           | 祭 | 狂言  |
|------|---|---|---|-------------|---|-----|
| 三四三  | 八 | 三 |   | 橋弁慶・菰上      |   | 蟹山伏 |
| 四四四  | 八 | 三 |   | 花月・船弁慶      |   | 千鳥  |
| 五四五  | 八 | 一 |   | 竹生島・天鼓      |   | 棒縛  |
| 六    |   |   |   |             |   |     |
| 七四七  | 八 | 五 |   | 芦刈・鉄輪       |   | 太刀奪 |
| 八四八  | 八 | 四 |   | 杜若・土蜘蛛      |   | 蚊相撲 |
| 九四九  | 八 | 三 |   | 旅下僧・半井部・船弁慶 |   | 樋の酒 |
| 一〇五〇 | 八 | 二 |   | 小督・花月・紅葉狩   |   | 太刀奪 |
| 一一五一 | 八 | 七 |   | 小鍛冶羽衣・狸々乱   |   | 釣針  |
| 一二五二 | 八 | 六 |   | 小袖曹我・船弁慶    |   | 口真似 |

平成

| 回    | 年 | 月 | 日             | 能     | 祭 | 狂言 |
|------|---|---|---------------|-------|---|----|
| 一五三  | 八 | 五 | 清経・井筒鞍馬天狗     | 菊簪    |   |    |
| 二五四  | 八 | 四 | 賀茂・巴・石橋       | 釣針    |   |    |
| 三五六  | 八 | 二 | 蟬丸・雲林院・紅葉狩    | 蟹山伏   |   |    |
| 四五六  | 八 | 八 | 清経羽衣・土蜘蛛      | 太刀奪   |   |    |
| 五五七  | 八 | 七 |               |       |   |    |
| 六五八  | 八 | 六 | 経正・杜若・土蜘蛛     | 蚊相撲   |   |    |
| 七五九  | 八 | 四 | 鶴亀・橋弁慶・住吉詣    | 蟹山伏   |   |    |
| 八六〇  | 八 | 三 | 威陽宮・半井部・鉄輪    | 蟹山伏   |   |    |
| 九六一  | 八 | 二 | 鶴亀・吉野靜・玄象     | 棒縛    |   |    |
| 一〇六二 | 八 | 八 | 花月・羽衣・小鍛冶     | 長刀土心答 |   |    |
| 一一六三 | 八 | 六 | 経正・源氏供養・紅葉狩   | 蟹山伏   |   |    |
| 一二六四 | 八 | 五 | 小袖曹我・草子・若針・鐵輪 | 引括    |   |    |
| 一三六五 | 八 | 四 | 小督・杜若・角仙人     | 子盗人   |   |    |
| 一四六六 | 八 | 三 | 嵐山・井筒・黒塚      | 茶壺    |   |    |
| 一五六七 | 八 | 八 | 経正・班女・土蜘蛛     | 附子    |   |    |

| 回 | 年 | 月 | 日 | 能         | 楽    | 狂言 |
|---|---|---|---|-----------|------|----|
| 六 | 五 | 八 | 七 | 小督・羽衣・殺生石 | 清水   |    |
| 五 | 六 | 八 | 六 | 鶴亀・半節・正尊  | 二人大石 |    |
| 四 | 七 | 八 |   |           |      |    |

# 名古屋新能の沿革について

長谷晴男

名古屋市民を対象とする新能は、昭和四十

一年八月六日、市内若宮八幡社に於て催行された「第一回市民の納涼能楽の夕」より数へると、平成七年は「第三十回名古屋新能」といふ記念すべき新能となる。

若宮八幡社での新能は、筆者は二回に亘り観能した。名古屋市の中心地といふことで、満員の盛況。同社宮司川瀬進氏の「火入式」も拜見することができた。たゞ、左に記す諸点が気掛りであつた。

第一点は、能楽は「幽幻」を尊ぶ道である

が、舞台後方のビル壁面のネオンが色とりどりに点滅する情景は、能楽を催行する場所としては不適當であること。また車の騒音により、度々音声が消されたことである。第二点は、開演中に夕立にでもなれば、会場を移して続行することは不可能であらうといふことである。

尤もこれらは筆者個人としての実感であつたが、演能関係者も同感であつたので、能楽殿運営委員長として熱田神宮当局の許を受け

て、昭和四十三年八月より舞台を熱田神宮神樂殿前広場に移し、「第三回名古屋新能」として催行することとなり、爾来二十八回、市民に親しまれ、年々盛況を呈しつつ、現今に及んでゐる。茲にその沿革の概要を述べることにする。

○ ○

一、舞台としては当初、熱田神宮舞樂神事用舞台（三間四方）に檜懸、後座、地謡座を附け加へて假設舞台として使用し、斎館前

庭に西面して組立てた。

二、名古屋支部にて組立式舞台を新調し、見物者の増加に伴ひ、信長堀の方へ寄せつけ北面して組立て、椅一、三。脚程度を並べ前方若干の部分を棧敷席とした。

採光、音響等については、楽師でテストを実施し、萬全を期してゐる。

三、楽屋としては、熱田神宮齋館を使用、空調施設（冷暖房）完備で楽屋としては最良、楽屋の変更は無い。

四、開演に先だち、奉告祭を神樂殿に於て執行、名古屋支部会員参列、安全を祈ることになつてゐる。

五、火入式——元来新能は宗教的な色彩が濃厚なものであるで、たとへ市民納涼の催物であつても、火入式を重視し、私は昭和四十三年より平成元年まで二十二回奉仕したが、毎年、検討、改善を加へるほか、事前に嚴重なる打合せをして萬全を期したので、「火入式」は嚴然とした儀式として、

一つの型をつくり上げた。

### 〔概要〕

○松明二本に淨火を移し、奉仕員四員が神樂殿向拜に列立する。

○名古屋支部長、同副支部長二員が橋掛より舞台へ進み出で、舞台東寄りに西面して列立する。（袴着用）

○奉仕員が参進する、列次は左の通り。

○松明（学院学生）——○松明（学院学生）——○前導（橋掛宣又は官堂）——○長谷権宮司（熱

田神宮能樂殿運営委員長）〔狩衣・布衣着用〕

○松明役は舞台正面階下に於て左右に分れ相対して立つ。前導所役は権宮司を舞台に前導、権宮司は舞台中央南寄りに北面して立つ。前導所役は権宮司の斜左後に控へる。

○松明役一員舞台に昇り、松明を権宮司に進め、畢りて正面の篝火の位置に控へる。  
○名古屋支部長、権宮司の前に進み、権宮

司より松明を受けて舞台を降り、正面の篝火の位置に至り、薪に点火、畢りて復座する。

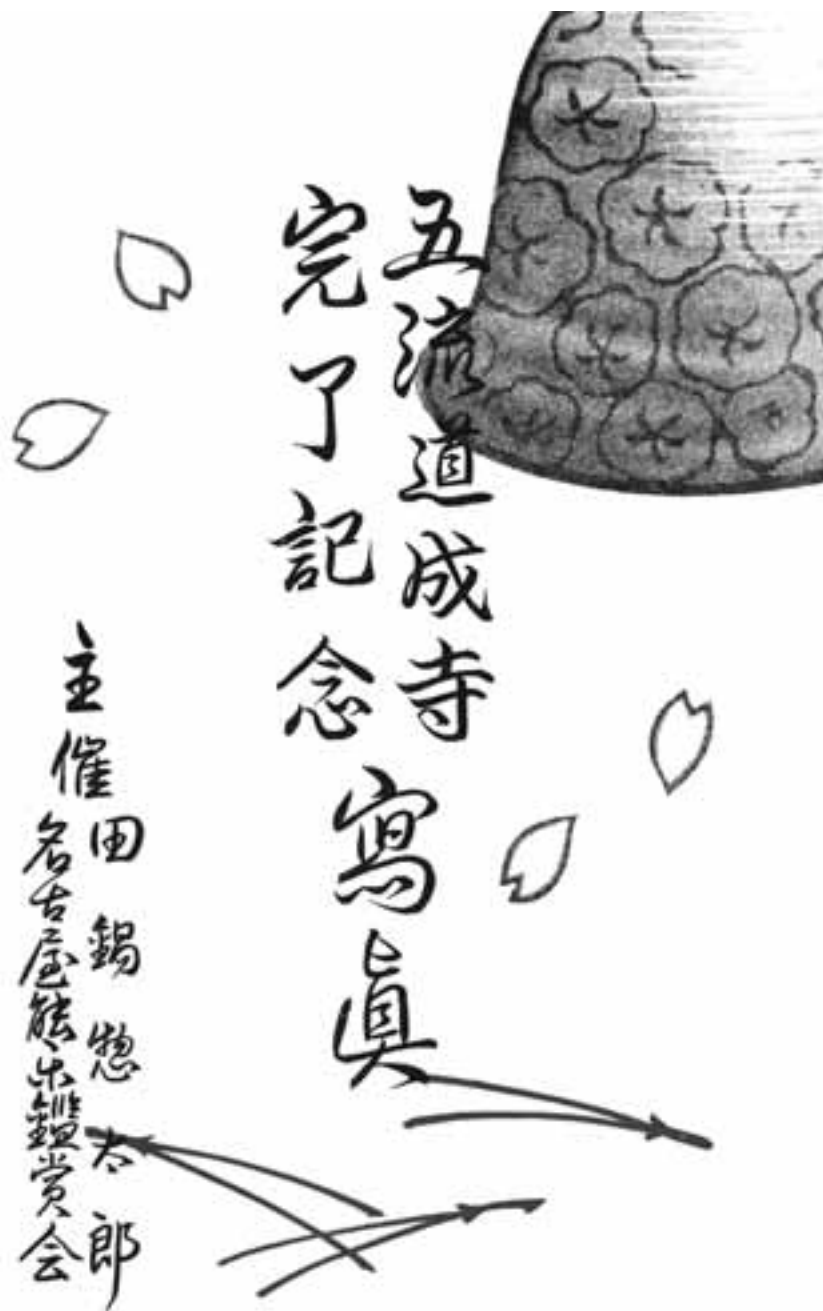
○同副支部は支部長に準じ、松明を受けて舞台を降り、舞台東側篝火の位置に至り薪に点火、畢りて復座する。

○各退出する。

権官司及び前尊所役は舞台の正面西寄りの床に着き、能一番を鑑賞、畢りて神樂殿に入る。支部長、同副支部長は火入式終了後、樂屋に入る。



昭和30年11月20日 舞台落成記念霞会 記念写真



五流道成寺

(第一回) 昭和三十一年三月四日

成寺 寶生九郎 高西村 泉滋太郎 田鍋惣太郎 谷口喜代三 藤田六郎兵衛 衛

間 茂山千五郎 茂山千之丞

鐘後見 宝生英雄 後見 辰巳孝 地頭 武田光雪

(第二回) 昭和三十一年五月三日

觀世音

宝生 宝生 弥生 木 琴 男 閑  
田飯 鍋惣 太郎 佐六  
前川 善雄 藤田 六郎 兵衛

三度之次第  
無頭闢  
赤頭蒼束  
間

赤無頭蒼東崩間

鐘後見梅若六郎 後見 觀世武雄 地頭 梅若武久

(第三回)

桜間竜馬

福指 粉王 川茂 十雅 之助 夫  
田下 鍋村 惣英 一郎  
森鬼 田頭  
光八  
春郎

四

按山臺山 按山亭四郎

鐘後見 本田 秀男 後見 桜間 弓川 地頭 桜間 道雄

(第四回)

金剛巖

岡治郎右衛門  
谷口勝三郎  
田鍋惣太郎  
杉小寺金太郎  
市太郎

臨

三宅藤九郎 和泉保之

鐘後見 種田治郎 後見 豐島弥左衛門 地頭 今井幾三郎

(第五回)

律刑多端

野島 信 田山本敬太郎 鍋郷太郎 森野田崎 光太郎 治郎

鍾後見 喜多節世 後見 後藤得三 地頭 喜多 実



昭和31年3月4日 五流道成寺 第1回 シテ 宝生九郎師（絵葉書）



昭和31年5月3日 五流道成寺 第2回 シテ 観世喜之師（絵葉書）



昭和31年10月14日 五流道成寺 第3回 シテ 桜間竜馬（絵葉書）



昭和32年1月27日 五流道成寺 第4回 シテ 金剛巖（絵葉書）



昭和32年5月3日 五流道成寺 第5回 シテ 喜多長世（絵葉書）

昭和四十年十月

金森連三先生 監修

名古屋市 市役所  
福祿壽車山車囃子譜范

若宮囃子保存会

名古屋市福祿壽車山車囃子譜范





福祿壽車人形咖啡子

編 織 車 人 形 子  
 1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100  
101  
102  
103  
104  
105  
106  
107  
108  
109  
110  
111  
112  
113  
114  
115  
116  
117  
118  
119  
120  
121  
122  
123  
124  
125  
126  
127  
128  
129  
130  
131  
132  
133  
134  
135  
136  
137  
138  
139  
140  
141  
142  
143  
144  
145  
146  
147  
148  
149  
150  
151  
152  
153  
154  
155  
156  
157  
158  
159  
160  
161  
162  
163  
164  
165  
166  
167  
168  
169  
170  
171  
172  
173  
174  
175  
176  
177  
178  
179  
180  
181  
182  
183  
184  
185  
186  
187  
188  
189  
190  
191  
192  
193  
194  
195  
196  
197  
198  
199  
200  
201  
202  
203  
204  
205  
206  
207  
208  
209  
210  
211  
212  
213  
214  
215  
216  
217  
218  
219  
220  
221  
222  
223  
224  
225  
226  
227  
228  
229  
230  
231  
232  
233  
234  
235  
236  
237  
238  
239  
240  
241  
242  
243  
244  
245  
246  
247  
248  
249  
250  
251  
252  
253  
254  
255  
256  
257  
258  
259  
260  
261  
262  
263  
264  
265  
266  
267  
268  
269  
270  
271  
272  
273  
274  
275  
276  
277  
278  
279  
280  
281  
282  
283  
284  
285  
286  
287  
288  
289  
290  
291  
292  
293  
294  
295  
296  
297  
298  
299  
300  
301  
302  
303  
304  
305  
306  
307  
308  
309  
310  
311  
312  
313  
314  
315  
316  
317  
318  
319  
320  
321  
322  
323  
324  
325  
326  
327  
328  
329  
330  
331  
332  
333  
334  
335  
336  
337  
338  
339  
340  
341  
342  
343  
344  
345  
346  
347  
348  
349  
350  
351  
352  
353  
354  
355  
356  
357  
358  
359  
360  
361  
362  
363  
364  
365  
366  
367  
368  
369  
370  
371  
372  
373  
374  
375  
376  
377  
378  
379  
380  
381  
382  
383  
384  
385  
386  
387  
388  
389  
390  
391  
392  
393  
394  
395  
396  
397  
398  
399  
400  
401  
402  
403  
404  
405  
406  
407  
408  
409  
410  
411  
412  
413  
414  
415  
416  
417  
418  
419  
420  
421  
422  
423  
424  
425  
426  
427  
428  
429  
430  
431  
432  
433  
434  
435  
436  
437  
438  
439  
440  
441  
442  
443  
444  
445  
446  
447  
448  
449  
450  
451  
452  
453  
454  
455  
456  
457  
458  
459  
460  
461  
462  
463  
464  
465  
466  
467  
468  
469  
470  
471  
472  
473  
474  
475  
476  
477  
478  
479  
480  
481  
482  
483  
484  
485  
486  
487  
488  
489  
490  
491  
492  
493  
494  
495  
496  
497  
498  
499  
500  
501  
502  
503  
504  
505  
506  
507  
508  
509  
510  
511  
512  
513  
514  
515  
516  
517  
518  
519  
520  
521  
522  
523  
524  
525  
526  
527  
528  
529  
530  
531  
532  
533  
534  
535  
536  
537  
538  
539  
540  
541  
542  
543  
544  
545  
546  
547  
548  
549  
550  
551  
552  
553  
554  
555  
556  
557  
558  
559  
560  
561  
562  
563  
564  
565  
566  
567  
568  
569  
570  
571  
572  
573  
574  
575  
576  
577  
578  
579  
580  
581  
582  
583  
584  
585  
586  
587  
588  
589  
590  
591  
592  
593  
594  
595  
596  
597  
598  
599  
600  
601  
602  
603  
604  
605  
606  
607  
608  
609  
610  
611  
612  
613  
614  
615  
616  
617  
618  
619  
620  
621  
622  
623  
624  
625  
626  
627  
628  
629  
630  
631  
632  
633  
634  
635  
636  
637  
638  
639  
640  
641  
642  
643  
644  
645  
646  
647  
648  
649  
650  
651  
652  
653  
654  
655  
656  
657  
658  
659  
660  
661  
662  
663  
664  
665  
666  
667  
668  
669  
670  
671  
672  
673  
674  
675  
676  
677  
678  
679  
680  
681  
682  
683  
684  
685  
686  
687  
688  
689  
690  
691  
692  
693  
694  
695  
696  
697  
698  
699  
700  
701  
702  
703  
704  
705  
706  
707  
708  
709  
710  
711  
712  
713  
714  
715  
716  
717  
718  
719  
720  
721  
722  
723  
724  
725  
726  
727  
728  
729  
730  
731  
732  
733  
734  
735  
736  
737  
738  
739  
740  
741  
742  
743  
744  
745  
746  
747  
748  
749  
750  
751  
752  
753  
754  
755  
756  
757  
758  
759  
760  
761  
762  
763  
764  
765  
766  
767  
768  
769  
770  
771  
772  
773  
774  
775  
776  
777  
778  
779  
780  
781  
782  
783  
784  
785  
786  
787  
788  
789  
790  
791  
792  
793  
794  
795  
796  
797  
798  
799  
800  
801  
802  
803  
804  
805  
806  
807  
808  
809  
810  
811  
812  
813  
814  
815  
816  
817  
818  
819  
820  
821  
822  
823  
824  
825  
826  
827  
828  
829  
830  
831  
832  
833  
834  
835  
836  
837











《資料編》 第三部 豊橋の能楽の歩み



[illegible]

出巻の人だったから、それなら  
とから、いかに公衆の仕事を増やしていれば、根が深まると  
を好まずにたまたま、酒をなくすという方面がなくて

だで、大へん驚きかまふからう。さういふあつた  
 ことを、お母さんといふのは、町民の古くから、第一の人の  
 こと、無理に頼むといふは、いふから、小公孫も、母に愚問弱  
 問ひながら、口をきかす。母は、  
 町民の成るに、いふと、母は、  
 だ、お母さん、下町、お母さん、  
 だ。小公孫は、お母さんの

久松氏が此のとき言は、貴師の所習は社の神祇學を、無理に讀解せしむ、お祭の時には祀の由來をしていた。祭樂は古田邊から傳へてきたといふ、久松がそれから廢て、道成寺

小久保 彦十郎

[illegible]

此の書物は、  
田沼重家から  
江戸へ持ちこた  
れた。彼が書簡集に記述するは、終身の読本もの加能  
といふものの性質であった。江戸人は決して電氣を嫌

「さう、曹鳳寺の本堂は小公侯参十郎一人の管理となつてゐたから、眞實家であることが判明された。」「  
また、この口入から聞かせるに、精進屋でなくとも小公侯の家へ来たといふだけであらうが、」

(一六)

小久保 彦十郎  
―― 士族たちにも能楽の指南――

[illegible]

春播藝名(49)

其の國の典章にあり、しに其の土地を分與すべし。然らずば、  
 其の國の土地を分與すべし。然らずば、其の國の土地を分與すべし。  
 (49)



來稿者姓名 (48)

下連は、そのなかで、  
 時に破産でも宣告せられて、小侯は御用断絶で、  
 土庫などは奪って来、隠匿してなければならぬ。そして小侯  
 は、半ば同族殺しなど、城へ入能るの機をいへどもなつて  
 しまつた。

(皇女理一郎帝談)

[illegible]

敵々たるものがある。しかしそれを離す、生来の西にいら  
 るものは、感情ではこの小父娘十郎の素顔をもっと愛おしむ  
 。そのうちに、素顔を明けたらだが、小父娘の素顔とは、



變態はそれぞれとて、  
主人に知らずなだけで、  
普通に、髪で覆って来られた。  
さうしてそれを手淫にしよう  
とかなだかに来ったのだから、  
もう一人の男の手にとら

# 小久保 十郎

何處へやら鎌倉の古く、遠藤屋へやら、お徳の遺骸を  
 山に葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を



の土地が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を

# 赤松 花子 (50)

鎌倉の古く、遠藤屋へやら、お徳の遺骸を  
 山に葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を

# 小久保 十郎

小久保はついで、ついでに鎌倉の古く、遠藤屋へやら、  
 山に葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を



その遺骸を山に葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで

# 赤松 花子 (51)

あ、花子、お徳の遺骸を山に葬らうと、三十五坪の地を買った。  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで  
 大木が三つ、土田に三つ、お徳の遺骸を  
 葬らうと、三十五坪の地を買った。そこで



# 小久保 彦十郎

「教えるの自分で、習うの自分で」

そのあとで野矢先生は「私、それにはお断りだ。その断言は、私のまことに名字が似合ふから、まづいざ先生から稽古をうけなさいと野口俊彦に言った。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。

「またお断りですと云うのは、先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。

「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。

# 赤穂浪士

(56)



野矢先生は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。

【赤穂浪士 一巻】



野矢先生は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。

野矢先生は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。

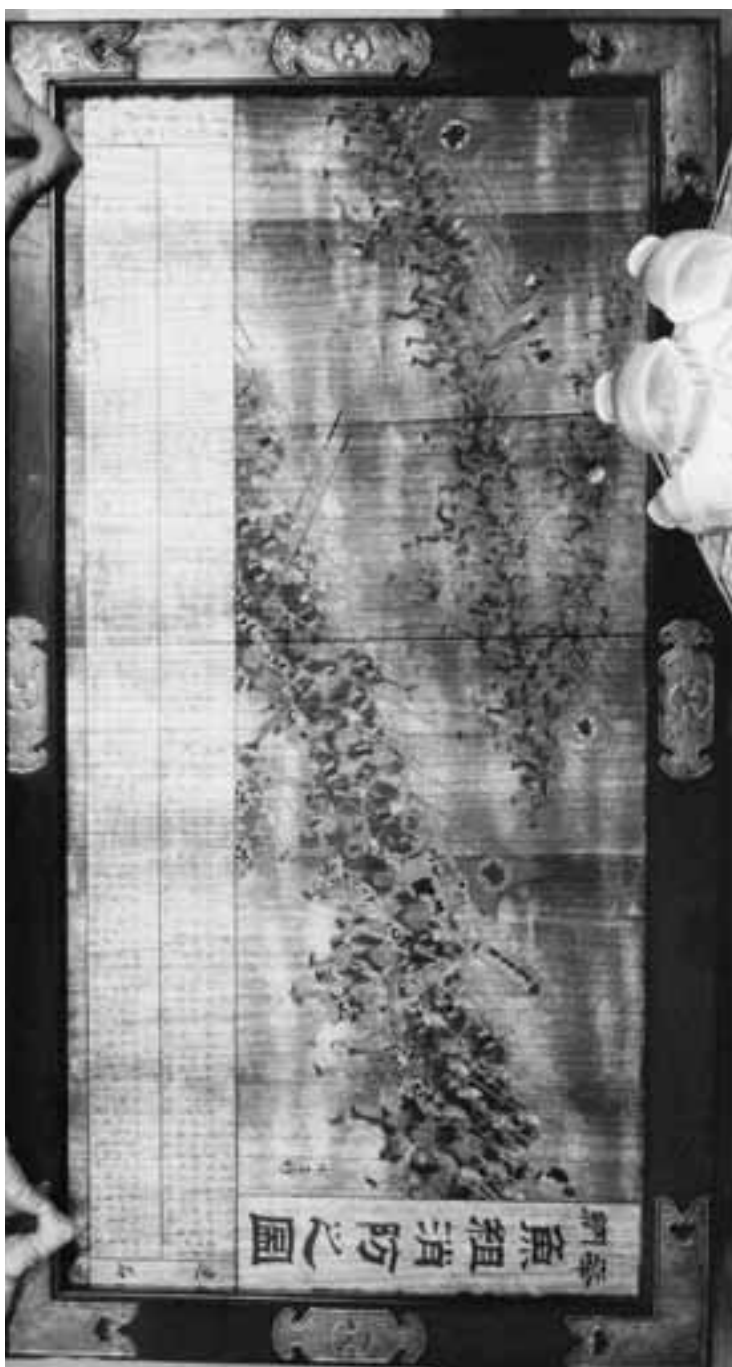
【赤穂浪士 一巻】

「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。

「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。

「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。

「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。野口俊彦は「先生、それは何で？」と問うた。



魚町消防之図 額 奉納者名簿（安海熊野神社蔵）



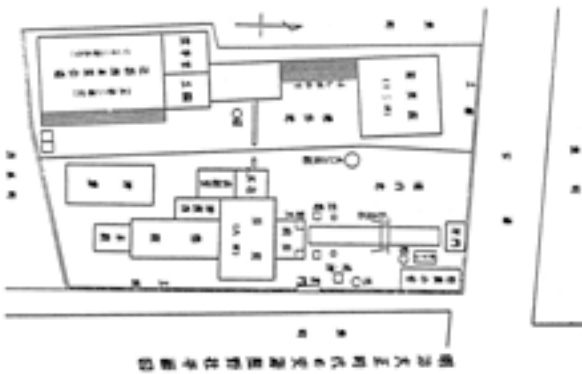


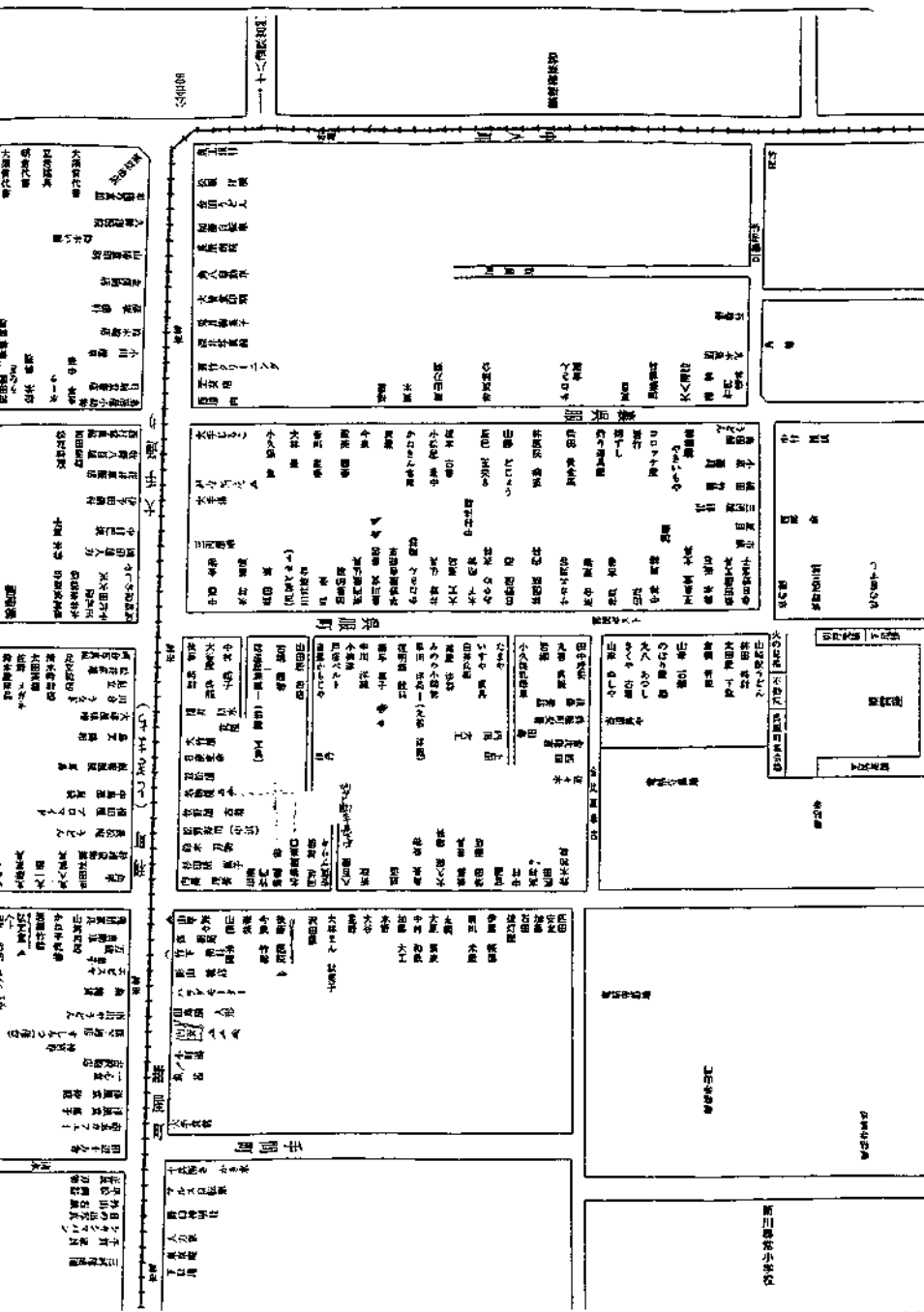
明治24年 6 月 竹内市藏 (竹内倍吉父親) 奉納額 (曲は烏帽子折、安海熊野神社蔵)



[illegible][illegible]

(*cf.* 呂邦興與謝明達) 卷(六) 謝明達( 卷四一 謝明達傳 )





昭和10年前後 豊橋商業中心地家並及地図



昭和十一年

竹内倍吉氏の三十年回顧録（明治18—昭和36）76才

（原文を忠実に清書するも、ただ変体仮名は変換不能のため現代仮名とす）

（なお原文には句読点がほとんどなく、読みづらいので適宜入れることにした）

全14頁

## 謄参十年

竹内倍吉

はしがき

一夕新朝報社長山本新三郎氏を訪問して御願ひし、貴重なる紙面の一部を拝借して一週一回魚町能楽史を書きつらね、故人先覚者の功を一般世上に発表し併せて斯界同好者の御参考にもならんと、自身丈けは大勉強のつもりにて今日より思ひ出すまゝの事柄多少の横道えそれる事もあらんかな、各氏好奇心と御同情を以て御一読願ふ次第です。

昭和十一年一月誌

暮の十一月名古屋の栄町角で三十年前豊橋にての同門国宗鹿太郎に御目に懸つて立話し二三分、宅へ帰つて見ると故人石部先生の事を思ひ出した。

東田大蓮寺の西部に一基の石碑が在る。精通院実譽達玄居士碑の表に故石部實藏君之墓石に大正四年九月建之松風會と明記した一般市内に幾千の墓あつても斯様なのは少ない。申す迄もなく門下たる松風會が建てたのである故師の余徳の表われであ

る。

魚町能楽界其当時は東三河能楽界の恩人である石部師の先生は、魚町故人小久保彦十郎氏、今一人豊橋出身当時横浜在住の故人松崎新吉氏、其外小久保氏門下に故人魚町上浜清一氏（石部師の実兄）、藤田市太郎氏、渡辺直次氏、現在に於いて大口喜六氏、長阪理一郎氏、滝崎吉次郎氏、彦阪勝太郎氏（是の人は小久保師の相続者）在り。

三十四五年前魚町能舞台の新築が出来て目出度舞台開きが催された。其時は筆者は町内には生れたれども能楽は習つて居らんで拝見丈けに出懸けた。小久保師は魚町能楽界即ち東京から名古屋へ行く迄に殆んど田舎には皆無と云ふ程の能舞台その大功労者唯一の先生でした。立派な体格で装束を付けられ翁のシテを勤められた。何となく有難く感ぜられ、其多年の努力が引続き今日魚町に残つてある訳で、今の様に舞台に電気等は無い時代、四隅には古代の蠟燭然も今の若い人の見た事もない大きな者、それが風が吹くと消えもする様に成る。見てもハラハラして居つた変れば変る者です。

蠟燭から瓦斯へ

小久保師の家は油屋彦兵衛と云つて旧吉田城主大河内家の御用達をして一、二の旧家、其為めに家中の人々の御相手に出た当時家中の中に和田八千穂氏の先代は小鼓方安松氏も同様。長

阪氏の話には、今の深井写真館の裏に能舞台が在った由で、数寄と熱心の結果が小久保師の一大田舎に一寸類の無い仕事大なる失費も一向苦にせずして斯界の爲め努力せられたのである。

此処で一寸能謡或は狂言等に向趣味の無い、又色々の關係上其道を知らぬ人々に説明申す事がある。

申す迄もなく魚町の能は魚町熊野神社の祭礼に催される。八町の神明社鬼祭、又、六月吉田神社の花火祭も同様の魚町氏子の催しであるが、能樂は舞台へ出る人々即ち其仕度は鬼祭又は花火祭の如く、神事係の人々が一ヶ月又は二ヶ月前に準備に掛かる。其事の如何は兎も角、左様な短時日で出来ないシテ・ワキ・大小鼓・笛・太鼓・狂言・地謡凡て昔より約束されたる道に依りて一同大衆の前に演ずる国樂である。其内の一人が約束を間違えても其一番はメチャメチャになる恐れがある。其練習に想像以外の失費を要すために商賣に追はれる。魚町の中で全部の人は舞台に立つ人が集まらぬ。小久保師時代にても市内は勿論、新城町からも来てそれでも不足して、大半は名古屋から頼んで来た。其人々は名古屋で一流の先生方である。小さな魚町の能も東三河の殆んど全部の斯界同好者の集まりである。三十余年後の今日も多少町内の人が加わった丈で、不相変人は足らぬ勝で催主としての魚町側には、隠れたるなやみが絶えぬ事である。されば他地方より出演の人々も中々舞台へ立つ迄には、其仕度即ち練習とても容易な事ではない。

芸と申しても近く徳川時代の能樂に就て考えると、能樂は將軍家を主として能樂各關係者は全部御家中である。又、加賀の前田家、熊本細川家、岡山池田家、大名の能とても同様出演者全部の扶持を頂戴して、士分御家中左様な人々の只芸道に精進すればよいので、別に生活の苦の無い名人上手もあつた訳で、其頃江戸で町人の金持ちが極く内々で屋敷内で舞台を造り能を催した事が知れて、町人の身分で上を恐れぬ事不都合なりとの故を以つて家屋敷財産没収<sup>ケンシヨ</sup>所「闕所」を申し渡されたと云ふ記録がある。

能は大した仕事である。今日東京の各流家元其他の舞台も数十万円を要した建築物二、三ある。其維持費も中々の事、市内同好者然も宝生流は徳川公を会長として松平伯其他一流の実業家の會員によつて催されてある。梅若は三井家、金春は細川家、皆支持者がある。

是れを田舎の豊橋で催す<sup>其</sup>らの難儀は申す迄もない。小久保師其他の關係者が金員以外の寄附は一般人の思ひ及ばぬ事である。

さて今日で比較して見ると小久保師時代の能は、実に立派な者であつた。シテ方は名古屋大野先生によつて門下小久保師を第一として、続いて小久保門下のシテ方の人々、ワキは当時名古屋にて名人と評された西村大藏師（今の西村弘敬<sup>コウケイ</sup>氏の祖父）、大鼓は名調吉田方條師（吉田秀夫<sup>ヒロオ</sup>氏の祖父）、外に新城町から阪

巻氏、小鼓方市内は前記和田氏、安松氏の外に本町に石田不二藏氏、町内に尾崎喜代治氏、笛方は名古屋藤田流家元藤田清兵衛師、町内は先代佐藤善六殿、故鈴木半藏氏、太鼓は町内に鈴木勘右エ門氏、当時にて相当の年輩である。

中に思い出す人々の内に、大鼓の吉田師がハゲ頭の目立つ姿にて、四方によく通ずる掛声で鼓を打つ。其調子の鳴りひびく音実に当時目立つて見えた。現今町内の古老の人々多くの場合に談り草に残つて居る。

西村師は尾張徳川家能樂師の内で当時東西に名を知られた人で、ワキ師はシテを助ける一番大切な人、然もワキとして立派な計りでなく、シテ方大小四拍子凡ての事に悉しく、随つて舞台に立つてシテと應体する時、又凡て相手の消息を心得居る為め一番の主役たるシテの引立つて？と舞台を活かす事名人と云はれた人。当時豊橋の能が活氣ありし筈である。

今日の如く世の中が便利になつても、能樂其者は蠟燭の光りで舞台を照らした時代と少しも変わらぬ事をやるのである。進歩も改良も無い。それは能樂其者の生命である自主的「保守的」の藝術たる能樂を改良すれば、他主的「進歩的」の芝居化する恐れが有る。芝居化すれば能樂の値打は零になる。

又狂言方として名古屋から井上菊次郎氏（当時六十才位と見えた人）、是の人は晩年東京舞台へ立った時、全東京の狂言方を一なめにした東西に名のひびいた人である。狂言は凡て言葉が

ヒヨオキンである。是れを自然に出す事に依りて一般の人に面白く見せるので、井上氏はやせ方の人、カン高い声でシャベリ出す時は一同耳をソバ立て聞き入る。其動作の枯れた姿は一種のコットオ品「骨董品」とも見えた。

魚町の能は七月七日八日、其一週間前から加納屋（鳥居新三郎家）え泊り込んでの稽古があつた。笛の先代佐藤氏とも極めてコン意「懇意」で色々の話の種を残した。

先生がよければ弟子も上手になる。然し当時は左様に時間の余ユウ「余裕」が有つたので、現在二代井上菊次郎氏も筆者え話の際に、今日の時勢に於いて狂言を教える人習ふ人が如何にも不勉強で、先々の事を考えて心細くもなりいやにもなると聞いて居る。

#### 舞台披能

舞台披きの時二日翁が催された。一日は小久保師外に一日は町内上浜清一がシテをつとめられた。小久保氏に続いて町内有力家として当時大分尽力せられた人。町内のシテ方は、八島―藤田市太郎、班女―渡辺直次、野守―滝崎吉次郎、町内外は、安宅―大口喜六、熊野―長阪理一郎各氏。拍子方「囃子方」は記オク「記憶」少なく、本町―石田不二藏、町内尾崎喜代治、新城―阪巻久次郎、ワキ方（西村大藏師の実弟として）新城町―川村類造の各位、外に名古屋から大鼓永田虎之助―小鼓田鍋惣

太郎、青木恒治各師出演せられた。

今思ふと素人のシテ方として相当の重荷の様に考えられる。其能が催された事は当時の人々の勢がよかつた事を証明して居る。多少無理な処もあつたと想ゾオ「想像」されるが、凡ての人の熱心のたまものである。

其時に用いた面装束オビは今日も同様の品である。大河内家が丹精して集められた品、現在に於いて六十余面ある内の二十点計りは全部天下の逸品、其内の三、四点は全国幾百の能面の中で第一に数えられる品である。装束とても大半は全国にまねる品である。此面装束を付けて催す能、土地のホコリ「誇り」で有る。

此の能のすんだ翌年からボツボツ人が変り始めたので、程なく第一の先生小久保師が陸奥の国弘前へ転居せられ、あとを上浜氏外前記の人々が引き受けたわけで、其中に故石部実藏師が加わつた。蠟燭の舞台から瓦斯の舞台へ移るのである。

此の中間の事柄を書かぬは申訳がないが后日にゆづり度い。

## 石部先生の事

一番熱心で又其為めに家事の差支えるのも忘れて尽した人は石部師である。筆者は明治四十一年頃から石部師の元へ習ひに出かけた。其時のお宅は萱町福谷藤七氏の南で、確か其あとに今の中村病院長が代つて入られたと思ふ。上浜氏の実弟で町内

とも縁故深く小久保師のあとに代わる人が無かつたので自然に一人で先え立つ様になつた。

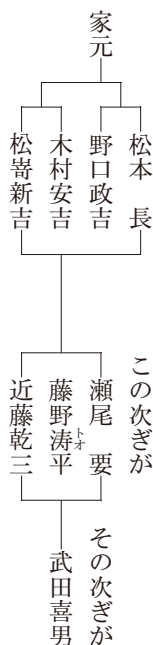
稽古に熱心なのは驚く程で当時門下生三十余名あつた。其中には止める人新らたに入る人もあつたが、我々が習ひに行く様になつた時の石部師の先生は松崎新吉師で有る。豊橋出身として横浜に見えた。此の人は素人とは申しながら先代家元宝生九郎先生の直門である。宝生九郎師は素人の弟子は取らぬ教えぬと云われた人で、其内にも随一の門下生で当時三十余才、今日宝生流の後見役たる野口政吉師と同門にて、武田、近藤諸師の先輩である。

名吟家松崎師の事を申述べる。

松崎氏の先考は豊橋旧家中の中村道太氏。東京へ出られて一時実業界に名を擧げた人。当時は東京能楽界は衰への極、名人宝生九郎先生も殆閉口せつゝあつた時代にて、中村氏が宝生家元を助けて色々尽力せられ、其中で次男として松崎氏が名人の教えを受けたのである。何でも三十オソコソコの年で二百十番（現今は百八十番に改正残り三十番は廢曲となつた）の内大半一順して二度目の稽古に移つたと聞いた。主として素謡・仕舞位であつた様に思われるが、豊橋としては宝生流には極めて密「密」な関係がある松崎氏は又普通よりも声のない人でナンギ「難儀」などの持主。その人が多年名人の訓練によりて、きたえ上げた謡は実に何共申し様のない渋味を持って、正座して

諷<sup>ウツ</sup>われる時の姿、声、三十年後の今日も思い出される。

宝生直門の順序は



現在家元重英氏は当時加賀に居られた様に思ふ。

松崎氏の声は松本 長氏に近かった。名人宝生九郎氏七十余才、松崎氏三十余才、当時九郎先生は一ケ年に一回位しか地方出張はせぬ時代、然かも田舎の豊橋え一回見えた。是れが宝生九郎氏始めで又終りでもある。今は無いが船町の川堤神明社は湊町の北に翁屋（醉翁亭）と云ふ料亭があった。その座敷で盛大な素謡會が催された。出席者百余名と云ふと如何にも少人数の様に思われるが、世間一般の人に通ぜぬ能楽界其当時としては多人数の集まりであつて、名人九郎先生を聞かんとして東三地方市内も関係者以外の特志者出席して一日を過ごした。九郎先生は熊野のシテ一番諷<sup>ウツ</sup>われた。ワキは確か松崎氏、同行者として野口師藤野師が見えた。

謡本を見て居ると九郎先生の声は、張り切った吟を持つてすらすらと運ぶ名調は、二十才<sup>ハタチ</sup>台の人の諷<sup>ウツ</sup>ふ声の様に聞えた。或

る人の話をあとで聞いた。日本に名人二人あり、宝生九郎と攝津大掾（元の越路太夫の老後の名）共に普通の人の持たぬ調子が出る。それは下の声上の声皆共に普通人より一段高い声一段低い声が出たとの事である。

今日にても家元を招じて謡會等を催す事は中々至難。三十年前に豊橋で催された事は、松崎新吉師の当時の宝生流に於ける勢力のありし事を証明して居る。豊橋の生んだ能楽界名士の一人である。

松崎師が豊橋の素謡會に来られる時に石部師が教えを受けたので、又自身横浜へ出張せられた事も有った。松崎師が豊橋へ見ると言ふ話を聞いて安城町から島村麟太郎氏が時々來會せられた。当時の県技師で非常に熱心家四、五年前病没せられた人。筆者と同様に名古屋永田門下で同流。筆者は名古屋能樂堂へ出る時は大鼓、島村氏は小鼓。二十余年後の昭和三年より五十の間は豊橋の筆者の会え度々來て頂いた。六十足らずでセイ去「逝去」せられたが、名古屋の素人、實際は玄人同様沢山門下が有った。能樂界では随一の名手、小鼓の調子よく素直で、筆者が同席した時も誠に気合が合体して打ちよかつた。

現在の名古屋能樂堂で追善會が催された時も、参会者会員として百余名もあつた非常の盛会。故人の功勞を思い出して此処に一般の方え御披露する次第である。

石部門下として当時重なる世話方今日で言ふ大幹部は神野三

郎氏、湊町原田覺次郎氏、故河合 清氏（元の河合病院長）で有った。石部師時代は毎月一回素謡会が開かれて、多き日には廿何番午前より始まって夜七、八時頃に終った。会場は湊町原田覺次郎氏のお宅を主として、松寄師の来会の際は上伝馬賢養院を借りた事もあった。

当時の豊橋駅長で曾根氏と云ふ人、月に十五回即ち駅の休み日には必ず石部師の宅え稽古に出かけた人。先ず随一の熱心家で然し余り上手な方ではなかった。失礼ながら調子が悪くて同吟には困ると言ふ側の人。

以上の人々が魚町の能に直接に効り無かつたとしても、当時の人々の熱心な団体によりて、一年一回の能の地謡（主として）に出るために稽古せられた訳で、主に石部師の努力の決果であるが、又同門の諸氏の力にも依る事。一、二年あとから入門せられてから引続いた人が、故山本新次郎氏。会場は石部門下として原田氏のあとを受けて、松葉三番町河合 清氏のお宅で催された。石部師として最終の会場となった。

明治四十一年頃から大正三年迄六、七年間は、魚町の能は石部師を主として門下一同によりて催された。先輩傍係（傍系）（外様大名格）として町内はシテ方故藤田市太郎、故上浜清一、滝寄吉次郎。笛方故鈴木半蔵。太鼓故鈴木勘右エ門、故佐藤善七（㊦）呉服店主として㊦の通り名の方がわかり安かつた。

当時は囃子方に一番困った時で、名古屋の先生方全部呼ぶと

云ふ事は中々出来ぬ時代で、兎に角四拍子の人数さえまよればよいと云ふ方針を立てた。処が石部師も全部の囃子を教える事となると一寸差支を生じ、第一に手附が足らぬ。是れは能楽道にては一人一役の定めがあつて、舞台上にて差支の役を代理する時に於いても、心得のある人があるとしても、その人がシテ方ならばシテ方、囃子方とても四拍子の内一役以外の代理を許されぬ事になって居る。是れは藝術を尊重する意味に於いて堅く約束されて居る。

四拍子の人にも困ると云ふ有様であつた。そこで考え出したのは手附を揃える事。第一に笛は佐藤家に森田流の立派な手附が有る。太鼓は金春流の手附が鈴木勘右エ門、佐藤光次郎（㊦）商店）両氏の持ったので間に合せる事になった。大小の手附に困ったそこで相談の決果、石部師を主として彦阪勝太郎、現代佐藤善六（先代佐藤善六氏は笛方であつた）、筆者と四人で名古屋から小鼓の先生土屋重実師を呼んで稽古を始めた。

土屋先生が見えたと石部師の隣家に旅館が有つたそこで一泊して頂いて習い始めた。朝早くから夜十時迄殆んど休みなしで四人が稽古した。それが名古屋では例の無い事。始めから能一番の稽古である。先生の骨の折れる事は申す迄もなく、習ふ方は猶更で当時は六ヶ敷とか何とか考ふる余地はない。無我無中「夢中」である。一つは手附を取ると云ふ目的からで、彦阪氏は杉山村から泊り懸けて稽古に見えたので有る。

其年の七月魚町能に久方振りで吉田方條師が孫の秀夫氏（當時十七、八才であつた）を連れて出演せられた。土屋重実先生と石部師以外笛方は魚町八百半鈴木半藏、太鼓<sup>⑤</sup>以上の囃子方で二日間の能が催された。吉田方條師の大鼓で筆者が敦盛の小鼓を一番打った。シテは故井川平吉氏、地謡は無論松風會一同、筆頭は何と云つても声のある人だから神野氏、続いて故河合清氏、原田氏、国宗氏（當時豊橋警察署長）外中々他人数であつた。

今考えると吉田秀夫氏が羽衣の大鼓、小鼓佐藤善六氏で、十七、八才で能一番打ったが、恐らく名古屋では未だ々々豊橋が吉田氏の初舞台であつた事と思われる。

然し名人吉田方條師一人丈け加わつても外が成つて居らぬので、兎に角催は出来たが先づ々々素人能として出来のよい方は無かつた。

然し当時の勢と熱心な事は魚町の装束が他へ持出す事を禁ぜられて有るので、二、三年后には石部門下で新らしき装束を買入れた。其二、三年の間に新らしき囃子方として、石部師の門下故林 弥八氏（呉服町の）が大鼓、小鼓方として故河合 清氏が加わつた。其熱心に集めた装束も今日では空しく魚町に保管せられて有る。使用する人が無い、否、人が足らぬのである。

#### 松風會の地方能

松風會を主として勿論町内のシテ方囃子方も加わつて（狂言は全部魚町）の素人能が岡崎―田原―浜松で各一回づゝ催された。三十年後の今日迄もそれ以外に前三ヶ所では豊橋素人能以外に能が催された事は無いのである。毎度並べ立てるが、能の準備に必用「要」なる即ち素人として馬力をかけての稽古をする人がないのである。

一番面白かつた事は田原能である。田原には彦阪氏の門下の人々有り地謡に加入せられた。場所は巴江神社の社務所で、巴江社の祭礼に奉納せられたわけで随分せまい所。

現今と違つて田原へ行くにも大変である。牟呂から渡船が出た時代で、二時間も三時間もかかつた。当日二十余名田原行に馬車で行つた。四、五台の馬車（乗合六、七人）を買切つた。

時間は二時間も掛る。今日で見ると実に不便な事である。時は十月末日で日が短かい、夜になった。見所は野天で立見の人々大部分。彦阪氏はシテ一番つとめられた。俊寛、羽衣、舟弁慶終つて一同木戸三樓え一泊した。二日懸りの催であつた。舞台がセマイ為めに、造り物の舟を出すに囃子方の頭の上えかける様にして出した話の種になった。

岡崎行は矢張駅から鉄道馬車で行つたので場所は確かに記憶せぬが、別院の本堂を拝借して舞台樂屋見所を取つた様に思われる。上浜氏が羽衣のシテで、當時岡崎同好者の催で有つたが

非常の盛会で、双方共満足して帰った。

浜松行は会場は五社公園内演武館で上を楽屋、下え舞台を取って全員殆んど満足、実に見所の準備一切立派な事であつた。

石部師の元え浜松町有力家（銀行頭取）小竹録之助氏（現在も浜松市宝生流の重チン「重鎮」で有る）往復せられ親交有り。

其決果浜松では能が催された事が無いので、一般の人にも見せて斯道の進歩に供したいとの趣意から、市内有力者全部を奨めて全員を集めたので、当日一同会場に着いて驚いた次第で、鉢木を町内シテ方瀧寄吉次郎氏、ワキは飯田 新氏。筆者は切能舟弁慶の時に後シテの出で長刀が装束にかかつて困った。あまりあわてたので法被（ハツビ）の肩を取る事を忘れたためで、舞台で困りはてた。然し幸にも大盛会で終った。石部師時代の能の白ビ「白眉」である。

喜多流飯田俊徳氏

石部師並に魚町能に絶大な後援者として、故正四位勲四等飯田俊徳氏が有った。飯田医師のお父さんで当時隠居せられて豊橋神宮寺の一部に家を新築せられた氏は、喜多流として今の家元喜多六平太氏を助けて功有り、今の家元から免許皆伝即ち素人としては全国に例の少ない事で、其道に尽された人である。

飯田 新氏は謡を石部師に就いて習ひ宝生流であつたが、お父さんの熱心の決果ワキ師として魚町舞台に立たれて今日に引続

き、三十余年に及んで居る。是れは魚町とは極めて密切「密接」

な関係が有り、飯田氏のお宅にワキ方として大切な手附が有る。外に石部門下としてワキ方大戸直則氏（故東田郵便局長大戸

氏のお父さんで当時六十才位で有った）、是の人は実に一流の謡方で舞台え立つ時の姿、謡ひは全身に力を込めてシテ方に向ふ時の気合は、実に素人とも思われぬ態度であつた。年のかげんで時には絶句等もあつたが、決して舞台えスキを見せなかつた。

飯田氏が喜多流として魚町能の中へ一番撰待（シテ方として）を出された。特に石部師がワキ方（是れは實際はシテ方の石部師として許されぬ事になつて居る）、其他同門方が参加して宝生流の地で催された。あとで各方面からヒナン「非難」が有った由である。是れは当然の事であるが、又魚町として飯田氏の後援に対して特に承知の上で参加したのである。名古屋では驚ろいたそうである。大小は確か吉田方條師、土屋重実師、笛は魚町八百半？氏であつた。

撰待の能は申す迄もなく大曲である。能の安宅の後編としてシテは佐藤継信の母、ワキ方は安宅のシテ役としての弁慶は、接待の能にはワキ方として主従一行十三人。実に能樂の真髓「真髓」を極めた大曲である。名古屋でも三十年間に出た事は余り聞いた事が無い。先生でも度々は出さぬ曲である。素人計りの魚町舞台で催した事は、飯田氏の努力の決果である。中には名古屋から東京在住の家元喜多六平太氏え飯田氏が實際免許皆伝

であるかどうかと聞かされた人もあったとの事である。

当時は比較的都会の名古屋よりは魚町の少人数の催が熱があったので、石部師時代は先づ々々魚町能の賑やかな時代であった。

是の時代には豊橋から名古屋の舞台えシテ方として子供丈けで一番催に出演した事があった。夜討曾我シテ一長阪氏子息(現今の千才楼主)、ツレ十郎上浜氏次男(現在上伝馬町の竹内玄洞医師)、狂言方として故鳥居音次氏(加納屋の次男)。子供丈けで一番催す事はめつたにない。名古屋で大に好評を博した。地拍子は勿論先生であった。

其頃は一般に人気ものゝん気な方であつたから稽古の日数も長かつた。七月七日の能の番組が極まると石部師は六月一日頃から毎晩魚町の舞台で稽古を始めた。立方、四拍子、地謡凡て全体の復習である。今日では市内何れの神社でも毎日参拝する事であるが、其頃は魚町の境内は入口に門があつた(現在新銭町の喜見寺の檜造りの門が熊野神社の正門)。そして七月祭礼の外は一年中出入は無かつた。舞台の中の現在魚町集会所も戸閉めで、即ち平常御参りする人々は門の外で拝殿に向つて御参りして居つた。夕方になると先生の石部師が大抵一番先に出勤。町内は門下としては筆者一人丈け、外八百半、㊦、加納屋(狂言の先生)。第一番に先生が門をあけて(向側の杉本屋に鍵が預かつてあつたので毎日借りて出入した)中へ入る。そして夜十一

時十二時頃に終る。先生が一番あとに残つて鍵を杉本屋へ返却して帰宅すると云ふ有様。

先ず今日の人では出来ぬ事。如何に斯道に熱心であつたか、又門下も其力に引かれて多忙の中にも都合して集まり、且又多大の助力もしたのであつた。

よく話が出たのは故河合 清氏、山本新次郎氏等魚町へ行つて帰るとゆかたと袴がゾオキン「雑巾」の代りになって来ると申された。常に出入せぬ処を使用する為めと、町内に其世話をする人が不足して居つたので、基礎工事に時間と種々の故障のある能は、一ケ年一回の催も一通りや二通りの事ではない。

地方に能舞台及び装束を持つて是を活用すると云ふ事は至難な事である。又横浜から名古屋迄の間に於いて三十年後の今日幾千人の素謡を習ひ、又囃子等を研究せられる方々ありとも舞台と装束を持つて居る土地は無い。

#### 下手な謡

石部師時代に東京から先生方を招へい「招聘」して素謡会を催したのは、第一番に前記家元宝生九郎師の船町翁屋の会。次に広小路通り花園町の幼稚園の階上で一回、野口政吉師(現在は改名せられて野口兼資)を主として、松崎新吉師及其門下の先生方の出張を乞ひ。今一回は、今日はあと方もなくなつたが、新川用水路南にあつた新川公德館で素謡会。是れは実に田原町、

新城町からも参会者あり大盛会であつた。其時に、野口師が会員の小袖曾我の謡の中頃にかつた時に会場え見えた。よくそろつて居る（但し素人としての―）と話された。めつたに御世じ「お世辞」を言はぬ先生であるから、あとで会員と談し合つて一笑した。

石部師と筆者は師弟の間、時々話もあつた中に石部師の一言。松崎さんから聞いたが九郎先生が云はれるには、下手な謡が謡える様になると一人前だがと云はれた。

さてわからぬ事である。天下の名人宝生九郎先生から見れば皆々門下、即ち謡を諷ふ人は皆下手な謡であるが、是れは何人と申せども当然な事と考えられる。然し一人前になるには中々に容易な事ではない。そうすると一人前の先生方が宝生家元から見て、下手な謡と云ふ事になる。それでは余り簡短「簡単」になる。

一般の方、現在謡を研究せられつゝある人々の参考として一言申す。

筆者は大正八年春東京に於いて大藏流大鼓家元故大藏繁次郎先生（当時六十余才）の御宅え二、三ヶ月稽古に行った事があつた。其時は大鼓の門下は一、二人、小鼓の門下一人位で色々話を伺つた。大藏先生は、あの人は謡が拍子にハズレない。即ち近頃各流で謡本に記入して、且又講習会迄も催して居る（地拍子の事を申す）様に成つたから、素人え教える事を免したと

申された。

是の方は東京では小鼓の先生をして居られた。筆者は其時に始めて宝生先生の下手な謡と申す意味がわかつたのである。誠に心細い話になるが、謡の調子上げ下げ、句終「句読」を正しく謡ふ事が出来て、且又拍子にはずれない謡を諷ふ事が出来て始めて、宝生先生の一人前の謡、下手な謡と申す資格を供える事になる。

豊橋は例外として近き名古屋に於いても、現在千人又は数千人の謡を習はれつゝある人の内に何人その資格があるだらうか。筆者は名古屋宝生流に於いて、先生方及び同門の人々を数えて十人以上を知らぬ。

声がよいとか調子がよいとか申して天狗になる事は禁物である。天狗は藝の行き止まりである。如何に調子がよく、節廻しがよいと申しても拍子に合はぬ謡は能の地謡としては不合格である。

石部師の元えあとから入門して斯道に尽された人に、故中尾富三郎氏（豊川町長として又醬油屋として有名であつた）がある。晩年の稽古で余り御上手では無かつたが、熱心の事と世話ずきなので、土蜘蛛のシテを習つて舞台え立つ事となつた時に新しき装束を注文して、其相手たるワキ、ワキヅレ、自身の前後の装束全部自弁せられた。其後はれを松風会え全部寄附せられた。其石部師の死後は長阪理一郎氏の元え入門して、名物

男として一般の人々に知られた。又其後は筆者の先生名古屋永田虎之助師え入門、其時豊川町伊勢屋を稽古場として、牛久保町星野君、豊川町斎藤君、伊勢屋神谷君等、大小四拍子を習はれた。其費用は大半中尾氏の寄附によって維持されたとの事を聞いた。五十余才にて没せられたが、名古屋の素人能え出演熊坂のシテを舞はれた。先生は故土屋重實師（当時は名古屋宝生流のシテ方只一人の先生であつた。筆者も入門した）。其時分には名古屋能樂堂は呉服町北のせまい小路の中にあつた。現在は布池町にある十萬円の寄附をあつめて建てられた立派な建築物である。しかし大名古屋ですらも右能樂堂の維持に困り年々赤字を出して居る。中尾氏は藝も熱心であつたが、又斯道の発展に尽された事も感謝すべき事である。現在の豊橋市に於いても中尾氏の様な奇特な後援者を十人程ほしい。一般の人々に御願ひ致す。

一寸横道え廻つたが傳手に故河合 清氏の話になる。



竹内倍吉の子供能楽教室 稽古風景（龍拈寺方丈）



昭和7年11月28日 柳鶯会 記念写真（龍拈寺方丈奥座敷）



龍拈寺でのこども仕舞 発表会写真（吉川〔旧姓：大山〕敏子）

竹内倍吉氏主宰による普及活動

## 往年の豊橋地方の宝生流能楽を支えた方々の

### 追憶とエピソード

織田 哲也

まえがき

往年と言っても小生が謡を始めたのは昭和二十三年十二月の入門で、戦後のことである。当時二十三歳の若輩で回りはすべて戦前から活躍されている大先輩ばかりであった。謡を始めたきっかけは、その頃小生より二年先輩の大村省一氏が入社（中部ガス㈱）されてきて、その頃の会社で若い男子は大村氏と小生の二人だけであった。終戦直後の混乱から世相も治まりかけて、若い者は仕事が終われば麻雀・パチンコ・映画へと、今まで抑圧されていた遊びに解放されて毎日遊びほうけていた。

そんな時、会社の直属上司の天井義一郎氏から「お前ら若いもんは麻雀やパチンコで遊んでばかりいては駄目だ。死ぬまで楽しめる趣味を持て。それには謡を習うのがよい。謡は自分一人でも仲間同士でも一生楽しめる。幸い豊橋のような田舎で普通ではお稽古を受けることができる。煙 富次師という大先生が東京から豊川へ疎開されてみえていて、豊橋でお稽古を受けることができる。こんなチャンスはまたとないかもしれない。俺も中村良一常務に紹介されて常務と一緒に始めたので、お前らも謡を始めろ。これは業務命令である。」と、とんでもないお達しである。二人で頭を抱えたが、業務命令というきついお達

しでは従わざるを得ない。不承不承上司に付いて行くと、稽古場は中村常務のお宅である。普段は軽々にももの言えない重役のお宅である。二人の緊張はその極度に達していた。何しろ正座を学生時代に剣道の時間にその苦しみを味わって、その恐怖心を忘れてはいない。最初のお稽古は鶴飼の学習用謡本を畑先生がご用意してくださっていて、二人並んで十分か十五分何も知らぬまま夢中で大声をあげたが、終わって畑先生が優しく「さあ足を崩して楽にしないさ」と声をかけられ、気がつく二人とも足が痺れて足を崩すこともどうすることもできない状態であった。先生はニコニコしてみえたが二人は必死でまるで達磨さんのいざりのごとく渾身の力を両手にこめて次の間に下がったのである。この姿に見とれていた先輩方とくに中村常務夫人（中村まさ子さま）は「お神酒徳利が転がるように当分楽しめますわネ」と皆さんと談笑されていて、恥ずかしくて穴があったら入りたい気持ちとはこのことと実感したのである。以来二人にとって週一回の謡稽古はまるで拷問を受ける日々であった。家に帰ると正座にこれつとめ何時しかこの拷問から解放された、忘れ去るようになった。

中村良一氏は会社における雲の上の方で後に社長・会長・相談役まで勤められ、謡の大先輩でもあり公私ともに大変なご指導をいただいていたが、惜しくも昨年十二月に九十三歳のご高齢で永眠されてしまった。

天井義一郎氏は都市ガスの技術者で直屬上司でもあり、小生は中学二年生のとき父を失っていて、社会生活を始めるときからのよき指導者で父代わりにしごいていただいた大恩人である。小生に謡を強制されたが、五十有余年に亘って唯一の趣味を持たせてもらった恩を忘れることはできない。会社の重役までなられて退職後隠棲されてしまい、やはり一作年亡くなられて葬儀も知らされず、仄間で知り慌ててご霊前にお参りしご冥福を祈るとともに、生前のご恩に感謝の誠を捧げるありさまであった。

大村省一氏は入社一年くらいして浜松支店へ転勤した。そのころ中村常務は浜松の方で戦災に会われて奥さまのお在所の豊橋に仮住まいをされていたが、浜松の戦災復興のために浜松に戻られて復興事業の責任者として活躍される傍ら、豊橋で始めた畑先生のお稽古を継続すべく浜松のご自宅へ先生を招いて、転勤してきた大村氏はじめ会社の青年たち数人のほか、地元の有力者の方々に呼びかけて浜松における宝生流の普及の基礎を築かれた。大村氏は何時の間にかお稽古をやめられていたが、時代が下がって同氏のご子息が京大に入学されたとき、今日で言う部活に何がよいか父親に相談があった。そのとき京大の部活に能楽部があることを知り、即座に自分が習った謡本もあることから能楽部へ入部を指示した。そのとき大村氏は何も知らなかったが京大能楽部の指導者は辰巳 孝師であったのである。ご子息が京大を卒業するとき卒業記念に能「経政」のシテを舞

い、大村氏ご夫妻は京都へご子息の能を観に行き「久し振りに京都で能を観てきたヨ」と小生に話されたので、そのときご子息の事情を知ったのである。丁度そのころ小生は辰巳 孝師に師事しており、先生に大村氏の子息のことをお話しすると「おお、大村君は筋がよくて優秀だったヨ」と言われ、縁は異なものといくづく感じたものである。

まえがきが長くなりましたが、小生の勤務先の会社関係で謡関係の方々のことを述べてきましたが、最後にもう一人神野三郎翁について触れておきます。

神野三郎翁は明治八年五月愛知県西春日井郡清洲町で出生し、豊橋の穀倉地域である神野新田を明治二十年代に干拓するため赴任し明治二十九年ついに干拓事業を完成させた方で、勤務先の中部ガス(株)の前身豊橋瓦斯(株)を明治四十二年創設したときの創始者の一人である。小生が入社した昭和十九年当時は会長職として時々出社してみえ、正門から直接事務所には入られず、必ず現場構内を一周してから事務所に入られ、大きな天眼鏡で書類に目を通されているのをお見かけした。勿論直接お声を掛けられる機会は一度もなく、上司から翁のエピソードの数々を伺ったが、その中で謡に関するものを一・二述べておきます。翁は宝生流の謡の名人で立方はしなかったが、戦前の豊橋の魚町安海熊野神社能楽殿における恒例の祭礼能には必ず地頭として出仕せられ、翁の地頭でなくては演能がうまくできなかった

と言われていた。たしかに決して綺麗なお声ではなかったが、普段は破れ鐘のような特徴のある大声で話しをされていたのが耳に残っている。翁が昭和三十六年四月八十七歳でご逝去されたときの葬儀の席上で、翁の生前を偲んで翁が録音された「鉢木」の一節がテープで流され、初めて翁の謡を聞いて驚嘆したあの破れ鐘のような声がお腹に力がこもって体中から吹き出るような謡であった。その録音テープは現在のようなカセットテープではなくて、デンスケと称されたオープンリールの録音機で自宅で録音されたものであった。ポータブルの録音機が出始めたところで、録音のとき謡の前に「もう、いいかエ」と言う翁の声があつてから「鉢木」が始まっている。その後デンスケからカセットテープにダビングしたテープをいただくことができ、大切に保管している。

もう一つは翁のご長男神野太郎氏のことである。太郎氏は小生が入社直後の昭和十九年三月に三郎翁から中部ガスの社長職を譲られて社長になられ、数年経ってからと記憶しているが、会社の若い者たち数人がある日社長のご自宅に夕食に招待された。当時は未だ戦後復興時代で容易に外食のできる時代ではなかった。上面された材料で社長の奥さまの手料理で夕食をしなから閑談し、若者の考えや社長のお話を伺っていたときの、社長の談話が今でも記憶に新しい。太郎氏は明治三十六年九月父三郎翁が神野新田干拓事業をしていた神野新田事務所で生ま

れた。三郎翁の厳しい躰のもとに成長し、小学校に入学する前の未だ文字が読めないころから、三郎翁の膝に抱かれて竹生島の謡を習わされた。「だから今でも竹生島だけは空で謡えるヨ」と仰られていた。その太郎氏が大正十年四月慶応義塾大学に入学したその年の夏休みのことである。夏休みで帰宅した太郎氏が座敷で座敷簾を長刀代わりに振り回して、船弁慶の仕舞の稽古をしているところを三郎翁に見咎められ「太郎！お前何をやっているんだ」と怒鳴られた。「大学のクラブで能学部に入り、今度能の船弁慶をやるんだ」と答えると「何、能をやる。それはならぬ。昔から芸者遊びをしても家の身上を潰すことはないが、素人が能にのめり込むと身上を潰すと言われている。とくにお前は自制心が欠けているから絶対に能をやってはならない。以後お前には謡はご法度とする。謡関係からすっかり足を洗え」ときついお達しを出されてしまった。ご自分でも自制心に思い当たることがあったのか「それ依頼ぶつり謡から足を洗ったヨ。ハッハッハ」と、小生が謡をやっていることをご存知で、自制心の涵養が必要だと言わんばかりに、小生の顔を見て仰られたことを肝に銘じている。

以上で勤務先の会社関係の方々についてを終り、以下小生が謡を始めたころから接してご指導をいただきお世話になった方々について、思い出すまま列記します。いずれの方もほとんど他界された方々ばかりであることに気が付き慄然といたし、ただ

ただご冥福を祈るばかりである。

## 滝崎吉太郎

明治時代から魚町の宝生流祭礼能の中心的存在として活躍された滝崎家のご当主として、魚町で○に吉をいれた屋号の魚屋さんで、屋号から「まるきちさん、まるきちさん」と親しまれていた。赤銅色をした偉丈夫な方で古武士を思わせる近寄りがない風貌の方であった。饒舌な方ではなくどちらかと言えば無口の方であるが、小生らの質問などにはお顔には似ず優しく簡潔にお話しをしてくださった。そのお話しには筋の通らないことには妥協を許さない気風が漲っていた。謡も仕舞も力のこもったご気性そのもので、宝生流の見本のような方であった。日本の伝統芸能と魚町の伝統を豊橋市民に伝えるため戦後間もないころ、豊橋市公会堂で能羽衣のシテを舞われたり、小学校の講堂で羽衣の演能をして生徒たちに情操教育の一助を図るなど、豊橋の文化向上に活躍された。なお、滝崎氏は大鼓の名手であって、昭和三十年代に入ってから番組で大鼓を勤められるときは滝崎長昭という別名（芸名）を名乗られていた。惜しむらくはまだまだこれからという壮年期に難病の白血病に罹れ、この世をさられたのが残念でならない。ご子息の滝崎泰夫氏はご健在でお父さまの謡を引き継がれており、詳細は泰夫氏にお譲りする。

## 福谷 温あづ

当地方の油脂業界の雄・蒲郡の竹本油脂社長である豊川市為当町の竹本長三郎家の四人兄弟で長男は跡を継ぎ、次男以下三人は全員豊橋へ養子縁組で竹本家を出られ、いずれも当地方のそれぞれの業界で名を馳せ有名な方々ばかりである。福谷温氏は中学二年生のころに豊橋の旧家福谷家へ養子にいられた。養父の福谷元次氏は万延元年（一八六〇年）生まれの豊橋における政財界の先駆者の一人で、市制施行前の豊橋町長・市制施行後の初代市議会議長・県会議員・教育会長・育英会長を歴任し、実業界では豊橋に初めて電力会社やガス会社を起したのをはじめ繭周旋・倉庫・運輸・製糸・鉄道・養魚などの各会社を創業し、その会社の社長や役員を歴任し、商工会議所の第十六代会頭を勤めた大物であった。なかでも豊橋市民病院の前身である豊橋慈善病院を開設し、その経営に腐心した記録が残されており、いずれの時代も病院の経営は容易なものではなかったことが伺える。元次氏はまた多趣味を持ち、花・謡曲・書画・園芸・庭木・道具と幅広く特に謡曲を好み、ご自分では謡はなかったが大正時代魚町の安海熊野神社祭礼能には毎年娘たちを連れて観に行き、娘たちは幼少のころから千歳楼（豊橋の戦前における老舗の料亭）の長坂理一郎翁について謡を習わされ、娘たちは夜になると父親の前に正座させられて復習させられた記録も残っている。

そんな養父のもとへ養子となられた温氏は京都帝大医学部病理学部を専攻し、一時財団法人豊橋病院が豊橋市営に移管される前約一カ年間、養父の要請で院長を勤めたことがあるが、もともと癌の研究など大阪赤十字病院や福井市の福井赤十字病院で顕微鏡と対決する医学博士であった。養父のご薫陶を受けてみえたのか謡曲には造詣深く、小生が昭和二十三年謡を始めたころは、温氏のご自宅は豊橋市中八町にあつて、同じ町内の中村良一常務の仮住まい宅と近く、両家の閑静のお宅が交代で畑先生を迎えて謡の稽古場としていた。温氏は養父が創業された中部ガスの非常勤監査役でもあられたので、中村良一常務とは昵懇の間柄であつた。温氏は間もなく大阪・福井へ研究に没頭するため豊橋が不在がちになり、同氏宅の稽古場はなくなつたため同氏とのお近づきの期間が短く、同氏の謡もあまり記憶に残っていないが、ただ、小生が最初の鶺鴒の稽古を聞いておられて、「鶺鴒の謡はいい曲だね」と仰られたことだけは今でも忘れない。謡のウの字も鶺鴒のウの字も知らない小生にとつて「いい曲だね」と言われても、どこがよいのかさっぱり判らず、この方はよっぽど謡に詳しいであろうなと感じただけは覺えている。同氏の子息では次男の秀夫氏（長男は中学生時代に病死）は多分学生であつたころの昭和二十三年に謡をされていた記録がある。京都大学工学部応用化学を卒業し、東京の三菱化成のエンジニアとして活躍してみえる。なお、福谷千代さんは

温氏のご夫人で昭和二十三年に謡をやつてみえた記録がある。

#### 小島和四郎

前述の福谷 温氏の実弟で竹本家から豊橋の酒卸業の老舗「川清」商店の当主として小島家にご養子としてみえた方である。

この方にはもう一人末弟の田中平六といわれる豊橋の呉服屋老舗「田中屋」のご当主がみえたが、謡とは無関係の方で詳しいことは存じないが、温・和四郎・平六の三氏は養子三兄弟として豊橋で有名な方々であつた。しかし、この三兄弟はどういう訳か互いに仲が悪く、互いに悪口を言い合つていた。兄弟の自慢話を聞くのもあまりよいものではないが、有名なご兄弟が悪口を言い合つているのが不思議であつた。噂ではこの三兄弟は異母兄弟で（昔はよくあつた）、そのために仲が悪いとのことであつた。

和四郎氏のご夫人は小島寿女と仰つて観世流の謡をやつてみえた。ご主人の和四郎氏はご夫人と一緒に謡を謡うことを嫌つて宝生流をやられていた。福谷 温氏が豊橋を去られ間もなく、中村良一常務も浜松へ戻られて謡の稽古場がなくなつたとき、和四郎氏は豊橋駅前「川清」商店を新築されその二階に立派なお座敷を作られ、そこを稽古場に提供された。戦後の焼け跡の豊橋にはまだ宴席にする施設もなく、和四郎氏はご商売のお客さまを招待する場が必要とて作られたとのことであつた。

この稽古場は畑先生が昭和四十四年に急逝されるまで使用させていたでいた。想い出は数々あるが中でも忘れ得ないのは、和四郎氏が新酒の出るころには、謡の稽古が終わると必ず「これが今年の灘の蔵出しで、味わってみておくれん」と言って藍色の渦巻き模様の試飲用ぐい呑みに一杯ずつ振舞われるのである。「これはのん、世間一般では口にすることはできません、酒のもとでこれを三倍以上に薄めて販売するんで、これ一杯が普通の酒の一合くらいになるだぞん。この原酒がほんとの琥珀色と言うもんで、よく見て味わっておくれん」と独特の豊橋弁で説明されたものである。もともと酒を呑めない体質の小生も、そのとろつとした原酒を一口含むと、えもいわれぬ香りと甘味が口に広がり、それ以来酒の呑めない小生が日本酒だけは好きになった。もつともその原酒は酒に弱いので一口だけ味わって残りは皆さんにお回しした。酒に強ければこんなに美味しいものをたくさん呑めるのに、とつくづく思ったものである。

和四郎氏は小太りの立派な体格の方で、ちよつと鼻声に聞こえる独特の謡で、体中から声が出る大声で、地頭にうってつけたのであるが、常に謙虚で出しゃばることを決してなさらなかった。当時和四郎氏のご長男は小生と同級生で哲也という同名であったが、父親の言うことを聞かず、ベルギーあたりを放浪しておつて勘当同然にされていた。そんな一人息子がいないので、寂しかったのか小生を息子同様に可愛がってくれた。大分

してからその子息は放浪から帰国すると立派に父親の後を継いでいる。父親が逝去すると襲名して和四郎と改名した。小島氏に聞くと小島家は代々襲名をしておるとのこと、故和四郎氏の旧名を聞き漏らしている。

## 岡本 十束

岡本氏は小生が謡を始めたころの最長老の先輩であった。当時年齢を伺った記憶はないが、七十歳台の小柄な綺麗に枯れた老人であった。戦前から謡を嗜まれている、最初は下懸り宝生であったとお聞きした。小生が謡を始めたころは現在のようなテープレコーダーという文明の利器がなく、週一回の畑先生のお稽古だけでは、何が何だかさっぱり分からず困っていると、親切に「教えてあげるで、わしの家においでん」と声を掛けてくださった。岡本氏のご商売は骨董品の仲買をやってみえたように、豊橋駅に近い交通の便利な石塚というところに前述の小島和四郎氏の小屋を借りて、そこを拠点に仕事をしてみえた。その小屋へ週一回会社の仕事を終えたと通い、謡の発声の基本や吟の出し方（かなり高度な技法の解説でそのときはまったく会得などできず、理屈だけは記憶に残って、吟が出るようになってのは十年以上後である）など説明を加えながら、復習を繰り返していただいた。まったくの無報酬で教えてくださり、謡を謡いながら教える楽しみができて喜んでみえた。また、お仕

事の関係で宝生流の謡本の古本が出ると必ず入手されてきて、今どきでは嘘のような何銭という値段で分けてくださった。

岡本氏のお稽古を受けていると、そのうちに前述の滝崎吉太郎氏と後述する高須光治氏が「わしのところへもおいでん。教えてあげるで」と仰られ、お言葉に甘えてしばらくの間この三氏のところを一日おきくらいに渡り歩いて謡の教を乞うたものである。

もう一つ岡本氏の昔話で記憶に残っているのは、戦前の第二次世界大戦前のことと思われるころのことである。豊橋は戦前軍都と言われ、現在豊橋公園や豊橋市役所の在るところは豊橋歩兵十八連隊があり、支那事変のときは九州久留米の歩兵連隊とともに中国で勇猛を馳せ、中国軍は両連隊の攻撃を知ると戦わずして退却していったと言われていたほど強い連隊であった。また、向山町の現在豊橋商業高校と向山緑地は豊橋工兵隊の跡地で、向山緑地は当時の工兵演習場で今でも演習に設置した頑丈なコンクリート製のトーチカが残っている。この工兵隊は支那事変開戦時に上海攻略のために呉淞敵前上陸のとき、上陸部隊のルートを開くため弾雨のなかの最前線作業が上陸成功に大きく貢献したと言われていた。この他豊橋には陸軍教導学校・陸軍予備士官学校・陸軍兵器廠などがあった。これらの跡地はいずれも大学・高等学校・工場・住宅団地などになっている。まさに軍都であってたくさんな軍人がいた。これらの軍人の将

校は謡曲を愛好するものが多く、岡本氏はこれらの将校連に謡を教えていたと言われていた。将校たちは官舎だけでなく、民家に住まいしていて、毎朝兵卒が馬を曳いて迎えに来ると、将校は悠然と馬に跨り馬上で鞍馬天狗の「花咲かばー」の一節を唸りながら出勤して行ったとのことで、優雅な時代もあったのである。辰巳 孝師も軍隊に行かれたとき、入隊前の職業を問われ宝生流職分と答えると、即座に「お前は訓練を受けなくてよい。将校連に謡を教えろ」と言われ、「毎日謡を教えていてえらい目に合わず楽をしたヨ、芸は身を助くとはこのことと身をもつて体験したヨ」と仰っていた。軍人間には謡曲愛好者が多かったことが伺える。

岡本氏は謡会るとき濃いこげ茶色の袴を着けてみえ、この袴は豊橋伝統の吉田紬の生地で作ったもので、豊橋市牟呂町の婆さんが織ったものだが、その婆さんが亡くなってしまったので、もう吉田紬は絶えてしまい、この袴は貴重なものだと言いつつ、何度も聞かされたものである。

また、岡本氏は謡会するときなどには、「いい声を出さなきゃあ」と言いながら必ず懐から龍角散の小さな丸い缶を取り出し、ぺろつと一と舐めして、唇の回りが真っ白になっているのをいっさい無頓着に平気で謡っていった茫洋とした風貌が臉に浮かんでくる。

## 高須 光治

この方は豊橋の書籍店で老舗豊川堂ほうせんの経営者で、その関係から終戦直後市内の中心部新本町で焼け跡の真っ只中にバラック建てで時習堂という古本屋を経営されてみえた。瘦身の色白で瀟洒な優しい紳士で戦前から謡曲を嗜まっていたようであった。小生が謡を始めたころ前述のように謡の手ほどきを優しくしてくださった方であるが、病弱勝ちのため、間もなく亡くなられてしまい短いお付き合いであったため、あまり詳しいことを知らない。ただ、ご商売の関係で古本の仕入れ時に宝生流の謡本が出ると、すべて仕入れてきて岡本氏と同様に小生に渡してくださった。高須氏は本の専門であるため大半は同氏から入手しており、現在小生が手持ちの謡本の大半はすべて当時のものである。高須氏は大正版などの変体仮名が多い難読のものは小生には不向きと、選別されて昭和初期からの昭和版を必ず渡してくださるという、細かい配慮をしてくださっていた。こうやって多くの先輩方に暖かく助けられ育てられたお蔭で小生の今日があることを、感謝の念を失っては罰が当るであろう。

## 鳥居 晴一

鳥居家は代々魚町の祭礼能に奉仕されていて、晴一氏は小児麻痺かなにかで足がご不自由のため昭和六六ころから小鼓方として出演されていた。何流であったか小生が始めたころは囃子

方に多くの流派があることも知らず、聞き漏らしてしまった。

ただ畑先生に小鼓の稽古を謡会の前になると受けておられた記憶がある。当時小鼓を打たれる方は後述する佐藤ユリ子さんと大原紋三郎氏がみえて互いに競ってみえたような気がした。常の稽古には謡のほかに地拍子の稽古をしてみえた。畑先生が張り盤を打たれ、鳥居氏が謡いながら両手で太腿をパンパン打れるのを最初に見たときは何をしているのか分からず、後で鳥居氏に質問すると「謡いのリズムの基本であって拍子謡の基礎になるもの」と詳しく説明を受けたが、何が何だかさっぱり分からなかった。十年以上経ってから本格的に地拍子の勉強を始めたとき鳥居氏の稽古姿を思い浮かべ、夢中になって両腿を叩き真つ黒に腿が内出血して驚いたのが昨日のことのようである。

## 佐藤 ユリ子

秋田出身の秋田美人であった。豊川で芸子さんをやってみえたそうだが、小生が知っているころは豊川で舞仙という料亭を経営してみえた。畑先生の女性一番弟子で多くの女性弟子の元締めのような方で、親分肌の凄い方であった。畑先生の会は東海富宝会と称していたが、その会員の女性群だけを龍舞会といつて纏めてみえた。男性群も負けじと岡本十束氏が虎嘯会と命名して頑張ったが、龍舞会の勢いには圧倒されていたように思う。それというのも佐藤ユリ子さんは豊川の若い芸子さんをど

んだん畑先生の弟子にして、謡と仕舞を習わせ龍舞会を増強していったのである。その華やかさには虎嘯会はしゅんつとしてしまった。その上佐藤ユリ子さんには道古清子さんというよい意味の凄いライバルがいた。佐藤さんは小鼓を打ちその手さばきは実に綺麗であった。謡も低い音から高い音まで綺麗な声の方であった。それに対して道古さんは太鼓を打たれ、謡は独特の響く大声で地頭にピツタリで何時も地頭を勤め、囃子の掛け声も見事であった。仕舞も佐藤さんは綺麗な葛物が似合い、道古さんは荒い男物がピツタリの方であった。互いに対照的であったが、畑先生の一番弟子を競い合っていて、芸の上達は目覚しいものがあつた。しかし、道古さんはご主人がサラリーマンで一介の主婦であり、佐藤さんのリーダーシップには敵わなかった。道古さんは間もなくご主人が東京へ転勤になられ去ってしまった。

佐藤さんの鮮やかな思い出は、毎年行われる畑先生の謡会るとき、午後三時ごろになると必ず佐藤さんが生卵を一つ持って先生のところへみえ、先生の目の前でボンと卵を割りその二つの殻を使って鮮やかな手捌きで卵の黄身と白身を分けて、黄身だけを先生のお口にそれこそボンと放り込まれるのである。先生はその黄身を丸さらゴクンと呑みこまれる。午後からの疲れを癒すその仕種がいかにも師匠を大切に想う女性弟子として自然な振舞いであつた。周囲の者は果然と口を開けて見とれ「俺

にも入れてくれないかなあ」という顔付きであつた。昔から精をつけるのに生卵を呑むと聞いてはいたが、ああやって呑むことをそのとき会得したのである。

ある冬の一夕佐藤さんの舞仙へ招かれて、謡などの四方山話をしていたが、そのとき佐藤さん手作りの美味しい料理のなかで、秋田の鉈漬という大根を酒粕で漬けた漬物の味は忘れることができない。大根を鉈ではつって樽に入れて漬けたものであるが、秋田では冬にこれを物置から氷を割って出してきて食卓にあげるものだそうで、豊川では暖かくて凍らせることができない。また一味違うと言われたが、こんな美味しい漬物は口にすることはなく忘れることはない。本場の秋田で本物の鉈漬を死ぬまでに口にすることができようか。そんな佐藤さんも数年前亡くなられ寂しい限りである。

### 森 泰樹

森氏は明治四十三年生れの熊本市出身で名大附属医専教授と名大助教のとき、昭和二十三年弱冠三十九歳で乞われて市立の豊橋市民病院長に就任されてきた方である。当時の市民病院は木造で病棟などは明治二十二年に建てたものを移築したもので、病室は畳敷きで座って診察していると蚤が飛んできたり、屋根瓦は飛んで雨漏りがしてもそれを受けるバケツもない、幽霊病院といわれる破産寸前の病院であつた。そんなボロボロの

病院再建に辣腕を振るわれ、悪戦苦闘のすえ見事に建て直され、二十七年間院長を全うされ以後名誉院長として現在もご健在である。そのご活躍振りと功績は凄まじいものがあり、豊橋の名士として語り継がれ森天皇といわれていて、その辣腕振りを伺えることができる。

その森氏は昭和四十五年に本間英孝師が来豊されるようになってから本間師に師事してふじ子夫人と一緒に謡仕舞を始められた。そのころのある日曜日の昼下がり森氏に招かれてご自宅に伺ったことがある。なにしろ森天皇といわれている方で、しもの小生ごとき者は容易にものを言えるものではない。恐る恐る伺うと院長宅は森御殿と噂で伺ってはいたが、新築間もない檜と畳の香りが漂う素晴らしいお屋敷のお座敷に通されてしまった。しかも床の間の前に一枚座布団が敷いてあって、そこに座れと仰りご自身は下座に平伏されて、ご足労をかけて恐縮、謡をご教授願いたいと鄭重なご挨拶で面食らってしまった。「こんな上座ではお尻がむずむずとし落ち着いて謡も謡えません」と言う。「いや、趣味の世界には地位も職業も関係ない。君は謡の大先輩であるから教えを乞う私はこれが当然である」と仰られた。功なり名を遂げた方のお言葉に返す言葉もなかったただ感服するのみであった。

「実は謡を始めようと思うが、私は生来大変な音痴であって、病院などの宴会の席上で余興をしなくてはならないときは、『た

だ今から音痴の真似をいたします』と言って歌を唄うと拍手喝采である。音痴でない歌は唄えない全くの音痴であって、これは誰にも白状せず今日までやってきた。こんな音痴がはたして謡が謡えるだろうか」と言う相談である。咄嗟に「謡には音痴は大丈夫です。昔、岡本十束という長老が『謡は音痴結構、西洋音楽と違ってどういいうわけか音痴の方が謡には向いている』といわれました」と答えると、そのときの森氏の安堵した嬉しそうな顔は忘れられない。勇躍して謡を始められることになり、そのときは橋弁慶の「是は西塔北谷の住僧、武藏坊弁慶にて候」と謡い出し発声のご説明をして早々に引揚げた記憶である。

森氏には豊橋市の市民文化会館へ組立式の能敷舞台を造って寄贈するとき一方ならぬご尽力をいただいた。それは本間英孝師が来豊されるようになってから、毎年市民文化会館ホールで東海宝英会大会と称して謡・仕舞の発表会を催していた。そのころは会員も三十数名を擁していた盛会であって、森泰樹氏に東海宝英会の会長になっていただいていた。昭和四十九年になつてある日、本間英孝師から「市民文化会館に能敷舞台を設置できないだろうか。そうすれば皆で本格的な能ができるんだ。もし造れるようならば、私が宝生流の能を海外に紹介普及するため、先年家元がインドへ興行するとき造って、飛行機で運ぶことができる組立式敷舞台の設計スケッチ図を入手することができるから、それを参考にして造ってみないかネ」と小生に相

談があった。小生は仕事の関係で会社の施設の建設や建築を手掛けていて、ものを造ることは好きであったので「それは面白い早速検討してみよう」と一つ返事で引受けてしまったのである。

早速森会長や皆さんに相談すると、森会長が「それは良い話した。文化会館は市の施設だから、市の文化事業として市に予算を付けさせ分捕ろうじゃないか。百万か二百万もあれば十分だろう」と、さすが市民病院再建でご苦労なされた方だけに話しは早い。四十九年九月に本間先生から渡印時の設計図を入手すると、森会長は早速動き出した。市民病院再建を二十年以上同病院長の現職を勤める森会長は、市の予算獲得のしかるべきツボは十分心得てみえ、予算獲得はお手のもとと言わんばかりであった。翌五十年二月二十一日には「敷舞台の製作予算が五十年年度において確保の見通しがついた」と小生のところへ入り、続いて同年三月一日に「市予算百三十五万円ほぼ確定的のため市の建築課長と、中日劇場の敷舞台を調査するように」という指示が出された。ここまでされた森会長はそれ以降いっさい口を出されず、時々経過報告をしてもただ黙って聞いてみえるだけで、小生らにすべて任せきっておられるのである。

それからというものは若い者の小生と滝崎泰夫氏の二人は東奔西走し、納入先の文化会館事務局や市の建築課へお百度を踏み、調査・設計・製作の段取りをした。このときつくづく感じ

たのは、小生が会社の仕事の関係で役所の色々な役人と接触してきたが、ほとんど木で鼻をかんたような扱いをされ、役人仕事というものをいやと言うほど経験していたが、この時ばかりは全く違っていた。接触する役人が皆んな驚くほど親切である。これが同じ役人かと思われ、それというのは役所の要所要所に森会長のお声が行き届いていたからである。滝崎泰夫氏が「ホイ、森院長の威光は凄いもんだノン」と小生と二人顔を見合せたものである。

調査には本舞台の熱田能楽殿を参考に調査した後に、当時中日五流能が行われていた中日劇場へ市の建築課長と係長に同行して、舞台の奈落まで入って敷舞台の構造寸法を調査し、建築課で木造部の設計図作成の参考にした。意外に苦労したのは揚幕の作成であった。中日劇場では舞台効果のために白木の所作台の下に黒幕を敷き詰めて敷舞台全体を浮かび上がらせるようにしていた。その関係で揚幕は五色とせずビロードの黒幕として幕の中央にシテ方の目印に茶色のテープを縦に着けた幕を使用していた。このため中日劇場の揚幕は参考にならなかった。

熱田能楽殿で揚幕を調査してあったので、その後魚町の保存しである揚幕や、本間先生に佐渡の本間舞台の揚幕を調べていただいたり、色々調査したがいずれも異なっていて一定ではなく決定に迷い、再度熱田能楽殿の揚幕を調査するなどをして、最終的に五色の本格的揚幕を作ることにした。ただ、表の牡丹唐

草模様の布地は正絹の本物は高価のうえ年に何回も使用するものではなく、寄贈後の市の管理で虫干しや防虫のことを考慮して、化繊のテトロン地にした。この稿の小島和四郎の項で先出の呉服老舗の田中屋さんが、正絹の布地見本まで取り寄せご寄贈くださるという有難いお申し出まであったが、先述の理由から鄭重にご辞退をした。このテトロン地の布の入手に八方手を尽くしたが、意外なところで仏壇具屋から揚幕用の紫色の（朱色がなかった）綱と房とともに入手できた。

揚幕の縫製の段階でも亦一苦労をした。会員に清水美恵子さんと仰る長唄のお師匠さんで、清水洋裁研究所を経営してみえる方がいたので、この方に無料奉仕で縫製を依頼したのである。快く引受けてくださったが、なにしろ三米もある長さで五色の布地の裏に浅黄色の木綿裏地を着ける袋縫いは、普通のミシンでは縫うことができず、研究所の生徒さんたちが大奮闘したことであつた。この時市の方から所作台は重ねて保管できるからいいが、その他の組立附属品は分解した一つ一つを汚したり傷が付かないよう保管できるよう、梱包用の布袋を作つてくれと注文が出されていた。このため、鏡板・貴人口・切戸・高欄・目付柱など分解部品一個一個を収納できる袋を設計して、これは小生の家内に縫製させた。

鏡板の老松と切戸口の若竹の絵については、やはり会員で伊藤一義氏が市内の栄フラワーという花屋さんを経営してみえて、

多趣味の方で日本画をやってみえて、鏡板の絵は絵具代だけ出してもらえば、自分に画かせて欲しいと申し出があつた。願つてもないことで早速お願いをした。日本画のお師匠さんは市内の神社の神主さんとかで、伊藤氏はお師匠さんと各地の松羽目を調査したうえで、お師匠さんに見本の原画を画いてもらい、その指導を得ながらご苦労なさつて見事に完成してくださつた。

木造部の製作については、市の建築課で度重なる設計協議の末、基本設計・見積設計図・合い見積徴収・施工業者選定・施工図・施工承認図等を作成した。これらについては小生らの意見を存分に聞き入れて、少しでも安価で値打のあるものをと、材料の選択から業者選定まであらゆる努力をしようとした。業者の選定には市の出入り三業者から合い見積をとり、当初はかなり予算オーバーをしていたが、削ることは今後の市の仕事をするうえで好ましくないと、言いながら折衝を続け最終的に市の予算百三十五万円で所作台一式を作るところまで漕ぎ着けたのである。この所作台は能に使用するだけでなく日本舞踊やその他和楽器演奏などの一般部門でも使用するという大義名分が付いていた。その他の木造附属品も当初八十万円を七十万円に折衝し、木造以外の附属品など約三十万円の附属品一式計百万円は東海宝英会と豊橋観世会で折半して負担する結論になった。このことを五月十三日に森会長に報告し協議に入ると、森会長はその場で豊橋観世会の総元締めをされている産婦

人科谷野病院院長の谷野博先生に電話を掛けられ、趣旨を説明して内諾をとり、詳細は後刻小生と滝崎氏が訪問して説明させると言って電話を切られた。その処理の素早いこと、傍であっけに取られて見とれていたものである。すぐに谷野先生を訪問して快諾を得たのは勿論である。

かくして東海宝英会はサラリーマンなどの低所得者は一人一万円、会社病院経営者などの高所得者は二万円づつ基金を集めることにして、会の負担金五十一万円を徴収することができた。一万円の端数を不思議に思い記録を見ると、森会長だけ三万円納められていた。ケチで有名な森会長がどうして一万円余分に出されたのか、その理由は記憶にない。推測であるが、観世会はきっちり五十万円持つてくるので、当方は一万円でも多くして、優位に立とうという深慮遠謀であったかもしれない。これを深慮遠謀と言うかどうかは分からない。森会長なら考えそうなことである。

いろいろなことがあったが、こうして無事に能敷舞台は完成して文化会館に寄付採納を終え、四十九年七月九日新舞台披露の東海宝英会大会のリハーサルを行うとき初めてステージに設置し、そのときを利用して所作台の床板は厚さ二十一ミリの合板に一ミリの米櫨張りのため、汗等によるシミなどの汚れ止めには足袋を履いていても滑らないワックスを厳選し専門業者にワックス引きをさせて最後の仕事を終えた。ここまで多くの方々

の協力を仰いで完成した舞台披露は四十九年七月二十日当時の宗家宝生英雄、野村蘭作、宝生英照、内藤泰二先生などのそうそうたるメンバーを揃えて盛大な披露を待望の能三番（清経・葛城・土蜘蛛）を含めて開催した。

それ以来森会長はずうつと謡いを続けられてみえ、能狸々、鉢木も舞われていたが、お年を召されたためかここ数年前からお稽古は止められ、定式能などの能の鑑賞には必ずみえていた。しかし、最近お見かけしなくなったので、どうかなさったかと何しろ九十歳を超されるご高齢なので心配されるが、お体の不調を伺ったことはない。

## 西村 祐三

西村氏は昭和三十年代半ばごろから奥さまの梅子夫人とともに畑先生に師事されて謡仕舞を始められたようである。丁度そのころから小生は約十年間会社の仕事が多忙になり謡の稽古を休んでいた。エネルギー革命時代といわれて石炭時代から石油時代に転換する真つ只中であって、都市ガス製造という仕事柄から、徹夜作業に近い仕事の連続に明け暮れていた。昭和四十五年に本間英孝師が来豊されることになったとき稽古を再開した。そのときのお稽古場が西村氏のご自宅であった。西村氏は金沢の医専を卒業されて豊橋の現在地で西村耳鼻科医院を開業されている耳鼻科医の先生であった。能面の「痩せ男」を彷彿

とされる色白で瘦身の謹厳実直な方であった。金沢で勉学をされたご関係か金沢から奥さまを迎えられ、その梅子夫人がご自身で「金沢のお姫さま」と言われるだけあって、お年を召されてもいつまでも純真無垢そのものの方であった。金沢弁を決して改めようとなさらず「豊橋弁はきつくて汚い、汚い」といつも仰っていた。加賀宝生の本場でお育ちになったご関係で主人に謡を奨められてご一緒に始められたと伺った。

昭和五十年に先述の能敷舞台を完成させて暫くしたある日、西村先生が小さな新聞の切り抜きを持ってきて「世の中には個人でこんな音楽堂を造られている人もあるんだなあ。鉄筋コンクリートで音響効果を完璧にしてクラシック音楽を楽しんでいるんだって。わしも一つ自分の能舞台を造ってみようと思うがどうかネ。丁度自宅の数軒置いた北側に手ごろな土地を持っていて、そこにうまくできないだろうか相談に乗ってくれんかね」と相談を持ちかけられたのである。早速その土地を調べてみると間口五間弱、奥行四間の舞台に十五畳くらいの見所が採れそうである。もともと橋懸りは間口が約五間あるから正規の形には採れないが、三間四方の舞台の向かって左側に接して幅一間弱で三間の長さの橋懸りスペースが採れ、舞台との境を高蘭で仕切る。後座も地謡座も若干奥行が狭くなるだろが型は整うことが分かり「先生なんとかうまく納まってできそうです」と進言したときの嬉しそうな顔は忘れられない。このご企画

に会員が喜ばれたのは当然であるが、最も喜ばれたのは師匠の本間師であった。そのうえに「舞台を造るとき狭くてよいから控えの間に壁へ嵌め込みのベッドを設えて、豊橋の稽古の度にホテルに宿泊はもつたないから、そこで宿泊できるようにしてくれんか」との注文を出されるのである。西村先生は快く引受けられ、建物は鉄筋コンクリートの二階建銅板葺きにして、階上を能舞台、階下を先生ご夫妻の隠居所の居間を造ることにし、木造和装に定評のあるゼネコンで、岡崎に本社がある小原建設にさっさと発注されたのである。

建設中の現場には毎日出られていて、完成を楽しみに見回っていたお姿が目に見えてくる。かくして昭和五十二年四月十九日には建築完了し、引き続いて西村先生は舞台の鏡板に老松の絵を先述した伊藤一義氏の日本画師匠である田中桂一氏と、水彩画を得意とし市内の中部デザインセンターの社長をされている富安昌也氏の両氏に発注された。田中桂一氏が老松・若竹の絵を画かれ、富安昌也氏はデザイン上のアドバイスと絵を画くときのお手伝いさんを提供されてみえた。にじり口の上には田中桂一・富安昌也両氏の落款がある。また、舞台入口の階段途中に『西村能舞台』の銘板文字は豊橋の書家では最高の大沢華空氏の揮毫をもとに作成設置したものである。同年五月には舞台諸施設も完了した。

それから西村先生は舞台披きの諸準備に取り掛かれ多忙を

極められていた。舞台披露謡会の計画やら、舞台を豊橋文化協会への紹介から各報道機関への発表応接や挨拶回りなどに飛び回られ、やうやく諸準備を整えられて舞台披露祝会開催に漕ぎ着けたのが同年七月三日であった。当日は当時の青木 茂豊橋市長の臨席を得て、袴姿で火打石で鑽火を切る古式行事から始まって朝九時半から夕方五時半まで終日盛大な舞台披露をなされたのである。

こうして作り上げられた能舞台を皆さんに無償で開放され、皆さんの研鑽振りをいつも満足そうに眺められている傍ら、ご自分の古稀祝と奥さまの喜寿祝の謡会や金婚祝の会を催されるなど、以後十余年唯一の趣味の謡一筋に余生を楽しまれていた。しかし寄る年波には争えず昭和六十一年七月初ころ肺腺維症という難病に罹られてしまった。無念の極みであられたであろう。最後に入院されお見舞いに伺ったとき「織田君、わしも日本人男性の平均寿命を過ぎるまで生きて来たので、もういいよ。家に帰るよ」と仰られた言葉は脳裡から離れられない。何という潔いご決意をなさる方かと呆然とし咄嗟に返す言葉を失ったのである。昭和六十三年一月二十一日午後五時半ごろ再入院先で夕食中に突然永眠されたとの訃報に接し、覚悟をしていたものの、余りの大往生に驚愕し押っ取り刀で参上したのは言うまでもない。吾が子のように可愛がっていただいたご恩は終生忘れることはない。

それから以降は亡き西村先生を偲びながら、梅子夫人と謡稽古を楽しんでいたが、その梅子夫人も先生が亡くなった二年後に胃癌になられてしまった。最後まで癌であることを隠し通し、手術の真似事までして胃潰瘍と納得させていたが、平成二年九月一日ついに先生の後を追うように、あっけなくこの世を去られてしまわれた。ただただお二人のご冥福を祈るのみで、散々今でも舞台をお稽古場に使用させていただいて、何の恩返しもできない身を恥じ入るのみである。合掌



西村祐三氏（前列中央）と梅子夫人（前列右）

## 山本 雄三

雄三氏は小生より四年後輩のクラシック音楽に堪能であった。小生と同じ職場で誠実そのものの人柄のため、色々な仕事に携わっていたが、中でも社史編纂作業には心血を注がれていた。その彼がいつのころか記憶がないが、「謡の地謡の男性合唱は、あれは素晴らしいものだ。あの和音は世界にない絶品ものだヨ」と言い、本間英孝師のころ短期間であったが謡の稽古を受けた。いつの間にか今度は長唄に魅せられて転向し三味線まで弾いていたのにはびっくりしたことがある。そんな彼が昭和五十二年九月に滝崎泰夫氏から魚町の能面由来誌編纂の依頼を受け、また、西村祐三氏からも、その費用は西村氏が全責任を持つから是非実行をと懇願され、普通の人ではできない活動を開始した。それは国会図書館の調査、名大の調査、豊橋郷土紙の調査、新城の大原紋三郎氏の資料調査など、あらゆる資料を収集してすべて事実資料をもとに、ついに昭和五十六年十二月に「豊橋・魚町の能楽と豊橋の宝生流能楽の歩み稿」を刊行したのである。そんな雄三氏が昨年正月心臓病で六十九歳の若さで急逝されてしまったのである。まことに世は無情である。

この魚町の稿はあくまでも事実資料にもとづくもので網羅されており、一つ残念なことがある。それは昔から魚町に言い伝えられていたことで、魚町の能面・能装束等が明治維新後吉田藩主大河内家から引き継がれた経緯である。言い伝えでは、吉

田の殿様は大変貧乏であつて、廢藩置県で殿様が東京へ引揚げるときお金がなく、ご用商人の魚町の方に殿様が所有していた能面・能装束を借金のかたに置いていったものとのことである。もともとこの面や装束はご用商人が殿様に賂で贈ったり、世話をしたもので中身は十分承知しており、また、城内で能を催されるときは魚町の方が囃子方や狂言方が出勤しなければ、能はできなかったと言われていた。したがって江戸時代からご用商人は代々狂言方・囃子方を世襲されていたことが伺われ、町方の能狂言は盛隆していたようである。勿論これらの記述された証拠研究資料はなく、山本雄三氏はこのことを明確に記載することができなかったのである。小生が魚町の滝崎吉太郎氏や鳥居晴一氏、狂言方の山本浅太郎氏その他魚町の古い方々から伺ったことを要約すると上記のようであった。

以上誠に拙い文章で申し訳ございませんが、ご参考までにご判読賜れば幸甚に存じます。

平成十三年九月十日

## 編集後記

『東海能楽研究会十周年記念論集』を刊行したのは、平成十七年のことであった。それからわずか二年で、またまたこのような大冊の論文集の刊行することになるとは夢にも思わなかった。この企画が提案されたときには、正直言ってどれぐらいの論文が集まるのか心許ない心境だった。

しかし、蓋を開けてみると、新会員の投稿をはじめ力作が続々と寄せられて、編集者冥利に尽きる質量となった。また、編集が始まってから寛鋤一先生収集資料による資料編併載の提案があり、これまた大部の内容であることを知って圧倒された。総じて、この研究会を続けていることの大きな意義を感じ、感慨を禁じえない編集作業であった。

編集にあたっては、読みやすさを考えて諸種工夫し、全体のスタイルを統一したのはもちろんのことであるが、一方で執筆者の個性も尊重し、注の付け方などは原稿の形をなるべく生かすようにした。

私の多忙など諸般の事情により、刊行が大幅に遅れたことをお詫びします。

(林 和利)



東海能楽研究会

催花賞受賞記念論文集

平成十九年三月三十一日発行

編集発行 東海能楽研究会

代表者 覧 鋤 一

〒453 0802 名古屋市中村区下米野三二九

幹事校 名古屋女子大学文学部 林研究室

〒468 8507 名古屋市中区高宮町一三〇二

印刷 共 生 印刷 (株)

名古屋市中区新栄二丁目十一六